

コロニア小説選集

第一卷・パウリスタ文学賞以前

コロニア文学会編

コロニア文学会

『コロニア小説選集』

刊行委員会

鈴木 悌一

武本 由夫

清谷 益次

前山 隆（第一卷担当）

薮崎 正寿

カット 若林 和男

装幀 前山 寿美子

コロニア小説選集 第一卷★目次

賭博農時代	園部武夫
ある開拓者の死	田辺重之
夏代	片山耀子
配耕	古野菊生
転蓬	古野菊生
入植から	桜田武夫
ふくしゅう	杉武夫
渦	武本由夫
死灰	武本由夫
ある裏街	秋野愁
雨	柳千枝子
牌	柳千枝子
つつじ	山路冬彦
月光	山路冬彦
美しき咎人	山路冬彦
樽	水野浩志
なすび	北島文子
ロテリアを買う女	北島文子
牛糞	渋川和樽
早咲きの花	渋川和樽
野生	田畑三郎

星座の涯に	……	佐藤 実
孤影	……	佐藤 実
梨奈のはなし	……	緑野 狷太
泥濘	……	摩耶 晃
老移民	……	竹井 博
ゆがめられた歩み	……	上村 俊幸

コロナ用語注釈	……
解説	…… 前山 隆
収録作品発表年月	……

賭博農時代

園部武夫

略歴 不明

「作者のことば」から。 遙か彼方の黒雲の中に稲妻がピカリと光る。何だかそれは頼りない。何でもないのかもしれない。しかし小鳥たちは近くの大樹に群って夕立がくるぞ、いやこないーと喚いたりこぼしたりしているじゃありませんか……小鳥たちはやはり希望に燃えて私と一緒に海を越えて来た新米です。私ですか？私はブラジルの土を踏んでようやく七カ月、（…）トマテを、バタタをいじくりまわし、まるで大家の馬鹿息子の花作りのように可愛らしい百姓の真似事をするにすぎません。いつか、ブラジルの様子がわかるのはいい。しかし今に小鳥たちはすれっからしになって雷が鳴っても平気で貪慾に餌を拾うようになりはしないでしょうか？ 私はやっぱり彼らのもって来た純真な気特と使命とを惜しいものと思います。みなさん、小鳥たちの心をあまり動揺させないで下さい。（…）

賭博農時代

これは植民地の或る寝苦しい夜の幻想に過ぎないかも知れないけれど……。

ヴァガブンドはよくそんなことに目がついた。

―おい、見ろよ。売笑婦（プータ）！

ペツと舗道の上に吐き捨てられたコンデ組 ―こんな言葉もあるぞ ― の唾をつけ黒子で軽く見流して、降雨期の生暖い風をサツと肩で切った花岡ルリ子。マルチネリの広告燈に灯が入って、プラッサ・ジョン・メンデスの椰子樹の蔭に囃り残しのソルベッテが転がり、紅バラのガーターの結ばれた真つ白なかの女の脚に新鮮な力のみなぎる頃――

この一名混血児のルリ子とは何の関係もない、コンラッド・ネーゲルがオデオン座のスクリーンからシネマ狂いのセニョリータ達に呼びかけていた……。

長い間、トロツペールの馬の鈴の音とカボクロのバンドリンの響きに抱かれて平和な夢を貪っていたに違いない ― コロニア時代のポルトガル人の無理想を暴露したトリアングロ（三角街）―サンパウロにおけるあらゆる

る近代生活の象徴。プラッサ・ダ・セから四十五度の角度をなして走る二つの流行街。サンベント寺院と市立劇場。そしてその二つの街を結ぶ他の一辺ルア・サンベント。

ビルディングと商店とカフェと女の足と乞食。そして街の辻々にロテリアが呼売りされる風景……。

花岡ルリ子……。彼女の趣味は男。――ソルベッテ――シネマ――。百姓の皮膚の汚濁を嗅ぐこと――。変態性欲――。安宝石の蒐集。

：彼女はいつも一匹の蠱惑的な東洋の虫となつてこの眩るしい三角街（トリアングロ）を縫つて歩いた。イタリアーノとフランセースとエスパニオールとアレモンとルッソとプレットと……ポルツゲースの混合する皮膚の街を、あらゆる人種の錯綜する中を、シングルカットと蛇革靴の扮装で常に三角形の一辺上の一点となつて、そのマッフを透いて見える己が肉体の秘密を匂わしていた。

そして海岸山脈から来た夜風がキャバレーのビラを女乞食の足許に吹き寄せた時、新フォードの車体が花岡ルリ子の肌一杯に停止して、その夜の彼の女の桃色紙に記入された男。――トマト成金の太村。かの女は好きな百姓の皮膚の汚濁に抱擁されて――オームラ。妾はもうそろそろ疲れたのかも知れない。桃色の帳の蔭……そこには風呂も化粧室も便所もあつて、誰かの葉巻の香に

胸をときめかせながら臥ておれたらね……。

ールリ子。それは俺と結婚したいということかい？

猥雑な吐息を巨大な心臓で染めてトマト成金がいつた。

すると、かの女は粹な裏返しの靴下を鳴らしながら、
ーバカ！ 誰があんたなんかと結婚するつもりなのよ。
オームラ。どうだっていいのよ。……あんた接吻して……。

車はコンラッド・ネーゲルのかかっているオデオン座
に向って走った。

II

中央線X駅から五軒の地点ー大村農場。

五度の傾斜面に二十万本のトマトの植付けられた農場は、獰猛な番犬とチエテから来た農場監督と数多の農業労働者によって組織され、大サンパウロを襲い来るトマト供給の減退と価格高騰によってメルカードの朝風が擾乱されるといので、時期外れなるにもかかわらず悲壮なトマト戦線の真只中に農業労働者の手は永遠にトマトの汁に染り切っていたか？

鷹が舞うー。遠山波を背景に点々たる椰子の樹があ

り、うずくまるサツペの土人小屋を彼方に見て、タンケ―タンケの粗野な風景。そしてろば（ブーロ）がのたくる傾斜面にマモンの実の誘惑。

ここに陣取ったニツポニコの小器用さが飽肉的民族の嗜好を利用して経営するトマト農場の井戸端では、数人の破衣の労働者がボルドー液を作るために一つの大樽を囲んで南緯二十三度半の苦熱と闘いながら、働いていた。

或る労働者は発煙にむせながら生石灰を溶いている。溶かれた石灰は大樽の中の硫酸銅液と都合良く化合させられた。化合して故里の秋空の色となったボルドー液の灰かな薄青色が労働者を感傷的（センチ）にして、移民先覚者の我利我利の歴史が不透明に沈滅して、尻のない搾取競争がグルグルと渦巻くボルドー液の中に消滅して行った。

三カ月という間撒布器を借金のように背負った労働者によってこのボルドー液がふりかけられ、マクロスポリウム菌に対する突撃が繰り返されて作られるトマト、か

つてニツポンが毒茄子と称して怖気をふるった赤いトマトは、既に疲れた農業労働者の食欲を啜ろうとはしなかった。

この誇るべき伝統も何もない只無暗矢鱈に化学肥料の注ぎ込まれるだっ広い農場ではあったが、大村農場の

前期のトマト生産高は――

A――最初の植付け二万本が当って一躍十二万本に増加。

B――一箱平均十五ミルと見ても一日出荷量平均七、八十箱、総計約一万箱。この収得百五十コントス。

けだしその結果たるや市場売上価格の大半を大村が搔っ攫ったことになり、鈍重なブラジレイロを仰天させて分益契約の申込みが続出し、次いで我も我もと賭博的才智に囚われた英雄ニッポニコが蜂起した。イタグアケセツ―バの彼、――イタケーラの彼、――モジの彼、スザノ、ロマノポリス、サン・ミゲールの彼等達……。

彼等の射倖心は鉄槌でたたかれたように興奮し、野心満々たる肥料屋の倉庫に眠っていたマモナ粕、骨粉、チリ硝石、塩化加里等々の山が崩壊し始め、経営の拡張は無理に走り、想いは早や栄耀の一角に膠着してトマトを作らぬ者は世界の馬鹿者と嘲笑するのみであった。複式経営も優良品の生産も眼中になかった。そしてトマト作りのための家族――南米の土を踏んだ許りのいじらしい家族までが、募集に応じて馬車に揺られながら思い思いの農場に移って行った。

しかし満州の銃声を外にやはり幾何かの移民が、毎日サントスの埠頭を怖ろしい税関の方へと歩いていった。しかも移民というものは漸々新しい思想と新しい計画に満ちた人々で置換えられていたのだが。そんなことには何

の関心もなしに第二の獲物に向って熱中する大村農場。

III

サンパウロ市街の熱い舗道も深夜になって鈴懸樹の並木の下に冷えて行った。

花岡ルリ子はかの女のアパートへの道を椰子の花粉を踏んで薄ぼけたブラス方面の夜景に果敢ない浪漫主義を感じながら黒人女に迎えられて重いドアの中に入って行った。

その部屋には花岡ルリ子の変態遊戯場。インデアン・シルクの花模様のカーテンに隠されたダブル・ベット。

この部屋には一人の青年が飼われていた。

それはブラジルへ来た許りで放心している彼女の所謂野良犬。捕られて目を醒した許りの彼は、スカートのホックを外したまま着替えもしないで寢床の上に胡座をかいた花岡ルリ子の不倫な姿を見ていた。そうして言った。

―お前どうかしたんかい。

―また百姓の臭いでも……？

突然ルリ子は彼の髪を把んで揺りながら……

―おまい、妾がいなくっても生きていける？

―威しっこなしにしようよ……

―真剣だよ。チクショウ！

―じゃ、僕の行く処は一体何処なのだい……？

カーペットの上に青白い野良犬が悲しそうにして転った。

かの女は寝台のバネをギイギイ鳴しながら、気の毒そうに見下して言った。

―勘弁して呉れよ。妾結婚するのだから……。

―なんだって、そんな？

―ほう……野良犬。……まだおまえにも口惜しがるような性根が残っているんかい？

―じゃ僕の体を叩いたり転したりする代りに、百姓の頑丈な腕であやされながら眠りたいのだね。

―あたしの休息を妬むんかい、野良犬。

―いいや。だけど……

と言いながら彼は花岡ルリ子の足先に哀願の接吻をしようと這い寄った。

これがきつかけとなり遂に又いつもの浅間しい彼等の変態遊戯が始った。

野良犬の悲鳴。ルリ子の狂笑。蹴る、転

る……音、汗。

―僕、別れるのは嫌だ！ブラジルじゃない。ルリ子の中で生きるんだから……。

！バカ、バカ、バカ。バツハツバツハツハツ……。

IV

トマトの値は案外安かった。しかし大村はまだ自信ありげに構えていた。

そしてドタン場で利益を一把みにしてやろうと考えていた。

メルカード・セントラルの界限は腐った野菜を踏みつけた労働者の足跡で斑点だらけである。翌日の午前、このサンパウロの三月廿五日街にあるコンプラドル黒瀬の事務所にトマト成金の大村はやって来ると、血色の悪い野菜作りの蛸集した中を通つて二階の応接室で黒瀬と会った。すると黒瀬が、

「大村さん、宜い加減にわたしの言う通りに動けませんか……例のあれでさあ………」
と言った。

「なんですぜ。あすこの産業組合ではもうコロンボの缶詰会社と先物契約をして、それも一キロ二百レースで二千箱の予約つていうんですがね。……いくらミスツラードだってあまり甘い話じゃありませんぜ。旦那だつてここらで任して下さった方が無難でしょうよ、ヘッ

へ」

しかし大村は、近頃駆け出しの黒瀬の奴、ひとかどのコンプラドール振りやがって、畜生、外のケチなトマト作りなら兎に角、大村の貫禄を考えてみい……。ペツとサンパウロ生活の中樞神経となっているメルカードの壁に唾を吐きかけて、顔面筋肉をびりびりさせながらラルゴ・ダ・セーに画して建つ軽快な建物ホテル・ノロエステに向って新フォードを走らした。

「じゃ、どうあつても承知出来ないというのだね……
……と言った黒瀬の陰険な顔がチョツと気になったが……

既にホテルの入口には昼間の化粧を凝した花岡ルリ子が、そのエメラルド・グリーンのジョゼットの布地から透いて見えるエロチシズムのために、玄関番から追払われようとしていた。

「妾、淫売じゃないんだ、と例の蛇革靴で蹴ろうとした時に大村が着いた。カルナバルのジャズ・レコードが聞えていた。

ホテル・ノロエステの一室でシャンペンの泡を吹き飛ばした後で、二人は結婚らしくない結婚をした。

花岡ルリ子が何故結婚したか。……。大村に言わすれば、割目の這入ったテルセイロのトマトに却って食欲を感じることがあるように、ルリ子の生理を借りて肩の凝らない愛欲の満足を履行したにすぎない。

しかし怪物の恋にも衣裳が必要だった。トマト成金の
大村が白昼の花嫁にいった。

― 今夜の急行でリオに向って新婚旅行に出かけるんだ。

― リオのメルカードに花嫁の相場をせらそうというの、オームラ：・・・。

― 花嫁をせるほど人非人じゃない。

すると結婚式に寝乱れた女は、

― オームラ。妾お願いがあるわ・・・。

― トマト作りを止めるとでもいうのかい。

― いやよ。妾：宝石を買って欲しいの！

V

壮快な驟雨がルアからルアへ真自な脚を叩きつけて通った。ソルベッテリアの庇から雫が光って落ちた。

雨上りのスガスガしいデイレイタ街の舗道を花岡ル子と大村は散歩していた。この街は飾窓の中に蠟細工のセニョリータがアマレーロのアフタヌーン・ドレスを引き摺っていた。華美な雑踏を縫って一組の新婚夫婦はジュウの貴金属商店カーザ・エスブレンドルを訪れて豪華な宝石の蒐集を眺めた。

このコレクションは世界中のセニョリータの魂を玩弄した。

―― まあ、なんて素晴らしい。ダイヤ、ルビー、バイロップ、ウバロイト。カルネリアン、タークオイス、ムーンストーン、キャツアイ……等々。

どれかを買って貰えるにはちがいなかったが、ありとあらゆる光彩の躍動する中に、幻惑され切ったルリ子の目にむ夜光球の女王マツクル、メークルの冷光は触れ難い厳かな光であつた。だがこのおそろしいような陶醉を一体どうしたらよいのか。

―― ねえ、オームラ。あたし、たまんなくなつたわ！

―― 泣くんじやないよ！

するとルリ子は手提をヤケに振り廻しながら、

―― ええ、泣くわ、泣くわ……。ね、オームラ。妾は

あなたが好きよ……。

大村は笑いながら葉巻を嚙んでいた。

その頃、サンパウロの心臓部では……。

トマトを積んだカミニヨンの行列が次々と赤煉瓦の重囲の中に吸い込まれて今日の市が開かれようとしていた。五百箱のトマトが並んで、カミニオンは赤煉瓦の外に退却した。

そしてその後にコンプラドールと、トマテ作りと、商人と、インチキの群による無秩序無統制の喧騒が蜂の巣

を一蹴りしたように湧き立った。大村農場の監督も今日は二百箱のトマトを擁して眼をきよろつかせた。複雑な因果関係から今日の相場はなんとしても今期のトマト作りの運命を暗示するものでなければならなかった。ともあれ、世界の最尾端を歩むブラジルの総てがそうであるように、ここには仲買人席も監督も計入係も書記も指値人も何もなかった。唯一つの埒の中に買う者と売る者とは押込められて各人各様に口から口へ、手から手へ、売るか買うかを喚き立てる習慣にすぎなかった。

コンプラドール ― A B C D E だがこの日は不思議であつた！ 栄養不良に怯えたトマト作りは大概遠慮してそれでも二十五ミルと吹っかけた。ところが買手はやまびこの応ずるがごとくにあちらでもこちらでも十ミルと叫んだ。AもBもCもDも それでも何時もは十四ミル、十五ミルと水準器の泡のように落着くところに落着くのであつたが、今日の泡は一向に動かなかった。

十分 二十分 三十分 依然として十ミルの買相場は堅かつた。期せずして場内の空気は異様な色に染つて来た。

― どうして十ミルか？

遂に空腹な生産者の悲鳴が突つ走った。するとA、B、

C、D、 は苦しそうに笑つて視線を合した。山奥に

トマトの青臭を嗅いでいる時は臆病な者も、メルカードの空気には直ぐ酔っぱらって興奮した。しかし何の見当もつかないで不和雷同し、只ウロウロした。

1 コンプラドールが共謀（ぐる）になった？：

― 否、黒瀬が皆を買収して大村への挑戦だ。

と囁く者、喚く者……。寝不足の彼等の眼は十ミルという泣きもきれない相場を見詰めたまま進んで行った。……こうしてコンプラドール黒瀬の策略の中で十ミルが確定的なものになってしまった時、彼等の経験からしてこの結果がどうなるか、その思考力さえ喪失して徒らな興奮とトマトによる生活苦の中に墜落して行った……。

サンパウロ市場のトマト相場のガタ落ちを報せた情報が大村の耳へ入ったのは彼が花岡ルリ子を伴ってホテル・ノロエステに帰り着いて間もないころであった。

この人為的な下落がコンプラドール黒瀬によってなされた市場攪乱であることが分ると、大村は内臓が口から飛出さんばかりに憤怒を感じた。どう考えてもどうにもならない相場であった。そしてトマト勝博戦の弾雨を潜り続けて来た大村には自分の農業の運命があまりにも明瞭であった。

― 何とかしなければ……。何とかならぬものか。畜生！ 畜生！ 大村は動物園の虎のように室の中を歩き廻った。のたうち廻ったが、しかし、彼の網膜を掠めるものは幾ら不作とはいふものの収納舎一杯に語って絶好

の時期を狙っているトマトと、肥料屋の苛悪い面構えと、恨みに光る労働者の眼付きと、……又その耳に想い出したように聴えてくるものは化学肥料を山と積んで突進して来たカミニヨンの爆音！

ウウウ、ウウウ、大村は唸った。ジュウの店で買って貰ったブルマルビーを愛撫しながらマンガを喰べていた花岡ルリ子は、皮肉な笑いを浮べて後向きざまに言った。

――ねえ、花婿さん。あたしとても素敵ない気持よ。……こんな幸福な晩が又とあるかしら？

――

――オームラ。あんたなぜ黙ってんの。……え？、――よう、オームラし約束じゃないのくりオへ遊びに連れてってよ……。。

大村は思わず卓をドカンと叩きつけて吸鳴った。

――それどこじゃないのだ。この淫売奴！

果物皿が転覆してマンガが不審そうにつづいて落ちて行った。

――ホホ、ムイト・オブリガーダ（大きに有難う）！妾が淫売だって？　そうでしょうとも、落っこちたトマト成金さん。……妾先刻からのあんたの唸り声を聴いて初めて判ったような気がするよ。バカ、……バカ。何の為にあんたがジャボネーズの親分かね？　一体あんたはこの頃移民さんが皆何で苦しんでいるのか知っちゃあい

まい……。アレモンのように目標が欲しいんだよ。目標を立てようとどれだけ焦っているか。それにあんたは一文の仕事もしやしない……。みんな……。お前みたいな奴は野垂死した方がいい。ミーリオの肥料位にはなるだろうから。ね。オームラ、妾は帰るよ。そして家の野良犬に言ってやるんだ。時が来たのだ！ エンシャーダを持って新しい世界を耕せてね……。勿論妾は、今日限り離縁さ。……。呪われてあれ！ あばよ。

腐れていく花岡ルリ子の肉体にニッポンの血が循環したということは奇蹟に相違なかった。それはむしろ見えない物の力がルリ子の紅唇を借りて言わせたと考えた方がましであった。

かくして大村の花嫁がその日限り消失した代りに、ホテルの給仕人が甚大な勘定書を持って彼の面前に突っ立っていた……。

動きの取れない世界は何処にもある　ー　というのは目標の無いことを意味する。

こうした内情暴露を外にした、農業労働者は疲労すればする丈トマト汁が浸み込んで行った。コンプラドールの策動による相場の下落と、マクロスポリウム菌の跳梁と、土壤の憤慨とによる大村農場没落史の最後のページを飾る所の唯一の方法　Ⅰ　あがり切ったトマトの病葉をむしって坊主にする……。

ああ遂に移民史の貴重なる幾頁かを、大村と、黒瀬

と、

花岡ルリ子と野良犬とに貸し、彼等のために汚濁に沈み、

……疲労のために歪められた農業労働者の肉体！ 日没。

……一人の労働者は化学肥料の無節制な給与に疲弊し切った土壌の上に突立って彼方の山脈を睨みつけた……。

あの蔭に平原あり、丘陵があり、山があり、その膨大なブラジルという土の上に……。

賭博農の間歇的な光栄に幻惑されて何時の日もその目標を認め得ずして彷徨する蟻——蟻——その散漫な蟻が集まって高々と一つの蟻の塔を築く日は果して何時の日か？

今も彼方の大西洋を、一隻の新しい移民船が近付いてくる。―輝かしい日本移民の目標を樹立するために―

畜生！

労働者は大きく息を吸い込んで叫んだ……。

（一九三二年）

ある開拓者の死

田辺重之

略歴 ペン：ネーム西岡正雄。一九〇八年、北海道蛇田郡に生る。北海道高等専修学校農業科に学ぶ。一九二八年、移民して、サンパウロ州サント・アナスタシオに入る。二九三〇年以来モジ・ダス・クルーゼスのコクエーラ植民地にて農業に従事。コロニア文学会々員。この「日本の小学校を終えただけの青年百姓」、「ペンなどほとんど握ったことのなかった」作者が生れて初めて書いた小説「ある開拓者の死」は、一九三二年にサンパウロの伯刺西爾時報社が行なった「植民文芸短篇小説懸賞募集第一回において、第二席に人選したものである。

ある開拓者の死

一 カマラーダ（農場労働者）

「何、仕事が欲しい」

大助は威嚇するように太い声で叫んだ。彼の前にはバ
イヤーノらしい黒光りのする顔の男と、その妻であらう
腹のひどく大きな女が肩をすばめるように立っていた。
かたわらの地上には彼らの全財産を詰め込んでいるアロ
ース・サツコーつと、痩せて猿のような面で白眼ばかり
大きい幼児がきよときよと大助を見ながら坐ってい
た。

「よく働きさえすれば、使ってやってもいい。まあ、二、
三日働いてみる。サツコはこっちへ置いとくんだ」

そういつて小柄な大助は、足早に家裏の方へ歩き出し
た。この黒い家族が裏のミーリョ小舎へ着いたか着かぬ
間に、大助のどら声はまたひびいた。

「急いでカフェザールに行くんだ」

六尺近い男がエンシャーダをかついで大助の後から裏
山を登って行く。雲一つない空に、午下りの太陽がきら
きらと瞳にしみる……。

もうすっかり暮れたコーヒー園を、四人ばかりのカマ

ラーダが重く疲れきった足を引きずるように下りてくる。

身も心も日干しになりそうな終日の炎暑と闘ってきたこの勇士たちには、夜こそ極楽世界であるのだ。望みといえど空きつ腹を満たすことと、ぐっすり寝こむことの他にはない。だが彼らはこの二つが恵まれているのみで充分満足していた。それぞれ、空ききった胃袋に夕餉を想像しては、口中に貯ってくる唾液をごく飲み込みつつ帰って来た。

日本人の若者達と今日来た男の四人は、井戸端でぶるぶると顔を洗い、汗でぼさぼさになったカミーズでぬぐって、前後してカンテラの光がゆらぐ薄暗い食堂へ入って来た。今こそ楽しい夕餉が始まるうとしているのだ。四人のカマラーダに大助、それに「似た者夫婦」といわぬばかりの小柄な妻と十才ばかりの男の児の七人がメーザに着いた。その時、今日来た女が食堂の窓から眼ばかり光るクビを出した。突如、大助のどら声が破裂する。

「この乞食奴が、出てうせろい。働かぬ者が飯を食うという法があるか」

カンテラの光が大きく揺れて、食堂がざわめきだした。

つと立ち上った男は形相物すごく、小男の大助をねめつけて、

「うううう……」

腹の底から絞り出すようをうめき声を発した。緊張した他のカマラーダ達は、起らんとする風雲に身がまえをした。けれども弱き者はカマラーダであつた。いったん怒り心頭に達した男も、支配者の前には頭を下げねばならないのか、結んだこぶしをそつと解く弱さであつた。妻は小屋へ逃げ帰つて泣きじゃくっている。可哀そうに彼女も今日一日食にはぐれているのだ。これからここを出てどこへ行くのか。身重な妻を連れて願つてみよう、頼んでみよう。こう思つた男は、崩れるようにまた腰を落した。この様子に他の人々もほつと一息ついたのであつたが、飯がノドを通るはずがなかった。この地主は、今までも厳しい男とは思つていたが、こんな鬼だとは知らなかった。世の中にこのような人間がまたとあるだろうか。そう思いながら、あたかも自分が叱られたようにうつむいていた。

「パトロン、彼女も今日一日なんにも口にしなかったのです。そ、そしてもう臨月になっており、仕事はできず、可表そんな奴なんです。ど、どうか、ウン・プラットの飯を食わせてやって下さい。明日からうんと働いて恩がえしをしますから……」

「だめだ、だめだ。俺の処じゃ、働かない奴には飯を食わせないことに定めてあるんだ」

そういつて大助はボルソからなにがしかの白銅貨をつ

まみ出しメーザへ投げ出した。悲痛な面持ちで起ち上った男は、その錢に目もくれず尻に敷いていた破れシヤペウをつかむと、こそこそと舎外へ出て行った。

裏の小舎へ行ったらしい音が聞えたが、やがて哀れなバイアーノの家族は、子を抱き、サツコを背負い闇の中へ消えて行ってしまった。

二 ラランジャを売る

あくる日――からっと晴れて昨夜の出来事など遠い過去の夢のように拭われた日和――カマラーダがカルビに出た後、大助は唯一人、母屋近くにあるテレーロ拡張の煉瓦を一枚一枚重ねていた。

馬鹿たれ奴が：人情だなんかと女々しい考えを起こしこの浮世が渡れるものか。俺は泣きごとをいう人間は、

ずんと虫が好かねえのだ。大きな図体して、あのざまあ何でえ……。それに若い奴らも生意気だ。ゆうべはどうとう飯も食わんで帰ったりしやがって……。糞面白くもねえ。

百五十アルケールスを所有して、この植民地一の地主である彼の家は、赤土の極く粗末なもので、裏手はバナナ林、前の方はラランジャの伸びきった樹に囲まれ、一

面に雑草が生い繁って、子供達が怖ろしがるような屋敷だった。小女の妻がアルモツサの支度をしているのか、コジーニヤから細々と煙が立ち上っている。

家の横の革道から瞳の青い子供が――それは山向うに見えるコロニアに見かける三、四人が、

「ボン・ジイア」

そういつて大助の傍へやって来て、

「ラランジャをこれだけおくれ」

一番丈の高いのが一ミル貨を差出した。

大助は無精気に立ち上って、棒を与えて子供らにとらした。

黄金色のラランジャがポタリポタリと雑草の上に落ちていくのをじっと見ていた大助が、

「これ、これ、もう沢山だ。そんなに落しちやいけねえよ。ウン、ドイス、トレイス……」

子供がもって来たサツコへ声高く数えて入れるのだつた。

三 放 浪

金子大助――金子は名に相応しいが、「あの小間助に大助とはよかった」と植民地の人々が蔭口するほど小柄な大助は、十四年前このノロエステの奥のK植民地に入植したのであった。

ブラジルへ来て三年ばかり聖市で大工をやり、厘に厘を積む式で小銭を蓄え、この植民地では最上等の土地を百五十アルケールレス八コントスで買い込んで入った草分けであつた。その当時の奮闘振りは大助がもつとも得意に回想するところのもので、ピングでも飲めば平常とはまったく異つたゆるみのある笑顔で、だれかれの差別なく物語るのであつた。

ある日の夕餉の後で、若いカマラーダを前にして、過去半生を語り出した。

―俺だつて大した人間じゃねえ。

俺の生まれ故郷は北海道なんだ。親達は元を質せば会津の藩士だったが、明治維新の落城を前にして、スタコラ、エゾ地南部へ落ちのびたほどの腰抜け武士よ。

その地では百姓に落ちぶれ、粟を作つて細々と暮しを立てていたのだが、俺はその三男に生まれたんだ。

何？　大助つて名をどうしてつけたかつて？・・・

馬鹿にするなよ……アハハ……こいつは親父かやつぱり俺と同じように小男で人に馬鹿にされたから、この俺が大助になるようにつけたんだろな。

十七の秋に室蘭で大工の弟子入りをやったが、何よ、―その……その娘っ子という奴と初恋とかちゅうやつに落ちたんだ。それがしれたとき、親方の奴、赤うなつて怒りよつた。

その晩そこを飛び出したきり、……あれがはたちの

ときだったから　ー　さよう　ー　二十八年ばかり故郷へは足を入れずさ。東京で二カ年遊び、「いつそ遊びついでに外国を見てやれ」そういうかんたんな考えで満州へ渡り……

あすこでも、だいぶ道楽をやったな。今度はうんと遠い所へ行ってみようという気が起き、ペルー移民の間にもぐって南米へ渡って来たんだ。ペルーのリマ市で散髪屋の弟子になりすまして、毛唐の頭をチョキンチョキン

ンさあ　ー。若い時は仕方がないもんで、ペルーにも落着くこともできず、あれからチリーへ入り、今度は硝石山の人夫かせぎだ。

いったい俺という人間は、特別小男に仕立て上っているので、どこへ行っても、おいチビチビと可愛がられて生活に不自由するこたあなかった。チリーからアルゼンチンへ……。ブエノス・アイレスの郊外にも二年位も住んでおったか？　それからブラジルが日本人向きだと聞いたもんだから、もう矢も楯もたまらずにさあ、サンパウロに出て来てしもうた。考えると、今から十七年もの昔さあ。

俺もその時にや三十才を越しおったからさすがに考えたなあ。いつまでも放浪しとったんじゃ、しょうがない。

これっ位で道楽は切り上げようと……。まあ、これまで

が俺の歴史の上巻というところだよ。ハッハハ。

そう話して、大助はピンガを口へもつていった。カンテラの光は窓からの涼風に細々とゆらいだ。

若い者達はメーザにもたれて、大助の小さい赤黒い顔を見つめながら、聞いていた話がとぎれたのでほっと深い息をついた。

大助はまた続けた。

―人間も悟ると偉いもんだ。昨日という日まで道楽三味で暮してきた俺のようなヤクザモンでも、素真面目になることができるからなあ。

幸い大工仕事が少々いけたので、サンパウロじゃ直ちに仕事にありつけた。そこでも親方に可愛がられて、金はわりに貯った。他の奴らが、「宵越しの銭はもたねえ」という職人氣質で、湯水のようにパッパッと使い遊んでしまうのを外目に見てさあ、始末をして行くなあ、まんざら淋しいもんじゃなかったよ……。今に見ていろ、という気があったから、奴らをせせら笑ってやる余裕さえあった。

……なに？　奥さん、かかあかい？　そうだ、その時分あいつは耕地で前の亭主が病気になり、サンタ・カーザへ入院していたが、親方の家へ女中に来ている内に亭主が亡くなり、寄辺のない独り身を毎日泣き暮しとったんだ。それを親方の胆入りで一緒になったんさ

ア。

ところで、ある日のことだ。知っている男から土地を買わねえかというんだ。俺は北海道で土地で儲けた人間を知ったんで、将来はどうしても土地持ちでなくちやと考えておった時だったんで、すぐ乗り気になった。その男はいろいろ、パウダーリヨがどうの、ベロボンがどうの、地味の良いことを並べたておったつけ。

《地券はどうだ》と俺が訊いたら、ドットール・ペードロがゴベルノが払下げたのを買受けたんだから確実なもんだといったので、俺も買う気になった。……が、今考えて見りや空恐しいことさ。マツパを見ただけで皆目解らねえ土地を買うというんだから。

こうして苦心して貯めた八コントスなにがしを全部払い込んで手に入れたのがこの百と五十アルケールの地所さ。

こう語る大助の顔は、しだいに愉快そうに輝いて見えてきた。カンテラの灯は石油がきれたのか、今にも消えそうな瞬くような灯だった。大助は立ち上るなり　フツと吹き消して、ほう、ええ月夜じゃねえか、と誘いながら窓外を見た。青白い異国の月光が、みんなの赤銅色の面を照らしている。一人の男はこくりこくり船漕ぎをやっている。熱心なもう一人の若者が話をうながすようにいった。

「貴方はそれでよくその地所のよいことが解りましたね」

「どこの何兵衛だって、こればかりは気紛れさア」

だが、大助は微笑を含んで、

「その知り合いという奴がどこをかうかとかマップを
　　掘るから、へどこだって、そんなことが解るもんか。
　　まあ、売り出しの一番手前がよからうな≒唯そういつて
　　決めただけなんだ。まったくこいつだけあ運だったよ。
　　考えてみりや今から十四年も前のことだ。いよいよ入植
　　するという段取りになって……その時分は、今サンパウ
　　ロにいる正坊も生まれておった。かかあと三人がソロカ
　　バナ線の汽車に乗り込んだ時にや、さすが南米中を股に
　　かけ廻った俺も、ちよつと心細かったよ。」

汽車は終日、瘦地ばかりのカンポを走り続けるの
　　に、なんだか地獄の里へでも運び去られるような気がし
　　たよ。

翌々日の夕方、〇〇町まで辿りついた。今でこそこ
　　もすっかり拓け切ったが、あの時分は〇〇町までしか鉄
　　道が来ていなかったもんだ。

〇〇町には地主の住宅があつて、その晩はその物置
　　小屋へ泊った。

ちよつとばかり残つとつた錢で米と豆を一背負いと塩
　　やマッチを買い込んで次の日がいよいよ入植と決った。
　　〇〇町から四十キロからあるんだが路というにや勿体な
　　いように、両側の草樹が蔽いかぶさつて、カロツサでも
　　容易のことでは通れやしない。

四十キロという路が全部密林の中で、トンネルのようなどころを俺が兵糧をうんとこさ背負い、フオイセやマッシャーダやエンシャーダを手にはぶら下げて先に立ち、かかあが正坊を負うて、鍋、塩、マツチの包みを下げて後から続いて来た。

自慢じゃないが、涙が零れてきた。幸いに三十キロも行ったところにイタリアーノがおって、豚の放し飼いをやっていたので、その日はそこに泊めてもらったが……。

あのときほど人懐かしい思いをしたこたあなかった。

そのイタリアーノも地獄で仏に会ったように悦んで、豚肉で御馳走してくれたが、実際山奥で絶えて人に会わんときや、誰も彼も皆兄弟のような気がするものだ。

ところで、自分の土地に一步踏み込んだのは、今のリンニヤ辺だった。

あの鉄道線がその当時の路でな、百五十アルケールスの地主様となって自分の地所へ来てみたものの、この広い区域だ。《なるほど俺の土地や広いな》と感心したが、手のつけようがない。《こりや早まった》と思ったが後の祭りさ。作物をとったところで、運搬もできねえ。仕方はない。少しつつ山を伐って豚、鶏でも飼いつつ、浮世を忘れた気で汽車でも開通するのを待とう、とかかあと話し合って椰子の割木小屋を造って、親子三人、奥山

の仙人生活を始めたんだ。

夜が更けてきたが、大助は打切ろうとはしないでつづけた。

―考えてみりや人間の体という奴は、弱いようで強いもんだ。俺が今日でも若いもんに負けんだけ働くのも、

あの時分の体験があるからだよ。かかあもよく働いた。ワラジも解かずに寝たことが幾日も幾日もあった。

北海道の熊―俺達の顔がまさにそのとおりだった。

今じや一包みのマツチを一月でベルデしているが、あの時分は始め買って入った一包みが三カ年、汽車が開通するまであった。小屋の中央へトツコを一つ半埋めにした奴へ火をつけて置くと、六日も七日も燃え続けとった。それに石油一滴使うじやなし、マツチの要るようなことはなかった。

入植が九月だったから、十二月ミーリオや豆、バタタの収穫があるようになる迄、食物といえは米、豆、塩に菜っ葉位のものだった。翌る年、イタリー人からもらった豚が仔を産む、鶏がビツシヨにやられながらも殖えていったから、心強かった。べつに汽車のつく迄待つ氣じやなかったが、すこしでもカフェーを蒔いて置かんことにや、草分の価値がない。後から楽に這入って来る奴とおなじじや残念だからな。

オンサの吼えるのも耳障りなのは初めの間だけだ。す

こし経つと、あれが聞かれぬとかえって淋しいくらいよ。

幸い、病気ひとつするでなし、今日迄暮してきたが、植民地の奴らが俺のことを運が好いなどというが、けして運じゃねえ。

人間は努力だ。ふんばりさえすりあ、俺のようなヤクザモンでもかなり成功できるんじゃない。

ああ、長いこと話し込んだが、さあさあ、寝た、寝た。明日はS地のカルビをやって貰わにやららんから。

大助は立ち上りざま 両手を伸して大きなアクビを一つした。そうして、ことごと右手の寝室へ入って行った。

四 懐 郷

大助が故郷を飛び出してから二十八年になる。時折、指を屈しながら ー 四十八か。俺も爺いになったものだ。

親父らはどうしているかな？ 親父は、そうだ、八十過ぎだ。お母あが七十八か。兄貴が五十七と、相変らず貧乏暮しだろうな。……丸長大工のお米さん、初恋の娘、

……俺とは三つ下の十七だったが、あれも白髪の婆さんで、今はどこのかかあに、いや、どこの祖母さんになっ

ていることやら。小学校の級友らも皆年は寄つたろうが、大して成功した者もあるまい。やはりおれが横綱格かな？

大助は近々にいわゆる錦を着て故郷へ帰ろうという予定をもっていた。そのためこの頃は、よくこのような思ひ出にじつと耽っていることがある。

今日も快い晴天である。カマラーダ達が畑へ出たあとで、庭の樹蔭に午前の涼風を受けて、うとうとしていた。

―洋服も靴もシャペウも、この町の飛切り上等を作らせた。あれで日本に行くんだ。船は三等でもよいが、横浜からの汽車は二等にせにやなるまい。故郷の奴ら驚ろこうな。金子の三男坊が成功して帰って来た。ブラジルでは三百七十町歩の地主様だそうな。……ああ、気持ちのええことだ。

なんぼ植民地の奴らが人非人と罵しろうと、やっぱり金の世の中だ。『金なくてなんの己の桜かな』か。俺がこの不景気に帰国して、年老いた親御を欣ばすことができるのも、辛棒のお蔭さ。……馬鹿野郎奴が。

人情々々というたところで、親孝行もできねえ人情がなにになる。俺あ爪糞ほども悪いことをした覚えはねえ。俺の踏んで来た道はみんな正しいんだ。

支払いをできるだけ延したことはあるが、いつ引懸けたことがあった。植民地の奴らはどうだ。人情のありそ

うな面をして、町の山本の店を借り倒したのは誰なんだ、いったい。……なに、腕のねえ人間は羨しがつていい加減な蔭口をたたくんだ。奴らは二口目にや運だ運だとほざくが、腕のねえことを棚に上げて、よく白々しくいえたもんだ。

草分の苦心を見ろ、俺の家を見ろ！　これが百五十アルケール、カフェー十六万本をもつ大地主様の邸宅か。伊達や運びや金は残らねえ。いったい植民地の奴らあ、胴慾の鬼のなんのと悪口をいう癖に、俺の前じや頭を土につけるようなオベツカをいう。日本人会長だつてそうだ。今年で五年続けたが、なにも俺が好きでやっているのじゃない。選挙となると、みんな俺に押しつけていて、

いや、《会長を金子が独占する》のなんのと、あきれた話だ。

彼は半生の苦心と現在の植民地のあらぬ風評とを交々顧みて、不平でならなかった。

彼の想い出すところでは、半生はけしてありふれた行路ではなかった。行つても行つても峻峻な岐路と苦悩の山路だった。けれども、それをどうにか踏み越えて、目標の成功というゴールに飛び込んだ彼である。そこには、当然観衆の喝采が起らねばならぬ。それなのに、近頃の冷い植民地の風評を耳にすると、彼は自然と昂奮してくるのだった。

「貴方、そんなところでなにを考えているんです？」

裏山から空弁当の包をからから音を立てながら帰って来た妻が、いつになく考え込んでいるような大助に言葉をかけた。

「うん。国のことを考えているところよ」

大助はちよつと微笑を浮べたが、すぐ真面目な顔付きで続けた。

「お前もだいぶ老けたなあ。ずいぶんと苦勞を続けてきたからなあ。成功も半分はお前のお蔭さ。似た者夫婦というが、俺達ほど、体も心もよう合うた夫婦はなかるう。

貧乏で首の廻りの鈍い奴が、やれ新しい着物だ、御馳走だ、新築だと騒ぐにさ、お前はこの俺に、このようなつぎはぎだらけのカミーズを着せる偉ら物だ。

だが、それにしても正坊にや困ったもんだな。十六の働き盛りが、勉強で候のと、サンパウロへ飛び出してしまったが、あんなバグバンドが学問してどうするか。お父っさんを見る。農学士だの専門学校出を顎一つで使うんだ。学問して使われる人間になるよりや、使う人間になれというて聞かしたら逃げてしまいやがった。長男でも彼奴にや後継ぎはできねえ。信坊は十一だが、あれだけにや気をつけてバグバンドにやすまいぜ」

咳きながら立ち上った。

五 兇 変

いよいよ帰郷の日が近づいた。今日は最後のカフェー園巡視の日である。

五キロからの長い耕地は、その間の谷々に四つのコロニアがあり、二十四家族からの四年契約者やコロノがいる。

駄馬に跨って高みへ上っては下り、また登って行く馬上の大助の姿は心やかであつた。

よく繁茂したカフェー樹が午後の陽に輝いて、遠く波うねりのように見える。

心なしか大助は、ぐつと胸をそらして手綱を揺りしめ満足そうに瞳が輝いていた。

三つ目の高みへ差しかかった。大助は去年そこで、イタリアーノのコロノがフアツカを引き技いて追いかけた時のことを想い出した。いまいましてに舌打ちしながら、

「あの時はまったく危かった。カルビのことでちよつと小巖しう怒ったら日をむいて鳴り出し、ピカつとするものを見たと思つたら、もうフアツカを引き技いてかかりよつた。俺は背を丸うして逃げたつけ。幸い近くに馬が置いてあつて、飛乗りざま一目散に逃げたので助かつたようなものの、どうも毛唐はあれだから虫が好かん。」

なにかといえど刃物三昧に及ぶ。ジャボネースはその心
軒はないが、小理屈の多いのには参る。まあ、バイアー
ノ当りが一番よからう。危険もあるが、騙して使うには
もってこいだ。今度帰ったら、コロノはバイアーノばか
りにしてやろう。

などと考えながら、カフェーの樹の隙間に洩れる微風
に汗ばんだ体を涼めながら、点在するコロノの家を訪
れ、

一応の帰国の知らせをして廻った。四年契約者の原田に
は、くれぐれもよく後事を委託して帰った。

いよいよ出発の日が来た。日本人会長の帰郷というの
で、会の幹部が十人ばかりと、それにコロノなどが続々
と顔を出し、賑やかな送別であった。

大助にとっては、かつてない楽しみの日であった。新
調の洋服で、人々にピンガを振舞い、自ら豪快に笑いつ
過した。

今夜は町の泊り、明朝一番の汽車で出聖するというの
で、夕方近く独り乗馬で家を出た。彼としては、こうし
て独りの道々をいろいろな連想に耽る方ががさついた談
話を交えるよりもはるかに愉悦を感じた。それで見送り
の人々を、ことさらに断ってしまった。

微酔の熟した頬に軟風を受けて、ともすると雫れそう
にぐっと込み上げてくる幸福感を危うくかみしめてい

た。

町に程近くなつて、小暗い繁みにさしかかった。道端の草叢ががさがさと喝いだ。と見ると、そこに現れた男、

瞳が射るように大助にそそがれている。

大助の群った記憶の中から、稲妻のように光ったものがあつた。

「ああつ！ あのだ……」

後の叫びを打ち消して、手にしたピストルがパンパンと薄闇に響いた。

「うつ。うつうつ……」

大助はかすかに唸りながら、もんどりうつて馬から落ちた。

鮮血にまみれた錦の帰国者が、路上に足先をかすかに震せていたが、ほどなく迫った夕闇は一切を包んで夜の幕を下した。

数日後である。

町から程遠くない共同墓地に新しい一個の十字架が建

って、

「K植民地草分 金子大助 ここに眠る」

と鮮やかな日本文字が見出された。

（一九三二年）

夏代

片山耀子

略歴 本名・林伊勢。一八九九年、東京都日本橋に生る。一九二六年ブラジルに移住。現在、家庭の主婦。俳諧、創作に関係。田宮虎彦の作品に強い影響を受ける。所収作品「夏代」は、伯刺西爾時報社主催、同胞発展廿五周年記念懸賞短篇小説第一位入選作（一九三三年）である。他に、「船中夜話」、「潤一郎・精二とその弟妹」（『新潮』一九七五年二月号）などの作がある。サンパウロ市在住。コロニア文学会々員。

（編者注 伊勢さんは谷崎潤一郎の妹）

夏 代

夏代は私共に十年もおりました女中で御座いまして、私共ではただ、なつ、なつと申しておりましたが、本当に氣だての良い賢い女で御座いました。私共は未だあんなよい女中を見たことはありません。おそらく、もうあんな女中は二度と見つかるまいと思います。いいえ、女中などと申しますのは間違っているので御座いまして、なつはもうどんな家庭へ入りましても立派にやつて行ける主婦であり、母であつたので御座います。私がこう申上げる位で御座いますから、御近所なぞの評判も大変よい御座いまして、あちこちから縁談なども大分あつたのですが、肝腎のなつがいつも行こうとは致しませんので、とうとう十年もいてしまうようになってしまったので御座いますが、でも終いには、国元の方からやかましく言つて参りますので、致し方なく帰つたような訳なので御座います。

なつは北海道の者で御座いまして、私共へ参りましたのはまだほんの子供の十五の時で御座いましたが、主人が商用で度々あちらへ旅行致しますものですから、その旅館の世話で始めてこちらへ連れて来られたので御座います。貧しい上に、弟妹が多う御座いました由で、早くから奉公に出されたそうで御座いますが、でもその割

に人ずれしていず、何事も几帳面で、影日向なく働きま
すので、なつは忽ちのうちに主人夫婦からまたとないも
のに信頼されてしまったので御座います。

けれども、なつが本当にこの家にとって、なくてはな
らないものにされてしまったのは、あれはもう余程前の
ことになりましたが、いつぞや流行性感冒が大変流行りま
した時、日頃は丈夫な人でありましたそうで御座います
のに、先妻が、感冒から肺炎をおこし、まだ二十五の若
さに、二つと三つになったばかりの子供を残し、突然逝
ってしまつてからなので御座います。幼い者を残して突
然に愛するものに先立たれてしまった主人の気持はどん
なだったで御座いましょう。今でも折々は当時を回想し
て無量の面持ちをいたしておりますが、まったく一時は
途方にくれてしまったそうで御座います。殊に先妻との
間は、長い間の恋愛が実を結んでまだやつと三、四年に
しかなくなっておりませんでしたそうで御座いますから、主
人の悲歎は定めし深かつただろうと察しますので御座い
ます。

けれどもそれにも増してなつの驚きと困惑は察するに
余りあるもので御座います。でも、なつは雄々しくも立
ち上り、悲歎の余り、傷つき病んでしまった主人と母の
ない二人の子供を擁し、よく二年の年月をこの重任に堪
えたので御座います。私が主人を知りましたのは丁度そ
の頃なので御座いました。

或る偶然のことから主人の郷里の家と、私の兄嫁の実家と同じ村の極く近くであるということが分りました、それからというものは、主人はよく私共を訪ねて来たので御座います。

私の実家と申しますのは、軍人でございまして、亡くなりました父も、叔父も、また現在の二人の兄も皆軍籍にあるもので御座います。したがって、御交際して下さる方々もみんなそうした方面の方達ばかりで御座いますのに、そうした所へ、この主人の度々の訪問は、いつか私達の心を好奇から親愛へと移して行ってしまったので御座いました。第一に、母は、その若さに似合わぬ如才のない、そうして身だしなみのいいことに氣を取られてしまいました、兄は兄で、その軍隊のこのみしか知らないような自分に比べて、これはまたあまりにも多方面に渡る、その知識と経験の前に少なからぬ敬意を表していたようで御座います。そうした空氣がいつしか私と主人を結びつけるに役立ってしまったので御座います。申し遅れましたが、主人はもうその頃から横浜に小さいながらも毛織物商を営んでいたので御座いました。

なつの話が十分横道にそれてしまいましたが、でもそうしたうちにも、なつの噂はいつもされておりましたので御座いまして、主人はなつにどの位感謝致していたか知れません。

「なつは僕にとって再生の恩人です。僕がどうにかなつ

たら、どんなにしても、なつに恩返しをしなければなりません」

私一家の者は、何度こうした主人の言葉を聞いたか知れません。いよいよ婚礼も迫って来た或る日、主人は改めて私に申すのでした。

「景子さん、お蔭で私はいま貴女によって幸福になろうとしています。今度はどうぞなつの事を考えてやって下さい。貴女が来て下さって少しでも家の中が落ち着いたら、僕は何をおいても、なつに休養を与えたいと思うんです。景子さん、どうぞ僕の気持を分けて下さい」

私にだって何の異存が御座いましょう。喜んでそうすること誓ったので御座いました。

とうとう私はなつと一つ家に住むことになってしまいました。朝つからの目まぐるしい時がやっとたって、牛込の家へ落ち着きました時なつはどんなに私を喜んで迎えてくれましたことでしょう。

「奥様、ようこそ御出で下さいました。且那樣はもうこの間中からどんなにお喜びになっいていらつしやいますか。私もまたこんな嬉しいことは御座いません」

なつはそう申しますと、ぽたぽたと涙を流すので御座いました。きつと、私を見て急に長い間の感情が一時に込みあげて来たので御座いましょう。

私もまた、なんだか胸がいつぱいになって、なんとも申すことができなくなってしまったので御座います。

日が経つにしたがつて、私となつとは本当に親密になつてしまいました。ですから、行ったらすぐにゆつくりとなつを休ませようと思つておりましたことも、いつかう実行されず、なつもまたちつともそれを望んではおりませんので、とうとうそのままになつてしまいました。もつとも私は、なつのためにかなりのものを分けて与えてやりましたけれども、そんな訳で御座いましたので、家を出ます時、母が、いくらいいい女中であるといつても、

自分より先きに来ていたというものは本当に使いにくいものだからと、幾度も心配してくれましたことも、ちつとも懸念なく、私となつはまるで姉妹か友達のように睦み合つていたので御座いました。年も同じようで御座いました。でも、なつは私のようにぼんやりと育つた者と違ひまして、年こそ私より一つ下の廿才で御座いましたが、話しますことはまるであべこべでいつも私の方が教えられるようなので御座います。・

勉強といえは私の方がどれだけ多く致したか知れませんのに、何の役にも立たないので御座いました。とりわけ子供に対します時のなつの態度は実にしつかりしたもので御座いました。例えば、子供がなにか輿に乗つて悪戯をしておりますような場合、私にはそれをどうしても強く叱ることができないので御座いますが、なつはそん

な時きつと、「坊ちやま。そんなことなすつてはいけません」とはつきり止めさせてしまうので御座います。と
いって、なつはけっして子供に冷たいのではありません。男の子ですから、ずいぶん乱暴もし、困まらせるようなことも致しますが、まだ一度もいやな顔を致したことがありません。

その態度は丁度、慈母の愛児に対するといったようなので御座います。

それから、これは後で考えたことなのですけれども、なつはもしかすると、主人を愛していたのではないかと思えるんで御座います。別にこれということも御座いませんが、なつはいつも、「旦那様が、旦那様が・・・」と申しまして、私がまだ来なかった時分の主人の話をするのが好きで御座いましたし、それに主人の用ですと、何事も念を入れてやりますあたり、そうではないかと思われるので御座います。それに、いつでしたか、子供を連れて、早く遊びに出かけたきりなかなか戻りませんので、どうしたのかと心配しておりますと、夕方になりますして表の方から主人の足音に交って子供の声も致しますので、走って表へ出て見ますと、子供達は主人の両手にくら下ってにこにこ致しておりますし、なつはその後から、いそいそとついて来るので御座いました。でも、流石に私に悪いとも思いましたか、

「坊ちやまが、お父様をお迎えに行こうとおっしゃって、

お聞きにならないものですから」

と、赫い顔をして申すので御座いましたが、私はその場の様子に、何だか暗い思いに閉ざされてしまったので御座います。私さえ来なかったら、なつはいつもこうして楽しんでいられたのではないだろうか、と、ふとそんな風に思われまして。

それに、あんなによく致してやりましても、なつはやっぱり私より主人の方がいいと見えまして、私には打開けないようなことでも主人にはみんな話してあるので御座います。いつぞや主人が風呂に入っております時、何の気もなくそこを通り掛かりますと、いつも風呂の加減を見に行きますなつと主人の話声がするので御座います。

閉め切つてあるのと、水の音とでなつの声はよく聞こえませんでした、

「心配するな。万事は僕に任せて置け」

という主人の声ははっきりと耳に入つたので御座います。

何事だろうと暫くは不安に戦いましたが、しかしそれはこの間中からなつの所へ度々国元から言ってくるらしいお金のことだろうと思ひ当りましたので、ほっと安心致しましたが、でもなつのそうした態度は、何となく裏切られたようないやなもので御座いました。

けれども、そんなことがなんでなつを傷つけることに

なりましょう。主人を密かに愛していたからといって、それを私がなんでとがめることができませんでした。いいえ、愛していたからこそ、あれだけのことができたので御座いましょうと思いますと、私はなんだかなつがいじらしくさえなってくるので御座います。何時迄も何時迄もいたかったなつでは御座いましたが、やっぱりそうはいきませんでして、あれは桜の花のやつと少しふくらみ掛けた三月の末で御座いました。十年も住み馴れた家、自分が育てて大きくした子供とに別れを告げて、泣く泣く帰って行つたので御座いました。私達も、みんな親身の者に別れるように泣いて送つたので御座います。

みんなの者に停車場迄送られて、泣き腫した真赤な顔を幾度も幾度も下げながら、やがて見えなくなつてしまつたなつを、私は何時迄も忘れることができません。

それからもう柱暦は三度も取り替えられました。なつはどうしたのか、それからちつとも便りをよこしません変りがなければいいがと思っております。私の方には、大變變つたことが御座いました。第一あの震災です。店も住居の方もすっかり駄目になつてしまいましたので、もう市内はこりごり致しまして、それに私も二度も流産を致しまして、すっかり健康を損ねてしまったので、あれからずっと、此方に住んで居ります。此処からはもう直きに鎌倉で御座いまして、東京へも二時間で行かれま

すので、主人は毎日此処から通っております。、けれども

私はすっかり田舎者になってしましまして、この頃ではめったに東京へも顔を出すこともなく、日用品は大抵主人が・調べて来てくれますので、本当になにか特別の用事でもない限り、でもそんな時にはいつも主人が東京駅まで来ていてくれますので、震災後も三年になります。が、私はまだ一度も東京の街を歩いたことがないので御座いきす。それに、その後まだすっかり健康を取り戻していない私を一人で出すのを主人はいつも心許なく思っています、るらしゅう御座いますので。

けれども一昨日久し振りで従妹が訪ねて参りましたので、勧められてとうとう一緒に東京まで行くことになってしまったので御座います。なんだかあまり気が進みませんでしたけれども、それに主人に黙って出たこともないしと思ひまして幾度も考えたので御座いますけれども、兄達はみんな他方へ転勤してしましまして、暫く振りで会った従妹が妙に懐しく、別れが惜しめますので、遂に一緒に行く気になったので御座いました。

暫く振りでみの雑踏にもまれますと、もう人の中を泳ぐだけですっかり疲れが出してしまうので御座いました。Mデパートに入つてようやく従妹の買物をすませ、三階の玩具部に出た時で御座います。私もその中に入つて子供達のためになにかクリスマスのプレゼントでも見付け

ようと致しますと、つい目の前に四、五人の人の頭にさえぎられた所に見覚えのある横顔を発見致したので御座います。しかし、もしやと思つてよく見守りますと、それはまざれもなく今朝家を出た主人に違いないので御座います。そして主人が下を向いて何か申しておりますのは、連れている三つ四つ位の男の子に何か話しかけているので御座います。男の子は、人波にもまれ、踏まれそうになり、あわてて主人に取りすがりました。主人は急いで抱き上げると、とれて落ちそうになっている帽子をかぶり直させてやるので御座いました。

ああ、けれどもどうしたということなのでしょう。その勇の子の顔は、主人がまだ幼い折乳母に抱かれて撮ったというその写真とそっくりなので御座います。そればかりではありません。近づいて見ると、主人にはもう一人若い婦人の連れがあるので御座いました。二人は肩を並べて行き過ぎようとしています。はつと思ひました瞬間、二人は何事か此方を振り向きました。六つの瞳は期せずして合わされました。私は思わず、「あつ、なつ」と叫んでしまいました。

「まあ、奥様……」

私はそれからなつが何を申したか、少しも知りません。何処をどうして帰つて来たかも知りません。ただ従妹が、真っ青な顔をして、

「お姉さん、確りしてよ、確りしてよ」

と幾度も申しましたのを覚えていただけで御座います。
今朝も又主人が何か言いたげに私の病床を見舞うのでしたが、私はもう顔を合わせるのも苦痛なので御座います。このままいつそ、どうにかなってしまえばいいと念じております。

それももう、また昔語りになろうとしています。私はいまこの植民地で、可愛い生徒を相手にさわやかな生活を営んでおります。

静かな、しかし単調な生活は、私をして、時にはたまらない望郷の念を起させます。兄は何時でも帰って来るようにと申してくれます。しかし、半世の過去は私をして、人生のあらゆるものを棄ててしまいました。私はいま新しく、更に見直すことによつて、真の何物かの姿を見出そうと致しているので御座います。私はそれが何時になろうと、それ迄、此処にこうしてこのさわやかな生活を守ろうと思つていたので御座います。

（一九三三年）

配 耕

転 蓬

古野菊生

略歴 古野菊生は本名である。高円寺萩夫の筆名を用いたこともある。福岡県の産。早稲田大学仏文学科卒業後、一九三二年、ブラジルに移住。ブラジルにおいては、新聞記者、文教普及会職員、雑誌『大地』主催、銀行員、大使館員などに従事したのち、一九七〇年、日本に帰国。現在は京都に居住し、京都外語大でポルトガル語を講じている。詩と創作の分野に活躍し、長い間コロニア文学界の主なリーダーのひとりと目されていた。戦前、ブラジル在住の文学愛好家を糾合して、コロニア初の総合文芸誌『地平線』を興し、それを主催した。（一九三七―三八年）著書には、詩集『花粉』（鳥井稔夫・古田土光良との共著、一九五一年刊）、歴史物語『ブラジリアへの五〇〇年』などがある。よみもの文学賞、パウリスタ文学賞の選者をもつとめた。

配 耕

海が次第に泥色に濁って来た。

エンジンの調子が急に落ちて、微雨の中に、メコン河の三角洲の一端が、船の行く手に、大らかな孤を描いて旋回した。

船の速力が落ちると、船尾の上甲板にある、密閉した病室の温気は耐らなかった。新しいペンキの匂いと、病人の熱っぽい体臭と、石炭酸の臭いが、ごっちゃになつて胃の工合を悪くしている信吉は、幾度も吐き気を催して病室を飛び出した。

てすりにつかまりながら喉に指を突き込んで、吐こうとしても、胃袋を絞るようにして出て来るのは、ねばねばした胃液ばかりだった。スクリュウによつて物凄く盛り上つて来る白波を見つめていると、信吉の疲労しきつた頭はくらくらした。

この二、三日、信吉の二才になる息子は、四十度を頑固に一分も下らない熱で、乾柿のように痩せ衰つていた。

船医は疫痢の疑いがあるといったが、それらしい徴候は何もなく、ただ高熱が続いた。鋼らが鳴つて中食の時

間だった。南支部海の暑さで弱った移民達は全く食欲を失っていた。移民達は大儀そうに「蚕棚」を離れて、のそのそと食卓に集って行った。塩気の足りない馬鈴薯の煮付けの上に、妙に生臭い干魚が二尾、チヨコナンとのっかっている――移民達は、一瞬、「またか」と言った情ない表情をするが、すぐいつもの諦め切ったような顔をとりもどし、眼を伏せて色のはげた赤い箸をとりあげるのだった。

「飯や、飯や、なんばいうたて落ちついていやがる。はよ食うてんか！」

ボーイの一人は、手でメガホンを作って「蚕棚」の間を催促して廻った。

そして何かぶつぶつ口答えするものがあると、ボーイは、顎のあたりのニキビをいじりながら、冷たい尖った声できめつけた。

「なんや、文句があるんなら、事務長さんにいうとくれや。ふん、モジアナにでも行きたいんやろ」

信吉の妻は、熊手で脳味噌をひっかき廻すような頭痛と、吐き気を齒ぎしりしながら辛棒して、蚕棚の隅っこに身をちじめた、あの油ぎった青白い顔のボーイは、自分をみつけたら、また口汚く罵るだろう。彼女は、船会社のマークのついた毛布をすっぽりと頭から冠った。訳のわからない高熱と、密閉した船室の温気にやせこけ、眼だけ白く大きく剥いて、ものをいう元氣もなく

なつた息子、ひつきりないエンジンの脈搏、神戸の収容所に会いに來た老母の雨にぬれそぼった小さな姿、香港の人の眉のないぬっぺらとした顔、信州のうすら寒い夕方、方の駅、鋼ら、鋼ら、馬鈴薯……そんなものが、ぐるぐるとごっちゃになつて、彼女の割れる様にうづく頭の中をかけまわつた。そして、今朝、無理に息子の看護に病室に行くという病氣の自分を叱りつけて、朝飯も午飯も食べないで病室にこもっている夫信吉の、目立って凹んだぼんのくぼを想つて、彼女は、ポロポロと涙をこぼした。

船全体をゆすぶって、低声（バス）の汽笛がつづけて鳴り、甲板の方が急にざわめき始めた。

サイゴンの港。

雨の故か、夜が早く来た。

河と、はじめのつかない濁った水田のそこに水牛が群れ、夕闇の中を紙片のように白鷺がとび交った。

岸ちかい小屋から、灯かげが洩れ、河に映つて

鈍く光った。

船医の通告で、船窓は全部閉め切られた。マラリヤ蚊の侵入を防ぐためだ。

雨で湿気を帯びた生あつたかい大気が船を包み、船室内は更にむんむんと蒸して塵箱みたいな汚臭が充満し

た。

移民達は船底に、黄疸を病んだメコン河の濁流を、膏汗のにじんだ皮膚に、ひたひたと感じながら、寝苦しい、

一夜を送った。

翌日――。

本日正午本船ハ新嘉坡二向ケ出発ス。船長の告示が出、とつくにその時間を過ぎても貪慾な移民船は、クレエンの触手を止めなかった。移民輸送ばかりでは、移民船はボロイ儲けにならないのだ。

船尾の犬小屋みたいな病室から、信吉夫婦が、喪心したような憑かれたような面持でよろめき出て来たのは、船が動き出して間もなくであった。

やせこけて、更に小さくなった顔一面に汗を吹いて、息子は息をひきとった。

南支那海の深夜は、星があかく、風がマストとアンテナに鳴った。一声吼えるように汽笛が響いて、どんごろすに包んだ信吾の息子の小さな柩は、闇の海面に一条白い水脈の中に吞まれて行った。

大きな黒い手が、心臓をわしづかみにもぎ取って、甲板に叩きつけたような気がした瞬間、信吉の妻は、くたくたと甲板に坐り込んでしまった。

同情からというより、初めての海葬への好奇心から、半円を描いて集っている移民達は、妙に冷たいものを背

筋に感じて、ぞろぞろ蚕棚にひきあげて行った。

息子が入っていた船室に、今度は信吉の妻が横たわった。

シンガポール、コロンボ、そして「英国の湖水」印度洋――移民船は一時間三百二十哩の速力で日本を距って南航しつつあったが、信吾の妻は、信州の山蔭に残した年老いた母から、信吉から、この世のあらゆるものから、船よりもっと早い速力で「死」に向って暮進していた。

配耕先が定まると、移民達の気持は、もはや全く昨日までのような”家族的”なものではなくなった。少くとも、数日前、あの南太平洋の土用波の上でのめやい合った気持ではなかった。

ブラジル、そこに茫漠としてつかまえどころもなく広がった世界、そして、その荒野の果にみじめなほど微かな、ちっぽけな自分達の存在――あがいたところでどうなる！　といった自棄と、本能に近い自衛への身構え、そうした砂の噛み合ったような気分、雰囲気が移民船から湧くメタン瓦斯であった。

信吉の配耕先は、ノロエステ線C駅奥の耕地だった。明朝、眼の検査が済んで配耕先に出発の予定だった。信吉の妻は、リオ・デ・ジャネイロに着く前日あたり

から、ほとんど意識を失ったと同様な重態にあった。

雨が去来して、甲板に出ると、まるで日本の晩秋のような佗しさであった。海岸山脈は、低く垂れた夜空の彼方に、寝そべった家畜のように、おしだまっていた。

聖書研究会の若い男女は、病室のすぐ近くに、円を描いて集まり、感傷的な声で”また逢う日まで”を唱った。

船の売店で、片栗粉を全部買い占めたり、婦人洗面所でふんどしを洗濯したりして、赤ん坊をもった人達や、若い女達から、極度に嫌われていた研究会の会長は、鳥のように上ずった声を振りしぼって（神の国は近ずけりです）と長ったらしい説教の終りを結んだ。売店の腰掛で、皮肉に笑っていた再渡航だという青年が、嚙んで捨てるようにいった。

「神の国だか地獄だか知らないが、明日、耕地について見れやわかるこった。その時になってラマエフマ・リマサバクタニ（主よ何故に見捨て結う）なんていったって間尺に合わねえや」

その「清教徒達」の傍を通り抜けて信吉は病室と船室の間を、幾度となく往来しなければならなかった。

船医も看護婦も、明日の検眼の準備に忙しく、病室の方では信吉の妻も、外の病人達も殆んど構われていなかった。

妻は、サンタ・カーザに入院しなければならなかったが、信吉は、明日、どうしても皆と一緒にノロエステの

耕地に出立しなければならなかったのであった。

信吾の行くべき耕地は、再渡航の人達の話によると、”最も巧妙な機構（カらくり）によって、移民の骨まで、しゃぶり尽す有名な監獄部屋みたいな日本人耕地”だということであつた。

しかも、そのからくりという奴が、いずれも老獪な日本人によつて、水も洩らさぬ組織的なもので「いくつも蔓はひろがつとるが、どの蔓も一本の太木に這いよつと」というわけですたい。大分甲羅の固うなつた老木じやがな、なかなかのガルガンタですばい」と再渡航の熊本県人は、妙に抽象的な説明をつけ加えた。その「太木」が見たければ、今夜一等食堂で一杯やっているから、大喝一声されるのを覚悟で行つてみるがいいと言つた。

しかし、今の信吉にとっては、ノロエステの耕地がどんなものであるか、移民をしぼりあげる「組織」がどうでもよかつた。そんな余猶のある気持ではなかつた。室の代表に相談して「何とか」して貰わなければならなかつた。

船尾の犬小屋みたいな病室から、信吉夫婦が、喪心したような憑かれたような面持でよろめき出て来たのは、船が動き出して間もなくであつた。

やせこけて、更に小さくなつた顔一面に汗を吹いて、

妻は、サンタ・カーザに入る。そして自分は、数百キロメートルも距ったノロエステの奥に行く。――火の玉のようなものに、ぐるぐると追いまくられる気持であった。そしてその一步前に其暗い深淵が食欲な口を開いて待ち構えている気持であった。

本腰になって降り出した雨が、沖を向いている左舷を、やけにもの凄く叩きつけている。その暗い雨の中の甲板に、数人の男達が一塊りになってとび出して来た。まる脱獄囚みたいを感じだった。彼等は、ひどく昂奮し、

口々に汚く罵りながら、移民船室の方にどやどやと急ぎ去って行った。それは信吉を混えた室の代表や役員の誰彼であった。

彼等は、再渡航の熊本県人が正しく予言したように――大木の大喝一声を唐竹割りに、真っ向から見舞われて、上の方の食堂から舞い戻って来たものだった。

しかし耕地への出発を明日に控えて今は全く共鳴性と反応性を喪っている船室の雰囲気の中でこの一塊の男達の昂奮は、敏感なりトマス紙のように、冷たく酸化して行った。この不潔な不快な穴倉みたいな移民船室の共同生活の最後の一夜、それに対する些やかな、楽しげな感傷はあっても、もはや隣人の悲劇への感情なんか湧こうとさえしないこの空気、真空のような空気――ねえ庄田さんまあ何も因縁じゃと思うて諦めて貰うんですな

あ、

とてもあの秋尾の鼻息じゃ、耕地変更なんか覚束んですよ、おかみさんも気の毒じゃが……。

部屋の代表は、妙に信吉から顔をそむけて、こう言つた。

― それあ、外に方法がなかわけじゃなかない。あの

大将、なかなか男んくくだいいうたっちゃ聞かばってん、生のよか娘つ子でもお伽にあげるか、このまるかとボルサン中にそつと捻じこむかすれあ……。

喪心したように、蚕棚の端に腰を下ろして、雨に濡れた髪を両手で掴んでうなだれている信吉の鼻先に、熊本県人は、親指と人差指の先をすり合せてみせた。

路傍の人みたいに興なげな、冷たい眼が、彼のまわりの蚕棚にあつた。

K君 ― 前便の中に一寸書き添えたあの気の毒な若い夫婦もの、そうだ、和歌山県人の庄田信吉といった、あれはやっぱり、結局、移民として処理されてしまったよ。

移民として、そうだ、明らかに人間としてではなかった。

彼の細君はあの翌る朝、雨の中をサントスのサンタ・カ

―ザに送られて行つた。そして庄田君は、他の移民達と共にノロエステに向つた。

あのやさしい細君は、恐らくサンタ・カーザの異邦人の中で一人で死んで行つたことと思う。あの重態で、あの孤独で――僕は神の奇蹟を信じない。

何か外に方法がありそうなものだ―、と君はきつと不審がると思う。まだ上陸して、耕地に入つたばかりの僕にすら、そんな気がしないではない。しかし、僕は、神戸の教養所から、この耕地に入れられるまでの、一人、いや一個の移民としての僕を、客觀的にみつめるとき、庄田君の場合が、決して珍らしくなく、いや、当然な移民会社の取扱いであろうとさえ考えられる。この言葉は決して逆説ではないのだ。

この耕地でも、僕は、無数の庄田君の場合と同じ、或いはもっと残酷な、非人道的な実例を聞いた。

しかし一切の悲劇の原因は、単に移民係という一個人の悪徳にのみよるものではなく、移民会社そのものの根本的な不合理にあると僕は信じる。

商船と郵船との大株主によって命脈を保つ移民会社、この営利会社が会社としての業績を収めようとして躍氣になっているとき、その圧力が、もつとも抵抗力の薄弱を移民の上におおいかぶきつてくるということとはきわめて自然な物理的現象なんだ。庄由君の場合もまた、この物理的現象のささやかな一片にすぎないのだ。

悲劇の最も根幹的なものが、日本政府の、移民―南米移民と遠慮しておこうか――に対する冷淡あるいは放任にあることは勿論だ。ブラジルに棄民という言葉がある。実に、尽し得て正こうを得ているね。

日本を厭がって逃げ出したあいつめ、南米到着早々もう憤慨してるわいと君は、あの独特な皮肉な微笑を洩らすだろうと思う。それを覚悟して之を書き加えて無沙汰を謝す。明日から、いよいよコーヒー園の除草にこの瘦腕を振うことになっている。これで失敬する。さようなら。

庄田夫婦の其後については作者は何事も聞きしることが出来ない。しかし凡その想像はつけることが出来ると思う。偶々作者の知友がこの問題について、日本への書信の中に感想らしいものを書き添えていたので、同文を借用することにした。

（一九三四年）

転蓬（てんぼう）

半開きにしたドアから、顔をのぞかせて、

―雪！（ネーヴエ）海も甲板もいっぱい。雪！　はやく采なさい、秋田さん！

いつもはまるで感動というものを知らないジュオンが、息をはずませている。

――秋田さん、氷菓子（ソルベッテ）、エ？

白い兎の襟巻きをしたジュオンの八才になる妹のルイザが秋田の腕にぶら下って来た。

―抱っこしてやろう、ルイちゃん

三人は一塊りになって後甲板に出た。ジュオンの報告はまったくだ。一面の雪であった。極地の白夜とはこうした感じのものであるうか、明け方とも夕暮ともつかない不気味なまでに静り返った薄明であった。

その薄明りの中に、海上とは思えないひそかな雪である。午後は雪かも知れませんが、気圧が低くなっていますから、お久しぶりでしような、雪も――。今朝、無電局で会った二等運転手（セカンドメイト）がそういった時、秋田は、何となく胸の痺くのを感じた。

学生であつた頃、下谷の鶯谷近くに下宿していた彼は、その陸橋に立つて、東北の方からの汽車が東京にはまだ見ない雪を、車蓋の上に乗つけて、橋の下を通過するのをよく眺めたものであつた。

ade Cases
Leve Cases
le ve a Soud

かろやかに かろやかに ……)

俺、知らん。(ヨ
ン
セイ)

――追憶（サウダーデ）って、なあに？

ジュオン、お前、兄さんだから教えてやってくれ。

と、俺（ヨ）ら、豚小屋（シケイロ）想い出す。あれたい（アケレ・メズモ）、ね（ノン）え、秋田さん。秋田は思わず苦笑した。

― まあね。わかったかい、ルイザ？　するとルイザは、肩をすくめ、外国人のように眉をあげて、ノンと答えた。

― 馬鹿たれ！「ケ・ボーバ」
と言つて、ジュオンも笑った。

“ 鼻の先を赤くして、兄妹は甲板の上を走り廻り、雪をけちらしてみたり、両手でまるめて頬にあてがつたり、嚙つてみたりし、向か突飛なブラジル語で興じ合ったりした。

雪というのは、いわば氷菓子のようなものだ、と何時か父親に聞かされていたこのおませの小さな「ブラジル娘」のルイザが、最初に味わった幻滅は、雪がただ冷たいばかりでちつとも甘くないことであつたに違いない。もしかしたら、十七才のジュオンも同感だったかも知れない。

― 冷めたいなあ、糞！ケ、フリア　メルダ
ジュオンが、持っていた雪の塊りを甲板に投げ捨てようとするのをルイザがもぎとり、

― あたい（ヨ）、母（ママイ）さんに見せる。
そう言つて船室の方へ走って行つた。

静かなのも、僅の間であった。低気圧圏内深く船は入ったらしい。アリウシヤン群島のすぐ商を日本海流に逆らって、船は一晩中、悲鳴に似た軌みを響かせ、ひっきりなく身震いしながら吹雪を衝いて疾走した。

秋田はその夜、とぎれとぎれに夢を見た。どれもブラジルの夢であった。一つの夢はソロカバナの田舎道らしかった。視神経のしびれるほど濃い蒼空が、大円蓋のように頭上にあった。花のひらきかけた木棉（パインイラ）の大樹があり、その蔭に、秋田は母と坐っていた。耕地を出て、リオ・デ・ジャネイロに行く日に似ていた。

秋田は空を仰ぎ、水の中に青空ありて……という聖書の中の文句を考えていた。母は靴を脱いで脚を雑草の上のにばしていた。雑草に混ってきんぽうげの花もある。砂蚤（ビツシヨ）をとってあげまっしょ、そう九州弁で言って、秋田は母の足の指に手をのばした。

すると、あたりが急に朝焼けのようになくなった。木棉の花が満開となって花びらが落ち、仰ぐと高い梢に耕地の混血の娘たちが、未熟な果実の房のようにいて、秋田の方に向かって何か叫んだ。

ポツンと、夢はそこで切れて、目がさめた。秋田は寢床から起き、よろめきながら船窓の、二重に締めた鉄製の窓蓋をはずして、硝子越しに外をのぞいた。波は窓を叩き、雪も降りつつけている。キリキリキリ……

と、

今にも船体が裂け砕けるかと思えるような乱みに混つて、海燕の鳴き声がした。

秋田は寢床に戻り、潮とかび臭い毛布を顔からかぶつて、ブラジル！　ブラジル！　と声に出して言った。

水面をはげしく板か何かで叩くような音がつづいて二つした。ま、そないしやはらんかてええだっしやろ、なあ、あんたはん、あてからもお詫びしまっさかい……ねばっこい大阪弁が、その弾力のある音につづいて、特三食堂に近い売店のあたりで渦巻いた。

船酔いで昼食を摂らない者が多く、それでも食堂には十五、六人の船客があつた。一斉に音のした方に注いだ怪訝な視線の中に、秋田が若林という同年配の青年になだめられながら姿を見せた。そのかげに隠れるようにして、真紅の外套を着たルイザが船の動揺によるめきながら、ついて来るのが見えた。

――　どうしたんだい？

いつも秋田と食卓を同じにする青年たちが蒼白な顔をした秋田の、席につくのを待ちかねて訊ねた。

――　一等の給仕なんだ、殴っちまった。

食卓につくと、ゆつくり茶碗に茶をついだが、口にもって行く手はまだ興奮にふるえていた。

――　ミイになぜ知らせません、ミスタ秋田。

――　ミイも十日間、運動不足です。ハハハ　。

隣席から、カリフォルニアの大学生の谷がぎごちない日本語で、やじった。

「ルイザが泣いて上から帰って来たんだ。どうしたって訊くと、あいつが上の社交室の一等船客たちの中へルイザを連れていったらしいんだ。

ー 元来、気障な野郎だよ、アスパラガスみたいな面しやがってさ、ムーチョ・ビエン！

ブエノス・アイレスで洗濯屋をやっていたという青年が、腕組みしながらおだてるような口調で口を添えた。

ー 始めは、そんなつもりじゃなかったのかも知れない。が、ルイザに、雪のまるめたのを持って来て、こう言ったというんだ。これは冷たい球（ポール）だけれど、大切にしとけばこのまま日本に持って行けるからポケットにしまつときなさい……。

誰も苦笑するばかりであった。

……そして、こっちへ来てストーヴにあたってらっしゃい。この子も、始めは喜んでいたらしいんだがね。

そのうちポケットからぽたりぽたりしずくが落ちて来た。球がなくなった。そして今まで喜んでいたこの子が泣き出したのが面白いというので、そこにいた外国人も日本人も大笑いした、というんだ。

ー そこで、その、幫間（たいこもち）ボーイ奴、大いに面目を施した、という次第かい、チエツ」プータ・

メルダ！

向い側から、充血した眼を剥いて秋田をまるでその給仕でもあるかのように睨みつけたのは、リオ・デ・ジヤネイロのある富豪の家の庭番だった男である。毎晩一人でランプを弄び、火酒（ピンガ）をあおり、果ては秋田の部屋に時間も構わず押しかけて来て、

―慶応四年、アメリカ公使フアルケンボルグが唱導した局外中立なるものの真意を、秋田君、貴公どう解釈する？

などと突飛な質問を発しては、幾時間もねばる男である。

秋田は一度の強い近眼鏡を光らせて、黙々としている若林に、

！考えてみれば、何も殴るほどのことはなかったんだ。しかし、僕は、ただ、むしろ腹が立ったんだ。僕自身、白状すると移民であることにひけ目を感じている故か何かこうブラジル移民全体を愚弄されたような気がしたんだ。秋田は、ルイザから事情を訊くと、その一等船室付の給仕を下の方に呼び、軍隊風の平手打ちを給仕の左右の頬に与えたのであった。きめの細かな、女性的な頬の上に、掌の跡のつくはぜ強い打ち方であった。給仕は泣き笑いに似た表情を浮かべたまま反撃一つしやうとしなかった。それがまた秋田の感情を一そう克（た）かぶ（）らせた。三等の給仕たちが秋田をとりしずめた。

― 秋田君、あとで僕の部屋に采んか。

と若林が、黙りこくつて茶をすすっている彼の肩をかくく叩き、席を立てて行った。

― とにかく、大人気ない振舞だったよ。

やっと平静をとり戻した秋田がこうつぶやき、ふと三、四人へだてた横手を見ると、ジュオンが、人を憚るように、右手で食器を覆いかくし、危なかしい手付で箸をあやつっていた。日本船に乗ってから、生れて始めて、箸というものを握ったのである。

ブラジルの生活とは、日本船に乗った日にすでに橋梁は破壊されていた。周囲はことごとく日本であった。

この十七才の二重国籍者に注がれる眼には微塵のハンディキャップもなかった。芭洋とした大陸の自然児が、けわしい日本の社会で受ける無限の試練は、はやくも、楽しいはずの海の旅で行なわれていた。箸も使えない。日常の日本語もあやつれない、薄馬鹿！ 彼に注がれる白い冷たい限差が彼を盗人のように食卓におびえさせ、訛りの多い両親の故郷の言葉を舌たらずに、おずおずとしやべらすようになったのである。ルイザも兄の陰にいた。

― ジュオンもルイザも胸をうんと張れ。箸なんか捨てて大威張りでフォークを使って食べるのだ。お前達が生まれた国のブラジルの言葉で、誰はばからず大声でしゃべるのだ。そんなにちじこまっていると、日本に行つ

て、毎日、雪の球（ポール）をポケットに入れられるぞ。
秋田は、出がらしの茶を、船会社のマークの入ったやかんから、ついでは飲み、ついでは飲みながら、人い
きれで曇った舷窓の向こうに上下する、北太平洋の冬
の、歪んだ水平線をみつめた。

ブ ジ ゴ キチヨウシユクス コヤマホテル 早く
も横浜の未知のホテルから、船客の誰彼に宛てた電報が
打ってよこされた。

― せち幸いのね、日本。何だか気が許せない感じだ
わ、母国へ帰るというのに。

若林の妻の牧子が、秋田の読んでいる電文をのぞきこ
んで、つぶやいた。

「牧子、あまりとんがらないで、まあサンキストで
も出せや。」

弾いていたギターを寝台の上に投って、若林は秋田と
並んで腰を下した。

蜜柑箱からとり出したサンキストに、牧子が器用な手
つきでナイフを入れると、花束でもばらまいたように、
狭い船室いっぱい、甘美な香が漂った。豊饒な大地に育
った果実の色にも香にも、若々しい奔放さがあった。
一片を口に入れると、甘い中に柔かな、舌を刺す冴え
た味わいがあった。味はブラジルのラランジャに似ては

いる。しかし、ラランジャのそれは、たよりない甘さでしかなく、かつてフランスの消費市場で、柑橘としての風味を欠く、というので不評判を招いた、とあった経済記事を秋田は記憶に浮べた。ブラジルで風味に乏しいのは、果実ばかりだろうか。

― カリフォルニアの果実園の中でも、日本人がいろいろ悩んでいるだろうな。

若林は、一つのサンキストを、掌にのせ、目と水平の高さに挙げて、誰へともなく言った。と、ドアにノックの音がして、谷が長身を曲げて入って来た。派手な緑色のジャケットを着ている。秋田が見上げて、

― 何だ、基督一代記の中の、気違いの役でも演るみたいなのやつを着用に及んでさ。

― シュア！ 緑は希望のいろ。夢見よ緑の？！ですよ。

― まあ、おかけなさいを、谷さん。

― カリフォルニアの若い衆、懐しのサンキストを喫し、而して汝のロマンスを物語れ、だ。

、若林が腰かけに余地をつくりながら、谷をからかうと谷は仰山な身振りで、

― ロマンス？ 僕のですか？

― シュア！

牧子が、谷の口調を真似たので、当の谷までが一緒にどっと笑った。が、谷は、やがてケロリとした顔付に戻り一瞬黙っていたが、急に思い出して、

ー おお、ゴツデム！ 大切な通知の役を（インフ
ォーメエション）忘れていたつけ。今夜特三食堂でキネ
マがあるんですって。午後七時かっきり。そいじや、ま
た来ます。やれやれメツセンジャー・ボーイは忙しい！
バイバイ！

谷は一気にそう言い、軽業師のような投キッスをし
て、廊下を走って行った。

ー ヤンキーの中で育ったのは、派手だなあ。

と若林は、秋田と牧子の顔を見ながら言い、三人は苦
笑した。

ー あの谷さんを見ると、つくづくブラジルの子は、
みんな憂鬱だと思うわ。早熟ているからでしょか、秋田
さん。

ー 僕、何かの本で読んだんです。ある世界旅行者
が、

こう言ったんですって。自分は世界を歩いたが、ブラジ
ルほど子供が憂鬱（メランコリック）なところは何処に
もない、つて。この本の著者はブラジル人ですが、その
旅行者の印象をとにかく肯定して、その主な理由は、ブ
ラジルの子供が、他の国よりも早く生活戦線に動員され
るからだ、と言っていますね。十二才になれば、もう一
家の大切な「臨時収入」を負担するし、十八才にもなれ
ば一家経済の欠くべからざる要員となる、と言っていま
す。

― 奥地なんか、ひどいですわね、早くから立派な一人役をさせられていますものね。

― 僕が日本人の植民地に入ってから、一番先に驚かされたのは、実生活の方面で子供たちがひどく早熟なことででしたね。どうかすると、大人が子供の声で話している、というような気持のしたことがあります。

― そうなんですよ。女の子なんか殊更ね。東京の場末の子どもよりか細かくって。

船全体が小刻みに縦震動（ピッチング）し、汽笛がつづいて鳴る。低く垂れた雪雲と、疫畜の皮膚の色をした海面との間の、狭い空隙を辿って、始めの音がまだ水平線にとどかないうちに、次の汽笛がこれを追って行った。

牧子が起って行つて、船窓から海面を眺めた。

― 船かい？

若林は腰かけたまま、牧子の背へ訊ねた。
いいえ。

― 島？

― 昨日も今日も波と雲か。まるでサンタ・マリア号航海日誌だよ。

若林は手をのばし、ギターをとりよせて線を二、三度鳴らしたが、

― 船も、こう涯しない大洋を航海していると、たま

には腹いっぱい叫びたくなるだろうからね、秋田君もそんな衝動をブラジルで感じなかったかい？

― あったね。

秋田はパラナとの州境に近い加排園の夕暮を想った。樹海という言葉は、正しく、その加排園から幾十軒と、地平線の彼方にまで目路はるかに連なる加排園の巨大な起伏に与うべきであつた。加排園からの帰途、牧場の柵に疲れた体をもたせて、その樹海に眺め入るのが、秋田の楽しい日課の一つであつた。斜め陽光が秋田の影を香の強いゴルツーラ草の上に長々と映した。牧草の中に、ほうずきに似た野生のトマトの実が熟れていたりした。どこを見ても自分以外には人影一つない。自分自身もまたその中に没しまっている樹海の中で、秋田は、咽喉のはり裂けるほど大きな声で叫びたい氣特に駆られることが屢々であつた。しかし、おそらくその叫びも、無限の静寂にのまれ、一人の人間の感傷や詠歎のためには、牧草の小粒の実一つ揺れはしなかったろう。

熱帯の海を通るとき、秋田は、この樹海を想い起した。

海は正しい楕円形を描いて止まることを知らない。船をめぐり、その折々の調子で、海の色が、花の咲く前の加排園そっくりの色に見えることがあつた。遠い涯から船をめがけて来る靡雨（スコール）は、パラナ州境から樹海を渡って来驟雨そのままだった。州境のあたりに、そ

の雨を含んだ雲が陽に翳りはじめ、それから半時間もすると、雨は、いくつかの銀の簾となって、秋田たちの働く加排園を包みに来る。

南京袋を頭から被ったムラトや、イベリア半島民の血をひいた娘たちの、栗色や小麦色の脚が、若鹿のそのようにすすきりと伸びて、濡れた赫土の道を雨と競って走るかと思うと、すぐ後の加排樹の茂みから、低くおさえつけた笑声がしのびやかに洩れ、

ヴェーニャ・カア

ー　ここへお出でよ、アキタ！

などと、彼女たちの、いたずらっぽい声がしたりする。

ーアーヴィングの言葉だったかに、航海は人生の空白（ブランク）だ、とあったように思うけど、僕らには全くよくあてはまる言葉だ。これが秋田君の場合だと、ブラジルと日本の生活とをつなぐ力強いハイフンなんだがね。　と、若林は、とり外した眼鏡をハンケチで拭きながら言うのであった。

ー僕、最近読んだアナトール・フランスのものの中に、こういう意味の文句があったよ。すべての変化は、よしんばそれが、もつとも祝福せらるべきものであるとともに、なお憂鬱をもっているものだ。というのは、我々が離れんとするものは、我々自身的一部分であるからだ。　一の生涯に入るために、人は、他の生涯において死ななければならない、とあるんだ。失礼な言い方だけ

ど、若林君が、ブラジルを引揚るのに、何か敗北感を抱いているのを、どうかと思う。それはフランスのいわゆる、他

の生涯で死ぬための憂鬱に過ぎんのじゃないか、と思うな。とにかく、君も牧子さんも充分闘ったんだものね。まあ賜暇帰朝みたいなもので……。

― 賜暇帰朝にしちゃ貧弱ね！

と、牧子は編物の手を止めて言い、三人は軽く笑うのだった。

若林夫妻は、ブラジルで五年半ばかり、奥地の植民地の生活を送ったのであった。が、若林の健康は、そこで鋏をとることを許さなかった。

J

彼がマラリヤで臥して、いる間に、牧子は、男の子を産んだ。

ブラジルは、その歴史で何度目かの革命の最中だった。隣州の軍隊が、新鋭の機関銃をもって州境の大河を渡渉して襲って来た……そんな噂が拡まり、屈強な壮丁達のある者は鋏を捨て、響尾蛇のいる原始林の中へ逃げこんだりした。その騒ぎの中で、男の子は急性肺炎で死んだ。

夜であった。山焼の火焰が、闇の中に、遠い地平線の一劃に小さな半弧を描いて紅かった。若林も牧子も、生きる日の限り、この遠景は忘れることはできまい、と思った。

アルファファの青々とよく生い繁った丘の共同墓地に、死んだ子を葬った。たくさんな十字架の中に、パラナ松削った日本式の墓標を建てた。黒や白や混血の植民地の子供たちが手に花をもって来た、コッポ・デ・レイチやいろんな野の花で、小さな墓標が埋った。

―僕たちは、ブラジルの土になるんだ。

丘の道を下りるとき、若林は、牧子と自分自らに誓うように、そう言った。

三年つづけて棉を作ったが、害虫にやられたり、ひどく値が廉かったりした。マラリヤは全治していなかった体に無理が重なって、健康は極度に損なわれてしまった。

その頃、北海道にいる若林の兄から手紙があって、もしこちらに来て店の仕事に力を籍してもらえると非常に好都合だが、といってよこした。若林はその手紙を、雨洩りのする茅葺きの家の病床で読んだ。

家裏の沼地で鳴く蛙の音が、いつもより高く騒がしい晩であつた。彼は殆んど夜明け近くまで、帰国のことを

考えあぐんだ。考えは丘の小さな墓標と、アジア大陸の東方の、弓形をした列島の間を振子のように左右した。

―日本に帰ろう。そして俺達はもう一度人生へ挑むのだ。

若林は、腹の底からの大きな呼気でカンテラの灯を吹

き消した。一瞬、闇の中に芯の匂いが、強くした。

船の動揺は少しも収まらぬまま夜に入った。特三食堂で映画が始まった。船酔いで起きれない者もかなりあるが、それでも食堂は満員だった。映画は二種類で、最初のものなどは、もう十四、五年は経った代物であった。

極く平凡な喜劇ではあったが、多分、切れたフィルムを継ぐ時、でたらめであった故か、幾百かの駒が逆であったり、表裏入り混っていたり、筋におかまいなしに前後入替えになっていたりして、船酔いで調子の変になった気分と交錯して、まるで奇怪な夢魔の一卷であった。

――秋田さんも采とられしたばいの。

――火酒（ピング）の強い匂いが襟元の方にして、振りかえると、テ

ーラ・ロツシヤ（紫褐色土）の色と酒灼けとで、擬装を施した戦車の胴体のようを、しかし、艶やかなジュオンの父親の機嫌のよい顔があった。

――あ、今晚は、おばさんは？

――ばあさんなあた、船に弱うしてどんこんなりまっしえん。留守番なしとります。

ジュオン達の母親は、夫より十幾つか年若かなのに、まるでこの男の母親ほどにも老けて見えた。油気のない

ばさばさの髪をひつくるめて、泥だらけのはだしで、齒の脱けた口を一文字に結び、夜明けから夜中まで働きづくめの主婦。まるで感情というものを喪失した役畜のように、原始林と棉畑と茅屋とを唯一つの世界として十幾年を働きつづけた女。彼女もそうした女の一人であった。

男達は収穫期ごとに、原始林を抜け、棉畑を越えて、酒と売笑婦とサイコロのある町へ貨物自動車疾走させた。日本人の集団地を多く控えた市街には、日本人の安料理屋が幾つもできた。不潔な皮膚が化膿するのに似ていた。

殺虫薬に灼けた、骨張った大きな掌をした酌婦と声を合わせて、男達は十幾年も前に流行った日本の唄をうたった。ジュオン達の父親もその一人である。

母親は夜になると、カンテラの芯に火を移し、子供達を手製の寝台にねかしつけてから厨に行つて明日のためのフェイジョン豆を煮る。頭の光る大きな蛍が幾つも窓から入つて来る。蛍を見て、日本の村のことが想われたのはそれはもう遠い昔のことである。想い出もない、希望もない。山のようにのしかかつて来る仕事ばかりだ。故郷のことどころではない、しみじみと空を仰ぐことさえない女――母親。

ブラジルの農村では、日本人の女には中年という時期がない。が、男は何時までも若く艶つやしい。

例え僅かでも、とにかく金を獲て日本へ帰ることが「幸福」であるといえるならば、ジュオンの母親もまた「幸

福」であるに違いない。しかし、船が夕方のサントスを出て、真珠の首飾りを並べたようにまだ港の灯が水平線上に臨まれているのに、もう船酔いで、三等の「蚕棚」に寝ているジュオンの母親の表情の何処にも、十幾年の海外での闘いをたたかい終えて、故国へ帰って行こうとする人の嬉しさ、満足のかげも見られなかった。サツペ葺の小屋で、ろくにはだしの足も洗わないで臥っている時と少しも変りはない。

ジュオンにしても、そして恐らくルイザにしても、船はただ狭く、固苦しく、不自由なばかりであつたろう。帰って行こうとする日本は全く未知の国である。夢でブラジルを見れば、そこへ戻りたい、と太平洋の真中で駄々をこねるルイザでさえあつた。始めて貨物自動車に乗って停車場に汽車を見に連れて行つてもらつた時の方が、どれだけ楽しかったか知れやしない。……父親だけが一人、はしゃいでいた。

彼が日本を出て来た大正の初年ごろの大どかな故郷が待っているのだ。円を掴んで帰る！ と誓った言葉は、今はとにかく成就されたのである。子供らは日本の子らに較べれば少しは「鷹揚」かも知れぬ。が、なめに金がある。金！ 日本でうまく行かなければ、またブラジル

へ舞戻って行くまでさ。彼は火酒（ビンガ）をあおっては、あたかも大成功者のように三等船室に振舞った。

その金は、極く僅かの額で、袋に包んだのを母親が後生大事にあずかっている。船酔いというのは、あれは嘘ばかりで、父親が金の番に彼女を寢床から離れさせないのだ、などと噂する者もある。

とにかく、父親一人が楽しく嬉しげだった。

次の映写が始まった。これも十幾年前の代物で、筋は、

アメリカン・インデアンである一人の農村青年が、発奮して都会に出、苦学して大学を卒え作家となる。ある白人の娘と恋愛したが、社交界で、インデアンであることを嘲笑され、一冊の小説を著して失意のまま、また元のインデアンの部落に戻る、といった風のものであった。単調な上に、旧時代のあくどい手法の映画で、秋田は終りまで見つづける根気がなかった。

人いきれのひどい映写場から出ると、船の動揺はすっかり収まっているようだった。後甲板の扉を、何気なしに開いた。と、月の光が滝のようにほとぼしり流れ込んだ。甲板は一面の白雪で被われていた。舷側へ歩み寄ろうとして、秋田は足を停めた。彼から少し離れた通風筒の傍に、三等船客の一人の老人が、掌にのせた白雪を、まるで砂金でもあるように月光にすかしみながら凝然として佇んでいた。

―― ハロー！ ミスタ・秋田。起床々々！水平線にサクラとムスメサンが見えていますよ。

元気に扉をノックして、カリフォルニアの大学生がふれ廻る。

海の涯には朝雲が見えるばかりであつた。雲は薄紫の藤の花の色をしていた。その藤の花房の蔭には、はやくも国土の一端が双手をさしのべているのかも知れない。よく欧州帰りの人が、懷郷病を昂じさせて、日本の姿の見える近くまで来ると、海に飛びこんで自殺する、という話を思い出した。が、この淡々とした気持はどうしたことだろう。それはすでに心をブラジルの土になろうと定めた自分であるからであろうか、それとも、僅か数年の南米大陸の生活から来た感性の耗弱の故であろうか。

秋田は、ぼんやりと、舷窓に劃られた円形の空を見た。

浅春らしく、触れば陶器の感触のしそうな淡青の空である。生まれたときから見なれた、そしてこの数年来、絶えて仰ぐことのできなかつた日本の空である。この国には四季があるが、自分がこれから死ぬまで住まおうと心に決めたところは季節のない国である。

四時 是夏一雨便秋 シジコレナツ イチウ スナワ
チアキ

海南島に流離の時、蘇東被がうたった詩の一節の通りの国土である。

窓を開けた。波の音が室の中へとと躍り込んだ。首を突き出すと、高い潮の匂がした。飛沫をまじえた風が快い。鷗の群れも陸地の間近さを想わせた。

― お早よう、と何時もながら落ちついた若林の声がした。隣室の舷窓から、やはり彼も首を突き出して微笑んでいる。

― やはりブラジルに落つくことに決めちゃったよ。故郷の方の整理は一カ月で済む。済み次第、すぐブラジルへかえるよ。若林君。

秋田は強いて快活な口調で声高に言った。

― そうか、決めたかい。

若林は、秋田の方を見て何度もコックリしてうなずいた。ラジオが朝の体操の前奏をはじめた。

― 幾十日も船の中でとやかく思いあぐんで決心がつかず、いよいよ日本の土の匂いのするところまで来て、とたんにブラジル永住の気になっちまうなんて、妙な話だけど……

― じゃ、やつぱりソロカバナの奥に行くんだね？

― そう、パラナ河の流域さ。河向うはマツト・グロツ

ソ州なんだ。ブラジルの牛飼いになると決めてしまおうと、爽やかな心境だよ。

と言って、秋田は、頬にかかった飛沫を右手で拭いながら、

―などと言うと、何だか負け惜しみみたいだなあ。

―秋田君が僕は羨しいよ。傍ら夫婦は結局 *v a v i c t i s*

（敗れたる者は悲し）さ。北海道に行ったって、いい生活があるとは考えられないしね。

― だけど、ねえ若林君、僕のブラジル永住だって、いや僕だけじゃない、ブラジルの第一世の永住の決意なんてものは、結局生活探求に疲れた者の、悲しい終着駅じゃないかと思うのだ。悲壮な諦めなしに、永住を決意することはできないんじゃないかと思うんだ。

船腹の吃水線のあたりを見つめて、二人とも顔をあげなかった。速度が落ちた。船は日本領海へ入ったのだった。

（一九四〇年）

入植から

桜田武夫

ふくしゅう

杉 武夫

桜田武夫

略歴 山口県出身。『農業のブラジル』、『伯刺西爾時報』編集部に勤務、

傍ら詩、評論、創作に活躍したが、戦前、病をえて帰国。

杉 武夫

略歴 本名・武井誠。明治四二年、北海道虻田都に生る。昭和六年、法政大学専門部高師科卒業。翌一九三二年、力行会移民としてブラジルに渡る。各地の日本語学校教師を歴任した。

戦前『伯刺西爾時報』紙、ならびに『地平線』誌上に、活発に創作・評論を発表した。本人いわく「利を求めて転々と職を変り、その間に文学への情熱を失い、現在は某製菓会社に勤務」。

サンパウロ市カンポ・リンポ街道居住。

入植から

桜田武夫

船を見てさえ、すでに胸の悪くなるほど、船に弱い俊作には、四十九日の航海で、女子の生理的变化ほどにやつれてただ幻影といおうか、理想といおうか、焦だたしい境遇の変化と、将来への計画とで、頭ばかりが妙にガツガツ呼吸しているように思えたが、サントスに上陸したその夜、波のない眼界、エンジンの音のない室、揺れぬ寝台に落付くと、更生したような揺藍時代にも似たような新しい生命の感じを抱かずにはいられなかった。が、それもわずか一日で、次の日には、サントス・ジュキア線上を走らねばならなかった。

彼には妙な性質があつて、どうかすると、外物の風景と、感情とが、急に電流の両極にあるような作用を起すが、またその反対に、目前の空気、否自分の存在さえ忘れて失うほど茫然となることが度々だった。

ジュキア線の汽車の旅は、ちようどその不感症にあつた時だったかも知れぬが、半日にわたる汽車の旅は、追憶の一片だに残らない印象の稀薄な経過だった。

その翌日、また、川船に乗らなければならなかった。それは遠泳の時の最後の二百メートルのところで、潮流

の急変化を感じた時と同様に、痛々しい次の努力だった。船の出る前の晩、赤黒いカンテラの灯を横にして、鏡に映した自分の顔を見た時、振られた女を見つめるようならみと、情なさ、哀愁とを含んだ大きな鋭い眼を感じ、沢色がなく、垂れ下った髪を掬い上げると、キラリと光ったものに、いつでもない閃光を感じて、指の金の指輪を見ようとして触れると、指輪はするすると滑るがごとく指から抜け落ちた。

二十世紀の代物とは思われぬ川蒸気の船尾の水車が、彼の頭にガンガン響いて、ピストン、船客の話、靴音等々とが交錯して、鳴りはためく鐘の中に頭を突込んだような音響以上の騒乱と変動を感じ、彼は益々憂鬱になった。川の名はリベイラということを微かに聞いた。

朝から降りしきる雨は、正午前迄になつてもまだやまず、彼方の空はちょうど日本の雪空を思わせる鉛色で、両岸の寄生木を盛った熱帯特有の灌木や、その森、偶々な土着人の家、広々とした牧場等をバックとすると、雨足は鉛色の線が上下に交錯するように見えて、長い雨期のために臭味も感ぜられる溝色の川面では、雨足が跳ね返り、雨の綾が霧のごとくしぶいていた。

気体とも思われぬ風が来ると、雨足はへしあいおしい海草のごとく波立たせてその度に後尾の水車の音が千切れたり、遠ざかったりした。

はるばる一万二千裡

地球の果て

船――川蒸気におれは乗っている

否乗らなければならぬのだ

川蒸気は上っているのか

下っているのか

鉛色の雨――雪空

熱帯の木、雨の馬のいななき

ただ、きつい煙草の煙り

彼は、かつて作ったこともない詩を口ずさんだ。

外套に手を突込んで、川面を見つめている彼の濃い眉から頬にかけて幾条もの雨しづくが伝って流れた。

彼の足下には箱に入れられた四、五羽の鶏が骸骨のようになくやせてコックコックと鳴いた。

――船はもうすぐセツテ・バラス植民地へ着くのである。

実際、その川蒸気は運命の渡し船でもあった。日本とは反対の位置にある伯国の、しかもこのリベイラ川の上流で、彼らの行末が決定されるわけである。

いよいよ、目的のセツテ・バラス植民地へ着きます、と、海興の案内人が、触先に立って、風に刃向いながら

無表情に彼方の上流を指さす。と共に気笛が馬鹿に長い煙突にふさわしく、「ボーボー」と牛のうなるように川面を撫で廻した。

総勢八家族の入植者は、バネ仕掛けのように身体を起し、舳先に向った。

目前に刻々現われてくる次の運命に、だれもが、猫の獲物を狙うような、そしてあまりにも緊張仕切つての静けさ、しかしやけつくような凝視で、視線は期せずして、

案内人の指し落ちるところに注がれ、得意気な説明に、しんとなり、思わず足に力が入り、爪先立つて行くのだった。

ザアザア　ザアザア、葦が風に靡くような音に、舳先で波が分れ、山形に拡がつて行く小波の動きが、彼らとはぜんぜん反対な悠久さで流れ、鷺に似た川鳥が、しきりと川面を掠めて餌を獲っていた。

せめて伯国に来る時の寄港地サイゴンに匹敵する港であろうと予想していた入植者一同は、雨あがりの重い空を支えている岸辺の丘にある小さい家並びを見て、緊張の構えに、お胴！　と、たたかれたような感じがして、荷物を纏める手には勢いがなかった。

案内人が「町」とはいうものの、小高いところにポツネンと、小さい塔のごとく奪え立っている白壁の教会が目立っている外、瓦ぶきの家も少なく、壁という壁はほ

とんど崩れ落ちて、骨の壁構えが露わに見え、それらはいかにも飢饉の後の頭痛的気分を感じさせぬ訳にはいかなかった。そんな家々が三十軒位あつて、岸辺に沿うて階段のように建っていた。

舟が着くと、そこいらの白、黒混ぜた子供たちが、川の色のようによんだ眼に、好奇心をみなぎらせながら、恐怖の前にあるような奇声を発して寄り集まって来た。

それらは、言い合せたように、崩れた大人の帽子に、糸かと思えるほどよれたズボン吊りのズボンをはいて膝から下には腫物を汚い布で巻いているものもあれば、ザクロのような傷口を出したものもあつて、そこには小さい蠅が炭を塗ったかと思われるほど集まって、足の指は鎌のように曲り、毛のない猿の足と同様だった。これが、ブラジルの児童かと思うと、俊作は毒蛇の中に生きるにふさわしい動物だと思つてまた見直した。

十四、五人位のそれらの中に、日本人の子供も四、五人いたらしいが、それは、日本人とは思えぬほど、動作挙動が同化して、ことにベラベラと葡語を語るところなど、なおさらその感を深めた。

四、五年振りの日本人の入植者なので、「町」の外人も相当集まつて来たが、皆、その子供を大きくしたものと変りがなかった。

総勢八家族の大人達は、安心と落胆とが衝突したような心持で、彼等の落付くセツテ・バラスを再び見直して

は、てんでに変わったことを考えながらも、女、子供を船から降ろしたり、手荷物の運搬に余念がなかった。

それは、五年此方、この埠頭では見られない日本人の賑やかな活動と風景であつたに違いない。

「どうせ、目的は日本を離れさえすればよいのだから：俊作は、その目的が果せられたには違ひなかつたが、大平原の果から――川面から――雨後の湿りを含んで漂々として吹く風に身をさらしつつあると、感傷的な胸に、いつもの傷みがうずくのをどうすることも出来なかつた。

学校の横のコッションの生え茂っている広場には、迎えの四輪馬車が五、六台待ち受けていた。車輪に赤土がこびりついて、馬の耳と腹には大きなアブが真黒にとまっていた。

低い空からは、午後の白々しい陽影さえ洩れ始めて、靴底の白い砂が妙に感觸的だった。

「行守さん、わての馬車どれだっしやる。馬に聞いて見まうか」

瓢軽な青脚絆が案内人に大声で話しかけていた。

「ブラジルの自動車は、四ツ足で早いだっしやる。おまけに耳の長いのがいやはるよって」

大阪人の家族はどっと笑った。

俊作の叔父吉兵衛は、惣領の吉太郎やその妻操、春

子、

吉次、吉三郎が手荷物を運んで来るのを車上でまとめていたが、急に思いついたように春子へ、

「俊作はどうしたんだ？　こんなに忙しい思いをしているのに」

家族構成の戸籍面では俊作の妻になっている春子は、やはり紙上のそれであつた。間接ではあるが詰問的な俊作への言葉に、情として答えた。

「増田さんが酔つて船で倒れているから、気嫌とつているのよ」

吉兵衛の顔に引立したようにぐっと青筋が立ったが、馬車台を踏み叩かんばかりに、

「吉次！　お父さんが呼んでいるからといって引張つて来い。増田家の付き添いではあるまいし」

吉次が埠頭に走ると、すれ違つて増田源吾を肩にした俊作がやつて来た。傍らには美代と、卓二と二人がついていた。町の子供も面白がつてぞろぞろと後に解いていた。

俊作が、こうやつて泥酔の源吾を介抱したり、気嫌をとったりして他人に危害を加えぬように注意するのはさながら肉身の親へのようであつた。親のように思えばこそ、泥酔者相手も出来たのである。酒くさいながらも源吾の重みを骨ばった肩に感じると、破産した父が思い出されてくるのだつた――破産して憂鬱な晩年を送った父

――そしてここにその形に酒を加えた同類の五十男……。

俊作を呼んで来いと怒っても、泥酔した源吾を抱えて来る俊作の美しさをみると、吉兵衛は、砂でもかみあてたような顔をして、

「オイ皆んな、吉次も春子も馬車に乗った、乗った。早く行かなけりや、収容所は遠いのだぞ」

と口やかましく車上でそわそわしながら妻のヨネの手を引張って馬車に乗せたりした。

「行守さん、増田さんの馬車はどれですか？」

俊作が行守に問うと、

「そうですね。皆、他の車が塞がってしまいましたから、ああそうそう、吉川さんと一緒にして下さい」。

と顔を上げて車上の吉兵衛をみて頼み込むように、

「吉川さん、どうでしょう」

「いや酒酔なんか、一緒にやれませんな。気の毒ですけど、それにうちは家族と荷物が多いですからな」

愛想のないばかりか、この増田に対する反抗的な拒絶に、行守は彼等間の関係を「こりや少し変だ」と、さすがに苦労人だけあって感付いたが、何気ない風だった。「叔父さん、でも他の馬車は一杯だし、この場合そんなこと言っていられないのですから、乗せて上げて下さい。はその代り歩みますよ」

「俺はお前を歩かせようと思って言ったことじゃないん

だからな」

俊作は叔父が、誰にもあてつけな言葉にぐっと癪に障った。

人生の何の意味であれ、或るポイントに立つと、必ず順調に行ったことの無かった過去を振り返って見て今も、

新入生の始まらんとする入植の埠頭において、叔父のいさかいはかなり憂鬱に落とすものだった。そう反抗した以上、否増田源吾をかばってやった以上、馬車の行動も増田源吾と一緒にでなければならなかったが、気の弱い俊作には血縁の者への態度としては苦しいものだった。

行守は、ちようどそこに来合わせた或る日本人の製材所の車を都合してくれた。

鞭が鳴って動き始めると、我に返ったように馭者を見た。三十に行くか行かぬかの頬のこけた色の黒い大男の日本人だったが、同胞とは親しまれぬよそよそしさがあった。

一行の馬車より遅れて出た俊作の馬車は、広々としたカンポの白い一本道をゴトゴトと歩いた。道には所々大きな石が岩のように出て、それに打衝かるとガクリと廻って、材木を埠頭まで運んで疲れている馬は、だらしく止ったりしたが、鞭の鳴る度に身を締ませてはヤケに走った。股から脚にかけて泡が井戸の瓦斯のように吹出

しながら、源吾は他愛なく、縁によりかかりながら高いびきだった。

美代は二重顎を深く埋めて、一所を見つめている眼は、少しの動きにも、ポツリと涙が出るように潤んでいた。弟の卓二や、十三の妹までが父の姿を見ては俊作を親しげに見た。俊作は船の中からではあったが、この姉弟妹三人の眼に肉身の暖かさを感じ、彼らと一緒にいる時に始めて、己れの存在を考えたりした。

白い一本道を行くほどに、埠頭を離れるほどに道の色に赤味が増し、馬車の動揺が劇しくなった。七キロの杭が立っているところに三叉路がありそこからは原始林になった。

木の葉と、木の皮、落葉の香り等が一緒になって原始林特有の、数百年の過去から現在に呼びかける親しげな、追憶的な、静寂な無言的の言葉を聞くような気がして、赤、青の彩色を施した小鳥が鮮かに活動的にその薄暗い薫高い中を飛び交うのがいかにも原始林の姿を和やかなものにした。が実際は天に沖して競い立っているこれらの一抱えから二抱えもある木を自分の手で開拓せねばならぬと思うと、原始林の中の細道で空が帯のように見える谷底の自分らは、流れる水のように弱いものであつて木々が急に伸びて行く感じだった。

道はますます悪くなって、馬の腹は土壁のように土がへばりついて足を深みから抜き出す時に、ギューとくす

ぐったい音がして、ポツと抜き切ると、ピシヤリととばしりが車台まで飛んだ。

ついに次の三叉路の坂では登ることが出来ず、源吾だけ車上に置いて皆は車を押した。

坂を漸く登り切ると馬は殺される場所を逃れたように出来るだけ大きい息を続けると、その息と共に車台は浮いたように前後に揺れた。

絞り込むように夕闇がやって来ると霧のように深い夜がやって来た。これからどの位かかりますかと聞いてみると、この山の腹を廻ると学校が見えるからその下に収

容所があると馭者は頭を掻き掻き答えた。赤黄色のようなランプの光が、点のように動き、時折金属性のピカリとしたものに反射した。収容所が間近に闇の中に浮いていた。

収容所とはいっても荒壁の掘立小屋で、柱には茸が生え、土間には糸を染めたような草が生えていた。何でもそれまでは放って置くのに惜しいというので生徒十五人位の夜学校であったそうだ。しかしこの山奥で長さ十米位の建物の中からカンテラの灯や、人の話声、うごめきがあることは、大洋の真中で船に会うように懐しいものだった。夜だったから、どちらを向いているかわからなかったが、真中に入口があってそれを奥に入り、左に曲

り、そして入口の方向に返ってつきあたりが六畳敷位の室が 彼らにあてがわれた。

先着の一行はてんでに、煉瓦で竈を造り晩食の支度をしたり、荷物を解いたりしていた。俊作は飯の香りをかぐと急に空腹を覚え、同じ馬車に乗せて来た会社から配給された米、バカリヤウ、乾肉、塩、砂糖などを室に運んで、そこいらの煉瓦を集めて、その室の窓の前にある堤を削って竈をついた。それから美代と一緒に裏の小川に水を汲みに行った。川は原始林とカンポとの境にあつて、原始林が屏風のようにそそり立ち水はその蔭からカンポの草を分けて湧き出るように流れて、吸い込まれるように原始林に曲っていた。ホウ！ ホウ！ とフクロウや、オーイ、オーイと人を呼ぶかと思われるサシ蛙の鳴声が、地から湧いて梢に登るようであり、闇もそれに和して、シンシンとうなって急に滅入る疲労を感じた。

建物の右側に薪を取りに行くと、湯を使う音ーと、笑い声とが混って聞えて来るので、見るとU形の金物の中に入っているのであった。カンテラの灯の影と、肉体の色と湯の映えとは何か妖怪じみた気分があった。

「なんば海興のおっさんでも、このトロッコが風呂になるとは思いもよるまいてハ、、、、」

二、三の笑声の妖怪はユーモアじみた変なものだった。

美代が、竈の中に新聞紙を焚きつけていたところに薪を抱えた俊作がやって来た。薪を入れると煙は横に吹き出して闇の中へ霧のように這い廻った。焰の立ち始めたところへ叔父の吉兵衛がやって来て俊作を引張って行った。

美代は俊作に対してすまないすまないと思いながらも、船中で母はなくなり、父はあの状態だし、その上一家を挙げて入植という仕事が到底、女、それも娘の身にとってには背負い兼ねる不可能事だったので俊作の男の力を借りずにはいられなかったが、その為に俊作が叔父と仲違いになった事実を考えると、実際どうしたらよいものか泣くにも泣かれぬ心持だった。

「あの、お菜は何にするの？ なんだったつけ。バカ……バカ……忘れたよ、あの魚の名前」

「カルネ・セツカッテ、セツケンノニオイトオンナシネ」話しかける十五の卓二やルリ子が原子林へ放り出された孤児のような気がした。

「姉ちゃんは泣いてるの？」

頭を撫ぜられた目の大きなルリ子が炎に頬をリンゴのように染めながら姉を見上げた。

無言の時がしばらく続いた。

「埠頭から随分違いのね。たしか出る時は三時頃だったから、三、四、五、六、七」

と美代が左手の親指から折って高々指を曲げる時、俊

作がやって来た、右手に手紙のような書類を持って。

……だれもが無言で彼を見た。

……美代は額の所に渦のような痛みを感じて……。

「何でもなかったよ」

言葉とは反対の俊作の態度を三人は見逃さなかった。それだけいって俊作はルリ子と美代との間にしやがんでルリ子にいった。

「口をお開け。サントスのチョコレート上げるから」

ルリ子は焰にキラキラする銀紙をまじまじと見ていたが無邪気に口を開けた。

南聖海岸山脈は、北方に吹きつける大西洋の濃い水蒸気を、その肌に受止めて、雨はほとんど一年中といつてよい程降り続けた。奥地は乾燥期というのに、その一帯は洪水に悩まされた。作物が立ったまま収穫の済まぬ内に次の芽が出た。大河の縁は別としてその植民地の米の収穫は奥地の半作だった。豆と芋とは植えた種すら失った。その上連作は不可能だった。二年と作付すると、カポエイラとして他に土地を求めるより外なかった。

そのカポエイラの面積の増す程彼等は、この不幸な天恵に吐息をついて、たたきのめされるように反抗を失って行った。

或る者は黎明をさえ失念し始めた。そして夕も。生活

というものに意義と意識を覚えず生きて行く者は生活の捕虜者であり、中毒者であるのだ。その捕虜者であり、中毒者は、働かねば――少しでも働かねば食えぬということのみの、人間として余儀なくも最低の観念の奴隷と絶って働く。夜になるとその反封として、肉体的に刺戟を求め、強い火酒に胸を焼いて陶然となり、石ころのように土間に寝た。

それは健康な喜びも、健康な悲しみもない生活に違いなかった。そしてあまりにも、入植当時の希望と熱とかけ離れたパイオニアの生ける屍の姿だったのだ。焰の燃えさかるような野望を抱いた狂熱の入植者の意気と、それら或る既植民の頹廢的自棄的な気分とが、当然として感情的に打衝かるのだった。しかし新しく若い者は利巧に振舞った。老人達にへつらうことは感情的には苦しいものだっただけでも、利益のある所にはエヘラエヘラ笑いをした。が反対に損の行く時は遠慮会釈なく喧嘩した。――

「この大根一ダースが十ミルなんて、二円五十銭なんで、馬鹿馬鹿しい。俺達は新植民だけれども、原始林にはパルミットというものがあることは知っているのだからな」と。

新植民は、心の中で、「同じ所に五年も暮していて、まだ生活の安定さえついていやしないじゃないか」と旧植民を侮辱の眼で見つつも、俺達はそんなドジは踏まね

えからなという具合に、新しいカーキ色の服で夢中になって地区撰定を始めた。そして「ラランジェーラ」というビラミッド形の青黒い肌の山を中心にして四方に流れる小川と小川との間に襞の小山を背にして各々の家を建て始めた。

――何年か後に、その家がどんな運命になるかを考える余裕もなく、冷静な眼で見て、良いにしろ悪いにしろ、

収容所から繰り出す家族が増して行くと、俊作は焦燥を感じぬ訳には行かなかったが、彼は若いことと、都会に育ったこととからこの入植ということを理想的に見た時、現実の結果を判断した。差し向き俺のこの腕で家を建てる事が出来るか？ 北海道を開墾して来た者と同様にマッシャードが振るえるか？

彼はあまりにも明白な目前の不可能事をみて必要のないことを繰り返し繰り返ししては考え込まずにはいられなかった。

希望――不可抗力――不可能事――結論――これらの細胞組織によって有機的に構成されたものが浮世の運命なのだ。源吾は、収容所に着いた翌日から喀血を始めた。診察の医者とは、その時、馬の去勢を終えてやって来た獣医だった。

（前篇終り）

（一九三四年）

ふくしゅう

杉 武夫

九月の終りになると農家は一寸閑になるので、日曜には魚つり位できた。小さな川だったのでろくな魚はいなかった。五センチか、精々十センチ位のタライラが釣れればいい方だったが、好きな人にはやはり魅力があるとみえて、日曜には皆よく出かけた。

前川もそうした釣好きの一人で、日曜になるとじっとしていられず、つり竿を持ち出す方だった。

その日は珍しくよく晴れた目だった。雲一つなく青く澄んだ空には九月の太陽がキラキラと輝いて、微風が木の葉をゆすぶって通る、たまらない絶好の釣り日和だった。

前川は、何時ものように幸子の家の前に出て口笛を吹いた。すぐに幸子の丸い色白の顔が現われた。

「もう、釣りに？」

幸子は、大げさに驚いて見せて空を仰いだ。

「あら、もうこんなになるのかしら。パパイたら、まだ寝ているのよ」

幸子の黒い瞳が前川に微笑みかけ、直ぐにまた家の中

を覗き込むように首を曲げた。前川は幸子のすんなりした首筋に、本能的衝動を感じ、思わずつり竿を掘りしめた。

「たまの日曜なもの、うんと寝かせて置くさ……。それより一寸その辺まで歩いて見ない」

「ええ」

幸子は、一寸周囲を見廻してから、前川と並んで歩き出した。

「ねえ、今度の日曜町へ行くんだが、幸ちゃんも行かない？　僕はもう町へ出るの三カ月ぶりなんだが……」

「そうね……。行けるかもしれないわ。弟の本やなんか買わなくちゃならないし、それに他にも用事があるから幸子の何処か夢見るような瞳が前川を駆ってまた楽しい空想にふけらせるのだった。」

二人は何時の間にかとまっていた。周囲は真白なカフェー花の強い香りでむせるようだった。

「オーイ、幸子」

ママイの声だった。

「じゃ、今度の日曜、ほんとうに行くね」

「ええ」

幸子の姿が見えなくなっただけから、前川は口笛を吹きながら一人で川の方へ下って行った。

「どこをうろうろしているんだよ、ほんとうに。さつきから相田さんが待ち兼ねているのに」

まだとかしていない髪の毛をかき上げをがら母親はにらんだ。

何かにつけて、相田、相田という母の言葉が幸子には気に入らなかった。相田の金持ちなのに目をつけているのだと思うと、母の言葉にさえたまらない厭悪を感じるのだった。

「やあ、どうしました、幸子さん。僕、今日カミニオンで町へ行くんですが、用事があつたらして采ますから、遠慮なく言つて下さい」

黒のカジミールを着て、きれいに髭を剃った他所行きの相田の、勿体ぶった様子が、幸子には厭悪以外の何物でもなかった。

「幸子、この間ほしいと言つてた櫛をお願いしたらいいだろう。……相田さん、どうもこの娘は一人娘であまやかして育てたので、強情で仕様がないですよ……。ね、

幸子。櫛だけだったのかい」

母親はふと、幸子がまだぼつんと立ったきりで挨拶もしていないのに気がつく、あわててかの相田の顔色を窺うのだった。

「妾、今度のドミンゴに町へ出るから、その時買つてくるから、いいわ」

幸子は、母親の見えすいたおついしようにには堪えられなかった。

「だって、幸子。せっかく相田さんが、ああ言ってくれるんだもの、頼んだらよいだろうね」

「相田さん。わたし、自分で今度の日曜に買うから、いいの。それまで待つわ」

幸子は、それだけ言うと、さっさと家の中に遣り込んでしまった。二人は、しばらくあっけにとられてぽかんとしていた。

「おばさん、今日は幸子さん馬鹿に機嫌が悪いんですね」
「……………」

幸子の母はしばらく走り去った戸口の方をにらんでいたが、相田の方を振り向くと、軽い溜息まじりで言うのだった。

「どうもね、相田さん。あの娘もあんなんじゃないかったです、この頃、前川さんとこの息子がうるさくつきまとうので……。きつと何やかや言ったに違いないんですよ。……きつとそうなんですよ」

「前川の息子が……。まさか、おばさん、ありや、日本語もろくろく読めないここ生れじゃないですか」

相田は、そういう言葉によって自分の地位を示すとともに、素気なく否定はしたが、心の動揺はさすがにかくせず、赤黒い顔が緊張していた。

「じゃあ、行つて来ますよ。おばさん、何かお土産を買つて来ますよ」

心の動揺をかくそうとさり気なく笑っていおうとした

が、何処か上ずって、かえって心の中が見すかされた。

セマナはどこの家も忙しく働いた。しかし、今迄長い間天気続きだったのが、何時か雨模様になり、木曜、金曜と続けて降ったので、田舎道はすぐ流されてしまつて、その跡はみじめな凹凸の多い、所々には大きな水溜りさえできてしまった。

そうして年に一度の道修繕が、少し早かったが行われることになった。

例年日本人会がやっていたのであったが、今年は青年会が引受けてやり、そのために浮く金を全額国防献金として送ることになった。

そう決定したのは青年団長相田の提唱によるものだった。どの新聞も国防献金の記事を書けないものはなかった。それに何より毎日の戦争記事は、在伯邦人の血を湧きたたせずにはおかなかった。そうした時、この青年団の自発的申し出が称賛の声をもって迎えられたのはいうまでもなかった。

前川は、日曜日朝六時半のジャルジネーロで町へ行つて、帰つたのは夕方近い六時だった。そうして初めて今日青年団の道普請があったことを聞いたのだった。なるほど帰る時、道が綺麗になっていると思つたが、例年のとおり日本人会で家長が出て直したのだと思つて、何んの気にもかけなかったのだった。だが、自分の出た後へ

すぐ隣りの山田さんから今日道普請があるとアピールがあったと聞いた時、何も知らないのだったから仕方がないのだったが、それでもやはり、団員としての務めを果さなかったことについての自責の念が胸を責めるのだ。ことに幸子と行ったということが、別に何の意味もないのではあったが、やはり心を責めるのだった。

夜は青年団の総会だった。

前川は、よほど急いだ積りだったが、学校の玄関の所まで来た時には、もう、団歌の合唱が始まっていた。それを聞くと今迄の急ぎ足がひとりでに重苦しい足取りに変って行った。そして団長相田の黒い顔と幸子の顔が交互に浮び上ってきた。知らなかったとはいえ、今日の町へ行って、国防献金の仕事に出なかったことが、何か悪いことでもしているように思われている時だったので、尚更、前川の足は重くなるのだった。

団歌が終わらないうちに、目立たないように入ろう、そう気がつくのと、前川は又あわてて急いだ。

建てつけの悪い教室のドアは、よほど静かに気をつけた筈だったが、ギィと鳴ってしまった。団貞は誰も気がつかなかつたらしかつたが、向い合っていた団長の相田の目がきらりと光った。

前川は、軽く頭を下げて最後の机の側にかくれるように立ち、皆に合せて鳴った。だがやはり何かしら、心の

動揺を感じないではいられなかった。

「諸君！ 祖国はいま非常時であります。日支事変が突発してから、日本内地では国防献金に出征兵士の歓送迎に遺族慰問にと国民挙って涙ぐましい努力を続けています。諸君、我々がこのブラジルの国に安心して暮して行くことのできるのは誰の為でしょうか。いうまでもなく、我々の祖国日本あるが為であります。国家なき民の境遇が如何に悲惨であるかは、我々はユダヤ人の迫害に之を見ることができます。また、国家あれども我が日本の如く万世一系の天皇をいただく世界に比なき国体を有する国でなくして、内乱に終始する支那国民の惨さはどうでありましょう。

諸君、我々はこう考えて来た時、いかに我が祖国が偉大であるか、そしてまた、その国民の一員として生れた我々が幸福であるかが分ると思います。然るに我々のこ

の偉大な祖国は今や未曾有の非常時に際会しているのです。あります。この秋、我々は何を為すべきでしょうか。祖国の人々は挙って銃後の守りを固うしております。我々在伯青年は、この祖国の非常時に只黙して自分一個の快楽に、利益に、幸福にふけっている時でありましょうか」

相田团长は、そこで一息つくと昂然とそり返って周囲を見廻した。前川はそのランプの灯に浮かび上っている

団長の顔から瞳をそらしてしまった。

「日本は非常時だ……。非常時だ」

その声は前川の胸の奥に秘む幸子の面影と錯綜してしまつて、団長の言葉はもう胸に入つて来なかつた。

日本人は皆緊張している。その時、俺はどうだ。仕事をほつてまで幸子と逢っているのだ。いや、そうではなかつたのだ。何も知らなかつたのだ。アピーズが遅かつたのだ。その心の中で前川は自分自身をなぐさめていた。だがその時、前川は団長の次の言葉を聞いて思わず立ち上つてしまった。

「諸君、我々がこうしておたがい真剣に祖国をうれい、少くはあれども国防献金をなすべく団員全部が出席して道路普請している時、ノウノウと町へ遊びに行っている団月があつたのを知つて、私は実に情けなく思いました。しかもであります。女を連れて行っているのです。この非常時にこの国民総てが挙つて異常な覚悟をもつて働いている時、こうした団員が我々の団におつたということは、実に我が団の不名誉、この上ないはじめであると思います……」

「団長、それは誰のことですか」

突然な前川の大きな声に、団員は一樣に後ろを向いた。そして今、団長が言った人間が誰であるかはつきりと知ることができた。

団長相田の落付きに落付いた冷たい笑いを含んだ顔と

団員全体の視線を感じると、前川は我にもなくばかりと机に坐ってしまった。

「その人が知りたいというのでしたら、言いましょう。その人は誰でもない　―　君です。君だけが今日の事業に欠席したのです」

「でも僕にはアピーズが無かったんだ。それに女を連れて行ったなんて……。ただ、偶然一緒になっただけなのだ。それをそんなに言うなんて……」

前川はその場にそれ以上いたたまれずに立ち上ると戸外に飛びだしてしまった。

真闇な外にでると、こらえにこらえていた涙がぽたりと頬を伝わって落ちた。

「畜生、相田の奴、馬鹿にしゃがって……。たたきつけてやるから……」

前川はあまりの昂奮に、只相手への憎悪を感じるだけで、自分の立場をどうしようという考えは浮かんで来なかった。

「おい、前川。俺はちゃんと知っているんだ。怒るな――団長の奴、今どうかしているんだ。なにか感ちがいしているのだ。だから、そう昂奮するな……」

一番親しい権藤のなぐさめの言葉を聞いているうちに、前川は、次第に今までの昂奮が落付いてきた。

「あいつ、えらそうな顔だけはしているが、あんな奴が本当の愛国者であるものか。あいつは自己宣伝がうまい

んだ……。帰ろう、帰ろう。そして一晩ゆっくり寝よう。
そうすりゃあ、何もかも忘れるよ」

「うん……」

前川はだまっとうなづいて見せた。だが、権藤の言葉は前川を充分満足させてはくれなかった。

復讐――前川は、今日、幸子から聞いた相田のことを思い出して、これが彼女にふられた相田のとった復讐の方法だなと考えた。卑怯な奴だ、と思っても、どうすることもできなかった。それよりも自分をよく知ってくれている権藤までが、そのことを知ってくれないことに淋しさを感じた。

「俺は、非愛国者だろうか？」

前川は、相田がこうした態度をとったのは、ふられた意趣暗しのためだということをいおうと思ったのだが、口について出たのは別の言葉だった。

「馬鹿な、道路修繕に知らないで出なかったからって、非愛国者になってたまるものか……」

権藤はそういつて大きく笑った。

まっくらな星一つない夜だった。

二人の歩く道の両側では虫が鳴きしきっていた。

（一九三八年）

渦

死

灰

武本由夫

略歴 戦前には武本由夫なる筆名を用いたこともある。一九一一年、岡山県に生れた。一九三〇年、満一八才、岡山県立閑谷（しずたに）中学校卒業と同時に、単独でブラジルへ移住。サンパウロ州アリアンサ移住地で六年間農業に従事したのち、サンパウロ市に定住。日本語学校教師、新聞記者、文化協会職員（機関誌『コロニア』編集担当）、コロニア版日本語教科書の専任編集委員等を経てのち、一九六七年以来、もっぱら『コロニア文学』誌の編集に携っている。短歌・創作の分野で活躍。岩波菊治亡きあとのコロニア短歌界をリードしてきた。短歌誌『椰子樹』の創刊時（一九三八年）の編集者であった。以来、しばしば同誌の編集に携った。一九七五年より月刊誌『コロニア詩歌』をも編集する。パウリスタ文学賞選衝委員。

コロニア文学会副会長。サンパウロ市内に居住。

渦

門先をほんのわずか囲った庭に朝顔がおもおもと露に濡れて開くようになり、白い朝の光りに浮かんでみえるカーテンの汚れ目が、急に目立たしくなってから、初秋の空はいよいよ澄んできた。

「今年は秋が早いこと。この二三日、朝が寒いと思ったら、又母さんの神経痛が出て来たよ」

と、言いながら、台所の戸口につかまって、膝小僧をさ

すりながら、母の竜代は、切なそうに顔をしかめた。部屋の掃除をしなから、道代は窓越しに、ポカポカ水蒸気をたてている家の後ろに敷きつめたグラマを心地よさそうに眺めていた。

グラマは少しで尽きて、向うは赤土道をへだてて隣家の珈琲畑になっている。行儀よく並んだ珈琲樹の連なりを追っていくと、土地がしだいに傾斜して、視野がぐつと展け、遙かに一帯の原生林が煙ってみえる。

道端に一本枝を張っているパイネイラは、早くから葉を落として、北向きの下枝からポツポツ蕾を開きそめている。小鳩が二三羽、羽根に美しい色沢をみせて止っている。

日曜日は、朝早くからパチンコを持った子供が、必ず

此処に鳩を射ちに来るのだった。

今日もいたずらそうな子供がポチャボチャした頬つぺたを輝かせながら、しきりに狙いをつけているが、鳩はケロリとして、チョンチョン枝々を飛び移っている。窓枠によって区切られた、この点景は、思わず道代を微笑させた。

「母さん、また、子供が来ているよ」

「早いこと。可哀そうにね。ひまさえあればパチンコだから」

「そうねえ。そういえば、松田さんねえ、三月いっぱいで学校をよすんですってよ」

「へエ、そりや本当かい。あんなに熱心にやってたのに」「学校は、しよっちゅうフェツシヤを喰うし、松田さんが、止（よ）すってなると、いよいよ子供たち可哀そうね」

「変だね、どうしたんだろ」

「心境・の変化ですって」

「心境の変化って、やっぱり、父兄会はだらしないし、教育令はやかましいし、厭んなったんだろう。若いんだもの、無理ないよ」

もつともだ、というような顔をして、母は台所の方へ去った。

「奥さん。僕あ、辞表出しましたよ」

「まあ、どうして」

「サンパウロで、もっと勉強します」

「でも、私達淋しくなるわ」

僕は、此の植民地の子供相手に、一生を一貧乏教師で終るつもりだと、常々言っていた松田が、藪から棒に、サンパウロに行くといったことが、彼女を極度に驚かせた。

道代は、表面的な理由になりそうなことを、二つ三つ挙げてたずねたが、松田は蒼白い顔をくもらせて、直裁にでて来ない言葉を、いくらか震わせながら、苦しそうな表情をした。

そうした彼の顔を見つめているうちに、彼女は胸が詰ってきて、明確に指摘することのできない何物かによって、身体の何処かに鈍痛を与えられているような気持ちになってきた昨日のことを思い出していた。

メーザにひろげた新聞越しに、信介が顔をあげた。

「松田君が止すって？」

「エエ、そうですって。あなたも話し相手が無くなるわねえ」

「僕よりも、お前の方が……：：：だろう」

「えっ」

何の気もなく返事をしながら振り向くと、口元に冷笑を浮かべて、彼女に注がれている睨むような瞳は、言葉よ

り以外な事を語っているのをみて、道代はギョツとしてしまった。

「……………」

黙りあつた二人の間に醸された異様な雰囲気揺り動かすように、井戸端で、竜代が鍋のすみをこさげる音が、しゅうしゅうと聞こえてきた。

何とか言わねばならぬ、と苛々しながら、言えば、かえって不自然に響きはせぬかAとも思われて、段々気まぐずになってきた。夫の白いしつこく摸索するような視線を片頬に感じながら、道代は窓枠に止めていた眼を、庭まで伸ばした。

コンデイションが急角度に悪くなった道代は、たまたまの日曜日を、とうとう何をするともなく過ごしてしまつた。

庭のグラマの上におっぱり出されたエンシャードに、さつきまでチカチカと反射していた夕陽が、何時の間にか、薄藍色をした遠い森のギザギザの中に、花がしぼむように沈みかけていた。前へ前へとなだらかな弧を描いて伸びている幾つかの緑の丘が、日の沈むにつれて、向うから向うからぼやけてきて、次第に視野が狭められていった。やがて暗青色の空に黄金色の縞（しま）が幾条となく放射状に引かれ、緑を琥珀色にかがった千切れ雲の三つ四つが、気取った足どりで、同じ方向に、ゆっく

りゆつくりと歩いて行く。それは、毎日見馴れた平凡な景色とはいっても、いかにも清（す）が清がしくて、道代には、快い魅力に富んだものに思われた。

夕飯を終わってお茶を飲みながら、母は楊枝（ようじ）を止め、信介の顔をちらっと見て尋ねた。

「今朝、大村さん、来たっけね」

「何、例の借金のことですよ」

話の糸口をぶち切っておいて、信介は黙った。

これが、この頃の家空気なのだ。父を失った道代の家庭に淋しさが漂っているのは普通と言わねばならぬが、三人の感情が少しずつ喰い違ってきたのは、何時からだろう。

突然、彼女の顔の中を硝子の破片のようなものが駆けめぐった。

「切って呉れっ。痛っ……、マツシヤードで俺の足を切ってくれえっ」

急報に仰天して、竜代と道代が馳けつけた時、信介はベツトリと冷汗の浸み出た額に、苦悶の色を浮かべて、藻掻き疲れた体をふるわせながら、絶叫していた。

一緒に山伐りをしていた人達は、能面のように顔を硬わ張らせて、信介の足の上に倒れかかっている木を、大鋸で、ごりんごりと引き切っていた。

それでも信介は、ようやく不自由な足を引きずりなが

ら歩くまでにはなった。しかし、傷の癒えるに従って濃くなっていく憂鬱な影は、信介を次矛に偏狭な性格に曲げていくようであつた。

信介の絶望的な顔色が、三人の感情をちぐはぐにしてゆくのが眼に見えながら、ともすれば、夫の氣分に引き込まれ勝ちな自分が、道代は内々恐ろしかった。

だから、といって、誰を咎めることもできない。快活な、生活力に満ちた信介が、男の誰もが持つている社会生活に対する固有の奮闘力を、少しずつ虫食んでいく、ビシューラの蠢動に似た、心の痛手に耐えながらも、彼の実際的な性格故に、落魄に対する哀傷感や、諦めから来る、一種の低回趣味に居ることができない、そうした信介を知っている道代は、口に出して何も言えなかつた。

しかし、母は暗い悲痛な影におおわれていく彼に対して、世俗的な愛情は示しながら、やはり、女らしい愚痴から、信介の態度を、一途に情無がつた。

「諦めたよ。諦めてしまえば、かえって楽なもんだよ。ねえお前」

と、道代には、言い言いしているが、日本から一緒に十アルケールずつロッテを買って入植した人々の家に、祝いごとや、景氣の良さそうな話があるたびに、淋しいねたましさを顔に浮かべて、ひとりやきもきしているのが哀れであつた。

「借金のことって？」

「四月が清算期だから、それまでに何とかして呉れってんだよ」

「お前、何て言った？」

「整理してくれって……」

「ロッテをかい。此方で言うまでもなく、その気のくせに、人って勝手なもんだねえ」

母には、入植当時の華かだった自分らの境遇が忘れられないのだ。〇〇海外協会の理事前田が土地の案内をしながら、「ほら御覧なさい。大根木がこんなに太く大きいのは、絶対に霜が降らないという事の証拠です」とかある大木を仰いで、「こんな木が密生しているのは地味が良いからなのです」とか、何の予備知識もない父親を、

すっかり有頂天にさせて山を伐らせ、ある丈の資金をかけて、珈琲を植えさせた。

なるほど、地味は良く、色々な作物がよくできた。景気はよし、「四年後には珈琲がとれる」と、入植者たちは、とてつもない空想を描いて四年後を待った。

だが、彼らが待っていた四年後の現実は、惨めな姿で歩み寄ってきた。景気は急天直下、それに、夢にも思わなかった降霜。

道代の家庭は、そればかりではなく、父がポツクリと

逝ってしまったのだった。

こうした不可抗力の前に、資金のありたけを張った人々は、雨曝しの布のように、ぽろぽろと、その生活は破れてしまった。

彼らと反対に、資金も持たず、彼らの庇護の下に自力更生を続けていた人達は、十年後の今日、まったく正反対の地位を得ているのだった。

移住地十年間のなりゆきを、じつと見まもってきた母は、面倒をみてやった契約者の大村から借金の督促を受ける度に、涙を流して悔しがった。顔つきの華奢な母が、

唇を震わせながら、次第に心の平衡を失っていくのを何時までも見ているに耐えられなくなって、道代は話題を変えた。

「民さん、今日来たってね」

「そうそう。紫の刺繍糸はないかって」

「気の毒だったわね。私もうずいぶん刺繍なんか……」

「あの人、今日は新しいピンクの服着てたよ。柔和な体つきだし、日焼けしてないから、よく似合ってたよ」

お前も当りまえなら、あの娘以上に与えられるべき幸福が、何かのはずみで人に盗られたのだよ。可哀そうに、とでも言いたげに、まじまじと、道代の顔をのぞきこんで、母は睫毛をしばだいたいた。

物事を其面（まとも）に見る母のそうした純粹な愛情をじかに感じる時、彼女は心からの愉悦が湧きあがるのを覚えた。

珈琲が落ちるから、コロノをしなければならぬ、この言葉にさえ、現在の道代たちは現実的な意味を感じなかった。唯、漠としたものの影でも追うように、とにかく畑で一日を過ごし、製材所の汽笛を合図に、家に帰って来るのであった。

「民さんがね、中央区に活動が来るから、行かないかって……」

「へエ、近頃よく来るんだねえ」

道代が夕日を背に裏口からはいると、網の上でバカリヤウを焼いていた母が、煙たそうな眼をして、民子の言伝てをした。

紋切型の夕食が終わると、ふと映画を見に夫を誘ってみる気になった。道代たちが誤謬だらけの手紙を読んだ

いるような、たどたどしい、又ちよつとした間隙からも忍びこもうとする、総身の凍えるような厭な気持ちにおびえている此の頃の生活感情が、映画を見ると、彼女たちにとって、ほんの簡単な事によって、糸口をみつ

けた縫れ糸のように、何のわけなく、するすとはぐれ

てくれはすまいか、という考えが湧いた。

「貴方、今晩行かない？二人で……」

「ふん……」

「わたし、観たいわ。連れてって、ね。ほんとうに久しぶりだわ」

蠱惑に満ちた瞳を輝かせながら、道代は久しく忘れていた甘ったるい口調で訴えるように誘ってみた。

夫のかいなを全身的に求めながら、もう一息というところで、妙に夫が身のまわりに張りめぐらしている蜘蛛の網のような不思議な霧のために、ふいと行き場を失う自分の胸を、恐れていたよりも案外自然に喉を通り越した言葉が、近頃になく、夫の心に彼女の心を近づけた、という意識を与えた。

途端に、唇の細かいけいれんに引きつられたかのように眉根に皺を寄せ、にがい菓を飲み下した瞬間の病人を思わせるような表情を浮かべた夫の横顔が、彼女の網膜に映った。

ひどい失望は、今まで無意識に制していた憎恵を揺り動かした。

三カ月に一度、四カ月に一度、というふうに、故国の映画が、梅映社とか、××シネマ社などの巡業部によって、このノロエステ奥地にも、もたらされるようになったのは、つい最近である。

科学的な娯楽機関からおいてけぼりを喰って、ひたすら新しい土地になずみ馴れようとしていた入植者たちは、長期の日照りに萎えていた稲が、たまたまの雨を吸収するように、法外な料金と知りながら、憑きものでもしたように、老若を問わず、スクリーンの前に詰めかけるのであった。

入植以来十年にもなるのに、公会堂のないこの村では、小学校が会場の代理をさせられていた。

道代は不断着のまま、民子に誘われるままに、二キロ余りの道を小学校の前まで歩いて行った。

肩巾の広い青年や、愛想笑いをしながら、日本臭い挨拶を饒舌に交わしている女や、平べったい顔に安白粉をなすりつけ、笑うたびにスカートをびらびらさせて胸を張るブラジル育ちの小娘たち、それらの幾群かが、自動車のエンジンによって作られた、この夜限りの電気の輝いている入口に、灯影に集まる蛾のように、現われたり、消えたりしていた。

まだ始まらないとみえて、内部の喧騒は、一つに融合って、物凄いうなりのように聞きなされた。

道代は民子と、民子の弟の健一の影に潜むようにして、むつと鼻を突く人いきれと、逃げ路を失って湧きたつ種々雑多な音声の中に、夜風に冷えた体を持ち込んだ。

白い幕を張った正面では、弁士が、大切そうに、油の切れた蓄音器の螺旋（ねじ）を巻いて、レコードをかけている。

しかし、聴いているのは、近くの十幾人かでしかなく、隅の方で、じれったそうに口笛を吹く男もあれば、後向きにすわって喋舌（しゃべ）り散らしている藪睨みの女もある。

ほの暗い後ろの方で、早熟な少年が小娘たちに向かつて腕を突き出し、既婚者でなければ解らないような、みだらな身振りをして、からかっているのも、小面憎く思われた。

煙草の煙と埃とが戯れている広い天井の下に黙って座っている自分を見ると、何の為に來たのだろうか？ と、不思議になってきた。

夫に対する憤りを誤魔化すために、自分自身の爆発を恐れて、此処まで逃げて來た自分の怯懦さ加減が思われて、次第に不愉快になってきた。

あの、時、夫の冷酷な頬に眼を注ぎながら、もう一歩進んだら？……、そうして、両性間の感情の勝負を決行してみたら？……。でも、それは、女にとって最大の冒険である。その冒険世界の存在を否定することはできないが、それを肯定するには、余りにも洗練されていない自分の精神を顧慮しないわけにはいかなかった。

何時の間にか電灯は消されて、正面の幕の表には、ス

トーリイが展開していた。

有機的な昂奮を顔いっぱいに見わした観客の顔が幾つもの、道代たちの前を通して出口に氾濫していた時、

「やあ、来てたのですか」

と、強いバスで声を掛けた方を振りむくと、背の高い松田が、端正な顔に、真面（まとも）に光を浴びて立っていた。

「まあ、貴方も。丁度よかったわ。民ちゃんたちとわたしだけでは、ちよつと心細くて、誰か来てないかと、物色（ぶつしよく）してたのよ」

振り向いた瞬間、民子が娘らしい恥らいを見せて、殆ど体じゅうでお辞儀するように、いかにも衝動的に頭を下げたのをきっかけに、道代は松田の方に歩み寄った。

残屑の散らかったガランとした会場を、彼女たちが出ると、思ったよりも冷たい夜更けの風が、小学校を取り巻くように植わっているパラナ松の梢にうなっていた。

水で洗った新鮮な果物を投げ上げたような月が磨ぎ澄まされた空に掛かっていた。彼女たちの影を、かんかに乾き切った道に、くつきりと映した。

道代は、近頃松田と話す機会が多かったことを思った。

未知の者が、何かの拍子に寄り合って、手さぐりに語った時、互いに少しでも、思想とか趣味の一致を見出した

こと程心地よいものはない。又何よりも深い友情を感じさせるものだ。語る度に両方から歩み寄って、何時しか、

家庭的な、社会的な悩みまでぶちまけるようになる。

夫に対する悩みについても、聡明な、彼の謙虚な友情に満ちた言葉が、どれ程道代の慰めになったか知れなかった。

しかし、最近、彼女に注ぐ彼の瞳が、一種異様な熱を帯びて来たことや、そして、注意してみれば、輪廓の正しい頬の底にも、炎のような切迫した何物かが、じりじりと音をたてて燃えているように思われた。夫から指摘される前、既に彼との交際に、恐ろしい予感を彼女は覚えていた。

遂々話に油が乗って、いけないと思っても、意志に反するブレーキのように、二人共通の話題にむかつて喋舌（しやぺ）りだしていた。

「じゃ、さようなら」

と、民子が、彼女の家の前でコックリ人形のように挨拶をして、弟の手を引き淋しそうに踵をめぐらした。

「松田さん、貴方、民ちゃんをどう思ってます？」

「どうって、おとなしい娘さんじゃないですか」

「それだけなの？ あの人、貴方を恋してるわよ。御存じ？」

「……………」

民子が居なくなってから、急に二人だけ夜更けの道を歩いているということが、変に後ろめたく、それを誤魔化そうとして、道代は意識的に松田をからかった。

ひっそりとしている珈琲園の中をうねっている道に、ぼっくり並んだ二つの影を見詰めながら聞く、赤坊の泣き声に似た月夜鳥の声が、ピントのあわなくなった二人の話をとざらせ勝ちにさせた。無気味な静けさの中に見る松田の、がっしりとした肩から腕にかけての強い線が、急にある恐怖のようなものを感じさせた。

「奥さん、僕は、僕はサンパウロに行く前に……………」
「いけません、言っちゃ駄目！」

頭髪を掴んで黙り込んだ松田が、深林の奥深く棲む精悍な野獣が飛びかかるように、彼女の肩に抱きつき、うわ言のように、早口に囁く言葉も、咄嗟の恐怖と狼狽の為に、彼女には聞き取れなかった。

しかし、思いもかけぬ、とは言えない危険に直面して、

むしろ哀願するようになだめたり、いやいやをしながら、道代はわき目も振らず歩き通した。

灯を消すとすぐ、信介は壁に向って、まだるっこい寝返りを打った。すると毎夜喚ぎ馴れた夫の体臭と体温が

蒲団を通して、興奮のために、まだ小刻みな震えのやまない道代の四肢をやんわりと包んで、次第に楽々と呼吸させてくれるようになった。

描かれた大きな波紋が、外側から、外側から消えていって、やがて一帯のうねりとなり静かな水面にかえった彼女の胸に、偶然の機会に跋扈する人間の心の何処かに隠れ棲む、獣の恐ろしさが、しみじみと感じられた。

理智的な松田が、長い間の悩みを凝視しながら、彼女に対して追々に感じてきた心持ちは、温い友情から、それが偶像化せられ、終いには、唯一筋の強烈な情愛となったのだ。焼酎のような、荒々しいむき出しの男の情慾が、遮るいとまもなく圧倒的に肉迫してきた刹那の感覚に対して、又彼の手から、胸から服を通して感じた逞しい精力的な触覚についても、性的な秘密に満ちた一種の恍惚境に追い込まれた自分の反射作用に対して、恨令（たと）えば、純白だという紙の上に一点の汚点（しみ）を見出した時のようなこだわりと嫌悪を感じた。

心の眼が鋭く自分に向けられ、次第に重苦しくのしかかってくる自己嫌意を、はねのけようとして「わたしは正しいのだ」と、懸命に思ってみた。しかし、唯それだけの言葉が何時までも、頭の中をどうどう巡りするばかりで、すぐそばから、いくら自分自身に、何も後ろ暗さを感じずる理由はないと、言い聞かせてみても、針のよくな神経を尖らせて猜疑の目を向けている夫である。自

分がいくら平静を粧うていても、朝、床の中で顔を見合
わせた時、すぐに、「お前は、何か俺に言えないことをし
て来たろう。いくら隠しても、お前の顔に残っている昨
夜の震えが、俺にはちゃんとわかるのだぜ」というよう
な眼をするだろう。そう思うと、道代は遣瀬なくて、涙
が頬に溢れた。

” わたしが悪いんじゃない。みな夫が悪いのだ。あんな態度をとられて、女の生きる道がある筈がない。まして、わたしは、若い健（すこ）やかな女なのだもの”

道代は信介との間に、高い壁を感じだしてから、自然さを失った夫婦関係について、肉体的な苦痛を感じていた。石棺の実が爆ぜるように、何時かは内から爆発する時が来るのではあるまいか？ と恐れながら、女盛りの彼女自身の体に燃える原始的な欲望に対して、何時も、その旺盛な発動を憎まねばならない自分を思うと、次第に哀れになってきて、じつとりと水を含んだ海棉のように、何処をおさえても、涙がにじみ出そうになってきた。

（一九三五年）

死 灰

春太を乗せたカミニオンは、次第に縮んでいった。

ひと昔も前だ。移民船がホンコンに寄航した時に買ったやつた、薄茶に細く黒い縞のはいったズボンを窮屈につりあげ、薄汚い襟の上に、まるで毛穴のおっぴらいたピンガ焼のうつけ顔をチョコナンと乗つけて、埃の浸んだカンカン帽を片手に、「それじゃ、兄貴」とも、「何処をめあてに」とも言わずに、あっけなく眼前を遠離つていった後には、何日もの日和つづきで、白らぼったく乾ききった街道の端に、くされマモンのような太陽が、薄気味悪くふらついていた。

字七はくびすをかえすと、四十年もその上まといっている痩せ細った、よぼよぼの自分の影を踏みしめ、卑属な安堵に喉をくすぐられながら帰っていった。しかし二、三尺の距離しかないカミニオンの上で、春太の顔がいびつにぼやけ、トツと間のびた瞬間、ひからびた瞼に、骨肉の情愛が一滴二滴、浸んで、思いもかけない血液の逆流を覚えた狼狽が、字七の意志を裏切って、さもうとましげに顔をそむけさせたのだった。が、車体がプルンと肩をゆすってふみ出すと、背中の皮膚に分厚なふてぶてしさが盛り上って来て、「なあに、いいんだ。こ

れで何も彼もよくなるんだ」という風な表情を、すぐにとりもどさせたのだった。

決断された案というものは、どうも奇妙なもので、それが決定的なものになり、具体化されればされるほど、いかにも愚劣な手段に見えてくるもので、宇七は春太をほおり出すことを、二、三年も前から何回となく目論んでみたのだったが、どんな合理的な目論見も、いよいよとなると何時も、その実現を信ずることができない苦しみ、悩まされて来たのだった。

今、たしかに、やすやすと、春太を追いつけた、という意識が腹の底にすわりこむと、頭から血がひいた時の歎息に似た拍子抜けの感じが、宇七に幾度も、かぶりを振らせた。

その空洞の裡に、まざまざと蘇り、鉛だまのように凝結するのは、字七、お新、春太の救いのない汚れきった泥溝の相剋の姿だった。

石油ランプがジュクジュクと音をたてている。粗末な土壁のこここに油虫を叩きつぶした汚斑が散らかっていて、ムツとにんにくの臭気のこもった暗がり、お新はゴソゴソぼろ布をかきまわしている。字七は棉のほとんどはみだしたふとんが年中敷きっぱなしになっているカーマの上に、居きたなく寝そべって、手製の煙草をシヤリシヤリ掌でおし揉んでは新聞紙にまきつけ、ペツペ

ツと土間に唾をしながら、たてつづけにふかしている。裏の谷間には、あきもせず小煩さく蛙が、タンコタシコ、罐の底を叩きつづけている。まだ契約期までには五カ月もあるというのに、今日アルモツソの時「いや、こりや口がすべったわい」という風を笑いにまぎらせて、耕主が来年の契約賃金のことを雑談に差し挿んだことを、さつきからお新に話していた。

「大野さんは、今年よりや、三十五ミルだけ余計出すと」「へエー。それで、お前さんは来年も居坐ると約束したんけ」

「ど、どうして、まだ、はええわな。そげ、あわてるかあ」

まわりくどい字七の話しぶりに癪を立てたお新がひらきなおると、字七はへどもどした。

実際は、夕方はたけがえりを、字七は耕主の家に呼びこまれて一杯御馳走になりながら、耕主をよろこぼせるような受返答をしてしまっているのだった。

「コーヒー千コーバに二百七十五ミルだそうの」、「小豚の五、六頭もやろうの」と、今まで抜目なくコロノをぎりぎりに搾って来た耕主が、急にニコニコして機嫌をとってくるのも、二分案通過で昨今そうでなくてさえコロノが払底しているのに、棉景気のかけ声で、俄にいろめき浮足だったコロノ達の喰止め算段であるという裡心も読めて、多少の息ぬきも出来るだろうという目安がつ

いたからでもあるが、それよりも、長い間不利な境遇に
不可抗的事情に向って、あえぎつものがきつ、転々と渡り
歩いているうちに、功名心や社会に対する執着をいつ
かすっかり擦りへらしてしまつて、真剣に生活と取っ組
むことも、光明を想うこともできなくなつて、唯、胃の
腑をふくらませてくれる平安のある処に流れゆく自棄的
な想念が、「へい、そいじや来年も、ご厄介になります
かなあ、へへへ……」と卑屈なうけごたえを字七にさせ
たのだった。

「そうだよ。狸にうまいことを言われて、エヘラエヘラ
したんだよ、お前さんは。しとを、だまして、大うそを
こいて……」

「……………」

「か、甲斐性なし。来年はノーヴァ・アリアンサに土地
を買うて、棉ア作る言うたな、誰だあ……」

「……………」

お新の横びんにピクビクする蒼いすじのうねりに、字
七はおびえて押しだまつた。

今年の二月に、トラホームで眼のざらざらに爛れた蒼
ぶくれた子供ではあつたが、たった一人の息子を、頭の
禿げた移住地で一番偉いお医者にも原因のわからない
熱

病に、もぎとられてからは、お新は唯の一日も腰がおち
つかなかった。何でもいいから、新山を買うて自分の家

に住みたいと、口癖のように言うようになっていた。そして、息子が死んだことも、之という自分の家がないことも、亭主に甲斐性がないからだと思い込んでいて、なに事によらず、無性に字七に喰ってかかるようになっていたのだった。だから、こういう話は下手にまごつくと、

夫婦の論争になり、果ては、口ぎたなく、わめき罵しるお新の狂態に惨めに打砕かれるのが関の山であることを知っている字七は、とっさに話題を転じた。

「春太は、またおそいな」

「また、ボテコじやろうぞい」

「飲むもええが、このごろあ、無茶じゃ、のう」

「自分ではたりやあて、自分で飲むじやけ、はたの者あ、なんも言われなあ」

「じゃからわしあ、なんとも言わん。なんと言わんけど」

「お前さんは、まだ春さんを、あてにしとるんか」

「いや、お前、そんな……。わしあわしで……」

「そんならええが」

「……」

宇七はポイと土間に煙草を投げると、そのままふとんの中に這い込んで眼をつぶった。

宇七は春太のことを思った。渡伯当時、あんなにおとなしかった春太を狂暴にしたのはお新だ。お新が一番悪いのだ。あの女は魔性だ。字七は春太の顔の上にお新の

顔を描いた。

途方もない白痴で、人並図抜けて力のある春太を利用しようとかかったのはお新だった。子供だましの御機嫌をとったり、時には、不自然な、字七が見ていてむしろがはしるような刺激的な媚びをさえ見せびらかして操った。

お新の執拗な手段に試みられてゆくうちに、春太は依怙地に、貪慾に、酒飲みになって行つて、ここ一、二年はお新が裏をかかれた思いに歯を喰いしばったこともしばしばであった。しかし、息子の葬式のときに、ぐでんぐでんに酔っぱらつて、暴れまわられてからは、何彼にかこつけて、或る時は、ヒステリーじみたかんぐりごえで、「春さんを出しんさい」と喚く度に、「うん、だすとも、どちきしよう。放り出す」と反射的に応じはするが、何時も、お新のきたない根性に対立的な感情が先立つて、春太への憎しみが、言葉について来ないために凋残な心持になり、しまいには激しい自己嫌悪におちいるのがつねだった。

じつと眼をとじていると、焰のような嫌悪が字七の身内をさいなんでゆくのだった。

ああ、何もかも、間違つてしまったのだ。

自分自身の切り盛りもできない愚かさを忘れて、いや自由だ、真実だ、愛だと、とんでもない寢言をほざいて、からいばりで渡伯したことも、よくよくの白痴である弟

を連れて来たことも、思えば呪うべき現在の焰に苛まれるような生活の根は、ずっと前からいぶりはじめていたのだった。

「もう駄目だな。……：駄目だ」

宇七は重苦しさに、そうつぶやきながら寝返りをうつた。

お新が台所で明日の朝炊く米をシヨキシヨキ磨く音が聞えてきた。明日は早いんだ。寝なければと、さしせまった現実が宇七にねむりを強いて来た。

「石田さあん、起きれ」

叫び声が表を走ったとみたら、宇七の家の入口に拳が乱れていた。彼が寝巻の裾を掴んでとびだし、いきなり戸をあけると、人声が崩れこんだ。彼はギョツとして異常に緊張した相手の瞳に視入った。

「酒、春太、毛唐、ファツカ、ピストル」すじみちはたたないが、耳底に残った知らせの断片をつぎあわせたまま、上着をひっかけると、ボテキンへ走った。

「ば、ばかめ。こ、ころされたな、はるたあ」

後から、どさくさやってくる近所の人々のランプも待たず、真暗な二キロの道を、「くそたれえ、はるたあ……」と、鼻をつまらせて叫びながら彼は夢中ではしつていった。

頭上の空間を紫がかった直線が破って、春太の胴にグ

サツとくいこんだ。物凄い獣の断末魔。どす黒い血しぶきと見る間に、肉塊が横倒しにどべった。

しらせ人のふるえる声が、胸によろげこんだ刹那、頭にカーツとのぼって采たこの光景にかりたてられ、虹のような息を吐いて飛びこんだ字七の血走った眼に映った店は、ほのぐらい中に、缶詰、酒瓶、石けん、荒物とごみごみ並べて、何のへんてつもない。ちょうど力限り引きのばしたゴム環がプツンと切れたような感じで、彼はうろうろと足元に眼を伏せた。コッピンニョが、こなごなにぶちわれてとび散り、冷んやりと無気味なファツカが刃を上にくろがっている。視線がまともに刃の上で逆立ちしてから初めて、今までの何か不均衡な連鎖に乗っていた感情が、ファツカをべつとりと染めている血糊と結びあつて、自然な、恐怖の中へ字七をひきずりこんだ。

ひと気のする奥に声をかけると、商品の蔭から、背のずんぐりした丸顔のおやじが現われて、白い歯を見せた。複雑した字七の顔色を見ると、おやじはげげんな貌つきをした。

「ああ、そうですか。春さんを。いやあ、ごくろうさん」「やつぱり……、も、いけませんか……」

「エ、なあに、酔つとるんですよ」

裏手に導かれながら、余りに距離のあるおやじの態度に、自分の想像の走った角度が実際と比較して、ひどく

急であつたことを思った。

べろんべろんに正体のなくなった春太は、ずっと離れたカッポエイラに頭をつつこんで、ほとんど泣くようなしやがれ声で、うなりながら足をばたばたやっていた。「ええい、ころせえ。わいを殺すことたあできまえが。

くそう、わいの兄貴もできまえが　ー」

どうもしないのに声帯が勝手に押出しているような、声調をきくと、「ああよかった。本当によかった」という風な純一な、素直な心持になつて、字七は子供でも背負うように春太をかつぎあげた。肩にぐったりとよりかかった春太のにがずっぱい酒息が、冷え切つた夜風のなかにただ一すじ、彼の首根に、ほの暖くかよつて来た。後からエンシヤーダやら、錆びついた猟銃を担いで、がやがやと詰めかけた村人に取りかこまれた頃は、すっかり落着いた字七だつた。

ボテキンのおやじから聞かされた始終を話して、桁はずれな弟の不覚をいちいち詫びたり、ピンガを買つて、まあ一杯とコッピンニヨを配つてまわったりした。

事件は他愛がなかつた。誰かれの見さかいのなくなつた春太が、一杯ひっかけに立ち寄つた黒人にからみつき、いざこざの果てが刃物三昧になつたのだが、真物になるには春太が酔いすぎていた。

唯、威嚇の一発や、叫喚の渦は、目撃した者を動転させ、字七に急を告げさせたのだつた。

朝のカフェーを飲むと、字七は尻ごむ春太を引っぱつて、昨夜のお詫びにあらためて近所まわりをした。自分で振りまわしたファツカで切ったらしい腕を包帯しながら、春太は今までついぞ見ない、しみじみした調子で独語くように言い出した。

「あんちゃん。俺あ……いきてえよ。俺あ、どこやかし、見てきてえよ」

「どこやかしつて、どけえいくだ」

「何処つてないけど……」

「なんだぜ、お前。金もなしに歩けるか。ひと足出りや、アグア（水）飲むんも、金じやけ」

「金ねえけんど、俺あ、力があるから……」

「ああ、力があるから」

字七はオームがえしに口真似をしながら、自分の腕に腫をおとした。強い直射に焼けちぢれた粗毛のしたに弾力を失った皮が、ざらざらふやけている。足腰、どこをみても、みな長い年月を世の残忍な力に虐なまれた漂泊者の苦痛に坤吟している。字七は深い歎息を洩らした。タマンコ（サンダル）がわりにもならぬ名誉心や良心はどうでもよいが、金と力がしみじみほしかった。だが、「なあに、運というやつがあらい」と、幾度も自分を瞞着して、朝晩お題目のようになえてきた金は、もう掴むめあてがまるでなくなっていた。せめて力でも、「あ

あ、力」頼めると思われる筋のみじんも無くなった五体をなでながら、暗澹とした気持の中に沈んでいった。

急に、びつくりするような大ききさで、アルモツソを知らせる製材所の汽笛が、澄みきった空を渡ってきた。何時の間にか包帯を巻き終った春太は、無頓着な表情で遠くを眺めていたが、笛をきくと思い出したように首をねじ向けた。

「こおつとお、カミニョンが通るな、いつじやったなあ」
「じゃあ、アラサトウーバに出るんか。うん、あっちがええな」

「ああ……」

「今のがアルモツソじゃけ、ここを通るな、四時廻ってからじゃろうぞ」

十二時、一、二、と指を折って春太はふらふら外に出て行った。生欠伸をかねて眼をつぶると、コジンニヤからお新が飯をせきたててきた。飯だめしだと思いがながら、ぎんぎんうわずったお新の声に昨夜の時間がこんぐらがって、どうにも字七は立ちあがることができなかつた。

（一九三七年）

ある裏街

秋野 愁

略歴 本名・住吉光雄。一九一六年、徳島県に生れた。蚕糸学校卒。一九三二年、ブラジルに移住。短歌・創作に関係し、戦前は『地平線』誌に小説・短歌などを発表。ある意味での文芸人として古野菊生に師事したことがある。現在、サンパウロ市在住。銀行員。

ある裏街

千田はじっさいやり切れない気がした。今更彼女を訪うたことが悔いられた。彼女は、彼の訪問を受けるとすぐ、一寸といつて出たきり一向に帰つて来ないばかりか、彼のいらいらする気持は、隣室の病人らしいうめき声で一層苛々しさがつのつてきた。

部屋の中は蒸せ返るような空気と、薄気味悪くしんとして圧迫する感じで辛棒ができないのだ。

妙にひんやりする風が、思い出したように微臭い臭気を送つて来たりするので、脳髓までも変になりそうな氣持だった。

彼はじっさい、彼女に病気のある家族がいるとは知らなかったのが、自分の不覺のような気がした。

寝ているのはきっと彼女の妹だろう。

彼は外に出るまで溜めていた唾をはき出して、足の向いたままに坂を登りはじめた。

石畳の間からは、ひ弱な雑草が、よろよろと生え上つて白い実を付けていた。急な坂をN新聞の所まで来ると、向うのトーマス・デ・リーマ街の方へ眼を向けた彼は、急ぎ足で来る岡本の姿を見つけて、ひとりでに嬉し

くなってきた。彼は、ピユツと口笛を吹いて手を高く上げると、向うでも手を挙げた。

このコンデ街と、トーマス・デ・リーマ街の角にはサルゼーダス伯爵の住居が重厚な赤煉瓦の壁に包まれて聳え立っている。その幾百年の古風な建物が頑丈な鉄柵と石畳の保護を受けている。その反対側――すなわち今彼が上って来た方角には同胞の細民窟が続いているのだ。

千田は蒼い神経質な面持で、この開いたこともない古城風な住宅の三階の窓に眼をやった。窓の下には二尺余に延びた草が一本、ひよろりとして、そのエリザベス王朝風の建物に寄生していた。千田の眼はこの時、伯爵家の窓よりその庭に茂る老樹に移って行った。苔むした老樹の枝には古い謎が秘められている。その鉄錆の付いた気味惑い建物と老樹と永久に開くこともあるまい扉――それらのものが彼の眼の中に飛び込んできた。

それでも、千田のような第二世の日本人には何のためか、それ以上の探究も必要がないのであろうか、唯見るまま、教えられたままに事物を観察するに過ぎなかった。

「何のためだ？」

と考える時は、

「あるから、あるのだ」

という結論がすぐ頭にきた。それだけに、けだるく物憂かった。何事もあまり頭を使いすぎてはならぬと、い

う気持ちからではなしに、唯何となく考えたくなかった。よしや、それを探求してもウン・トストンの価値もないということを知り尽していた。それより、ビツショでもかける方がましだという考えが先きに立つ。一体が物質本位な父母と環境の中に育った彼らには研究心も推理力もこの方面には恐しく欠けていた。千田も又、幸福にもそれを知ろうとはせず、又知る必要もなかった。彼の一時的な暇つぶしの気持ちだけが半意識で暇のやり場にしていたに過ぎなかった。

「まあ。パウロ、帰るの？」

うらむような眼で、美保が近づいて来たが、彼は黙って古風な住宅の梢に鳴る風の音を聞く振りをした。折角訪ねたものを待ちぼうけさせられただけでもパウロはしやくだった。

「ねえ、パウロ。今日はゆつくりなさいな」

「いや、用ができたんだ」

彼女が、はらはらしているのにそっぽを向いて彼は煙草に火をつけた。蒼白い美保は細い肩にしなやかな肢体を真赤な服で包んで、細腰にしめたシNTAXは喰い入るようだった。その痛ましい姿で、彼女は毎晩のようにお客達の機嫌を取るために店に出なければならなかった。

その楼はT楼といって、かなり盛んな料理屋であった。

どこか弱々しい蒼い病的な魅力が情感をそそるばかりに、千田の心を引きつけた。千田も美保もお互いに嫌いではなかった。美保は、やつと十九になったばかりだが、栄養不良と生活に疲れた顔は、二つ三つはふけて見えた。客の誰もが「私を二十より若くは見ないのよ」と、いって淋しそうに笑って見せた美保の顔を千田は思い出した。

彼も、かなり早熟の方で、今年二十だと思われぬ位上背で、顔立ちも早くから大人じみていた。

「今日は帰るよ。君も店があるだろう」

嫌味でなく、やさしくいって美保が降りて行く坂を見送った。

「おい」

背後から何時の間にやら岡本が元気のはち切れるような顔を見せて立っていた。

「勿論……だろうな」

岡本は千田の背を軽くたたいて歩き出した。

「何さ」

千田は大概分つてはいたが、聞いて見た。岡本は手真似で酒を飲む恰好をして見せた。

相変らず呑気な岡本に苦笑して、彼はよりつけの日本人のK飲食店に入った。

岡本は、勝手にセルベージャと腸詰を注文して、千田の掛けた横に掛けると辺りを見廻した。

セルベージヤを待つ間はかなりかかったが、丁度ジャンタ前の店はひっそりとしていた。隣りの席では、盛んに二人の男が、ガランとした店中に響くような声で騒いでいた。一人の男は五十位の耕ら顔な男で、似つかわしくもない金縁の眼鏡をかけていた。もう一人は放くちな顔をして、大口をあけては喋っていた。二人の前にはセルベージヤの瓶が分列していて、二人はロテリヤの話を夢中だった。

ロの辺りに一杯泡をためた男は、皺くちな顔の男が盛に吹きまくるのを聴いていたが、一点の差で取りそこねたのだと残念がった。その腹いせに飲んでいるらしいように見えた。ロテリヤの気焰が止むと二人は店を出て行った。あとには鈍いソルベツテの攪拌機のうなりが聞えて閑静になった。

二人は、味気なさそうな顔に、互いに思い思いの考えにふけて飲んでいた。

彼らの前を四回も五回も通るこの店の静子と呼ぶ娘を見ていると、二人は別々に変な気持に襲われてきた。早くから、性的に醒めていた千田は静子の肉感的な肢体を見て、生理的な厭悪を感じ出した。

岡本は、その豊満な肢体が、彼の感情を刺戟してきた。

アルコールが手伝っていた故でもあるが、じっと静子を見つめたまま、千田の不愉快な表情には気も止めな

った。千田は又千田で、そんな女に見とれている岡本を一層下品なものに思っていた。

二人がK飲食店を出たのは八時をまわっていて、もうそこには都会の享樂の夜がむくむくと拡がり、はずんだゴムまりのようにぴんぴんとはね躍っていた。

「散歩だ」

千田の眼は、アルコールで血走っていた。投げつけるような声を聞くと辺りにいた外人の女の子が振り返っていた。岡本は平気で笑いながら後からついて来た。

二人が、裁判所の重苦しい建物の前を通ってシネマ・サンタ・エレナの前まで来ると、千田はその隣り合った建物に吸われるように入った。白い造りの建物は煙草のむんむんする臭気と、人の臭気が充満している賭場になっっていた。

この地下室は都会の病的な快樂の享受場だった。賭けた金はうまくすると、二十倍から、三十倍になって帰ってきた。負けたら五十ミルや百ミルはあつてもなく失つてしまうような場所である。

賭けた男ら（此所には男しか入らない）は一心になつて球をラケットのようなもので打つのを見守っている。十号の番号を打った女がすぐ次の女に代った。次は二十五を打った。そのように繰り返して二回行くと勝負はついていて、三十五と云う数字が出ると勝負に勝ったものは走って金を取りに行った。負けた者はうらめしげに、金

高の掲示を見て、チョツと舌打ちをした。四十ミル払いになっている。岡本の前の眼の血走った男は、自分の持札を千切って床にたたきつけた。

岡本は笑いながらじっと見ているきりだった。

「い、来ているな」

岡本が肩をたたいた男は振り向いてにやにや笑った。眼の鋭いこの男はたしか村井とかいったな、と一寸そんな風に考えながら、岡本は千田の方をちらりと見やつて、その村井の持った札を後から取り上げた。

村井はいまいましたようにそつと舌打ちしたが、岡本は、

「こいつは、当らねえぜ」

と、いって札を返えた。

ジンジン鳴っていた鈴が止んで笛がピリツと鳴ると、女が一人ローラー・スケートを履いて走って来た。

岡本はさつきから試合よりか、千田の動作に眼をつけていた。

「賭けたな」と岡本は自分独りで思いつつ注意深く千田の苦にがしい表情から眼を離さなかった。

千田は、試合が進むにつれてだんだん身体をのり出していった。岡本は、前にいるブラジル人が四、五人でローラ、ローラと呼んでいるのを小耳にはさんだ。多分、彼らがその女に賭けているのであろう。その男達の後方で、手をもじもじさせている怪しい男も岡本には問題で

なかった。変だな、と思った時はもうそこに姿は見えなかった。

千田は夢中で前方ばかり見つめている。岡本は、そんな千田の夢中な様子が可笑しくって、よほど彼の後から行って驚かしてやろうと思ったが、黙っていた。

千田という男が、元来から岡本の忠告に耳を借すような人間ではなく、滅茶なこり屋だったのを思つて止めたが、あんな調子だと、まけ続けだぞと考えた。

千田は狼狽していた。最初二十ミルを取られてからは、彼の予算は皆外れた。五枚札を買つても駄目だった。

彼は、自分ながら今晚は上っているぞと思うのだが、負けただけの金を取り返えさぬ中は、止めるものかという気痔だった。

妙に意固地になつてくる自分をどうにも仕方のないような眼で見ている自分自身を考えると、なかなか統御できない圧迫を感じてくるのだった。

た易い自分に打勝つことすらもできないのを、千田は自分の病的な神経に結びつけて考えた。

「駄目だ」

最後の望みを切れて、彼は自分の持札を滅茶苦茶に引き裂いて前にたたきつけた。靴の泥と、紙片とダンダラ模様を作った床が泣き出しそうな恰好で、散らばった薄汗い人生の裏面を曝け出していた。

「駄目だ」

彼はもう一度つぶやいて、頭髪を搔いた。

彼は、蒼い顔を一層固ばらせて、近づいた岡本に笑って見せたが、その顔の悲観の色が、一層濃く彼の面に現れていた。

岡本は、さっきのローラという言葉思い出して、その女と、色の黒いイラセーマとを心で組んで見た。こいつは出るぞ。岡本は、千田の耳許で私語いた。

「十六を買うんだ」

千田は、蒼い顔を上げて、彼の自信ありげな眼を見ると、病的に引きつった微笑を見せて買いに行った。

千田が、買いに行くと同時に岡本は、一番売れない高の少ない四十六を買って持っていた。はずれても二ミルだ。もし当れば全部千田にやろう、と、そう思うと気も晴れやかになって来た。

喧燥な人声と、煙草の煙の中で、台上に立った男が笛を吹いていた。

周囲のざわめきは、瞬間、はたと止んだが、第一番の女がローラの音を立てて走って来て、金網の中で頬骨の高い顔を曇らせた。

カタリ、球は二十二に入った。今まで、しんとした場内がざわざわの風のような音を出して来た。

すぐ次の女は、変にすましているが、かなり整った顔立ちをした、この種の女としては容貌のよい女だった。これが入らねば、千田の持ち札は駄目になるのだ。

「ローラだ」

千田は、うめくような声で言った。その眼は血走っていた。岡本も、もう笑ってばいなかった。その重厚な表情を心持ち暗くして、右手をぎゆうと握っていた。ぐりりと、一周した女がカンと高い音を立てて、外枠にあても誰も笑わなかった。

もう一度、やりなおすために来て、カタリと音を立てたのは、五という数字だった。

女は、くると廻って首をすくめて、又くると一回転すると後ろ向きになった。

隣りにいた男も、チョツと舌打ちして手の札を床に投げて出て行った。岡本が、千田を振り返ると、蒼くなつた千田の顔に、キラキラとした眼の異様な輝きが充ちていた。この方面に来る人間の持つ、独特な情熱的な眼である。ここにいる人間からして、平均大きを眼と、突き出た額の持主が多かった。千田は、恐しく悲観した顔をして、岡本の傍らに立っていた。

その時勝負が決して、四十六という数字が出ていた。「勝った」

岡本は、自分の持札を千田の手の中に押しやって、さつさと独り外に出た。あつけに取られた千田が、四十五ミルを受取って外に出ると、岡本は隣りのシネマ館の前で笑って立っていて近づいた。

「はは、それは君への御礼さ」

そうして微笑んでつけ足した。

「この金を持って、又中に入ったら今度こそ取られるぞ。それで黙って帰れ」

岡本は、そこで千田に別れたが、彼が自分の住むペンソンのY屋に帰った時は、十二時を廻っていたに違いない。

「誰か見えていますよ」

このペンソンの女中が、彼の姿を見ると待ちかねたようにいった。

ここの女中の特別な親切には、感謝するが、その変な眼付きが嫌いで何時も黙っていた。それが、妙に今晚はなつかしい気がして、

「有難う」

と言った。

「ノン」

彼女は、につこりして岡本の眼を見上げて、何か求めているようだったが、岡本は客という言葉が気になった。しかも、この夜更けに自分のところに来ているには、

よほどの用件に違いない気がした。

彼女の傍を通りぬけて、自分の部屋のポルタを押すと、同宿の人達が寝ている横の机で、千田がしょんぼりと腰かけていた。机の上には煙草の吸殻が山のようにつまれている。紙の上には、蛇のように横文字がのた

くっていた。

「この夜更けに、一体何だい」

彼は千田の顔に深く刻まれた蚊を眺めながら、年の若いくせに、いやにふけてしまったなあ、と思った。

「外に出てくれ」

千田は、黙って先に立ちながら

「俺は、ぜひと、今日中に話したいことがあると思つて訪ねたんだ。でもなあ、おれは君の顔を見た時に何も言うことがなくなつた。これから先のことも、君と相談したいと思つたんだが、そいつも要らん。なにしろ俺は、君に感謝している。これから俺に悪いことがあつたらいつてくれ。今迄、俺がやってきたことの中には、ずい分な間違いがあつたように思う。みんなにもすまんと思つとる。今夜は実は、美保子に会おうと思つたが、止すよ。俺も、あの女には随分苦勞をかけた。君にも心配をかけてすまん。その点は俺も、つくづく感じているんだ。これからは、君にも心配はかけんよ。俺さえ、こんなやけな、滅茶苦茶な生活をしなければ、皆が助かるんだ。親父も、おつかあも、みんなよくなるんだ。俺の病氣もなおっているんだ。浅ましい話だが、俺は、君からもらった金で飲んでしまおうと思つたんだが、君からもう時、この金を持って中に入ると又とられるぞ、黙つて帰れ、といわれたことを思い出して、みんな持つて帰つたんだ。この四十五ミルの金が、

親父やおつかあを、どんなに喜ばしたことか。親孝行つてのは、いいもんだな。俺は何だか、日本に行つて見たい気がするよ。そして、尋常一年生からやりなおしたいようだ。今晚は本当にいい晩だよ」

千田の話を聞いているうちに、岡本は何だか自分の善行を横取りされたような腹立しさと、砂をかむような味気なさが、胸の中一杯に広がって行くのをおぼえた。そうして、「やつぱりあの金は、やるんじゃないか」とという後悔の念に駆られた。

それでも一方、これでよかった、という安堵の気特も勿論まじっていた。

（一九三七年）

雨 牌

柳千枝子

略歴不明

雨

あわただしい夕幕の街を、雨までがそうぞうしい音をたてて降るのである。

灯の明るい舗道を、白い雨脚が斜めに走り、点滴が軒毎に伝わり落ちるのが、まるで一列になつて間もなく舗道を叩いているようである。

叩かれる方の舗道は、長年の打擲に凹んで、水が溜つているのが涙をためているようである。雨の連打に委せ切っているところは、忍耐の見本ともいえよう。

何の屑とも知れない塵芥や、マツチの空箱や、紙袋の切れ端や、犬猫の脱毛や、ラランジャ、バナナの皮や、煙草の吸殻、マツチの軸木、女の髪針、そのような品々が、道路の片隅の傾斜に塊り合っていると、戦災に泣いているヨーロッパの難民を想わせる。これらの浮世の残滓は容赦もなく溢れてくる雨水の流れに浸されて、ふるえている。

舗道の片側のショウ・ウインドウの硝子に R E F R E S ・ C O と書いた紙片がはりつけてあるのだが、R E F R E までの個所が剥げかかり、C の字が破れていてそれが風の当るたんびにひらひらするので、あたかも S O S を信号しているようである。

交叉点の台の上に停って白い棒を振る交通巡査の雨合羽は、美事に濡れて光り、水を浴びたオットセイの毛皮か、濡れた鋼像を思わせ、ヘルメット帽の下からたえずしたたりおちる雨の玉は、彼の堂々たるひげの尖端（さき）にひと塊まりになってより集り、互いにおちまいと轟めき合っているのだが、運の悪い水玉からさきに、溜まりきれなくなつては路上におちていく。その間隔も正しいのである。

反対側のコーヒー店の前に、一枚の新聞紙が、クタクタに濡れて捨ててある。新聞紙には今をときめく映画女優エディ・ラムールの大写しの写真が出ているのだが、人はその美しい顔の上を無雑作に踏みにじっていく。と

うとうエディの麗容も、泥に塗れて疫病のようになってた。これが仮りにも一枚のブロマイドであつたとしたら、こうも無惨には踏みにじられず、何処かの淋しい独身男か学生の手に拾われ、ポケットの内にしまわれることであろう。

一日の勤めに疲れて、顔色の悪い、猫背の、煙草好きの勤人達の中には、相当エディのファンもいるのであるが、この場合左様な平常は忘れて、容赦なく泥靴で踏みつけるのである。当人のエディが、もし見ていたら、新聞の写真とはいえ、いくら何でも良い心地はしないに違いない。

いっそ、高嶺の花、手に入らないうっぷんと、何かファンが復讐しているみたいである。同じ新聞のエディの裏には、遠いヨーロッパの国の未来の女王とギリシャ皇室との新婚の写真もあるのだが、いづれはリシェイロにはき取られる迄、踏み絵の責め苦に会っていなければならまい。何かの暗示のようである。

なにか巨大な毛虫が、のろのろと這っているように走っているのは夕方の満員電車で、“PINHEIROSS”も“AVIDA”も、みんな両側、前後にまっくらな人の鈴なりである。五人一列の座席の前には、七、八人の人間が膝をかち合わせて立ち並び湿った体臭で息づまるようである。

何のためにかように沢山の人間をこの時刻になると、

こうも吊り下げて歩くのだ、と、もし電車が口を利き出したら、怒鳴るであろう。何のために沢山の「市民」と名のつく生きものは、かように帰宅の一瞬を急ぎ、一つ電車に乗りたがるのか。

不可解な人間の本能である。

平常、事務室で割合にのろのろと仕事をしている人でも、いざ帰りの電車となると飛鳥の如くなり、渾身の努力と迅速とをもって他人を押しつけ突きとばしても吊り下がる。

自分のために、という意識がひとりでに働き、人のためのような月給仕事などとは、またちがった気持になるのであろう。

山脇道子は、そんな雨の日、アベニード・パウリスタの交叉点にいた。薄いバーバリの雨外套を透して、湿り気が絹の衣類をつけた肌にまでつたわってくる。雨洋傘は持たず、頭巾だけで、ぐっしりと濡れている。

一日中、事務室でタイプを叩き、字を書いているので、肩は凝り、指先はふるえている。彼女は我が家の晚餐を考えてみた。

シネマ館の裏の、肥料店の地階を借りているので、しよっちゅう肥料の臭いがしていた。臭いだけでも肥るかもしれないよと、母親はたまにかねて時折悲しい冗談をいうのだが、道子は笑ったことはない。

父親は亡く、母親と、彼女の下に六人の幼い弟妹がいる。一家八人の重圧が、か細い彼女の肩にかかり、道子は楽しく恋をする気にもなれない。

会社の外交をしている宮崎良介と小林一造の二人からは、いつもある種の好意を示されるのだが、六人の弟妹のことを考えると、自然に臆病になり、あいまいな態度しかとれないのだ。

母親は、よい人があつたら、遠慮なくつかまえて、結婚しておくれよ、その人にうちも見て貰つたら……：といふのだが、そんな無責任に似た虫のよい言葉も、結局、本当にせち辛い世相を知らない母親の、世間知らずが言わせる言葉だと、道子はいつも取り合わない。

自分を、絶世の美人とも、また天才とも思われず、結局平凡以下の何の取柄もない、ただの女ではないかと深く反省して来ると、今どき、この険しい世の中を、わざわざ大勢の系累を背負いにとび込んで来る酔狂な青年はいるものかと思う。1

すべての若い男は渴えた犬のように金を欲しがっているのだ。「金」という言葉ですべての男の神経はそちらに集まる時代ではないか。午休みの冗談話にも「千コントス持っている女があつたら、後家さんでも不具女でもかまわない。僕は無条件で婿に行くよ」などと、平気でいわれる言葉も、しよっ中きかれる会社である。

下宿代にも追われ、シャツの洗濯代までも会社を追か

けられて取りに来られ、煙草錢や、電車賃をまでも、時とすると同僚から借りていく世相である。誰にも金がな
いのである。ないふりをして、何時も、しみつたれた格
好で愚痴ばかり並べ、その癖幾つかの会社を渡り歩く二
十年間に、こつそりと大分金を貯めていると噂されてい
る会計の老人だとて、やつとこの間、ブルックリンに土
地を一コマ買っただけではないか。

金を蓄積していくその度の高さよりも物価のはね上る
度の高さの方が、ずっと速い現実では兎と亀のかけ足よ
りも滑稽な競走である。

いったいどこに、この膨大な大都会サンパウロ中の金
は行ってしまうのか。

資産凍結令に引かかって、敵性財産として処分さ
れ、道子達の以前いた西川株式会社は閉鎖し、戦時中新
たにできた生糸会社に通子達はいた。だが―この会社
も、現下の世界的不況には氣息奄々（えんえん）である。
北米から肝心の生糸の注文がまるで来ないのである。ひ
と頃は成金会社で羽振りもよく、他の不況会社を尻眼に
どんどんと盛大になっていたのだが。社長は若いけれど
も実に敏腕な男、今の悲境も度胸一つでじつと堪えてい
る。道子達には泣き言一つ言わないのだ。

この男らしさは、むしろ小気味がよく、事業界に雄飛
する種類の人間にのみ見出される一つの美德でさえある
と、道子は観じた。社長と同年輩の社員も数人いるのだ

が、やはり社長とは段違いの気がして、道子は、知らず知らずその男達を軽視する癖がついた。無論心の中でだが。しかし、こんな鑑識眼も、世の中へ出されて働く女性達が、いつとは知らず身につけてしまう哀しい甲羅のようなものである。この生半可な達眼が、彼女の結婚をいつしか妨げていることには彼女達はまだ気がついていないが、道子だけは聡明にも、早くそれに気がついていて、ひそかにおそれている。

女はただ、何も知らずに男に嫁いでいく方が幸福なのじゃないかしら。

「道子さん」

不意に呼ばれたので、どきっとして見上げると、宮崎良介が雨洋傘の下でニコニコしている。長身で色の黒い彼は、この夕暮をくろい洋傘の中にと、歯だけが目立って白く光るのである。

健康そうな達しい笑顔であつた。

「あら、―― 宮崎さん」

道子はちよつと赤くなつた。

「おひとりですか？ 僕アまた小林君と一緒にかと思つた」

「どうしてですか？」

「小林君が君に何かおごりたいといっていましたよ。奴さん、何かいいことでもあつたんでしよう。僕も実は

誘われたんですがね。どうしてもぬけられない用事があつたもんだから」

なにも知らないらしい道子を眺めると、宮崎はまた笑った。

「ほほほほは。あの男、またいいそびれちゃったのでしようー。あれで案外うぶだからな。……知らないんですか？ 何も？」

「はい。ー午後はずうっとお目にかかりませんもの」
「え？ 何処へ行つたのかな」

「社長の自動車で、どこかへ行らしたようですわ」

「へーえ？ はてな？」

宮崎良介は瞬間ちよつと真剣な表情になったが、すぐ又笑い顔になって、

「この間のカルナバル。貴女はずうつと家にいらしたんですってね？」

「ええ。ー 何故？」

「小林がね、とても君をほめてましたよ」

「あら……」

「貴女はたしか、此国（ここ）生れでしたね？ アルバレス・ペンテアードの学校出で……」

「……ええ。レジストロで生れましたの」

「珍しいくらいおとなしい人だな、君は。僕は最初、貴女をてつきり日本生れとばかり思っていたんですよ」

あまりしとやかすぎるので、と宮崎は声を出さず心の中でつけ加えた。

道子の入社の日も浅く、それに宮崎達は、しよつ中地方廻りの生糸買付けや何かに出るので、会社に戻るのはいせいで三カ月に一遍位のものであった。だから道子たちと話を深くする機会も暇もないのである。

受付け、電話、会計と女の子は数人いるが、いづれもサンパウロ生れの都娘で、陽気で化粧の上手な娘達ばかりである。

若手社員の中でも、日本から直来した青年と、此国（ここ）生れとの間には、おのづから趣味や嗜好に、ひらきがあり、娘の子達に対すしなさだめのすきずきも、態度もおのずからちがっていた。都娘達は、陽気に朗らかに事務も散歩もつてのけた。

家庭のせい、環境のためか、あるいは本来の性質のさせるものか、道子はひとりちがっていた。仕事は責任強く几帳面にテキパキとやっていくが、あまりにもしとやかで無口であった。……、だが、その道子とて青春はあふれているのだ。心の奥深く秘めている情熱を誰が知ろう。

だが、若い娘の表面をしか見ない多くの青年達は、それが物足りないのである。道子の体の心髄にかくれている火のような情熱をあえて掘り出そうという青年はいなかった。

「あの女は、あまりおとなしすぎるよ。僕アもう少し、はつらつとしたのがいいね」

「だけど、君――。家庭の女としては極上だぜ。何でも器用で気がつくし、地味だし、第一、優しくって心が実にあったかいよ」

「いやにまた肩をもつんだね。交際ってみたのか」

「そうでもないがね。それア、僕の眼を以ってすれア、ひと目で見破るくらい、何でもないよ」

「大きなことを。――へへんだ」

「君の言ったことは、しかし、本当だな。僕もそう思ったもの。全くい人だよ」

「やれやれ、そこにも一人いたのかい。だが、僕ア……」
「ただ、あの人にはね。僕の調査したところによるとだね。系累が多すぎるんだよ。あの人ひとりで、たしか七人か八人の親やきょうだいを養っているんだよ。すこし可哀想だよ」

「そんな人と、うっかり結婚しちゃったら大変だな。ぞろぞろやってくるぜ。殊にこの国ではね」

「やりきれないな」

「可哀想なのは婿さんだよ」

若い社員や外交たちの蔭口も、しかし、道子の本質的な美点は充分みとめているのである。だが、道子に対する淡い同情や憐ぴんも、それ以上は発展しなかった。生活と闘っていく若い男達の心には、自分ひとりでさえも

ちきれない生活の重荷を、なおその上ひとの分まで担いでやる余裕は心にも懷中にもないのだ。無責任な恋愛のあと仕末の煩しさまで今の若い男は考慮に入れている。こわいまでに逼迫したせち辛さではないか。自然道子はこのけ者になるのである。道子はしかし、うすうすはそのことを感づいてはいた。

鋭敏で犀利（さいり）な彼女の頭脳は、二十一歳とは思えぬ敏活さで相手を心理的に洞察してしまうのである。

会社からまっすぐ家に帰ると夕食後すぐにアルバレス・ペンテアードの高等科へいく。会計士に、二年後なれることが彼女の唯一の楽しみである。母親が内職の進興堂の手袋の下請仕事で得るささやかな利益と、すぐの弟がコチア産組に昼間勤めて夜は商業に通うその学資の残りの僅少な金とが、一家八人の糊口の代（しろ）である。道子はよりも会社が大事であった。

関西の大きな商人の息子であった父親が、何かで失敗をして上の兄二人を大阪に残したままブラジルへ渡り、大農場主となる夢を描いたのであるが、もともと馴れない仕事とて有り金は忽ち失くしてしまい、買った土地は廃物同様に捨て去って都会地へと出て来たが、する事なす事芽は一つも吹かず、子供は次々と生れる。商売は転々する。そのうち勝負ずきの父親がビッショに凝り出して商売はそっちのけとなり、それに伴っていつ知らずピ

ンガの味もおぼえそれでも一時はビツショで百コントス儲けたりしたのだが、今思えばかえって身の仇となり、最後には、とうとう無一文の窮迫のどん底に、敢えなく急死してしまった。ささやかなペンソンなどを日本人の集まる坂の下町などでやっていた母親の力で道子達は成長した。

グルッポを出るとからスダンの煙草会社に働いたり、日本人の百貨店に働いたりしながら、それでも勉強好きの彼女は商業の夜学にいき普通科を最優等で卒業した。日本語も殆んど独学で、戦争前迄は手に入った女学講議録をたねに大正小学校の林先生に教わったりして、『文芸春秋』くらいはよみなす迄になっていた。

しかし、道子の性質から言えば、無口で凝り性な点や、

机の上の仕事よりも刺繍や洋服裁断などの方がずっと適し、又好きでもあった。十五、六の頃の彼女の熱烈な希望は、腕のいい裁断師か、デザイナーになることであった。だが、父親の死が意外に早く、勢いやむを得ず世の中へ働きに出なければならなかった。道子の瞼の中から、希望への道は見る見る遠のいていき、思いもかけぬ事務員となってしまったのである。おしのける術もない生活の方便は、彼女を、性質とは反対の方向へ、ぐんぐんと進めて行ってしまったのだ。

「じゃあ、失敬します」

突然宮崎は、至極あつさりとそう言うのと、眼の前に来て止まったロタソンにとび乗った。あいさつを返えす間もなかった。

「やっぱりーあの人も、私には惹かれてやしないんだわ」

ロタソンの窓硝子の中からニッコリしろい歯を出して笑いながら走りすぎて行く宮崎の男らしい顔を瞼の上にあたためながら、道子はうつむいて心につぶやいた。そして、その原因が何にあるかをすぐ考えた時、言いようのない腹立たしさと生れて初めての口惜しさを母親に對して持った。

「ーあんなに大勢の子供を、何も次々と生まなくともよさそうなものなのに」

「暢気に、幾人でも生んで、しかし、結局、その責任は今ではあたし一人が背負っているじあないの」

ー 厭なお母さん ー。

わけの解らない怒りにつれて、ふと眼頭が熱くなつた。

……その時、何の気なしに電車道の方を見ると、赤信号に妨げられて、数台溜っている自動車の中に、社長自身が操縦するパッカードがまじっているのに気がついた。

傍に信任の厚い小林が、何やらニコニコとして坐り、後部の座席には社長の奥様と奥様の従妹にあたる若い娘

との横顔が見えた。悠然と納まっているのだ。道子は、はっとして本能的に会釈をしてしまったが、誰も交叉点の舗道の片すみに雨に濡れて停っている女事務員のほうなど振り向いても見やしない。

自家用車は、折から青信号にのってすするとすべつて行くのである。

道子は何か、やるせなさで、胸の中がしめつけられるような思いだった。……それが嵩じて捨て鉢な気持ちになった。

これから、ジャンジャン、バイレにでも何にでも行つて、他の娘達のように、面白おかしく世を過そうか知ら。

……何か凶暴な気持だった。

「第二世の娘」達と、一般に呼ばれて、親達から手に負えない我がまま娘、無軌道娘のように言われている友達の誰れ彼れの方が、ずっと幸福で、生き甲斐のある日夜を送っているようにさえ考えられてきた……。

明日からと言わず、今夜から決心して、遊び歩いてやろうか知ら？ 弟や妹達は。――お母さんはどうなりとしたりいいのよ、私の知ったことじかない。……日本生れかと思う位やさしい娘だの、しとやかだの、親孝行だの、感心だのと――一体誰のため私はそのような

生活をしなければならぬの。――働きの者、感心といつもほめられる自分、他人の模範とまでされている自分、

だけど――みんなそれは上すべりのした、遠くからかけられている空虚な言葉だけではないの。――その私自身このみじめさはどうなのだろう！

みんな、私のそばから遠退いていく幸福。……掴めない結婚……恋すら、できない現実ではないか。

お転婆、セン・ベルゴンニャ、浮気娘、此国（ここ）育ち、とありと凡（あら）ゆる罵言をかげで受けている友達の方が、ずっと幸福に、のびのびと自由勝手な恋愛をし、若い日を楽しみ、そして自分でめいめい立派な青年を掴んでは、倖せに結婚のゴールへ入って行くではないか。

明日からと言わず、今からでも、――ふと見上げる眼前に舗道を隔てて、映画館リッツ・コンソラソンの灯の色がそそのかすように赤かった。QuerO amar a S u a m u — h e r 。――君の奥様と恋がしてみた――の電飾。それが、また、雨に濡れてひととき美しいのだ。

謝肉祭（カルナバル）のバイレにすら行かなかった自分が、何とも臆病でケチな人間に思えてきた。

大阪で南方から復員してきている二人の兄は、一人は痍兵で、二人とも日本の現状をこまごまと報じ――しかし、

自分らは全力をつくして戦って来た。兵士として何ら心に恥づる処は持たない。そちらは天国のようだときく、

何卒してそちらへ行きたいものだ」　との手紙が昨日きている。

ブラジルは天国。――全く天国だわ、私達をのぞけば。兄さん達は何も知らない……天国にだって、ピンからキリまであるのよ。……

眼の前を幾台も幾台も通りすぎる電車は一寸の隙もなく、よりつくところもない。あとから、あとから流れるように行き過ぎる自家用車の彩だしい群れ。……誰に打ちつけようもない憤懣、道子の顔は歪んでいた。……

「お姉ちゃん」

驚いて見直す眼の下に、末から二番目の女の子が、鞆をさげて雨に濡れている。コンソラソンのグルツポの帰りである。

雨傘も持っていない。

「あら、オルガちゃん。洋傘どうしたの？　また失くしたんでしょう、電車で」

「ノン、ちがう。学校で盗られちゃったの。ママエ、おこるわねえ？」

八歳の幼い智恵では、電車の中で忘れ捨てた自分の怠慢を叱られるこわさに、学校で盗られたのとゴマ化すのだが、その嘘の成否を気づかう恐怖はかくせないのである。表情の方が先に、嘘を白状しているいとしさに、道子は誘われて微笑した。

「姉ちゃん。早く電車に乗らない？　おながが空いち

やった」

「ママエ、今日どうしてた？」

妹は午後のグルッポに行くので、半日の母の動静は、会えば妹にきくのである。習慣であつた。

「ママエ、居眠りしててマキナで指縫っちゃつたって、

――痛い痛いって言つてたの」

えッ！ 声に出ない驚きが表情にでた。あッ！ だから言わないことじあない。老眼鏡を早く作りなさいって言つといたのに。――急に何とも言えず母親が可哀想になつてきた。

今迄の、一切の不逞な想念や映像は、たちまち掻き消す如く失せて、生活にたたかい疲れ、世帯の惨苦にやつれ果てた母の、まだ四十歳の若さだと言うのに、もう半ばは白くなっている髪や、荒れ果てた掌や、真黒な爪や、固く節（ふし）だつた指の一本一本が、ふと眼前に浮んできた。

神戸の富裕な家の娘と生れながら、父についてきて、はるばるとこんな遠い処で、若い時は夢にも見なかったであろう、労苦（ろうく）を積む母。

やつれてかぼそい猫背までが、何か運命的な不吉を宿しているような母。

「大阪の兄ちゃんにね。何か送つてやるんだって始めたの。カミィザ縫うんでしよう」

何も知らない妹のオルガはあどけない顔を姉に振り向

けて説明する。

そのえりもとや、耳柔に、うつすらと垢のたまっているのまでが、何かいじらしく、先刻（さっき）までは邪魔だとさえ思った程のこの妹も、今は何か急にいとおしくなり、姉は妹の冷めたい手を自分の掌の中に握りしめた。

電車は、相不変の乗客満載である。

「さあ。――オルガ、気をつけてね。一緒に来るのよ。いい？」

「うん」

雨は俄かに強さを増してきた。眼も眩むばかりである。

（一九四八年）

牌

言い募れば言い募るほど、心が湧き立ってきてとりとめがつかず、しまいには何を自分が口走っているのかさえ、わからなくなってしまう。顔貌も醜く歪み眼も引き吊っている。

そのみっともなさには本人は一向に気がつかないが、もし気がついたとしたらとても恥しくて人前にはいられないであろう。

聴いている相手は、老練というよりも六十七年の世渡りに、うんと厚かましい甲羅を心にのせて校智をさえ身につけているお蔭で、うわべは「そうだとも、そうだとも」と、尤もらしく合点々々をしてみせるのだが、心の中では可笑しさに地団太をふんで面白がるのである。

これが、聴き手が年若だと純粹の気持から一途に同情してしまうので話し手よりも感動してしまい、そのうち話している方は気分が半分以上手伝っている憤慨話なので、話しているうちに気も鎮まってきた、しまいには淡い後悔さえ出てだんだん不熱心となり、今迄の惰性でお芝居のセリフみたいにな、うわの空で話のつづきをつなげている状態になっても、聴き手の方は感動から夢中になり涙をポロポロこぼして両手をしらずしらず握り合わせて

首をふっていたりする。が、この滑稽さには話手も聴き手とともに気がつかないでしている所作である。

「あの人は私を奴隷だと思っているのよ。もう我慢ができない、こんな下らない生活！ 私だって立派にひとりで、たべて行ってみせますよ！ え、坊やと二人位、過せますともー。」

洋裁に充分自信のあるところを相手に知らせながら、「何なの、こんな貧乏ぐらしが！ 私はね、後藤と一緒にになってからは、一日だって楽しいことなんてありません。朝の五時から起きてこの子を……」と抱いている赤ン坊を邪険にゆすり上げた拍子に、先刻やつと泣きやんでスヤスヤと寝入りかけていたこどもはふたたび身もだえして泣きだす。

おむつの濡れているのも、顔中が眼鼻の判らぬほど涙やよだれでよごれているのも昂奮している母親の眼には映らず、憤慨の余波はこの子供までうるさく憎くなってくるのである。が、赤子のさわぐ以上に母親の頭脳の中はガンガンしてしまっているので、はたからきいているとおこっているよりも、あの赤子の泣き声をだまらせてくれればいいとはらはらするのだが、その実それほど抱いている人間の心にはひびかぬのだ。ヒステリーとはこんな場合の状態をいうのだろう。

閉口した聴き手の姑と小姑とはたまりかねて、どれ坊やが、と手を出しかけるのであるが、胸をはだけ髪は蓬

々として鬼面のような顔つきで齒をむき出して、良人の悪口を並べている嫁の有様を見ると、同情どころか浅間しさが先に立って勝手にしろと横を向くのである。

姑は横を向いてそつと左右の小指で耳の穴をふさいで、親の自分に向つてむすこの悪口を散々並べている嫁の話をきくまいとした。しかし、まるで物にでも憑かれたように良人のことを罵りさわいでいる妻君自身の頭脳の中は案外からっぽで、もう口丈けがさかんにのしつていたのであつて、本心は案外のところであり、今頃はこの雨の中を洋傘もなしで、しよぼしよぼと濡れしおたれた外套にくるまって電車を待っているであろう亭主の面影が、悪口をいつている頭脳のなかにひよいとなつかしく浮んだりする。

夫婦という人情の不思議さには、この場合、さすがの姑も気がつかない。悪口がこの場合は、腹が発酵している時の一服の清涼下剤の役目をして妻女の恨みは次牙に雲散霧消し、もう腹の中は空っぽになってきているのだが、今までの激しうがあまりに大仰だったので、聴き手の小姑は息がつまり、小姑の友達の若い娘はすっかり妻君の気の毒な立場に同情してしまつて、あたかも自分もその被害者でもあるかのような倒錯した感情に陥ちていた。兄嫁に同情されることは、小姑にとって兄を憎悪させることになるので、小姑は友人の聞いているのを見るとかえって娘を憎んだ。親友が娘に好意をよせたの

に嫉妬もまじるのであるが、こんな家へ友達を連れてこなければよかったと後悔するのである。

友達の娘は娘で、ああ結婚なんていやだ、と思う。こんな位なら一生ひとりでいたほうが、どんなに仕合せだか知れやしない……。目前に悪い結婚の見本が、わあわあいつているのを見るとそう思うのだが、しかしそのすぐあとからノイボとなっている青年との楽しい未来が思い画かれ、空想はいつの間にか結婚したあとの自分達のことにくくのである。

妻君の抱えている赤子はいつの間にかやまた眠りにおち、そとは相変らずの雨の音で、それが―ところどころ蒼黒いカビの吹いたくらい廊下の壁際にたっている四人の陰影を一層ゆううつなものに見せている。

世帯やつれのした嫁の姿には、どこにも昔の鷹揚さや優しさは見られず、姑はその原因は考えてみず、一途に嫁の本質そのものがいけないのだと憎々しげにそれを眺めめやるのである。

壁にもたれて暗い方へ向き、こつそりと先刻から耳に栓をしているのだが、その時、しわくちやになったコンチネンタルの袋をこつそりと上着のかくしから出すようまそうに一本を喫った……。喫い終ると姑は決心したような調子でいった。

「別れたほうがいいよ、全く。それじゃあんたもやりき

れないからね」

嫁に対する焰のような憎悪の念は口には出さず、ポツリといった。途端に含んでいた煙草のけむりが、欠けた齒ぐきの間からもくもくと出た。煙は空間に出ると、姑の面前でしばらく立ち迷っていたが、やがて頼りなく消えて行くのである。

「……………」

嫁は最初は姑のいった言葉が、うまくのみ込めぬ風であつたが、やがて眼を見はつた表情で、老婆の白髪だらけの貧弱な頭部をみつめるのであるが意外なことを聞いた、とその表情が語っている。そらやっぱり、ね、私達の間を妬いてるんじゃないの――口でののしりさわぐほど牡の底で怒っていない嫁の心は、決定的な姑の言葉にいささかあわてるのであるが、その狼狽はすぐ憎しみに変つた。――この鬼婆……………。

若い小姑はまた、自分のことは棚にあげてひとりで兄の悪口をいつている娘には、同情どころか反感ばかり湧き――それをおさえるためにも一生けんめい編物に精をだすのであるが、二つの眼は毛糸のあみ目におとしながら心の中の眼ではたえず憎い憎いと娘を額越しににらみ上げるのである。

未婚の小姑には既婚者の微妙な心の奥底は判らず、また放蕩という事柄もしかとは判っていないので、兄をさほどぐうだらとも思われず、また兄嫁の口と腹裏との差

違も判らぬので、幼い時からいい兄ちゃんて思いとおしてきた兄を、さもえらそうにののしりたける兄嫁のほうこそ、ろくでなしの図々しい恥知らずだと腹のなかではうんとやつつけるのである。

姑はその時、ふと嫁の背越しに、髪ピンが抜け墜ちそうになっているのを見つけ、差し込んでやろうと思わず片手を伸ばしかけたが、急にまた憎らしくなりやめた。おちて踏み砕かれればいい気味だと、こころのなかでけしかける何ものがあつた。

姑はいつも蔭では嫁をヒステリーと呼んだ。うちのヒステリー……。だが自分が若い時良人にしたヒステリーは思わず、また、自分の娘が現在、もつとヒステリーの形相でその良人をやつつけている場面などは見ているのに、うまく忘れ捨てにしている。

この矛盾！ 肉身の身勝手さ！

人間の心のなかの何かひとつの弱い部門であり、この身勝手さは誰でも一応はもっているものなのだ。

人間は、自分の子が墮落した時は社会の罪にし、他人の子の墮落は、ようしやなくその人自身を苛責する。我が子の不成績は教師の質が悪いからだといい、他人の子の時はその子をわらう。人間が、共通にもっていて、そしてだれも反省せずに死ぬまでもち歩いている哀しい弱点のひとつである。

娘に対する反感でしだいに頭のなかで煮え返ってきた

小姑はもう、我慢がなくななり、煙草にむせて眼やにと咳を一緒にふき出している母親の腕を手荒く引つぱると、邪険な声を出した。

「行きましようよ。………もう七時よ。暗くなるわ」
しやにむに、歩きだそうとする拍子に毛糸の玉がおり、湿った廊下をころがった。

そのけはいに、急に瞼の前からウロコがおちたように、恋人との未来の幻想から醒めた友達の娘は、これも何も判らずあわてたようすで玄関へとあとを追った。扉をぐつと開けると、さあつと叩きつけるような吹き降りであつた。

「あら、大変」

思わず首をすくめた二人の娘は、ピシッと強く頬をうつ大粒の雨を、なにか快いものと感じた。娘の形相や言葉に毒瓦斯にあてられたような不愉快な氣特になつていたところへ、なにか清涼剤のようであつた。

開けた戸をふたたび閉めた暗がりで、二人の娘は何とということなく顔を見合せて微笑しあうのである。

姑と嫁とは、その時も、まだ黙然と、暗い廊下にただずんでいた。一体なんのためにこの倅夫婦は、かように争い合っているのか。勝手な時は二人とも、ひと目はばからず（と老婆にはそう思えた）いちやつき合うくせに、どうして、私に向うと、こうも二人ともお互いの悪口ばかり言い合うのか。

姑は今更ながら自分の若い頃のことを、思いだす風であつた。しかし、老いてこわばつた彼女の頭のなかには、

若い時の良人との間のこまごました記憶などは何も止めず、年月という不思議な時蝕作用は、風雨に蝕まれた古木の表面に木目丈けが彫り残されるように、ただ亡夫との漠然としたよさのみが、思い出されるのである。随分とひどい喧嘩もしてきたようでもあるし、またしなかつたようでもある。すべては、もはや、記憶の層の圏外に在つた……。

老婆は、いつとき、追憶のなかのぐるぐるめぐりに、ぼおつとした貌つきでいた。

嫁にはそれは判らず、とりとめのないその顔つきが、何か自分を嘲けているようなひがみに、自然とおち、怒りはさらにかき立てられた。

「お姑さん」

声は完全にヒステリー声でふるえた。

「いつまで、そんなところにいらつしやるの？ あの人が帰ってきたら一緒になつて私をイヂめようと考えていらつしやるの」

この不意打ちに、すっかり度肝をぬかれた形の老婆は、おどろいて返事もせず、あたふたと玄関に出た。と、そこへ、外から戸が乱暴に内側へと突きあげられ、

戸外からぐしよ濡れの男が、雨傘と一緒に、ころがり込んできた。はずみをくった小さな老婆のからだは、二、三步よろめいて板壁に突き当った。

「あつ！ お前」

二人の娘も、突然に出現した大男の壁のような軀に、隅へおしつけられた。

「おお、ひでえ！ えらい雨だぜ」

彼は、誰にともなく叫んで、河から上った人のような体を、遠慮もなく雨外套を脱ぐのである。あたりはたちまち一面の水だらけとなった、。

頭から靴の先までぐしよ濡れで、よく見ると湯気が立っているのだが、場合が場合だけに誰も口を利こうともせず、飛びこんできた主人も様子が何となく異様なのはじめて気がついたらしく、雨外套をとって釘にかけ手早く靴と靴下をむきとると、スリッパをはいて、ハタハタと足踏みしながら、不思議そうに三人を交る交る見まわすのである。

「何だ。どうしたんだ？ みんな黙ってー。何かあったのか」

年の功で姑はさすがにそれには答えず、
「ひどかったろう？ ナニ、あんまり雨が降るのでね、帰りそこなっていたところさ」

「ついでだから、みんなめしを食って行ったらいいでしょうー。やあ、美佐子さん」

と、愛想のよい笑顔になり、

「この雨だ。そとは歩けやしませんぜ。おくらは？」

お母さん、おくら………。おい！ おくらはどうしたんだ。どこにいるんだい？」

その妻君は、とつくに良人の帰ってきたことは知っていた。知り過ぎるほど知っていた。口の先では憎い憎いの百万遍を唱えながらも、心のなかでは良人の声をきくことから、もう懐しさで一杯になっているのだが、玄関にみんなのいる手前、いつものように駆け出して行って、笑顔で迎えるわけにはゆかず、今度は、玄関にかたまり合って愚図ぐずしている三人のよけいな人間達に対して、一層の腹立たしさが湧いた。が、その外は一寸も動かそうとはせず、ただ耳だけに全神経を集めて、台所に、ひっそりと立っている。

良人は、とうとう台所へやってきた。

「おい！ おくら、何をぼんやりしているんだい。暗いじゃないか。熱いコーヒーを一杯、くれよ」

この言葉には、なんの曇りもなかった。むしろ意気揚々たる響きさえあり、その眼のなかには今までこの豪雨のなかを、戸外で一家の糊口のために働いてきた男の誇らしい感情があり、さらにそれ故、家内から感謝のこもった奉仕を求める表情があった。甘えた表情といってもよい。良人のこの言葉に、ハツと我に振り返り自分の周囲を見まわした妻君は、改めて気がつく、まだ台所に電灯

も点けず、火も付けず、まして一杯の熱い湯さえ出来ていないことに気づくと、先刻までのたけりたった勢いはどこへやら、急に恥しくなり、コソコソと抱いている赤ン坊を置きに寝室へとゆくのである。そのやや丸めた猫背は無言のうちに、わびの表情を良人へあらわしているのである。否、全身で表現していた。

良人はまた暗くて火の気もない惨憺たる台所を見まわし、まだ夕飯の仕度どころか、熱い湯さえない有様に気づくと、赫としていきなり怒鳴った。

「何だ！ まだ湯さえ沸いてないじゃないか！ おい！ もう七時だぜ！ 冗談じゃない！ おれは一日働いて帰ってきたんだよ！ 夕飯位、おい、早く食わしてくれよ！」

妻君は赤ン坊を寢床におくと、長い間の抱き疲れでしびれがきれた両腕をもみ合わせながら、心のなかではひどくしよげ返ってすまながるのである。が、返事がなぜかでない。

良人は、いら立つのである。

「何をしていたんだい。お前たちは一体………。寝てでもいたのか」

この寝ていたのかの一言は、うちしおれていた妻君の良心をまた猛然と荒びさせる利き目をした。妻君は極めてゆっくりと、赤ン坊を寝かしつけ台所に戻ると、良人の方は一顧もせず、不逞なもの腰で、のろのろと火を焚

きつけにかかるのである。

あかりもつけようとしなないその態度は、はたして良人の癰癤を破裂させるに充分であつた。

「何だい！　この女は？　いつも、いつもふてくされていやがつて　ー。おれを何だと思つてるんだ！　おれが帰つてきたのが、そんなに邪魔なのか！」

「・・・」

「退け！　いやなら、おれがやるワ！」

怒りに任せて手あらく妻君の軀をつきとばした。

キリンのように背丈高い妻君のやせた軀は、壁にぶつかつて、どしんと鈍い音がした。

この物音は静かな廊下を、暗い玄関にまで伝わり、二人の若い娘は瞬間おびえた表情になつた。露骨に瞳をみはり無言のままいた。姑の方は場馴れたもので、奥の方を一度、透かすように窺つたが、二ヤリとするとふたたび玄関の方に向きを変え、さつさと帰り支度をするのである。心のなかではイイ気味だと呟くものがあり、あの憎らしい嫁の毒口を、倅が思いき「引裂いてやればよいと思う。」

この場合、姑には、息子の不埒は少しも考えられず、嫁の不埒ばかりが、うんと、憎々しく頭にくるのである。

「さあ、お前さん達。雨傘をお取りよ。もう遅いよ」
姑はいつときも早くこの家を出たがるのである。

自分達がいたのでは、あの戦争もじきにやんでしまうであろうと考えると、喧嘩に一花咲かせねば、面白くないという腹から、立ち去りたがるのであるが、さすがに若い娘たち二人の純な心は反対であった。もしも自分達が帰ってしまったら、あとで嫁がどのような振舞いをうけるかしれないと思うと、恐怖心さえ湧き、小姑は若いだけにやはり、まだすなおな気持ちで娘をひそかにかばう心になった。しぜんと、先刻までの憎悪や反感は忘れるのである。どうしよう？ 仲裁に出ようか？ 期せずしてその問をからみ合わせたまま、四つの瞳は見合わされるのである。その様子をまた、姑は老人らしいまわり気で、この年頃の娘たちの好奇心から立ち去りかねているものと感じがいをし、

「何だねえ、あんた達もいやらしい。夫婦喧嘩なんて、面白いものじゃないよ。つまらない。さあ早く帰りましょう」

眉をしかめ、雨傘の尻をトンと石段に突いて、いら立ってみせるのであるが、全身を聴覚にした恰好で、奥の物音をきいている二人の娘は動こうとしなかった。何をしているのか、時々ぬれ手拭を空間ではたくような威勢のいい音がした。倅になぐられている嫁の顔を宙に描いて、姑は心のなかがはれてゆくような気がした。おなじようにちょうどその時、雨もあがった。なにか胸がせいせいし、老人とは思えぬきびきびしさで、姑は背のび

をすると、戸外に出て深呼吸をするのである。

思いのほか外は明るい。

雨洋傘をしゃっきりと握って舗道に出て娘達を待った。

なにか復讐を遂げたあとの快感をもつ人に似ていた。いまいましさに、もうひとつ、思いきり妻の横顔をはりとばすと、また雨洋傘を掴んで戸外へ、良人はとび出した。

大股で街の曲り角まできたが、ふと立ち止まると、忽然と角の居酒屋に入り、一杯のピンガを注文するのである。

電車賃が値上げにならぬ以前は、結構コニヤックが飲めたのだが、今は五百レイスなのだ。毎日となると、この差も馬鹿にならないのである。その埋め合わせはコニヤックからピンガに代えてつけた。レモンを滴らしたピングのカリス一杯も、また、なかなかヨキものなのである。二杯飲むと軀が熱くなり、怒りも鎮まったようである。金を払って雨洋傘を持ち直すと、彼は人の繁く往来しているベルゲイロの通りを眺めた。

いい気持であった。

ふっと、太いため息をし、

「さて、どこへ行こうかな、これから」

ひとりで、問答するのであるが、ボルソの中は知りぬいている月給日前だ。どこへ行かれよう？ シネマに行

くのもおつくうであつた。シネマの中の甘い場面などは、男もこの年頃になると、トロ臭くて馬鹿馬鹿しく、身を入れて見る気もしない。眠るだけなら金を払うのも損な気がした。

それにとにかく、腹は減っていた。陰のなかに、ふと、上等の料理店の内部や、遊び場の女の肢態などが意味もなく浮んだ。二重にいまいました。

彼はふと、ヴィラ・マリアナの神田の家へ行つて晩飯を食つてやれ、と思いついた。そこにはいつも夜の麻雀の卓が、かこまれていた。

在留邦人のなかでも有名な人間で、財産もあり、妻子は日本へ置き、戦争中も麻雀ばかりして暮してきた男である。

彼は、その応揚な人物の前では、へり下つてかしこまつてはいたが、心のなかでは、この無為徒食して、かつ豊かな人物を憎んでいた。富裕な日常に対する嫉妬かもしれない。またひがみかもしれない。なんとなく、いまいましたのである。

一下級俸級生活者として別にたいした未来が待っているでもなく、一日一日を、ただあくせくと糊口のために疲れている人々の頭脳のなかには、この種の憎しみや、ねたみや、ひがみは、日常、うんと詰まっているのである。及び難いものへの、苛立ちも含まれていた。

しかし、その鬱憤はいつも勝負のときに、充分に仇が

討てた。豊かな実業家は、麻雀では彼の敵ではなかったのである。

「よし、あの男の処へ行つて、晩飯を食つた上、今夜もひとつ捲き上げてやるか！ その上、あわよくば、ウイスキーの一本ぐらいは手に入るのだ」。妻君への不満が、かような形式で、豊かな知人のうえにあらわれていくことには、彼は思い及ばない。もしも、思い及んだら、妙な気がするであらう。勇躍すると、彼は酔も手伝つて、目前に來た電車に軽々ととびのつた。

片手で電車の支柱に掴まり、雨洋傘をプラ下げた片腕を動かしつつ、巧みに片手探りに内ポケットから、ベベリーを一本ぬき出すと、口に衝え、片手のままで器用にマツチを摺って火をつけた。この一と吸いは、たとえばうもなくうまいのである。

こんな芸当も、毎日電車で通い馴れた男達の、いつか知らず身につけた軽業のような器用さで、この器用さは一朝一夕のわざではない。長年つとめ人として修練を積んだ結果である。こんな日常の体験も、苔のように身につけたまま、市民達は死んでゆくのであらう。悲しい現実の断面であり、生活の側面である。

ひと息に、ふかく腹の中まで喫い込んだ煙草のけむりを、こんどは味わいながら、ゆっくりと鼻から出した。

紫煙は湿った大氣のなかを後方へと消える。「畜生！

忌々しい女房だ」

金さえあつたら　ー。そうだ、金さえあつたら、誰が
あんな、うす汚ない女なんかのところへ帰つてやるもの
か！　不思議と赤ン坊のことが気にかからないのは、や
はり、しつかり者の細君に信頼をよせている腹の底を曝
露しているわけなのだが、一途に妻君の憎い良人の心
は、その本心でつねに細君に頼り甘えている自分自身の
本来の姿には気付いていない。

自分のあとを継いでゆく幼い者への関心は、すべての
生きもののうえにあるはずなのであるが、人間の父性の
愛は、他に適当な庇護者があり、これにしらずしらず依
頼している場合は、多くの場合おき忘れられているよう
である。

麻雀は、はたしてもう始まろうとしていた。側卓に並
べられてある夕飯の井めしを早速平らげ終ると、すぐ彼
もその座に加わった。

予算してきたとおり、ジョニイ・ウオーカーのすばら
しい一本があり、彼は牌をかきまわしながら、思わず舌
なめずりをした。

ふと、右手に掴まえた白牌を何気なしに眺めた時、彼
は突然、妻の白い寝顔を思い出した。へんな気がした。
今度は、四筒の丸い輪模様を見ると、また妻君のロイ
ドめがねの顔を思い出して舌打ちがでた。今夜に限って
なぜこのように妻のことばかりが聯想されるのであろう

―― 散々なぐり倒してきたあと味のわるさからくる良心の疼きが、さような聯想を起こさせるのか。

彼はずっと以前、やはり妻を散々なぐった末、遊び場所へ行ったところ、終夜、妻君の恨めしげな顔が顔前にチラついて、遊びも少しも面白くなく、泥のように酔ってそれをまざらわしたことをまで思い出した。

今度のは――と手を見ると、六隻の青い竹の模様の牌であり、それがまた妻の大切にしている絹の衣服の模様とそっくりであることに気づいて、なにか妙な気がしてきた。気味が悪くなった。

執念深いあいつのことだから、きっと、おれをいつまでも恨んでいるだろう――。畜生！自分が悪いくせに！大体女って、どうしてあんなに無反省な動物なんだろう――

結婚前には、あんなに、おとなしかった妻君が、結婚すると、途端に悍馬のように扱い難くなるのも、彼にとってはひとつの驚異であった。

女は、男と結婚して、男の秘密や弱点を、からだとも知ってしまったと、こうも強く、わがままになるものなのか――。

彼は女の不可解な心理におびえる時もあった。うるさいので下手に出れば出るほどつけ上って勝手なことをいい、自分本位の感情にのみこだわって、相手のかなしみや、よろこびなどに一向に無関心なエゴイズム！これ

が女の本体なのか。結婚の日時が過ぎるにしたがつて、幾何級数的に募る女のわがままや、自分勝手は、男にとつては、浅ましき以外のなにものでもない。

― おくらの頭では、それすら理解できないのだ。
・

ことに、子供を産むと別人のごとくに強くなり、良人を圧迫してはばからぬ世の女房というものに対して、ふだんから彼は一種の反感と嫌悪とをもっていた。

ほんとうに、女ってやつは、度し難い動物だ―。そう思うと、またまた気が立ってきて、彼は宙に浮ぶおくらの顔に向って、威勢よく心のなかでは、つばを吐きかけるのである。

すると、ふたたび憎々しさが、かき立てられ、満腹のあとの闘志がぐんぐん盛り上るのを感じた。― 調子がよいぞ！ 今夜は。うんと勝って、久しぶりで明晩は遊び場へでもゆくかな。そうしたら、どんなに痛快であろう！ 弱気な男の、強気な妻君に対する報復は、こんな形式でもなければ払えないのである。

醜い、めがね猿に似た近眼の、貧相なおくらの面影のかわりに、栄養のいい白熊を餅想させるポーランド女の脂肪の塊みたいな露わな肢態を、ウイスキーのまわった頭脳のなかに思い浮べると、なにか復讐に似た快感が出た。すると、ますます闘志満々としてきて、矢でも鉄砲でも持ってこい、という気になった。こやりと、ひと

り笑いすると、椅子にすわり直し、手に持った牌を、
いっそうつよく彼はにぎりしめるのである。 （一九四

八年）

つつじ

月光

美しき咎人

山路冬彦

略歴 本名・西出清三（ニシデ・キョゾー）。明治四二年生れ。青森県出身。

日本大学芸術学科創作部卒業。時の校長松原完、教師講師に直木三十五、芥川龍之介、横光利一などがあつた。直

木三十五を師とあおいで文学勉強。ドストイエフスキイ、モーパッサンなどを愛読。二九才で大学卒、一九三八年三十才でブラジルに移住。処女作「つつじ」が第一回「よみもの」賞（一九四九年）に第一席入賞。以来数々の作品を新聞・雑誌に発表した。パラナ州マリナガ市内でホテルを永年経営していたが、最近同市内に隠棲した。

つ　つ　じ

乳灰色の朝霧が、八月のうつすらとした快い軋寒さを含んで、風と戯れている山の麓に、今を盛りと一本のつつじが、孔雀のように枝を拡げて、花を咲かせている。風が強く吹きあげてきて、厚く澱んだ霧を捲きあげようとするが、深い眠りに沈んでいた丘の、着物のような霧は、執拗に土にまつわりついて離れようもしない。風が下から押して来ると上に登り、隙をみて背後から悠々と、その濃厚な絨毯の裾を降ろしてくる。風が下に追ってくる、嘲弄するようにねつとりとした抵抗をみせて登り、物憂さそうにくるくると、夜の奇怪な夢魔に微睡しながら施回しつつ踊っている。つつじは、その中で気持よさそうにうずくまっていて、冷い朝霧に酔い痴れて眠っている。

齒揚子をくわえたまま、朝霧の中に出てきた義夫は、ふと朝霧と風とつつじの戯れの中に、現在の自分というものを見出したように思った。追うものと、追われるものと、その中に捲れつつあるものと。

遠い因縁の中から発生した風は、現象的余勢に駆られ、偶然に夜の冷却の中から誕生した。まだ深い夜の迷

妄から醒めきらぬ霧に、齒向かっていこうとする、その中で、つつじは無数の紅い熟しきった女性の肢体のような感覚の花を支えている。義夫は、その三つの感覚の中に視線を落して、自分の前後の感情の残滓を洗い落とそうとしてたたずんでいた。そのつつじこそ唯一人彼を真に愛してくれた母の遺身なのであった。十数年前、わざわざ日本から大事に持って来て、永住の土地と思った北パラナの一角の、茶褐色の薬物のような馴染みのない土の中に、最大の愛をこめて母が植えつけた、唯一の母と故郷への慕わしいきずななのである。

風がひとしきり強く吹いてくると、重厚な霧は、白い糸滝のように分かれて、空中を泳いだ。三年間の日米戦争が、邦人社会に与えた影響は、その風のように強く、抵抗力のない人たちをあおりたてた。

遠距離なるが故に、正確を通信もなく、勿論視野も閉鎖されて、あらゆる虚妄な工作も、容易に肯定せねばならなかった無方針な、無統制な人たちはさんざんな個々の感情のなかに、朝霧のように、放慢にわかれてしまつて、疑惑と嫉妬と不安しゅんじゅんのなかに、離れはなれの臆病な無力なものとなりきっていた。

戦争は終った。暗い不気味な風が、どっと吹きあげてくると、霧は真申から二つに分れて、各々の道をたどつていった。微妙な分界が、奇怪な不透明な風によって、作られてしまったのである。そして、風の粘着性と飽満

性が、無抵抗な朝霧を、翻弄しはじめてから、はや二年の歳月は経過している。霧は自由な意思も、強力な観念も、理智的な判断も喪失して、風のまにまに空中にただよい、群れ離散しはは相争っていた。

花を無数に抱いたつつじは、両者のなかにはさまれて、自分の位置を定めるのに、苦心さんたんしていた。あらゆる世紀の風潮は、彼を一つのかいらいにしていた。風が吹きあれるたびごとに、霧とともに無意識に枝をふるわせ、ぴしぴしと、その感覚を打ち、神経をつつきあつた。

霧がふかくかぶさつてくると、静かに身をよこたえ、自然の恩恵にひたり、夜着のゆたかな温か味のなかに、あんのんに枝をおさめるのだった。時としては、不意に強襲する風に、きようがくと不安と絶望に、はげしくおのき、枝も葉も茎も垂れ折れなんとするものがあつたが、土のなかに深くおとした根の凝集力の為に、耐えていくのであった。風はしばらくたゆたいだした。ゆるやかに、もてあそぶように、たわむれるように流れて、霧を吹き、つつじを撫でた。

義夫は立ちあがって、歩をすすめた。朝の爽涼な官能的な愉悦が、自分の行く道を示しているように思った。昨夜の会合が、決定的なものを彼に与えているのではないだろうかと思った。彼が人々の前でいった言葉が、春

の樹木の枝々のように伸びてきた。日本人会の人々が、平べったい円盤のような顔に、泥のような眼のくぼみを見せて、聞いているのが眼にうかんできた。会場が、破かい期の永のように、不気味な静寂（しじま）の中に沈でんし、彼の言葉をろかしては、いりまめのようににはじき返していた。無気味な感情と痺れんした智能のはらん。

「戦争は破かいであります、新しい建設の前提としての、それは擬装でなければなりません。日本が、世界第二次戦争に参加したのは、全世界的平和と、統一の建設のためでありました。聖戦というものが、なんであるか、

我々は明瞭に、把握せねばなりません。聖戦の意味を理解すると、まだ我々が勝戦だ、敗戦だと言っている愚かを、知ることができません。聖戦に勝敗の意味は含まれていないのです。なぜならば、戦争が目的ではないからです」

人々の顔がちりぢりに散った。不可解な表情、けいべつ、

ちようろう、ふんど、あらゆる表情の電波が、人々の顔を傷つけ、しわを寄せていた。たくさんな泡沫が、部屋のなかで湧きたってきた。義夫は、自分ひとり、感情のゆらぎに耽っているのではないかと、思った。それで

も、彼は惰性に身をまかせて、自分の思考を、鋏でほりだすように、永いあいだの思想の細胞を、一つ一つ検査するようになした。空虚な洞穴の中で、しゃべっているように。そして、自分の思想と生活が、人々のなかで、だ円形になっていくのを知った。人々のざくろのような口が、理解も、吸収力も、妥協性もなく、腐った水の中に喘ぐ鮎のようにひらいていた。義夫は、いたずらに観念をもてあそんでいることの無駄を知って、月光に照らしだされた白い倉庫のかべのように、黙りこんでしまったことを、思い返していた。

朝の野に出た義夫は、コーヒーの採取に、全身をなげだすように働いた。彼の労働力は、思想との一致点を見出したかのように、彼の内部の豊穡な感情をゆるがせてきた。コーヒー樹のしたの果実をかきあつめる手にまだ冷めたい朝霧の余感が、腕をとおし、彼の肉体を労働の快味にひきずりこんでいく。そして、あらゆるできごとが、断片的に連続して、彼の脳裡をかすめとおっている。

そのうちに、強いコーヒーの褐色の芳香が、ふと、義夫の立体的官能をあおって、いろいろな雑念をはしらせてきた。永い間別れている妻トミエの若々しいかれんな姿。彼の愛情に、犬のようにまつわりついてくる二人の幼児。執拗な憎悪と反感をもって、迫ってくる弟夫婦。そして、彼らにそそのかされている父としゅうとの顔。

ほおをなで、彼の肢体にふれてくるコーヒーの木々のなかに、それらの思索の要素がつつまれているように、思われてならなかった。

そして、彼の内憤に向かつて、あらゆるふんいきの圧迫がふつとうしてくるように思われた。

義夫は、自分自身の内憤を、うち払おうと思って、仕事から仕事へと、その日の冷氣のなかで働きつづけた。日はようしやなくすぎて、太陽は中空にのぼり、小春びよりのような暖かさで、さんさんとふりそそいできた。コーヒーのうつそうとした樹木は、大きな団塊となり、自然のいぶきのなかにゆれ動いていた。あくまでも正確に、縦隊に植えられ、まるで大きな緑の城壁のような、コーヒー畑のなかで義夫は自分の孤独をつくづくと感じた。それは、風と霧の中のつつじのような孤独である。

自分の世界情勢に対する意見が、植民者に対立するもののような孤独である。それ故に、しゅうとの怒りを買

い、無理やりにつれ去られた妻との別離が、なおさら彼を孤独の境地においやっているのではないだろうか。

深刻な妻への愛着は、あらゆる感情の頂点であった。しゅうとのために連れていかれた妻の、哀願する白い顔が、沈黙と静寂のなかに沈んでいる緑壁のなかに、額ぶちのように張りつけられて、なおさら、彼の孤独感

を深めるのだった。

複雑な無数の思索のなかに、自分の呼吸もせばめられたように、感じていた義夫は働く手を、ふと、なにげなく休めた時、強烈な甘い空気の断層が、突然彼をおそってきたように思った。彼が朝から、潜在的に予測し、期待していたものが、出現してくるという、無意識な予感がおそってきた。彼は必然的に頭をもたげた。すると、今まで考えていた妻の姿が、四、五本前のコーヒーの木かげから幻想的な映像のようにあらわれた。

彼は、ぐんと息をのんだ。とっさに自分の感動が、なにかしら妙な弱点を、妻にさらけだすような負い目を感じたからである。それは、半か年も別れている妻に対する弱味を見せまいとする、男の浅はかな肯定意識だった。

「あなた」

針金を刺すような声で、妻は叫んだ。その甲高い声は、

義夫の神経を過去の肉体的生活の記憶で震動させた。

「なんだ、お前か」

と、感情をおし殺した鈍重なしやがれた声を出して答えた。そして、二人は感情の抑圧の重量にひしがれて、数分のあいだおし黙った。それは、夜の港に碇泊した二つの人気のない汽船のような感じだった。が、それは、沈黙の語る強大な雄弁でなくて、なんであろう。

義夫は、自分の肉情が、突風のごとき憤怒となって、全身の血を擾乱するのを感じた。それは、すべての障壁も防塞も、むざんに粉碎しないではない狂暴な肉体の本能なのだった。

憤焰のおきをかきたてた彼の眼光が、ぎらぎらと飢えた秃鷹のように輝くと、それに応じたトミエの肢体は、情熱的な柔軟な海綿のような蠱惑をもって迫ってきた。半か年も別れていた彼らの情欲は、まるで皮膚の一本一本の毛が、線香のように燃えてきて、骨の髄まで焼きただらしてきた。

義夫は、傍らのコーヒーの末の下の寝台のような隙間のなかに、妻のうるわしい滴る露のような身体をさらっていった。

それから二人は、肉体の弛緩と、官能の飽和状態のなかで、心のゆくまで語りあつた。今や二人の思考は合致して、あらゆる会話は、すべて社会的紛擾を超越した彼らの家族四人の、現在と将来のことに移っていった。義夫の自分を取りまくふんいきに対するふんまんは、奇怪な動物のような姿に変わっていった。妻の従順さと、抑制されていた情念の奔出が、彼の固執していた思惑を、わけもなく解体してしまった。あらゆる思想も主義も、愛情の前にはひとたまりもなかった。義夫の包蔵する思想は、まだ人々の容れ得ざるものがあるということが、彼に明瞭にわかってきた。まだ時代は混沌としている。

人々の智能も、情操も、戦争のためにもみくちやにされてしまっているのである。

「あなた、妾はもう何もいりません。あなたと共に、子供をつれて、どこへでもまいります。あの土地も、みんな弟さんにあげなさい。あんなものが、何になりますか。」

あれがあつたといつて、一家族の幸福のかてにはなりません。必ず私達二人で、もつと立派なものを、作りあげる事ができるのです。二人の子供の将来のためにも、その方が必ずよいにちがいありません。ごたごたした家族のなかで、どうして子供の心をまつすぐに、育ていくことができましょう。自分たちだけでさえ、どうにもならないではありませんか。先刻も、家の様子をのぞいてみましたら、安子さんが、やたらに、忠夫を叩いていました。子供ですもの、どんないたずらをするか、わかりませんが、あんなに叩かなくてもよいと思うほど、叩いているのです。あれをみて、妾も決心したのです。それで、あなたをさがしにここまできました。妾は、あなたをあくまで信じています。唯妾一人は、あなたの高遠な理想を、信じています。それは、必ず酬いられる時があります。が、時機を得たねばなりません。二人で、遠いところへ行つて、待っていました。ねえ」

妻の一言一句は、義夫の心のおく底まで、えぐつていった。半年間の離別が、こんなにまで妻の心を進歩さ

せたのだろうか。彼女の深い理解と、洞察は、義夫を驚嘆させた。痛恨と怨嗟の別離は、かえって見事な収穫をあげていた。義夫は、自分の感情が、ピアノの鍵盤のうにふるえ、高らかなリズムを奏でるように感じた。

「わかつている。俺は、そうしなければならぬものと思っていた。俺は、あまりにも現在の状態にこうでいしすぎていた。それがわかつていても、お前のいないことが、決心させてくれなかった。子供のためにも、新しい土地と、新しい環境が必要だ。トミエ、お前はよくそこまで考えてくれた。俺もお前たちと、新しい土地に出かけよう」

義夫は、深く決心して、昂然として、新鮮な、清浄な大気を、胸いっぱい吸いこむのだった。すると、眼前に展開している深緑の豪華な緞帳のような、一万本のコーヒー園が、あまりにも彼の野心の前には、脆弱な、過少なものに思えてきた。

夫婦は、いろいろ家を出るための相談をして別れていた。

義夫には、夢にも思わなかった妻の言葉が、彼の決意を固めさせ、若人のように胸をはずませるのを覚えた。彼は、今ごろ丁度父も弟夫婦も、家にいないことを知っていたので、すぐにも、必要なものをまとめて、子供をつれだすことができるものと思った。家を出る以上

もはや何事も言いたくはなかった。たとえ、彼が不意に家出をしたとて、誰もびつぐりするものはあるまい。そのような彼らは仕向けてきたのだから。

義夫は、コーヒー園を横切って、家の方に向かった。家は、コーヒー園の傾斜の裾の泉に近いところにあるので、彼の働いているところから、かなり距離があった。

コーヒーの横木をとおして見える低地の風景は、朝霧にあらわれた新鮮さと、清澄さで、こころよく彼の決意を祝福しているように思われた。一步一步が、彼の新生活に近づく過程の歩調であると思うと、何かしら、軽い若々しい足取りになっていくのを覚えた。彼が、コーヒー園のなかから、家に通ずる道に出たとき、低いところにくずくまるように建てられた、粗末な赤い屋根瓦の家がみえ、丁度何事か話している四、五人の青年が入口に立っていた。彼は、青年会長の弟の元へ、運動会のことで、青年たちが来ているのだろうと思った。彼は、はやまりすぎた青年会の計画を、昨夜の日本人会の会合の場所です話したことを思い出した。すると彼は、何事についても、

兄に楯ついてくる弟の態度が、いやに心をあおってくるのを知っても、反感と嫌悪の情を、抑えることができなかった。

だらだら坂になっているので、彼の姿はすぐ下の者た

ちにわかったようだった。四、五人の姿に動揺がおこったと思うと、弟に別れた青年たちは、彼の方へむかつて、

帰り道を登ってきた。

「今日は。お働きですね。相変ず、お精出ますね。今年のコーヒーの実りが、上々ですから、さぞお楽しみでしょう」

と、青年たちは、ていねいな挨拶をした。

「いや、大したことありませんよ。値が好いからいいものの、それでなければ、大した金高にはならないのですからね。今年のコーヒーの景気は、戦後の影響としては、

予想外のものですからね。でも、あなた方も青年会の方で、いろいろ働いてもらってお世話さまですね。まあ、しつかりやってください」

と、義夫は、おせいじのつもりで彼らに話すと、三人の青年の顔に、なにか奇妙な、皮肉な微笑が動いたように思えた。

「それじゃ、まあ、失礼します」

と、青年たちと別れたものの、義夫は、何かしら、心の浮かぬ、嫌な破れない硝子玉のようなものが胸につかえてきたのを覚えた。

義夫は、弟の義助が肉身の弟でありながら、彼の人格を全的に尊重することができないため、義助が兄の後

をうけついで、青年会長に就任したことを、ひそかにうれえていたのだった。しかも、終戦後の伯国邦人社会の混乱は、何人をしても收拾することのできない状態にあるのではないか。ある処では、相互の思想葛藤のため、暗殺行為までおこった極端な磁石の針のような時代である。

あらゆる思想も、主義も、正邪のきわめをつけることのできない混沌としたもつれた糸のような世の中である。

その時、弟のような人格的に無価値な、無能な人間を、指導者とすることは、はなはだしく危険なものであると考えていた。それがために、昨夜の日本人会の集会でも、義夫は、自分の良心的な立場から、弟の計画に反対を唱えたのであった。運動会も結構だ。けれど、終戦二年しても、まだ邦人社会は動揺をみせ、それにつれて、伯国の官憲も神経を尖らせている最中で、大げさなことをするのは、つつしまなければならないだろう。戦争中は相互に苦しんできた。相互にきゆうくつな、気づまりな思いをしてきた。それかといって、手綱をはなれた奔馬になるのは、間違っているのではないだろうか。まだまだ現在の趨勢を達観する必要があるにある。彼は、そう思って、弟の行き過ぎた行動を制肘し、阻止しようとして、昨夜は、自分の思想を述べながら、日頃にもなく、雄弁をふるったのだった。

三人の青年が登り坂を上っていく後ろ姿を見、家の中に姿を消してしまった弟のことを考えると、義夫は、心の中に何事も起こらねばよいがと、祈るような、切ない気特にかかる今の自分の心を、叱るように励ますのだった。

彼としては、彼の昨晚の言葉が、青年会の人々には、もはや達しているものと、信じざるを得なかったのである。

すれば、青年会の幹部連中が、そのことで義助をおとずれてきたのは、当然なことだとしか考えられなかった。今の今さき、妻と共に、自分達の将来のことを考え、家族と離れて独立すべく、ひそかに家を出て、新しい希望の土地に、おもむこうとしている矢先、何事も、そのさしさわりになるようなことが、起こらねばよいがとは、彼でなくとも、当然考え、祈るような気持ちになるに違いないのである。

家の前の、小さな申しわけのような花だんの草花が、わずかな花を咲かせて、淋しいあいきようをたたえている。ちょうど余り花のない時期なので、端の方に、せんさいないじけきったような淡緑の松葉ぼたんの花が、寂しい地肌の濃い、禿げた花だんの中で、力なくうなだれている。義夫は花だんの中に足をふみ入れて、三寸余り伸びて、黄色い花をいただいている、傲然とした雑草のピッコンを五、六本むしりとった。

きめのこまかい八月の空は、一点の雲もなく晴れ晴れと、澄みとおったところよいブラジルの秋の気配をただよわせていた。そして、きれいな暗緑色のくしけずられたようなコーヒー園の傾斜が、青空の彼方まで、まるで愛情のつながりで結ばれているように続いていた。

ちらりと外の景色に目をうつし、あらゆる雑念をはらい落としながら、義夫は家の中にはいつていった。

家の中は、人気もないように、すさまじい程の液体のような沈黙にくろずんでいた。板壁が不気味にのしかかってくる、有毒なガスを呼吸して喘いでいるように、感じられた。

彼はサロンから、自分の部屋に入っていった。そして、

一わたり見渡して、手まわりの物をかたづけにかかった。

子供たちの姿はみえなかったが、そこらに遊んでいることは、わかり切っている、別段すぐに呼ぶことはな いと思つて、仕事にかかった。数分ののち、ふと義夫は、うしろに人の気配を感じた。義夫は、それが弟であることは、予知していたこととて、別段ふりかえってみようともしなかった。が、弟が、相当こうふんしているらしいことは、部屋の中に充満している緊張した空気の振動で、感じる事ができた。

「兄さん。兄さんに少し、話したいことがあるのだが」

と弟の熱ぽいふるえた声が、時ならぬ汽笛のようにひびいた。

「何だね。俺に用があるというのは」

と、義夫は、心の中に、少しも動揺のおこらない、落ちついた自分の氣特に、不思議なほど、英雄的な感動をおぼえて答えた。

「兄さんは、昨夜、日本人会の席上で、私を侮辱したそうですね」

と、弟の声は、突撃にうつる兵士のように緊張していた。

「侮辱！ 侮辱だって！ 何だいそれは。いやに極端なことばをつかうじゃないか」

「侮辱です。侮辱にちがいありません。青年会の計画をけなすのは、僕を侮辱することじゃありませんか」

「青年会のことは、一個人の私事ではない。だから、青年会のことを言ったからとて、お前を侮辱することにはならん」

「いや侮辱です。青年会長が、自分の弟であることを知っていないながら、青年会の計画を罵倒するのは、弟を罵倒することに、なりはしませんか」

義助のことばは、さぼてんのように、とげとげしい尖鋭な、色彩のない微妙な焦燥をくわえてきた。

義夫は、日頃の弟の態度を考えると、自分の今までよくせいしていた感情が、製材所の鋭利をのこぎりの齒の

ように、情ようしやもない強烈な憤怒にかわっていくのを感じた。

彼ら兄弟は、幼い時から、火と水のように、仲のわるい兄弟であつた。性格からして、これが兄弟かと思われ、るほど、正反対の気質で、ことごとくに衝突していたのであつたが、どちらかというところ、他人の感情にこうでいる兄の方が、常に弱味になりがちであつた。そして、弟が嫁をむかえてからというものは、夫婦ともども、彼ら夫婦に対する悪感情をつのらせてきていた。そして、弟夫婦が、父の土地財産を独占しようとする、野心を露骨に示してきた。

兄の正義感、家庭ふん争への嫌悪、世間へのおもわく、

父の感情を尊重する気持ち、永い間、義夫を牛のように黙し耐えさせてきていたのであつたが、現在、妻と子供とともに、新しい土地に、すべてを捨てて進もうと考へた決意がついてみると、弟の野望が、余りにも醜悪な呪うべきものにさえみえてきたのであつた。

口をとがらして、青年会のことを、口実にしながら、自分への憎悪反感を、噴霧器のように吐き出している弟の顔を横目で一瞥した時、海水のなかにはきだされた蛸の黒い墨のような憎悪が、烈しい憤怒となって、義夫をおそつてきた。

丁安、義夫は一つの瘤となつてもつれている綱を解い

ていたが、怒りにまかせ、力をこめて引っ張っていた綱が、不意に放れてしまつて、力余つて義夫の右腕は義助の胸元へと、猛烈にのびていった。義助は、はつと思つて、伸びきつた兄の右腕を無意識にささえ止めた。

「何をするのです、兄さんは」

とおどろいた弟は、まるで自分の体に打撃を受けたような衝動を感じて叫んだ。

「なんだと」

兄は、振りかえつて、そこに血走つた弟の顔をみると、

矢にわに、荒熊のように、弟の体軀めがけておそいかかった。二つの車輪が衝突したように、二つの肉体は、もろくも平均をうしなつて、土間に、屋内を振動させてころがった。そして、両方の肉体から、凝固した感情をはきだした全身のうなりが、ふいごから出た空気のように、口を通してきこえてきた。

おそいかかった勢いでたおれた兄は、力があまり、土間にたおれた時の反動が強められて、倒れた姿勢がおさまらずに、もう一度、反動をくつて、不利な姿勢にころげてしまった。弟はくるりと身をおこすと、忽ち、兄の体に馬乗りになつて、一撃、二撃を加えた。下になつた兄も、二撃をくらつたが、すぐに自分の体勢を、元どうりにかえすことができたので、第三撃をくわえてくる弟の右腕を、下から力一ばい突きはねた。同時に、右腕

は弟の首を、猛烈にだきこんで、身を振るとみるや、たくみに身を返して、横ずさりに身をおこしてきた。

先刻から奥の部屋でじつと様子をうかがっていた義助の妻安子は、兄のするどい声がきこえて、にぷい重そうな土の音がした時、何事かおこったことを知って、かけよってきた。すると、兄が身を横ずさりにおきて弟をおさえようとするとところだった。安子の加虐性の陰惨な目は、青い火花が発するように輝いて、二人の巨大な男の肉鬨に釘づけにされた。そして、やにわに、身をもたげかけた兄の横腹を力いっぱい蹴りあげた。

横あいからの不意の襲撃に、横腹の痛みをおさえ、ふたたびのしかかってきた弟の身体をささえながら、襲撃者を見あげた兄の目に、傲然と、鬼子母神のような安子の、惨忍に燃えあがる姿が映じた。

彼ら兄弟は、性格において相違があるように、体格においても格段の差があった。兄義夫の骨格は、弟に比較して、角力あがりのような巨大な岩じょうな体躯だった。

それに対して弟は、螳螂の斧といった形である。だから、同じ真剣味のなかにも、充分な余裕を多分に持っていた。

立ちあがって鉄拳をふった時に、兄の義夫の頭には、ベートーベンのパシヨネート・ソナタの一節の、雄大な豪

放な最も力も幅もある二符調が、たん、たん、とおたまじやくしとなつて、うかんできているのであった。

その幅のある余裕も、憎悪のため、野獣のようになった安子の顔を見た時、かえってその闘争心が、いやがうえにも昂められていった。

そして、圧倒するような猛烈ないきおいで攻めかかり、弟の首を両手でレめあげると、ぐいぐいとサロンの方におしまくっていった。そして彼は自分自身の中に、かつて感じたことのない狂暴な発作的な残忍性がわきあがってくるのを知った。

二人の肉体は、サロンの板かべにどんとぶつかった。そして、義夫の身体は、弟のうえにのしかかるようにおおいかぶさっていった。すると彼は眼前に、一つのものが、音をたてて落ち、ぴかぴかすると、二本の鼻孔から肺のおく底ふかくまで、ずしんと冷い固い鉄の棒がさしこまれたような痛みを感じた。

母！ 母だ。

それは、二人の肉体の震動で、壁からおちてきた母の写真を入れた額縁であった。義夫は、はっとして、思わずしめていた手の力がゆるみ、無意識におきあがっていた。

彼の下陰から、じかじかと熱い火花が発したかと思うと、白い涙がわき、大粒の珠となって、両頬を強烈な呵責貴の念となって流れていった。母の冷たい淋しい顔

が、

額縁のなかから、過去の映像のなかに、逆に思い出をくりひろげていった。義夫は、凝然と氷柱のように突立っていた。先の猛烈な関心に気圧され、よろめいてたちあがった弟は、兄が母の写真をだき、さめざめと両頬を涙でぬらしている姿をみて、さすがに、ざんきの感動で、立ちすくんでしまった。そして、全身に冷たい風が通過したような気持ちになって、兄の姿を、うち望んでいた。

「義助、この母の写真は、俺がもらっていく。と、言ってもわからないだろうが、俺は今日から、この家を出ていくことにした」

弟の顔には、反感とも、同情ともつかない、辛い表情がうかんだ。

「そのわけは、言わなくても、わかっているだろうし、俺とても、何もいいたくはないが、決してお前をわる者にするのではない。俺は、自分の思想の前途に、まだ未知を、不分明なものがあるのがわかってきた。それを解決するために、新しい土地にむかい、新しい建設をしたような、漠然とした気持ちからなのだ。それは、家庭の不和や、社会的萬藤や、人種的な反目などで解決されない世界的な問題なのだ。世界は、今新しい一つの基礎の上に立とうとしている。それは、何であるか、わからないが、その漠然としたもののなかに、俺は入っていき

いと思うのだ。だから、けっして、お前たち故に、家を出て行くのではないのだから、そのことだけは、得心してもらいたいと思う」

義夫は、それだけのことを言い終わると、自分の部屋にはいつて、ふたたび家を出る準備をした。

今や、彼の心には、何物もなかった。自分の一家が新しい発足をするということは、何かしら、世界の革新に一面をもたらししていくことだと思えた。そして、彼自身の思想の体系は、現在の世界が歩みよりつつある一点に、自然に時を同うして達していくものと信じられるようになった。世界は今、その擬態を脱しようとしているのである。そして、自分の不具の姿を明瞭に判断しようとしつつある。

義夫は、かんたんに出じたくを終えたと、外に出て、二人の子供を呼んだ。そして、身なりを整えてやると、父親に、彼の家出の事情を、よく呑みこまずように、弟に頼んで家を出ていった。兄の方に小さな荷物を持たせ、自分は二つのトランクをかかえて入口を出た時、彼は、大事なものを忘れていたことを知った。

荷物をおき、急いで泉のふちにかけおりていった。泉のふちには、朝霧にぬれて、湿気を持ち、今は十分に太陽の光線に全身を浴しているつつじが、真赤な光を満身にかかえていた。

彼は、つつじに近づいていった。

前かがみに伏しながら、つつじの根本を見た。そこには、大分前に圧し枝をしておいた一本の枝が、賂本を煉瓦に伏せられて、先の方をもたげていた。

彼は、そつと煉瓦をとった。そして、静かに枝の横の土をおこした。「しめた」快哉の声が、彼の口からほとばしった。つつじは、彼の希望にむくいたかのように、白い可憐な根をおろしていた。

やがて、弟の方に大事なつつじを持たせた彼ら父子の姿が、彼らを待っているであろう、妻のいる町にむかつて行つた。

(一九四九年)

月 光

それは月の冴えた夜であつた。一人のみすばらしい年老いた日本人が、ソロカバーナ線に近いある街道を、疲れきつた様子で歩いていた。彼は肩に振り分けた荷物を担いでいた。それは後の方にはブリキ板を丸めて、その中に色々な小さな道具を入れ、前には古びたうす黒く

なっている白い包に、自分の少しの着換え等を入れたものであった。帽子は縁も切れていて、案山子の着るもののようによれよれになり、服は上も下も継当だらけになっていた。

月光は白銀の大きな棉雪を、音もなく静かにさんさんと降らしているように照り映え、街道は亜鉛板のように反映していた。所々立樹やら、木株がある下は、どす黒い黒炭を厚くとかしたように浮きたった暗影をえぐり、月光に照った道の白さと、鋭い神経を刺すような区割を作っていた。

広い一望の中にあるサンパウロの境野は、うす雪におおわれたような全体的白さに伸びていて、肌をさす冷寒の気の中に、膨大な悠長な寂寞の中に沈んでいた。豊満な大陸の隆起が、地平線の彼方まで二重にも三重にも重なり合ってその全面を横え、更に深い白さにその腹面を晒らして、巨大な鯨の横たわっているように見えた。街道の右手は蕭（しよう）条としたミーリオ（とうもろこし）畑が続いていた。実りきって先をへし折られた無数のミーリオが、上に向った傾斜面から、黒壁のようなマツト（森）に続く畑の中に、うらぶれて千切れ千切れの長細い姿を、互いにうちつけ合せ乍ら、穂先鋭くつきたち、僅かな風に渴いた貪慾なすがれた音をたてていた。

不途、老人は遠くの丸いなめらかな丘陵の裾に、無数

の小さな花嫁の衣裳の裾の銀糸のような、温い美しい町の灯があるのを見出した。そして老人は大きな溜息を無意識に吐き出したのだった。

彼は疲れた足をひきずり、道の傍の草叢の中のトッコの所に来て、その町の灯がよく見えるのを確かめると、安心したようにトッコ（切り株）の上に腰を屈めた。そして又大きな溜息をつくと肩の荷を地上に降し、ポケットの中からオリンダの箱を出して、イスケイロ（ライター）に困難しながら火を点じ、煙草に火を付けると、最初の一服を腹の底まで、大きなゆすぶりをして吸い込んだ。

一息で充分に腹の中まで達したように、老人は肩をすぼめつつ、月の光に灰汁をとかしたように煙を吐き出すと、その夜一夜の宿を見出し得たような安堵を、深々と感じた。老人はその夜は、不案内な土地で、その夜の安眠すべき宿を見つけることができないのかと、今の今ままで心配しながら幅広い街道を満面に下部の方を鼠に噛られた白い煎餅のような月に照らされながら、痛む足を引き摺って、歩いて来たのであった。

トッコに休みながら、一息二息とゆっくり煙草を吹かしている中に、老人は四十年前、廿才の若さで日本からブラジルに渡って来てからの苦しい烈しかった生活の重荷を、算術に悩まされる小学生のように考えた。

彼を合せて六人の家族の団欒も、積もり積る労苦と、

生活の激変や風土病に、齒が欠けるように減って行き、ブラジルでもらった妻や、そして二人の子供さえも水に凌われたように失ってしまうと、五年程前に、唯一人きりになった孤独の自分を見出したのだった。

それでも四十年のブラジルでの生活は、彼の頭から、想像や空想や思考や欲望を奪い去り、単調と平凡と無感動さを植えつけて、そんな変化も、別に非常な苦痛や悲嘆を与えなかった。そして、彼は一人きりになると昔からの指の器用さを利用して、一寸した小道具を買い込むと、サンパウロ州の町々を足に委せて歩き、バケツや傘や小さな台所用品の修繕を家々に求め乍ら、奥地から唯一度サンパウロの市を見たさに辿って来たのであった。

地理の知識さえ充分にない老人は、人から人の口によって、僅かずつ、稼ぎながら、目的地に近ずいて行こうとしていた。だが、一週間程前から、今までにない身体の変調を感じていて、今そこで遠くに町の灯を見た時の、胸の中の嬉しさは、老人の生活の中にかつて無かった位であった。

サンパウロ市！それは彼の惨めな長い生活が憧憬（あこが）れさしていたもので、ただその四囲の耕地を渡り歩いて見たこともない市―彼は老後の最後の楽しみに、一眼それを見たかった。夕方出た町の人の口によると、もう五十軒余でそこに着くことができる。そう思うと老人は最後の力を出して煙草を捨て、再び荷を振分けに担

いで歩きだした。

街道は老人の気を焦立せあざけるように、くねくねと山際を曲っていて、遠くの町の灯は隠れたり現われたりしていた。

老人の、僅かばかりの人の家内道具の修繕から得る金では、汽車に乗って行く丈もできまいので、早や二カ月も町から町へと辿って来ていたのであったが、日増しにまさる肉体の苦悩は、自分の寿命が余り長くないことを感じさせていた。

近頃は少しの食事も禄にとれないほどに、胃や腸の激痛を覚え、身体の疲労は少しのハンダ附けでさえも指の自由が利かなくなることさえもあった。それがために、その夕方過ぎて来た町で、女の日傘を修繕している時、かえって指の利かなかったために、折角の傘の骨を折ってしまい、そのパトロアにがなられてしまったほどであった。そして自分の不甲斐なさに、無性に涙が出てほろほろ涙を流して泣いてしまったので、流石のパトロアも顔を背向けて同情したのであった。

それを思うと、老人はこれから先の旅が思いやられて、次の町で、少し稼げたら汽車に乗って聖市まで行くうと思ってみた。

老人が気の急くままに歩いている内に、先刻からの胃の苦みが段々と増してきて、とても耐えられそうにも

なくってきた。

そして、その胃の激痛は全身を痙攣（けいれん）させるほどになってきて、時々老人は立止って、その胃の苦痛を制（おさ）えねばならなくなった。

それはまるで、全身の臓物を大の鉄棒で搔き廻すように激しくなってきた、苦い渋い唾液が口の端から、たらたら伸びて流れてきた。老人は身体をへし曲げて苦痛をこらえていた。

どこからともなく、端々とした男声の歌が、搔き鳴らすギターの響きとともに、ブラジル特有の奥地の俗謡を伝えてきた。それは彼がまだ妻や子も生存していた時に、隣りのバイヤーノが常に歌っていた歌であった。

それを耳にした老人は、烈しい胃の苦痛に混って、遠い楽しかった追憶の苦痛が浮き立ってきて、険の奥から熱い熱い涙が針でちくちくさすように流れてくるのを知った。老人は道端に屈んでしまつて、横腹をおさえ、その声のする彼方を見やったが、森や低みの草薺のために、どこからくるのか、あやめもつかなかった。老人はその方向が分つたら、そこまでも辿りつきたいと思つたのだが、あたりの山の傾斜具合や、不毛地の荒々しい地肌の困難な細道を思うと、かえって街道の平坦な道を選んで遠くとも町まで出る方がいいと考えた。

その夜に限って、なぜか一台の荷物自動車も通らなかつたもちろん通つても、近題は夜には彼の合図に止つて

くれるものもないのは分りきっていることだったが、そうして苦痛が烈しくなってくると、慰めだけにでも自動車の灯を見たかった。

それでも道に坐って、その嫋々たる哀歌を聞いている間に、彼の苦痛は自然に治ってきた。それは、音楽が老人の思い出を誘い出して、心の苦痛と身の苦痛を癒したようなものであった。老人は再び起き上った。

そしてまたもや町の灯の隠見するのを眺めながら街道を足早に歩いて行った。

夜の灯は悪魔のように輝き、近くて遠いものだ。老人は大分歩いたつもりなのに、町の灯は彼に近づいて来なかった。老人は少し焦燥を感じた。

老人の右手は、こそこそと自らの身体をま探った。彼は自分の焦慮が意識されて、また更に烈しい焦燥を感じるのだった。そして何かせずにはいられないように思われて、無意識の間に煙草を取り出して火を点じていた。それは先程より美味しくはなかった。煙草の煙は口の端にひっ掛るほどいがらばく、老人はまるで河蒸気の煙突のように、口の先でぽつぽつと煙を吐いていた。眼前の焦茶色の煙草の火が明滅する度に、老人は奇妙な幻影を見るように覚えた。

平坦だった道が急角度に曲ると、前面に傾斜の烈しい坂が不意に現れた。老人は驚いたように仰向いた。

坂道は月光にまともに照り映えて吹雪する白滝のよう

に、老人を嘲笑し脅すようであつた。すると老人はまたもや烈しい苦痛が襲つて来ることを知つた。それは来る前から、以前より激烈な急激なものであることが予断され、老人は恐怖にわななき慄えた。

きりきり錐を揉み込みさし通すように、下腹が痛んでくると、腹が撚れ切るような熱い痛苦が襲つてきた。

そして全身がくらくらと前のめりにのめって行つた。肩の荷は振り落されて、地下に無惨にうち開いた。

もう駄目だ、と老人は思つた。老人はもうどうするともできないことを知つた。すると四十年のブラジルでの単調な平凡な生活の中から、僅かばかり忘れていた青年期の日本の姿が、搔きむしられた子供の絵本のように、夢とも現つともつかない色彩で現われてきた。それもまるで、ボルソ（手提げ）の中に積り残っていた塵糞のように投げ捨てられてしまうと、死んだ彼の両親や兄妹や、まだ映像の強い妻子の姿が、白い墓石でも見るように、蒙昧と空中にふやけて見えてきた。それらの無数の形のない姿が、白々と月光に夜光虫のように輝きながら、あちらからも、こちらからも踊り狂つて現われ、大きくなったり小さくなったり、横になったり倒（さか）さにたったり歪つになったりして、老人の眼前を蠢動して廻つた。

老人は一人一人のその名を呼んだ。

握りしめるように掴んだ。色彩も形も分らない、奇怪

な、作り損（そこな）った豆腐のような姿が、それでも老人に答えるように震動していた。

老人の肉体の苦痛はさらに激しくなってきた、彼の全身を火の車のようにしてしまった。老人は底のない不定な幻影を追って唯その頭脳丈（だけ）が感覚のないものとなつて、空中に浮いているように思った。その苦痛の火の車となつた一塊の肉むらは、頭脳とは別になつて地上に醜くミミズのようにのたうちまわっていた。老人はそれでも、前面の坂を這いつくばいながら攀（よ）じり登って行つた。

老人は自身が無数の幻影の中を泳いでいるのに夢中になつていて、その身体が前倒れに這いつづけて行くのを知らなかつた。老人の今までの見知つた無数の人間が、憐れむように励ますように、老人の感覚を摺つて行つた。

それでも、それが老人の最後の努力のように、その身体が急坂の頂きまで来ると、老人は、”あつ”と叫んで立ち上つた。

”サンパウロだ”

一面の灯の海、金砂をぶちまいたように、眼を射してくる幾百万とも知れない灯が、老人の眼下に、まるで空の銀河を見るように敷きつめられ、楽しく美しく、可憐にまたたいていた。

その灯を通して巨大な幾百もの高樓が空中を摩してど

す黒く聳え、人間の叫喚が響き、車や物の動きが軋みながら金砂の中をうごめいていた。

” ああ、サンパウロだ。サンパウロだ ”

と老人は両手を挙げて呼ぶと、そのまま、坂の頂きの中央にうち倒れた。

それから一時間後、一台の荷物自動車がそこを通りかかって道の中央に、ボロ屑のように倒れている人の姿を見出して、急停車したのだった。

車が止りきると、前灯が消え、一人の運転手が扉を開けて降りて来た。

月は、今や空中に傲然と登り切って、その王座を占め燦々（さん／＼）と細雪のように光を放っていた。そしてあたりの星

屑を掃き浄めた歓喜にふるえながら、地上のボロ屑のように折れ曲った老人の死体を、虚々（そらぞら）しい無意味な冷たい色に染めあげて、永劫の生を唱っていた。

運転手はちよつと老人の姿に手をかけたが、それがまったく息絶えているのを知ると、前面に見えるソロカバ―ナ線の寒村の細々とした灯を見やりながら、
「ちいっ」と地上に唾を吐いた。

月光は一瞬きらつと輝いた。

美しき咎人

それは豪華けんらんなる舞踏会の日でした。

サンパウロの町は、よくその地勢と気候の工合で霧が降り、全部がすつぽりと薄闇の中に包まれてしまうことがあります。一九三X年のある夜その日も夕方ちかくから密雲が空を蔽いはじめますと、夜の気配、ガローア（霧雨）のために漆窯の艶をましてきました。道路はまったく水浴から上った処女の肌のようにきめやかに光っていて、電灯の光線が金メッキでもしたようにとけこんでいたのです。わたくし達はその道路を、青春のロマンチックな感じきに胸震わせながら、領事館の自動車でその夜の舞踊場へ向ったのです。

そのころ、わたくしは駆け出しの外交官で、ブラジル・サンパウロの領事館が初任当時だったのです。がその日はわたくしの任期も終り、ブラジルにおける最後のニッポン領事館員としての舞踊会であろうと思われましたので、大変名残り惜しく、その夜は早くから領事を誘い出したのです。

領事A氏には美しい二人の令嬢がありました。もちろん、その夜は二人の令嬢が同伴で、どちらも決して外国

人に負けをとらない美しさです。姉娘の久美子は純白の夜会服に、真赤なボタンの花を胸につけ、すらりとした高いその姿は、全く輝くばかりで夜光石のような美しさでした。真黒のかみは長く白い服に照りながら垂れ、富士額の曲線が強く引締った紅い唇に艶麗な対照をなしていました。そしてその間に輝く双の眼は、ぬれた真珠のように人びとを眩惑させています。がわたくしは久美子の美しさの中に一抹の不可解な暗影が、深く澱んでいるように思われてならなかったのですが、それもこの物語が進んでいくにつれて読者の方にも分っていただけのわけです。それに引きかえ、妹の奈美子の麗しさは、日本服に金銀の刺繍を施した胸高の帯によって、純潔な美が眼醒ましめるようでした。

狭霧の中を、車は幾度も町をまがって、見覚えのあるパウリスタ通りにさしかかりました。車の走っている間、領事A氏はわたくしに今夜の会の成立をはなしてくれました。

それはアメリカ合衆国が排日移民法案を実施するか否かの問題が、このブラジルにも影響して来て、政府の耳目をそびやかしていた時であったので、一部の親日家が外交的な儀礼で推したものであったのです。そしてサンパウロでも一番の金持で、ブラジルの独立宣言当時の功労者である〇〇氏邸を選んだのも氏の親日家であるという関係からでありました。

パウリスタ通りを右におれて、サン・パウロ市を見下す高台に今夜の会場がありました。建ものは中世紀のがつちりした前面の玄関と門が、いかにも堂々としたいかめしいがんだ強な建築物でした。うつそうと繁茂したあらゆる樹木が、この建築物の背景となつて、広々と蔽い、もりの中のお伽噺の宮殿のようでした。玄関の前庭は鉄さくに囲われていて、薔薇の花をはじめとして、種々雑多な花が見事に電光に照らされていました。

自動車は庭園の間のはさみのようになった砂道を軋るように入っていました。この異国趣味深い高尚な香りのする独特な庭園美は、まことに得にも言えぬ華麗さで、こんな歴史の新しい国には珍奇なものでした。アーチ形の玄関にいくると、内部のサロンから流れる光線が、金銀の宝石を敷き延べたように輝きわたっていました。そして、ホノルルの月々の軽い音楽の曲の波が、たちまちにしてわたくしの心を捕えてしまいました。

もうその時は、その日の豪奪な舞踏会の期待と熱望とで、胸のうちはあふれるばかりです。その上若かったわたくしは、A氏の二人の美しい令嬢と同伴であることが無上の幸福で、全く地上の楽園に夢見る思いに誘われていました。

大広間に入ると、真昼を欺くような白日の明るさです。

無数の硝子玉をちりばめた五個のシャンデリアが高い円

きゆうの天井から最大の光射を放って、今日をかぎりの力を尽しているようです。広間の四隅には彫像や古風なかぶとが飾られています。かべには泰西の名画がかけられこの家の主の高雅な趣味を思わしめました。その中を各国の外交官、貴顕紳士、およびその夫人令嬢が五色の雲のように彩を競って集っていきました。わたくしたちも早くきたつもりでしたが、早い方でもなく会場はあふれるばかりでした。美服礼服の人びとが整然と流れ歩き、群れ集い、互に礼をかわし合ったり、愉快的上品な談話に打過しているのを見ると、わたくし達ニッポン人の接しし得られない光景に、心から羨望の念を感じたのでした。

そしてその典雅な余裕のある寛容な雰囲気は、全くそのおくゆかしさを尊敬せざるを得ません。その上、夫人令嬢方の落ちついたしなやかな外交術とも申しましか、舞踏会を何の障りもなく、秩序正しく運ばせる自然の心やりが、暖く気持よく心からゆさぶる態度をみせていました。

広間に入って行きますと、金の長いつえを持った、黒い立派な服で、彫像のようにつつ立った下僕が、ニッポン帝国外交官A氏として、大きな声でわたくし達の到着の報告をしたのでした。するとすぐ傍にいたその家の老夫婦があいさつに出てこられました。A氏は巧みなブラ

ジル語を操って慇懃に謝礼をのべ、続いてこの老主人に導かれるまま、各国の外交官および貴賓紳士に挨拶をかわし歩いたのです。わたくしも領事と二人の令嬢に従い、万べんなく廻り歩きました。それも別段格式があるというのでもなく、軽い挨拶で、ある時は素暗しいしやれも飛んで、まことに明るい外交術によつて為されたのでした。それによつて初めていよいよ今日の晴れの舞踊会に参加しているという観念が出来て、心の落ちつきと余裕を得たのでした。

わたくし達が到着しましてから後は、二、三の組が同じ下僕の声に紹介されますと、漸く今日の招待者はほぼ勢ぞろいしたのでしょう。一種の明朗な期待の旋風のようなものが人びとの間に吹きはじめ、いよいよ会がはじまるのだという気配が動き出しました。

わたくしも片隅で二人の令嬢とともに、居合せた人びとと談話をかわしていました。わたくしはその当時、外国語学校で学んできたとはいえ、拙いブラジル語で、かえって令嬢方に助けられながら会話の仲間に加わっていたのです。妹娘は大して姉のように話せる方ではありませんでしたので謹ましく傍の椅子に腰を下していました。

それが唯一のニッポン着の娘であつたので、人びとの目はみなその美しさに誘われているようでした。

やがて大広間の正面に設けられた高台に音楽師たちが

現われてきますと人々の胸は一時に高鳴り出しました。
ブラジルの国歌です。

大広間にいる総ての人びとは不動の姿勢で直立し静粛にきいていました。それはこの舞踏磐の序曲をかざつて、ふさわしい尊厳さを与えました。国歌が終わりますと、人びとは拍手をもつて楽師たちを称揚し、そして新しいメロデーの中に溶融していくのです。

楽師たちは国歌の昂奮の後をついて、ハイドンの「軍隊交響曲」を奏しました。それから次から次へと有名な楽曲を演奏して行きました。曲はシュトラウスとモーツァルトものが多いようでした。

音楽の律動、人びとの波動、サロンは今しも盛大なる舞踊の幕を繰り展げました。軽い足どり、旋回、律調、衣類のへんぽんたる様、どよめき、人びとの歓喜の動悸、呼動、短いおもしろいささやきや会話等が、さしもの大広間を一杯にしていまいました。男子の黒い服装にまじって、夫人八令嬢方の色さまさまの衣類は、散り飛ぶ無数の石鹼玉と狂って、彩錦となって、けんらんとひるがえっでいました。それらが律にあわせ交互に、ひらめきゆらめきかわすのは、言語につくせない美の絶対の表徴です。音楽はそれに氣勢を添え、人びとをいやが上にも励ましあふるのです。聞くところによると音楽師たちは当時、サンパウロ市より選り抜きの人びとばかりだったそうです。

領事A氏の二人の令嬢の舞踊も、決して外国人にくらべて負けをとらない巧みな繊細なものでした。ことに久美子の身のこなしと、音楽の波に乗る工合は、何とも言えない洗練されたもので、その優美な姿は目も欺くばかりでした。彼女は早くもこの舞踏会の花と輝き、並居る紳士方の相手として熱望されていました。

わたくしも久美子の踊り舞う姿に酔わされてしまったものです。

音楽！ 舞踏！ けんらんたる輝しさ！ この世の無上の歡喜の中に、時は惜しまれつつ過ぎてゆきました。

さっと、一面に汗を感じたわたくしは、別間の休憩室に息をつきに行きました。そこには客の肌と渴を癒すため、また舞踊の息をぬくため、ささやかな食べものや飲みものが美しく飾りたてられて軽い食欲におうじられていました。又そこでは舞踊をせぬ人、疲れた人たちの休憩する場所でもありますので、カルタをしている人びとも、飲食する人びとも雑談にふけっている人びともあつてサロンとは変って又愉快に明るさをも持っていました。

領事や令嬢方と離れてしまうと、ブラジル語のあまり話せぬわたくしもそこでは全くの一人で、ぽつとりとして取柄も何もありませんでした。それでもその環境の中で、気分だけはたつぷりとまんきつしていたのです。そこへひよつこりと一人のニッポン人の青年が現われてき

ました。この舞踏会が親日家の催したものでありますから、その日は聖市在住の主なニッポン人がかなり顔を見せていたのですが、今わたくしの目の前に現われたような若い男は数えるほどこしか出席していなかったのです。彼は二十才を越したそこその年配で、その白哲の美貌はニッポン人にもまれな位でしょう。わたくしは支部に居ったとき、彼のような男としては美しすぎるほどの美貌白哲の青年を、その上流社会に見たことがあります。が、彼はちょうど、そのような青年でした。そして一瞥みて、服装といい、举止動作といい、一廉の教養もあり、社会的な洗練さも具えていることが分りました。

わたくし達は初めての会合でありましたが、同胞的な感情と、その日の舞踊会の意義の共通感覚が既にわたくし達を結ばせるよすがになりました。彼はわたくしと卓子を同じくすることを喜ぶかのように腰かけ、自己紹介をしました。彼は名前を成瀬讓次といって、イルマン・シンプリシアナ街のあるニッポン商店の店員で、その日は主人と同伴を言いつかつて舞踏会に出席していたのでした。彼は日本から渡伯してきて、まだ日もあさく、その話の合間から察しますと、ニッポンでは家がらもよく中等程度の教育も済ましてきている様子でした。ですが何かしら余りニッポンのことを話すのを好まない様子でしたので、わたくしもある程度の身の上話にして外の

会話に移ってゆきました。

その部屋に流れてくる音楽の潮流は、いよいよ最高潮に達してきたようです。わたくし達のいるところから、サロンは見えませんでした。そのどよめきと、あの差迫ってくる人びとの息切れは、その調子と光景をまざまざと思わせます。

わたくし達は長い間話していましたが、周囲の騒音のため、自然と話題の穂を打切られてしまつて、二人とも踊らずとも踊っているような観念の中に融込んでいたものでした。この部屋の人びとも、今や最高潮の舞踏の感情に誘われつつ、その方を眺めつくしていました。

数分するうちに、その優艶な音楽が止み、人びとはすばらしい歓喜の昂奮から、和やかな休息の気配になつたのでしよう、雑然とした統制のない感情の波動がただよつてきました。そして三々五々と、この喫煙室へ流れてきました。

そめ人の流れに混つてわたくし達の坐っているテーブルの向側の扉から久美子が、軽い昂奮に策しい霞を火照らせつつ微笑を含んで入ってきました。その青年の位置は久美子に背を向けている恰好でした。

久美子は純白の夜会服を翻して、わたくしの方へ向つてきました。

「こんなところにいらしたの。ずるいわよ。にげたりして」

と彼女は卓子の近くにきてあえぐように言いました。

その時、成瀬も久美子の気配をしって、敬意を表しつつ立上り、その顔をみたのです。久美子の顔も立上った成瀬の方に自然に向ったのです。

突然久美子の表情はさっと一変しました。何といったらいいいでしょう。まるで面師の作った強張った表情の仮面のようになってしまったのです。全く複雑な表情でした。驚愕と恐怖の入り混った皺苦茶な、彼女自身がその感情を発表しきれないというような複雑なものでした。わたくしも咄嗟のことでしたから、明瞭に彼女の表情を表現することができるほど記憶していませんが、ともかく、あらゆる感情の総合されたような雑然としたものでした。

ですが、それにひきかえ、その青年の方には何の変化も認められませんでした。自然のまま、優雅に久美子にあいさつしました。

久美子がそこにあつたいすに崩れるように腰を下しますと、悠然と成瀬もかけました。

それからの彼女の様子は今くみじめなものでした。焦燥と困憶と狼狽の感情を、隠すにもかかわらずぬ気配は怖けきったこま鼠のようなものでした。その日の舞踊の話をするのですが、取りとめもない話の、つぎはぎだらけな感じの声はふるえて聞きとりがたいものでした。

わたくしには、この久美子の急激な変化が何のことだ

かさっぱり分らなかったのですが、それが成瀬青年に關した原因からであることだけは分りました。ですが、成瀬の態度からは、一向それに対する反応が現われてこないものですから、何が何やらわたくしの方でまごつく位でした。けれども尋常でない久美子の表情によって、何事か二人の間にあったことは疑い等いことです。普通ときは、男にも負けない自負心の粗い、虚栄と強情の見本のような久美子を、よく知っているわたくしにはそれが明かに分ったのです。その久美子の性質が、まだ青春の感情にあふれていたわたくしに少しの恋心も湧かせなかったのです。ですから、その彼女の極度の変化はわたくしに深い疑惑を抱かせました。「シュトラウスの皇帝円舞曲はよかったわよ。相手の方は受ても踊りの上手な方で、イタリアの昔の有名を伯爵の息子さんですつて」「あの人なら知って、いますよ。葡語が達者で新聞に美術の評論を書いている人でしよう」「そうかも知れをいわ。ピカソの話なんかしていらつしやったわ。一度会ったとか言ってらつしやったわ」二人の間に膜を下し、無理にたばこに火をつけてすっている彼女の態度は、おかしい位に無ざんな敗者の形でしたが、じよじよにその感情をわたくしとの会話に柔いできたのでしよう、自然の間にその落ちつきを取りもどしてきたようです。

それでも隠しきれない困憊は、その青ざめた顔色と、

微かに震えている唇と手に現われていました。わたくしは自然に久美子を会話の中に誘いこみ、落着きを取りもどすように努めました。

紫煙の立ちのぼる唇は、あるかなきかの震えを見せて、烈しい感情と戦っているようでした。そしてわたくしとの会話の中ににげ道を求めているようでした。その間、彼女の視線は四方のかべに這い廻っていて一定の場所に落着き得ないようでした。成瀬の存在が、彼女の視線を惑わせるのです。ちょうど、子供が恐いものを見たいがみられないという風で最初一眼見たときは錯覚ではないかと思い、しかもそれが錯覚かどうかを確かめることの決心がつきかねるといふ具合でした。

その久美子の態度と対照して、成瀬の悠然とした動作は、全くなにも知らないという無関心さを示していて、初対面のものに対するぎこちなさが見られるばかりでした。が、わたくしを中心として会話が進んでいくうちにやはり成瀬の無関心さの中に、僅かながらも現われる内心の動揺を直観的に知ったのでした。

妙な雰囲気の中にいながらも、久美子はよほど冷静になってきました。わたくし達は軽い飲ものとくだものを食べながら話していました。そこへ領事と奈美子も姿をみせましたので、わたくしは同伴の成瀬を紹介して席をゆずり、久美子を屋外の空気にあてるために誘い酒場を出てゆきました。その時は、舞踏も中途の休憩時間でし

たので、音楽席もがら空ですし、人びともサロンから、別室や裏の庭園の方へ流れてゆきました。

わたくしが久美子を誘って、サロンから庭園へ通ずる大きな扉から出ますと、そこは鬱そうとした樹木のすいせきでした。それもこの家の主人の心使いを知らせるほどさまざまな電灯の光線の巧みな配置で、このもりの全景は闇の中に宮殿のように浮彫にされていました。南米全部の樹木という樹木のあらゆる種目をよせ集めたとも思わしめるように樹木が、巧妙な技術をつくして植えられてありました。木肌の真白い、高い天をつくようなフィゲイラの木がたくましい筋肉労働者の腕のように根を下して、王座をしめて傲然とそびえています。合歡木のような糞をもった、それよりも繊細な柔い葉を織物のように整頓している優美を、あまり大きくもない木、奇妙ながさがさした木肌に、沢山の大小のこぶを樹幹のいたるところに附着せしめている樹木。すつくりと一ぼん真直ぐにそびえ、枝も葉も起立した兵士のように整った樹木、彎曲した背髄病にかかったようなもの、ニッポンの松のようなもの、杉、糸杉等あらゆる樹木が互いにその独特の美を発揮しつつ群植されています。そしてその樹間には種々雑多な蘭が無雑作にその優雅な姿を見せているのです。その蘭の種目だけでも世界に類がないだろうと思われるくらいでした。惜しいことには蘭の開花期ではないので一つとして花を載いているものが

見当りませんでした。開花期にはその芳香が万人を恍惚たらしめることでしよう。

わたくしは全くこの豪壮巨大な庭園に驚かされてしまいました。この中に、その日常を過す人はどんなものだろうと考えますと、秘かなる羨望の念を起さざるを得ません。この庭園そのものが一つの人間の幻想です。人びとは記憶の力や想像の翼を借りずとも、自然に世にも類のない理想郷に入りこむことができるわけです。そしてその中央に白樺のような木で釘一本使わずにできている四阿の中に腰掛けていると頭の中のあらゆる雑念や苦悶は、清浄な空気と環境のために、洗い潔められてしまいます。わたくしはこの夜のこの庭園を一生忘れ去ることはできません。

わたくしはこの庭園の中を、久美子と手を取合って逍遙遺していました。はや、サロンでは新しく舞踏がはじまったようです。音楽が甘美の蜜のような感覚で、木々の間を繊細を絹糸の如く漂い流れてきました。わたくしはこの音楽の波と濃緑の樹海の中を、うづとりと歩いていくうちに、いつの間にか久美子の存在を忘れてしまいました。気がついた時は、どこへ行ったものか久美子の姿はそこらあたりには見当りませんでした。もうわたくしにはそれどころではなく、この陶然とした感情を大切に胸に蔵して時のたつのを忘れはてていました。樹木、光線、音楽の三つが融然と合致して、一つの美の世界を

築きあげていました。

どれだけの時間をわたくしは造遥していたことでしよう。わたくしは再び樹木の間から、明るい光線に照らし出されて、まるで海上の遊覧船のような小さな一つの事を見出しました。一群の叢を潜って視界の中にはつきりと四阿を捕えますと美しさは一しわでした。電灯の光線の具合で、初めはよく分りませんでした。やや近付いたと思った時、裾を展げた光帯をそれた少し薄暗い所に二人の男女の立姿を認めました。わたくしが目を据えて見定めると、その二人は久美子と成瀬讓次でした。はつと立止った瞬間に、

「あなたはわたくしを苦しめるのですか。圧倒的な事情でわたくしの感情をもみ苦茶になさるおつもりですか」

と久美子の声がしました。

「何とおっしゃるのです、先刻から申しているように、わたくしには何の関りもありません。今夜もただ主人の命令でここに来ている丈のことです」

わたくしは立ちすくんでしまいました。薄暗いので二人の表情を明瞭に見ることは出来ませんでした。久美子は泣いているのではないかと思われました。わたくしはぼう然としてその光景を見ていたのです。何か神秘的な莊嚴なものが、そのふん囲気の中から生れて来て二人を包んでいるような感じです。二人もわたくしの気配に氣付いたようでもありません。

それ以上、二人は一言も発せず凝固したようにたたずんだまま、互いの眼を見合わしているばかりです。

男の態度は先刻と同じでした。感情の表現を嫌忌しきっている無表情な姿で女を見下しています。そしてその下半身が光線の中に浮いていますので、その光線の反射が男の全面に反映して、いかにも謹厳な不思議な魅力が蔵していました。女の感情の烈しさにも動じない画像のような姿態は彼のオスカー・ワイル・ドのドリアン・グレーの画像も斯くやと思わしめるものがありました。

わたくしはこの光景をどう解釈していいものかと判断に苦しみました。薄暗いうっそうと繁茂した樹木の下、自然のままの形を利用した四阿の影、微妙に流れて来る哀調を帯びた交響曲の律調にふるえた湿っぽい狭霧の中、彩に輝く人工光線を僅かに阻んだ陰影と半影とを巧に織りまぜた光帯の中に、二人の男女は沈黙のままじつと視線をかわしています。何とこれを言ったものでしょうか。

恋愛でしょうか。それとも他の何とも言えない感情の発露でしょうか。わたくしにはただのありきたりの恋愛とは受けとれませんでした。それは神秘的な名画でも見るような印象的な場面です。わたくしもいつの間にかその状況に捕われていきました。

二人は数分間身動きもしません。一言も言葉をかわしません。ある大きな感情の激動が二人を凝固させている

もののようです。わたくしも彼等の感情に同化されたように、まるで二人のある神秘的連りがわたくしをマヒさせてしまったように其処に釘づけにされてしまっていました。

すると不意にどこからか人の気配がかすかに感じられました。二人もその気配を感じたのでしよう、気を合せたようについとその場所を離れて行きました。久美子は四阿の表口の方から出て采ました。それが丁度わたくしのいた場所の前面の道に通じていますので、わたくしも久美子が近づくのを待って、そつと寄り添うように彼女の歩調に合わせて進みました。久美子はちらりとわたくしを見ました。その瞳の中には哀願と許容を求める深い感

情が明瞭にうかんでいました。無言のまま、久美子の感情を労りながら肩を並べ、サロンへ通ずるきれいな小砂利の上をきしませて行きました。

常日頃から、傲慢と虚栄と華美の権化で、男を男とも思わず、どちらかと言うと傍若無人の振舞の多かった彼女が、あれ程までにぶちのめされ奴隷のような卑屈な従順を示すものとは何人も考えることができないことでした。久美子はもはや二十四、五に達していたのです。今まで色々と男との噂も立ちましたが、いつも長続きせず本人も誠の情熱を傾けたことがないようでした。わたくしとの交渉も兄妹の如き淡々たるものであったのです。

わたくしと肩を並べて歩いている彼女は、そんな年とも思えない淑女の美と若々しさにあふれていました。傲慢な時の彼女の美は従順そうな美を示しているその時でもやはり、別段変ったように思えませんでした。そこに一種の神聖な美を湛えていました。あれ程傲慢だった女が、こんなに従順になれるものだろうかという、わたくしの神秘感がそうさせるのかもしれないが、わたくしは久美子が今までにない幽玄な美を表わしているのを知りました。そしてわたくしは何かしらそこに不吉なもの、この女は身を滅ぼすものではないかという予感を覚えたのです。しかも成瀬という男の圧倒的な態度は尚更その感念を深めさせ、彼女に変化を与えたその男に、不思議な魅力をおぼえせしめました。

サロンは第二の舞踏の為今やかなえのわく如くになっていました。それからわたくしは、久美子とも奈美子とも、そして各国外交官の夫人令嬢方とも組んで、雄大華麗な一夜を過しました。

それから二、三日経った日のことです。サン・パウロ市の邦人仲間に、領事の姉娘が、〇〇商店の店員と姿をくらましたという噂がばっと拡がりました。わたくしはそれを聞いて、実際奇異な感に打たれました。それというのも、わたくしは二人の関係を恋愛だとは解釈していなかったからです。その為それを聞いた時は、何か裏切

られたような嫌な感じに捕われてしまいました。嫉妬で
しょうか、羨望でしょうか、いや、そうではないのです。
あの舞踏会の夜の四阿での出来事を、美しい神秘的なも
のとして意味づけていたわたくしには、その噂があまり
にも冒瀆なものであるとしか考えられなかったのです。
わたくしは直ぐに領事の官宅を計れました。領事の居
室に通されますと領事はダンロに向って立ち、日頃自慢
の夢違観音の写像の前に、黙然と立っておられました。
そして振返ってわたくしに話されました。

「おう。よく来られた。わたくしは今この写像を見てい
るのだが、これ丈はいつ見てもいいものだ。この大き
さといい、姿態といい、誠に人間味にみちみちていて頬
から頸、頸から肩への曲線は何ともいえない端然とした
品位をもっていて、不思議な表現力を見せている。

わたくしは法隆寺でこれを見た時、初めてニッポン美
術の精髓を発見したように思っ、ある画家に頼んで、
その模写をしてもらって来たのだ。これが国宝になつて
いる法隆寺絵殿の本尊だそうだ。ニッポン美術の最隆期
の白鳳期の制作といわれていて、播州鶴林寺の観音様と
ともに、他に類例のない貴重な仏像だそうだ。そして、
この像に祈願をこめると、いかなる悪夢も善夢になると
いう不思議な伝統が伝わっているのだそうだ」

そのさいごの一言、領事は夢違観音の像に例えて、そ
の悲痛な無限な心境を語られたのでした。わたくしは一

言もものが言えませんでした。慰めの言葉も、励ましの言葉も、観音像の中にすべてを封じ込もうとしている領事の心境には無駄なものでありました。

わたくしは無意味な来訪の謝意を表して部屋を去ったのです。そして奈美子の部屋の戸口に立ちましたが、静まり返った部屋の中から、かすかにすすり泣くような声を耳にして、入る勇気も失せ、そのまま官宅を出て行きました。ただ、久美子が噂の如く家を出たという確定した事実を知っただけで帰らなければならなかったのです。

それから数日後、わたくしは領事館の残務も済み、近日にサントスを出帆、日本へ向けて帰ることになっていました。それが為、サン・パウロにもお別れのつもりで、ぶらりと独り夜の市街にさまよい出ました。三年間の滞在で、独身者のわたくしにも、いつの間にかなじんでしまったその夜景は、又とない美しさに輝いていました。高いマルチネリの建築物を、サン・ベント街から夜空を高く仰ぐとそれは何ともいえないものです。この光線に薄れた夜空の星は、青白く力弱く輝いています。そして空の色は、深い海底のような感じがしてなりませんでした。

サン・ベント街から右の広場に折れ、通称（邦人間の）お茶の水橋を渡って行きました。橋の下はちようど

工事中で、近い将来にはそこがサン・パウロの中心になるといわれていました。光の氾濫です。都心の夜の誘惑です。行交う人びとは尽きません。この陸橋こそこの市街のもっとも人通りの多いところでしょう。それもそのはずです。この市街で一番都会的な感覚をもち、刺戟的な都会の眺望を一撃の中に収めているところです。

わたくしは足取りも緩慢に、周囲の雑然とした夜景の美に浸りつつ歩いていました。そして思いなしに後を振り返った時、多数の人の影に二人の日本人の男女の姿を認めました。二人は睦じそうに腕を組んでいます。わたくしは思わず、はつとしました。それというのが二人は久美子と成瀬譲次に違いなかったからです。二人はわたくしに気付かぬようでした。睦じそうに何か話しながら、時々軽い笑いを光線の中に見せていました。久美子は黒の立派な外套をまとい軽快な歩調で成瀬にもたれるように歩いていました。わたくしは橋の手すりに身を寄せて二人をやり過しました。それがわたくしが久美子を見たさいごになってしまったのです。

わたくしは三日後にブラジルを去り日本へ帰りました。

そしてこの二人も自然と記憶の中に沈んでいきました。それだけでしたら、この話も平凡なものになるのでしようが、又二年後、はからずも再び、政府の指令でサン・パウロの領事館に赴任して采ました。そしてゆくりもな

く同じ領事A氏の下に働くことになりました。

妹娘の奈美子は二年の間に立派な娘になっていて久美子の容貌に優しさを加えたような美の所有者になっていました。わたくしは再び官宅に出入れをする身となりましたが、久美子に関することは絶対に触れないように心掛けていたのです。領事もめつきり白髪がふえ、その寛容な温厚な態度の中には、淋しい諦観が秘められて冷静な所が見えていました。話すことも美術のことか、仏教のことかで、昔と同じ夢違観音の模写像が彼の居間に掛けられてありました。

ある夜のことでした。わたくしが奈美子と二人でその日のニッポンのラジオ・ニュースを聞いた後のことです。

奈美子は静かにわたくしに言いました。

「久雄さん。あなたにお見せしなければならないものがありますのよ」

「何ですか、わたくしに見せなければならぬものとは。何か重大なものようですね」とわたくしは心当りがないので、わざとからかうように尋ねました。

「わたくしの姉の手紙です」

「ええ、久美子さんの手紙ですって」

「ええ、そうですわ」

「わたくしに当てた手紙ですか」

「そうです。ですからわたし父には見せずに納っておりますの」

奈美子は静かに立って自分の部屋に、その手紙を取りに行きました。その間のわたくしの期待は大きなものでした。その手紙によって久美子の失踪のことも分るだろうと思えたからです。引返して来た奈美子の手には一通の封筒が封も切らずにありました。わたくしは封を切るのもまどろこしいように思いながらあけたのです。

久雄様まいる

わたくしは今、ある東北伯の海岸に立って、漁夫がとり落していった小さな一匹の魚をみています。魚は自分の力ではどうにもならない力にひき寄せられて、

瀕死の床にあえいでいます。暑い太陽がかつかつと照りつけて、ますます彼の死を急がせていますので、そのあわれさは一入です。周囲のすべては何もしらぬげに晴々と輝いているのです。そしてただわたくしだけがそのあわれさを知り、もはや水に離しても助かるべき術もないのを知って、じつとその苦悶を見守ってやっているのです。久雄さん、あの舞踏会の夜のわたくしはちようどその魚のようであって、深い同情の念であなたに見守られていたのです。あの夜のことをわたくしはお話することができず、又これから永久に出来

なくなるであろうと思います。久雄様以外にわたくしの話をする人はありませんでしたのに、わたくしにはそれが出来ないのが残念です。ただ久雄様のご想像に委すより外はありません。再びお目にかかれないこの身ですもの。わたくしは今すべてを清算するために漂う一つの魂です。わたくしにかけられた深い咎のために、一生つきまとうどうにもならない力からのがれるためにただよう一つの魂なのです。わたくしはわたくし自身の罪の深さを量ることもできない無力さです。傲慢な愚かさがわたくしを罪から隠していました。わたくしがそれに気付いたときには、余りにも嚴重な咎の金輪がわたくしを縛りつけていたのです。それがためわたくしはすべてを失わなければならない運命に陥っていました。たとえその彰からのがれても、わたくし自身の心がのがれることができない破目になっていたのです。そしてわたくしのもつとも親しい久雄様のもとも去らなければならなかったのです。お許し下さい。あわれな魚は水を遠く離れてあえぎ死を待つばかりです。

我がさだめくすしきものと

知りながら

生き永らえし

年を数うる

わたくしは鼓動をゆするような強烈な感動にうたれながら、久美子の手紙を読みおわりました。がわたくしの心の底にはかえって不思議なこなしきれない疑問が淬のように残りました。わたくしはその手紙を奈美子に渡しながら聞いたのです。

「それから、久美子さんの消息はどうなったんですか」
「姉は……」

奈美子は声をふるわせて、どつとあふれ落ちる涙をおさえて、

「姉は死にました」

「え、もしかしたら……」

「え、自殺したのです」

久美子の死。手紙の文面でそれとは察しながらも、奈美子の口から聞いた久美子の自殺の事実はあまりにも無さんな出来事として、わたくしの心奥底のれんぴんと同情の念をゆすりましたし久美子のいうことが、何であるかわたくしには分りませんでした。

その罪のために、自分の奇しき運命を知り、未練多いこの世の中に別れるとき、それまで生きてきた自分の年令を数えてみる悲痛な久美子の姿が、険に熱く映ってくるように覚えたのです。

久美子の罪。それが何であるかという深い疑問として

残ったのですが、それも偶然にわかる時が采めました。

わたくしがその度の采伯には住宅の運が悪く、あるモツカ区の不便なところに下宿することになったのでした。

領事館を出ると、プラツサ・ダ・セエからモツカ行の自動車を捕え、終点で下車するとだらだら坂を登って毎日下宿へ帰ったものです。その当時は、どこかという変った知人も無く、わたくしは事務の外は無聯に苦しんでいたのです。それである日シネマから帰る道すがら、終点から道の明りの為に、やや廻り道をして家に帰りました。

丁度、終点から二つの区割を過ぎて、次の区割の角に、四角の練瓦建の酒場があつて郊外らしい黄色い濁ったような電灯の光線を往来に投げていました。何げなくそこを通りかかりますとそれは一寸した酒場兼青物屋で、おくの方に一人の男が頻りにコップを洗っているのです。私はその男の横顔を見た時、何かわたくしの記憶に引掛つてきたものがありました。どこかで見たことがある顔だなあと考えて色々記憶をたどってみましたが一向思ひ出しません。わたくしの領事館の事務上色々の日本人とも顔を合せますので、まあ、その中の一人だろうと考えてその夜はそのまま、寝についたのです。翌日一寸した用件で領事の官宅を訪れて、奈美子の顔を見た時、昨夜見た男の顔を思い出してはつと胸を打たれました。そ

の男こそ、久美子と駈落した成瀬讓次に違いないのです。

わたくしは奈美子と話しながら、その男を発見したことを告げようとする烈しい要求に攻められました。のどところでじっと抑え殺してしまいました。そして猛烈な好奇心が湧き、久美子の謎をとこうと考えました。用事もそこそこにして、引き止める奈美子を振り切って飛び出しました。

少し遠道にはなるのですが、予定のあるわたくしは、わざとその酒場の方へ足を運ばせていきました。時間は五時頃なので、昼の光が往来に一杯に充ちています。ですが、店内は充分視力をとどかすことができない位の薄暗い店でした。店は細長く、わたくしが歩いて来た方からいえば、おくゆきの長い間口の狭い店でした。番台が店の端から端まで長く伸びていて、後の方の棚には上から下まで色々な酒瓶が、齒が欠けたように並べてあります。

店の一番手前には、一寸した箱が棚代りに重ねてあって、野菜や果物類が置いてあります。昼の光線で見ますと、まことに貧弱なものでした。

わたくしはその隅のメーザに掛けて人が出てくるのを待っていました。時間の関係か場所の関係か、余り繁昌している店とも見えず、店の人も姿を見せていないのです。わたくしは成瀬との会見に胸をはずませながら待

っていました。そのうちに成瀬が店に出て采ましたが、何という変り方でしょう。あの白哲美貌の青年が、ぶくぶくと肥ってしまつて、色も浅黒く昔の美青年の面影はありません。わたくしは思わず驚きの声を挙げるところでしたが、その端正な容貌はあの当時の彼の艶聞を思わしめるものがあります。

彼もわたくしに気づいてメーザにちかづいてきましたので、わたくしはなにげなく一杯のキナードを頼みました。成瀬はいんぎんにあいさつしながらキナードをメーザの上に置きました。わたくしは直ぐ、真正面から成瀬の顔を見詰めたのですが、成瀬はわたくしを記憶していないのでしよう。

無表情な態度でした。わたくしはキナードを飲みながらも、どういうふうに話しかけたものか迷っていたのです。途中道々考えていたことが、こうして成瀬の前に出てみると咄い方法としか思えず切りだしがつかなくなつてしまいました。ところが、うまい具合に成瀬の方から、

「お客さんは、この近くにお住いですか」

と聞いてきました。

「すぐ近くの〇〇アパートにいますよ」

「どこにお勤めですか」

と成瀬はそう聞いて采ました。もうこうなればわたくしのものです。

「領事館に」とわたくしは答えて、じつと成瀬の顔を記憶を促すように見詰めました。

成瀬は鋭く感動したようです。そしてわたくしの顔をしげしげと見詰めるのです。数分間、わたくしたちの視線は空中にかち合っていました。

「そうでした。失礼ですが、あなたでしたね。久雄さんとおっしゃるあの舞踏会の夜の」

「そうです。わかりましたか、あの夜の思い出があなたと知った時、わたくしをここに伴れて来たのです」

「あなたは何もかも知っていていられるのでしょね」

「いや知りません。ただ、久美子さんがある咎の為に自殺したということしか知りません」

成瀬はじつと深い追憶の中に入って行つたのでしよう、深い表情のなかにその整った横顔を見せていました。わたくしはしばらく、成瀬の回想を破らないように口をとじていました。そして成瀬から自然に話してくるのを待っていたのです。

そのうちに成瀬はやっと口を開きました。

「あの時の直接の傍観者があなたであり、久美子の心の友であつたあなたに、わたくしはわたくし達二人のことを聞いていたかったです、いかがでしょうか。久美子もこの世の人でもないのですし、あの女の苦しみをあなたにも知っていたいただき、少しでも供養していただきたいのです」。

成瀬はニッポンで商業学校を出ると間もなく、その一家とともに渡伯してきた。一年あまりある耕地で働いていたが、彼は間もなくサン・パウロ市に出てきて、ニッポン人の商店に務めるようになった。当時はまだ二十二年になった若さであったが、彼の美貌とその商才は少しの間に主人にも愛されるようになり顧客も多くなってきた。ある日のこと、立派な服装をした上品な美しい娘が店に入ってきたかそれが久美子だったのである。

その時は他に客も多かったし、彼自身一人の婦人に応待していたので、久美子と直接顔を合わせていたのではなかったが、何気なく久美子の方をみたとき、彼女の妙な素振りに気がついた。成瀬は久美子が店を出てしまつて自分も他の客との応律がすむと、とりあえずその店員に話して品物を調べてみた。たしかに品物が一つ紛失していた。さして高価な品物ではなかったが、久美子の動作によつて明らかに万引されたものたちがいなかった。

彼はすぐに主人に告げたのであった。そして彼は久美子が、サン・パウロの領事の娘であり、万引は常習的だということを知った。彼の主人は請求書をかいて持つてゆけば、金はもらえるのだから、そうするやうにと彼に教えるのだった。ところが主人の言い方が少かつたために、成瀬は直接久美子をたずね、久美子に請求書をつきつけてしまったのであった。もし彼が今まで通りに領事A氏にひそかに渡していたら久美子が自殺するやうにな

るまでにならなかつたであろう。運命は少しの言葉の不足で、あたらしい生命を害ってしまったのだった。

成瀬に請求書をつきつけられた久美子は、まっ青になつて憤激した。自分はそんなことをした覚えがないといつて成瀬にくつて掛つたのだった。ところが、ただ主人の言葉によつてきたものであり、主人の店を大切に思っている成瀬には、久美子の抗議は無益だった。成瀬はその美貌の表情一つかえず、冷然と無言のまま、突つ立っているばかりだった。久美子は氣圧されてしまつて、素直に金を渡さねばならなかつた。しかも久美子が倍額以上の金を出すと、相変らず冷然と釣銭を出して帰つていった。久美子の怒りは成瀬が帰るとなほ強烈なものになった。彼女は復讐的な氣侍になつて、その翌日は、わざと成瀬の目の前で行つた。するとまた、成瀬自身が訪ねてきて同じような態度で請求書を出したのだった。久美子は成瀬に恐怖さえ感じた。久美子は狼狽した。そしてその奇妙な男を屈服したくなつて、三度目の罪をおかした。そして成瀬の来るのを待つていたのだったが、成瀬はちやうど多忙だったために、三日後になつて相変らず沈着な、冷静な態度で現われたのだった。久美子は成瀬を屈服するどころか、かえつて成瀬の忍耐と冷たさに屈してしまつたのであつた。そして久美子の憤怒は、いつの間にか自分の罪の自覚になつて煩悶と苦悩の日がつづいた。その点、ある程度まで久美子は白痴に近かつたの

かも知れない。そして領事A氏の寛大な処置が、久美子の罪の自覚を蔽い隠していたのであろう。

それがために、舞踏会の夜、成瀬に偶然会合したとき、

良心の苛責に一溜もなく打破られてしまい、成瀬が久美子をとがめているように思えてならなかった。彼女は傲慢も、虚栄も自尊心も、すべてを失ってしまったのであった。そして久美子は自分が成瀬に虜になってしまったような錯覚をおこして、次の日成瀬の家に行き、彼女と逃げてくれることを要求した。久美子は自分の罪を知るとともに、その罪を許して寛大に見逃した男に対して、恐怖的な魅力をおぼえ、一種の精神的な昂奮にかられたのであった。誘われるもののように男のふところに飛びこんでいった。そして二人はサン・パウロを去り、リオ・デ・ジャネイロへと移った。美しいリオの港を背景に二人の愛欲の生活は五カ月つづいた。成瀬も美しいらんと熟しきった女の肉体と、有りあまるほど、久美子の持ってきた金とのために有頂天の生活を続けた。

だがそんな変節的な生活が永續する筈はなかった。久美子は罪の苦悩とその自覚をあたえた男との生活が耐えきれなくなってしまうと、漂然と姿を消してしまった。

成瀬は残されたわずかの金で女の姿を求めたが虚しい

月日がたつうちに北伯のある海岸でニッポン人の娘の溺死体があがったという記事をみた。それと同時に、迷いまよった久美子の自殺前の遺書が届けられたのであった。

失望した成瀬はサンパウロに帰り、久美子の残していた金で酒場を買ってくらしてきたのであった。

わたくしは成瀬の話聞き終って、初めて久美子の笛が何であるかを知ることができると、久美子の深い苦悩と苛貴の念のはげしさを思わないではいられませんでした。わたくしはそれが久美子の罪悪であるとは思いません。運命に罪悪というものを結びつけるならば、運命そのものが罪悪でなければなりません。無自覚のうちに彼女の罪悪が犯されていたものでしたら、罪悪は彼女にあるのではなく、周囲の環境の罪悪ではないでしょうか。

それがため、彼女が自覚したときは、彼女は周囲から逃れねばならなくなり、遂に死を選んでしまったのです。そして生き永らえてきた自分の生涯も、彼女にとっては数えてみなければならぬほど、不思議なものであったに違いありません。彼女の不吉な影は死によって清算され、今はあの世で新しい魂をつちかっていることでしよう。

それから一年後のこと、わたくしは新妻の奈美子とと

もに、北伯のある海岸の砂丘にある久美子の墓の前に立ちました。

小さな木の十字架が、少し高く盛りあがった砂丘の上に淋しく建っています。誰が供えてくれたのか、紙細工の花輪が潮風に色あせて、はたはたと軽い音をたてています。海はどこまでも茫漠として、九天は青く澄み渡っています。

わたくし達は久美子の墓の前に額き、いつまでも祈つて、離れませんでした。墓の白木には

A q u i f a l e c e u u m a j a p O n e S a
としてありました。

(一九四九年)

樽

水野浩志

略歴 本名・水野浩。一九二一年、愛知県に生る。小学校を中退し、一九三三年、家族とともにブラジルに移住。鈴木三重苦の諸作品を愛読した。処女作「樽」は第一回「よみもの」賞（一九四九年度）に第二席入選。その後数篇の作品を新聞・雑誌などに発表した。当時は農業を営んでいた。ブラジル川柳社、コロニア文学会々員。現在は、サンパウロ市サント・アマーロにて、小売商を営む。

樽

丘の家に灯がつくと、気持がおちつかず、山焼くけむりのさまよう道を、上るのだった。小さな想いだった。自分にさえ、そのほのかに燃えるのを感じかぬあこがれに似た心で、圭子の家に通った。

道ばたのおさく婆さんのねぎの花が、厚い煙にもえた月をうけて、ほの赤く、空の星のどれもこれも、あたたかい春も浅い宵だった。

圭子の頬のようだ……。赤い月に星に、そんな想いが湧いて、けむりのこめた大気のせいばかりでなく、心もあたたかい。

圭子は二つの姉だった。

「すみおさんは、何をなさるの」

じいっとみつめる娘の黒い瞳のそこに何かさされるような気がするものがあって、ついどぎまぎしてしまう。その心の弱さに反抗でもするように、

「なにで、なに？ 何のこと」

「あのね。大きくなったら、どんな仕事をするの。やっぱりお百姓？」

「ううん。何になるか判らん。自分じゃ判らんよ」

「もっと勉強して、シダーデに出て、こんなきつい仕事

を毎日しない、暮しがしてみたくないの？」

「きつくなんかないさ。これ、この通り」

半袖の腕をまくって、力こぶを見せたが、見向きもしない。

「そんなもの、誰だってもってるわよ。じまんになんかなるもんですか」

「なら、圭ちゃんは、もっと大きくなったら、何になるの」

瞳のそらしかたが、いくらかあわて気味だったが、相手が若い少年である。そうした意識が、いつも大人なるものに気をつかって、どもりがちな言葉をつかう圭子でなかった。強くおさえつけんばかりに、

「このままよ。いつまでも、このままよ」

常々は、小さくなっていなければならぬ。乏しい言葉のうちより、最上の敬語をつかって、幼いころよりの労働に骨ばった体を、しなやかに扱わねばならぬ。それが、村のよい娘であり、縁の多い娘である。

町のパーマネント師に、あなたたちは結髪はしても、電髪はしないね。

それにつづいて、パパイ・ノン・デイシャ（お父さんが許さない）と、言われる哀しい娘たちだった。

「うそ言ってらあ。お嫁にゆくんだらう。そうして」

「そして？」

「赤ちゃんを、どっさりうむんだろ」

声をひそめて言うと、娘もそっと赤くなっていた。

石油灯が、ぽかっぽかっつと、暗くなり、明るくなりだした。

「ちがうよ。いつまでも、このままよ」

「このままでいるものか。むさく婆さんのように、しわだらけで、腰がまがって、人の悪口をいって」

「いやよ、いやよ。あんなにはならぬのよ。このまま、このまま」

と、後はただ笑いの中にいる。

「町へお嫁に行つて、セーダ（絹）の着物で、じやらじやら暮らすのだね。知つてらい。畑のどろくさい仕事だいきら

い。そうだろ、圭ちゃん」

この言葉の裏に、そうでないと、言い切ってもらいたい心が期待にはずんでいるのに、娘はだまりこくつてしまふ。そうなると自分には話をつづけさせる術がない。

安物の置時計が、くりやのすみずみまで行き渡って、果ては、かべにしむかとばかり、あたりも静かだった。家人たちも、寝しずまつて、ひとり石油灯のみが、息づいていた。

熟れた女の胸の起伏があたたく香ぐわしく感じられる。十八という年の豊かな胸から、視線を外すと、もろ充分に発達した腰がある。と、胸をつく感じがあつた。友達と争つた移民船の一日がよみがえり、恥しい苦笑と

なつて、口もとにゆがんで現われる。

「何？ なにがおかしいの」

しじまを破つて、娘は言つた。

大きな世界地図に、赤い航路がのたくっている。

その線に、毎日豆粒ほどの大阪商船旗が、二糎ずつも進んでいた。その地図のある部屋が、十三、四の自分たちの遊び場で、毎日八月の印度洋の陽が、甲板に返つていて、入りまじつた男の子も女の子も、白い服装が目立っていた。

男女共学は、小学一年生のころのみで、それからは、別々のクラスで、訓えられてきた自分には、なにかと面映ゆいことが多かった。潮風に男の子も女の子も、一緒に合唱を送る。唱歌の時間は楽しかったが、生来歌が不得手で、一人うたわずに、女の子の群からもりあがる歌声に、耳をかたむけていて、若い先生によく叱られたものだ。

家庭でも、学校でも、よその女の子に接することがなかったので、話しかけてくれる女生徒に、とっさには返事のできぬことも多く、なんとなく子供らしくない姿で、高いふなばたにもたれて、波を聞く日が多く、女の子に、快活につきあえる友だちが、にくらしいほど羨しかった。

ふるさとのきびしい自然と、はげしい貧しさに、半生を経てきた手のひらの厚い人々は、乙のゆれる、わだつみの天国を、こよなきものとしてはいたが、天国にもなお夢があつて、やがていくばくかの航路の果てに、更に美しき天国が待っていると、思いこんでいた。だが……少年たちは、たとえどのように、きびしい自然にあり、社会にあらうとも、自分たちが息づいている場所が、天国なのだ。地獄に在つても、自分たちのおさない生活に、天国をみいだす。

古りてきた一枚の世界地図、その前が自分たちの天国だった。麦ごはんにも文句はなく、みんな肥えてきていた。みやこ育ちの自分の細さは、仲間の者から圧しつけられるように、体格も、言葉からも感じられてさみしかった。学科が誰よりもよくできて、はめられるのが、ただ一つのうれしさ、ほこらしさだったが、遊びの世界では通用しない。

「赤ンぼは、どこから生まれるか、知っているか」

子供らしくない話だったし、こんな会話は始めてなので、つい意味もわからぬままに、赤くなっていると、

「――からだよ。ね、すみおさん？」

と、優等生だった自分に問いかけたのは、同学年で一番きりょう良しの少女だった。学科のできぬ子だったので、ことごとくに軽蔑するように心掛けていたが、一日中何をして心にかかるのはこの子のことで、性欲のない

恋というものがあるとしたら、十三才のそのころは淡い初恋のころだった。

「―からだつて。そこは、小便するだけのものでないか。ちがうよ、此所だよ」

全身で首をふつて、自分が指さしたのは、へその直ぐ下だった。幼い頃銭湯で見受けた女の五月帯の場所で、そこを刃物で切りさいて嬰兒を取り出すものと、印象づけられていたのだった。すると、皆は、わあとはやしたてる。女の子の美しい瞳が、瞳をかすめる。このことを言い出した男の子が、肩を叩いて、又言った。みだらな言葉だったらしく、なおさわいで、大人たちが何ごとぞとあちこちから眺めるので：ますますどぎまぎしてしまい、その言葉は全然判らなかった。

「なに？　なにがおかしいの」しじまを破つて娘はいった。

そうした淡い思い出にうす赤くなうて、ふと見る圭子の腰の線が、見てならぬものに思えてきた。

植えつけが近よってくる。これは蟻殺しをしなければならぬと、いうことだった。ことほど、この村には大蟻が多く、まき場の周辺の雑作地は、夜毎にタツ―印の殺蟻剤をもってまわらなければならなかった。今年はタツ―を一箱つかったとか、いや一箱どころか、二箱も用いたとか、まるで自慢のように拡まってくるのだった。

その時期になると、殺蟻剤のガスで鼻を赤くはれあがらせるのが、村人の常で、殺しても殺しても、蟻は絶ゆることなく、今さらのようにサウバがブラジルを倒すか、ブラジルが大蟻をたおすか、という言葉を口にのぼすだった。

ガス発生体のアルセニコを個人で買うよりも共同で求めようではないか、という声があがり、毎年共同購入をするのも、自然のなりゆきで、去年は百キロ入の樽を三本買った。一昨年は四本もとめた。本年も三百キロ注文したら、それだけが一つの樽に入ってきた。町の新型のカミニヨンでとどけられたのだ。

うちと圭子のうちと、野菜作りのすきなおさく婆さん、その他二軒のもので、分けることになっていた。

、各自が容器をもつて、約束の日曜の朝圭子の家に集まる。よく晴れわたった朝で、その二三日前の小雨に、永いあいだ地上をさまよっていた煙の大群が、追いはらわれていったので、澄みに澄み切っていた。風が強いので、

家のかげに樽をころがしていった。風の烈しさに、薬品のとび散るのをおしむ、細かい注意からだ。

おさく婆さんは、以前から野菜をかつぐのに閉口して、

早く分配してほしかったが、樽に表記されている量だ

け、ない場合があるかも知れぬと、皆の顔がそろろう日を待って、のびのびになっていたのだった。で、婆さんは、分配するあいだも、忙しそうに先頭になって、二のうでまで真白にして、年らしきもない、かいがいしさでたち働いた。

圭子は、ちよつと窓から顔を出して、あごで自分に朝のあいさつを送っただけで、くりやで母と話していた。「さて、この空樽をどうしますかな。取り手がありませんかな」

一通り分配し終えて、三百キロの余分にあつた五キロばかりを片付けて、圭子の父がいった。

「さあ、この樽はなあ、去年の分を水桶にしたが、木がもろくて、半年も便わぬうちに、くさってしもうて、役にたちませんが」

「でも、これは去年の分の三倍もあるから、何か物入れにでもなりましょうが、米びつなどに、どんなものですか」

「いやあ、うちにはそれがもう、セードロで作った大きいのが、ありますしな」

なぜと、話が出たが、結局圭子の父が、「これやなんですな、この樽を時価に見積って、誰かに取ってもらって、運賃にでも回すことにし、とり手がなかったら、くじ引きにして、当った人に払ってもらうんですな」

その提言に父が早速同意し、他の二人は顔を見合わせて、何か言いたげだったが、結局そのとおりに定まった。

残るのは、おさく婆さんだ。いつの間にやら圭子や、その母と話しこんでいるのへ「圭子の父が、樽はくじにすることにしたから」と言うと、婆さんも、一も二もなく賛成し、くじを引くと婆さんに当たり、婆さんはわしは若い時からくじ運が強くてと喜び、車でむかえに来た息子に、それを積ませて帰っていった。婆さんの頭にかぶった白いレンソが、小さくなるまで見送って、圭子の家に入る。

いつにも変らぬ圭子の笑顔が、父の手前気はずかしかった。

それから一月ばかりしてから、自家と圭子の家とは、足しげく交際することになった。それ以前は、何事につけても、圭子の家を悪く言っていた父と母が、今までの反対になった。あばたが、えくぼになった。そのもとは、共同で買ったアルセニコ・プランコの樽代を請求に、父と圭子の父とで、おさく婆さんのところに行ったことにある。

婆さんとしては、空樽はくじに当たった人にあたえられるべきで、代金は払えない。代金を支払うくらいなら要らないから、持って行ってくれというのだ。

「そうじゃない。あの時の話は、くじに当たった人が相場

だけの金を払って、樽を持って行くことになっていたのだ」

「そんな馬鹿なことがあるものか。あの樽をみんなが欲しがっていたのを、くじにしたのなら、当たったのだから金を出すが、みんなの要らぬものを、くじで押しつけられて、誰が金を払うものか」

婆さんの言うことが正しかったので、他の若い二人の家長がそれとなく婆さんの肩を持ち、圭子の父と父は、面目まるつぶれとなったが、なお意地を捨てず、容易に折れず、二人だけになつて、どちらもいける酒できえんを挙げた。

それからというものは、今までの疎遠に打って變つて、春の深みと共に、深くつきあうようになっていった。親密になる。それは物の贈答だった。豚を殺せば肉、もらい物があればお裾分け、野菜がよくできたと一部を届ける。

ろくに読みもしない雑誌の取り替っこ。その使いの役にされるのが嬉しかった。むこうから、いつも圭子。来ると必ず部屋をのぞく。

「あら、本を読んでいるの。なあに。あ、キングなの。生意気にもうこんなの読むの。パイに叱られやしないの？」

「ううん。叱られるものか」

「あら、すみおさん。おなかが空いてるの。くうくう鳴

ってるじゃないの。裏へ行ってお餅をたべて采なさい」
「うちにや、餅なんかないよ。ママイ、どつかへ行っておしゃべりしてるだろうから、今日はお昼抜きなんだから」

「ま、ひどいこと。わたしお餅持って来たのよ。食べて采なさい。つきたてだから、おいしいうちに食べなさい」

「圭ちゃんとこのは、あんこがちよっぴりだからな」

ふざけながらいうと、まあと、にらんで、肩のあたりをつねる。少し大げさに、いたいというと、くりやの母に氣をかねて、憎らしいと、小声でいうて離れる。

なんでもないことにはしゃいで、声をあげたり、こうして一つの部屋に、二人だけでいられることが、大きな満足だった。が、それもそれだけのもので、話がとぎれて相対すると、さけがたい苦しみが湧いてくるようだった。他愛のない話が、二人のすべてだった。

「これ、いいわねエ」

電髪をした雑誌の女性の写真に指を置く。

「こんな風に、雀の巣を頭にのせたいの」

尋ねると、年かさの女らしいところは消え失せて、やさしく、こっくりとうなづく。

「へエー。こんなのがいいかなあ。あたらしい髪をなあ」

と大きく息をして見詰めると、

「でも、とても美しいじゃないの。町に行くと、こんな

にしていると、気が引けてならないのよ」

と、おさげの毛をふくよかな手で、受けて見せる。

「でも、ちりちりにしたら、パパイにすつぽりと、やられてしまうよ」

真顔になって、首を人指しゆびで二、三度かるく切るまねをすると、肩をすぼめ、指につばをつけて、次のページをだまってくる。どれもこれも、写真のあるページだ。自分はビール箱の書棚から、小説をとり出して読む。

いすは圭子にゆずったので板の寝台が腰かけとなる。目は本にあるのだが体全体で、圭子の動きを感じていて、目に入る活字も頭にははまらない。「なに、それ？」と圭子が立ちあがって、小説をとり、さし絵のないのを見ると、

「何さ、こんなもの」

と、それを小さい手作りの机の上にはうり出して、すみおさんに日本語習おうかな、と言う。娘は、日本字もブラジル字も読めない農家の娘だった。自分が本を読むということがさみしいらしい。

「ないたことがあるの？」

「赤ん坊のころには、アンアン泣いたさ。今は泣かない。男だもの」

「そうかしら。涙のない人なんてつまらないわ。ほんとに泣いたことないの」

「いやな目つきだなあ。涙を出さない筈はないと、にらみつけているじゃないか」

「にらんでいるんじゃないわ。でも、泣けることがあるんでしょ。ね？」

素直に深くうなづくと、圭子の瞳が輝きを増してくる。

「星を見ていたら、涙がにじんできたんだよ。淋しいのでもなければ、嬉しいのでもない。あの椰子ね。あの椰子のそばの星やら、あれから少しはなれた孤りばっちの星が、きらきらするのを見とどけていたらへひとりでに熱い涙がころがり出たんだよ。その時、誰も見ていないのに、後めたい恥かしさで、自分の寝台にひっくり返ってしまったけど、夜もふけてから被った毛布のなかで、うれしかったよ。圭ちゃんじゃないけど、星や花を見て泣けるなんて、それだけ心が清いんだろうと思って。こんな気持ち判る？」

話し始めて返事のないまま、ひとりごとめいて、ときれとぎれに話しつつけると、吾が事ながらしんみりとして、わびしさが胸をしめ、重くなってきた心で「判る？」と答えをうながせば、

「判るわ。判るわよ。あたしだって、そんな気持ちになるの。なにがなんだか判らなくて、涙がにじんでくるの。」

ママイが、短歌だの、詩だのてやかましくいうけど、こ

んな心がうたになるのだと思うの。字は読めなくて、歌ができなくても、歌の心は判るわ。女の子ばかりが、こんな気分になるかと思ったら、男だつてやはりそうなの？ 涙の多いのは、それだけ心が余っているのだから美しいことなのね」

十二月にはいれば、この土地あたりは、棉が腰を切つて成育の身構えをする。一目、いくつかの丘の起伏は、棉のうねにいくすじもの斜線が青くひかれ、人に知られる奥ノロエステの暑さが、本格的になってくる。

暑さにうだつていても、こうした話をマンガの実のぶらさがる蔭で過せば、心たのしくすがしく、実の姉をもつてみたい、いや実の姉だつて、こうはゆくまいなどと、話のとぎれとぎれに思つてみたりもするのだつた。

「泣くつていえば、満江さんたら、お嫁に行くとき、家を出しなに声をあげて泣いたのだつて。知っている？ あすこの外人が笑つて話してたの。満江さんは、お見合のとき、おむこさんの横顔をちらっと見ただけで、気がすすまず断つたのですつて、そしたら、その仲人さんが蒲江さんの兄さんのお嫁さん、そら、知っているでしょう。背の高いひよろひよろした人、あの人を世話した人だから、兄さんも、小母さんもいやいとせめられ、蒲江さんは又、兄さんたちに口説かれて、いやいや嫁ぐことにしたのだつて。だからいよいよその日になって、ま

ともにおむこさんを見たら、心の底から嫌になって、哀しく泣いたんですって。そうしたら妹の春ちゃんやら、小母さんまで、それとは知らずに、ひきこまれておいおい泣いたので、仲人のおばさんは困って、『あつ嬉しいだろ。嬉し泣き。嬉しなき。さあさあ、自動車に乗った、乗った』と押しこんでしまったの。あんなにしてお嫁に行くの、可表そうね」

濃いマンガの葉蔭で、上気して語る圭子に、あいづちを打てば、喜んで果てもないほど続ける。こうして人の結婚のうわさをするのは、相手が誰であろうと、外のなにより楽しいいらしかった。

「嫌よ。あたし、あんな風にお嫁に行くのはいやよ。それより、知っている人なら、少しはきれいな人でもいいわ。黒人でもいいわー。いやよ、いやよ。まだお嫁になんかゆくものですか。すみおさんだって、いつかは、お嫁さんをもらうんでしょ。その時まで、どこにも行かないのよ」

「そんな、そんな馬鹿なことってあるものか」

充分に伸びた棉が、ころろとたくさん実をつけて、百姓の仕事もほっと一息ついたところだった。丘への道は、柏の枝が伸びて、ふさいでしまったところもある。足を濡らして月の路を駆けあがる。

「本当よ。本当よ」

圭子は、ほつれ髪を右手でかきあげながら、こくり、

こくりとうなずく。

「私ね、昭和植民地の山田さんとこへ、すみおさんのパイのお世話でお嫁に行くの。でも、蒲江さんのように、

泣きはしないの。だからといって、笑っていくんじゃないのよ。山田さんは、うちにずいぶん沢山お金をくれたんだって。そして、そのお金で、すみおさんとこへ、借金を返すのよ。ここから離れていくの、いやなのだけど、しかたがないことね」

だんだん言葉が優しくなってくると、むやみに悲しくなってきた。胸に湧く憤りは、自分の胸でかみつぶすよりしかたがない。さみしかった。いつにない固いそぶりの圭子と、やっと二人になれたと思ったら、「本当よ、本当よ」とくり返しのことば、まさかと思っただけに痛い言葉だった。

遠く家に帰って、くらい部屋にころがって、蚊に足を吸わせながら、ふと一月ほども前の圭子の言葉を思いうかべていた。

「じゃ、わたし若くて結婚するのね」

圭子と、その弟の登を残して、うちじゅうの者が、圭子の姉の嫁ぎ先に行って、さみしいからとて留守へ、毎晩泊りにいってやったその頃だった。湯あがりにほのかな化粧のにおいをさせた圭子が、暗いカンテラに手をか

ざして、「わたしの生命線は長いでしょう」と言ったのに始まる。暗い灯に、いつもより深みのあるその顔の陰に、彫刻的な美しさをみいだして、目をかがやかせていた自分も、手をさし出して比べて見ると、その半分よりやや長い程度の短さだった。

「早死にするなんかいやだなあ。この世の中の人々が死に絶えてから、一番おしまいに死のうと思っているのに……」

となげくと、

「年とつてしわくちやになつて死ぬのより、若いきれいなうちに、おしまれて死ぬ方がうんといいわ」

などと慰めてくれる。圭子も結婚線の名称を知っていた。小指のつけ根と、その線のへだたりが遠ければ遠いほど、結婚が早いというと、生意気なこと知ってるのねと、いくたびもいくたびも手に灯を近よせて見ている。いつまでもそうしていそうなので、うれしいの、と言うと、そつと灯より離れて横を向く。しのび笑いをしていくようなふうでもあった。

「今夜は、お茶のご馳走になれないか知ら」

「あら、ごめんなさい」

振り向いた顔が美しい。いつもより美しい夜だった。その夜の「じゃ、わたし、早く結婚するのねえ」と、悲痛さといった感じをかすかに帯びた圭子の声がよみがえってきて、さきほどの「本当よ、本当よ」と、うなづ

いた顔と二重になってくる。あの時、圭子はあの話を知っていたのだろうか。知らぬのは自分だけだったのか。別に好きだとも、きらいだとも話し合いた仲でもないが裏切られたようなわびしさに、憤りになるべきでない憤りが、熱い涙となって冷いまくらを濡らし始めていた。

圭子が嫁ぐ朝は、雨が今にも降りそうな暗い朝だった。頼まれて使い走りしながら、いつもと変らぬだらしない着つけの普段着の圭子に、つねの優しさがないように思えたが、今日の夜、人の妻になる人とはどうしても感じられなかった。再び娘として、ここに現われなくなるとは思えなかった。

「いよいよお別れね」

と圭子のいた部屋に、言いつけられて紅白の紙をさがしにいった自分に言う。何も今日は言えなかった。首にまいているレンソをいじっていると、

「お金持ちになりなさいよ」

と、ぽつり後先のないことを言う。言葉の意味を考へもせずになづく。どうしてこの人はタマンコ（ぽっくり）を脱いで靴に替えないのだろうかと、うなづきながら、そんなことを思っていた。出てゆこうとすると、さようならと、細い声でいう。その細さにふりかえつてみると、背を見せて、圭子は手箱をさぐっている。

音のしないように、そっと扉をしめて部屋を出た。

お嫁に行くのは嬉しいのだろうか、悲しいのだろうか。

いつもと表情の変らぬ娘を心に浮かべて外に出ると、雲間に太陽がのぞいていた。

あやちゃんは、圭子に似ている。あやちゃんは十二である。同じ年かさの少女たちと、いかにもたのしそうに、

手伝いの人たちのごたつく間を、あちらこちらとのぞいて歩いていて、犬のようだといって追われるのだが、どう言われても嬉しいとみえて、五月の蠅のように去ろうとしないのである。「すみおさん」と、あまえた声が、圭子とちがったつややかさがあって、いとおしいものに見える。

一人がこれちようだと、かたわらにあった饅頭の山を指さすと、あとの二人も声をそろえる。だめだ。いけないよ。もつと後でと優しくいっても、ぐずぐずして、その場を去らない。ねえ、あやちゃん、こんどまちに行ったら、よいものを買って来てあげるから、今はだめと白い目を見せても、なかなか行かない。よい物とは何だと尋ね返す。しばらくだまっでいて、ママデラ（哺乳機）というと、あや子がとびついて来て、あちこちをつねり始める。と、みんなして笑い、つねりの総攻撃。降参降参と逃げだすと、窓で圭子の顔が笑っていた。その顔に自分はほっとした。ほんのさっきの圭子は

常とは表情が変わってはいないが、余りにもさみしい人と見えた故。

夜になって、雨がほそぼそ座り始めた。美しく粧った圭子が、自動車に乗りこむ。その晴着を濡らすまじと、母が傘をさしかける。美しい。昼間の圭子とちがった美しい圭子が、またたく間に自動車の座席に納まってしまった。その座席へみんながかざす灯の群に浮ぶ圭子を、今はもう悲しくもなく、じいっと見詰めておれる自分が、あわれとも頼もしくも思えてくる。

雨がぽつりと頬を打つ。ひしとあやちゃんが自分によりそって、自動車のうちを眺めていたが、ふと振りあおいで、にっこり笑う。

「美しいね」

「ええ。とてもきれい」

うなずきもせず、目を見返して言う。

やがて、ヘッドライトがともる。

動きだした自動車の灯に写し出されたのは、隣家のおさく婆さんの樽だった。が、それも、自動車がハンドルを切り替えると一瞬にして消え失せる。道はおさく婆さんの家の手前で折れて本通りに出るのだ。

問題だったあの樽。

その樽が五月帯をした女の腹とひとときの光の中に見えた。船上の少年の日や、かずかずの圭子の想い出が、

灯をいれた走馬灯のように、頭にどつとあふれる。樽は、

何かに汚れて、一部が白く見えたのか、他の大部分がうすぐろくなり、一部が帯のようにもとの白さが残っていたのか、一瞬の印象が後を引いて連想が次々に続いて去らぬ。

叔母の産室のとなりの部屋で過した一夜。

産後が悪くて死んだ人の葬式。

遠い昔、弟の生まれた日の記憶。

世の女と同じに圭子も五月帯をする女となるのだ。いくたびも、いくたびも。果てはおさく婆さんのようになり果てる。そうして自分は……。

仰ぐと空の一部に星が見えていて、一滴、目のあたりに雨がおちる。

風が裏の竹やぶをおそって近よって来る。

家のなかで騒ぐ声のなかから、自分を呼ぶあやちゃんの声が高い。

（一九四九年）

なすび

ロテリアを買う女

北島文子

略歴 ペン・ネーム北島府末子。一九〇六年、横浜市に生る。旧姓渡辺。病院長の娘。十三才で左腕の自由を失う。

日本女子商業、日進英語、アテネ・フランセ、その他に通ったが、病息のためいずれも中退。一九二九年、ブラジルに渡り、リオ・デ・ジャネイロのコレジオ・バチスタに三年間通った。

一九三二年、帰国。同年、『新青年』誌の新人紹介で作品発表。爾来、同誌に推理小説を発表するかたわら、海外興業KKの嘱託となり、ほんやく・雑誌編集などに従事した。

一九三五年再渡伯後、北島薬剤師と結婚したが、戦後長い別居生活をした。一九四八年「よみもの」誌創刊以来、編集に携り、推理・実話小説、ルポなどを担当。各誌に作品を発表。一九六四年、サンパウロ市にて死亡。著書に『北島府末子作品集』（一九六四年）がある。

なすび

何でも大きな籠のようなものであった。

その中に、大きな美事な位艶々とした長茄子が、ドツサリ盛られているのである。周囲にどんな人がいたかも、その場所がどのような所であったのかも、全然おぼえない。ただ沢山の茄子が青竹の籠の中に盛り上る様子にぎっしりと詰り、そのまるい紫紺の頭の色と形とが、眼ざめてからもへんに鮮やかな印象として残っていた。

とにかく、奇妙な夢であった。平常は朝起きるとすぐ忘れてしまう夢が、その日一日記憶に残っているのも不思議であつた。

昼食後のあと片付けをしている時、考えともなくそのことを思い出していた彼女は、ふとある事に想到してあッ小さく叫んだ。

茄子の夢……一富士、二鷹、三茄子ってー吉兆じやなかったか知らー そう気がつくとき、殆んど同時に、明日が南米銀行の訪日債券の第一回の抽選日であつたことを思い出した。

そして彼女もまた、こっそりと、たった一枚を針箱の抽出しの底に納めていたのである。

それに思い及んだ時、彼女はもう黙っていられなくな
った。

話ずきな、どちらかといえは秘密のたもてない女一般
の通癖を、女性につきもののささやかな見栄と共に彼女
もまた備えていたのである。

「ねえ、松村さん。私昨夜ね、とてもいい夢見ちゃった
のよ……。茄子の夢……」

松村みね子は下町の雑貨商につとめてい、夏江の家に
間借りの自炊生活をしている二十八歳のわびしい老嬢で
ある。

ひどい近眼のうえに、肥って背が低く、最早人生はた
そがれた様にひとりできめてしまっているインフエリオ
リティー・コンプレックスにとりつかれている陰気な性
格でつつましい生活を身固く守りながら本を読むだけが
唯一の生甲斐と思って何年かを過してきたのだが、最近
では「ビッショ」という不思議なナンバーゲームにう
ちこんでいる。

台所の一隅でひとり黙々と遅い昼食の箸を動かしてい
たみね子はゆっくりと顔をあげて箸の手を止め、

「茄子のゆめ？」

と呟くようにいった。

茄子を食べる動物は何だろうと、心の中で突暖に考え
たが、牛も馬も豚も山羊もみんな茄子を好むような気が
した。

「そら、あの、昔からいうでしょう？一富士、二鷹、三茄子って？　初夢のうちに一番いいんでしょう？　浦田さんのおじさんもいつか富士山の夢を見てそれからどんだん玉菜（キャベツ）が当たりだして大儲けしたじゃないの」

「そんな事もあつたわね」

老嬢はそれよりも「ビッショ」なるナンバー・ゲームにおけるプロバビリテイの方が大切であり、思考はおのずとその方に向いてしまうので、はかばかしい返事にはならない。

二十五種の動物の顔かたちと、茄子とが鰯の干物でお茶づけをかき込んでいるみね子の頭の中を忙しく去来した。

「ねえ！」と夏江はいささか焦れて、それが最後の、最も言いたい主目的を早口に出した。

「明日、あれの抽選の日じゃなかった？　午後三時から」
「ああ、あの訪日債券？」

松村みね子も実をいえば、月給を割いた零細な貯金のうちから、こつそりと一枚を購（か）っていたので「明日が抽選」ということは知らないどころではなかった。味気ない彼女の人生にとって「日本訪問」の希望は、ああ、何と無上の楽しみであつたことだろう！　が、そうはつきりと真正面からいわれてしまうとなぜかすぐには応じられない気になり、わざとはぐらかすように、

「あら？そう？うつかりしていた……。明日だったの」といつてみた。これは哀しくはかない彼女の虚栄である。

「そうよ！私きつと当るわよ！」

強い、確信にみちた、何となく押し被せるような言い方であつた。これは夏江の平常の性癖であり、自分は常に正しいと自ら思い込んでいる人に共通の態度である。「当る？貴女のが？」

老嬢はびつくりしたような表情になつた。瞬間、羨望に似た気持が心のどこかを掠めた。まだ仮空のことであっても、人はあまりに確信的に言われると、誘い込まれて瞬間それが事実のような錯覚におちるのである。

「貴女、そしたら本当に行く勇氣出る？たった一人で？そして旅費はどうするの？」

中流の俸給生活者、それもまだやつと結婚して十一年目、生活の基礎もまだ固まっていない夏江達の経済を松村はよく知っていた。

「――あ、旅費」

瞬間、夏江の表情は凋んだように翳つた。

「――本当、旅費がないわね」

「東京から熊本まで、いくら女が儉約だからつて言つたつて――十コントス位は要るでしょう？往復ですものね」皿を拭く手を止めて、夏江はじつと瞳を宙に凝らすのである。

内職の男児用シャツの請負仕事で月々相当まとまったものを稼ぎ、時とすると夫の月給以上のこともあり、ラジオや良人の久平がたった一つの道楽である麻雀の道具も蓄音機も、みんな彼女のミシンが働き出してつくったようなものであり、時とすると久平の麻雀の牌のあと始末まで引きうけさせられることがある。が、それでもまだ子供がないので良人に内緒で月々わずかずつは貯えてあるのがカイシャ・エコノミカに二、三コントスはあるのだが――

「それじゃまだ足りないわね」

――吐息と共に夏江は一人言を呟いた。

晩の食事の時、彼女は昨夜の夢の話と、そのためにどうしてもかくしておけなくなって、訪日債券のことも話してしまう仕儀になった。勤め先から帰った久平は、いつものように大急ぎで夕飯を了うと、今夜の約束のイチヤン仲間の集る場所へ行くのにオニブスにしようか、電車にしようか、いつそロタソンで行こうかなどと考えていた折なので半分以上はうわの空できいていたが、ふと気がついたような表情になって、じつと妻の顔を見た。

「お前、そんな、債券買うような金持っていたのか？ いつも俺に無い無い言いながら――」

妻には良人の不平顔がおかしかった。

「債券だって、たった一枚じゃないの。それ位あります

よ」

「俺が困って、貸せ言うとき貸しもせんで　　―　水臭いな、お前は」

しかし、真実良人は別に妻を水臭いとは思ってはいないのである。

何か重大な入用事でもあれば、いずれはその債券をとり上げてしまうことも容易なことである。日本式の良人と妻の間柄ではないか。妻の位置はまるで鵜匠に操られている鵜と変りはない。呑み込んでいたって、やがて良人の手にしぼりあげられてしまう。それが何百年、日本人の妻と良人との不文律ではないか。

「おい、それよりお前今夜は少し貸してくれんか。凍結令解除のことで、寄り合いがあるのだ」

「無尽のより合いならお金の要るってこともあるけれど、凍結令に何でお金がいるの？」

「そんな詮索はどうでもいい―いよ。早く出してくれ。勝っ

たら返す」

時間を気にしている良人は、あわててついうっかりと真実を言ってしまった。

「――そらね！又麻雀！」

夏江は笑いだした。

良人も照臭そうに苦笑したが、知れてしまうと却って居直り、

「二百ミル無いか」

出て行く時、扉口で振り返り、

「お前の債券が当るように祈るよ」

微笑って言った。

その夜は、夏江は気前がよかった。

良人に軍資金を易々として、渡して出してやると、楽しい空想に、一時食卓の前に坐ったまま、ぼんやりと空想のとりこになっていた。

そこへ、同居のみね子が

「ああ、疲れた」

といいながら帰ってきた。

珍しくみね子の後から良人の末弟の義雄が入って来た。

「いまそこで義夫さんと一緒になったので」

みね子は、老嬢特有の神経過敏さでそんな事を低い声で言ったが、訪日の空想に有頂天になっている夏江の耳には入らなかった。

「何かいい事でもありますかね。ばかに嬉しそうじゃないか、嫁さんは」

義雄はドツカリと食卓の前に陣取ると娘と松村の顔を等分に眺め、ゆつくりと紙巻をとり出した。

「あのね、義ちゃん。私日本に行くんだけど、旅費がないので困っているのよ」

「日本へ？義姉さんが？本当に行くの？」

「本当よ、もうきまつているの」

「それはそれは。兄貴、しばらくはのんびりだなア、結構ですな」

「いやな義ちゃんね。それよりお餞別項戴よ、ね？」

「でも娘さんは大胆だなア、旅費もないのにどうして行かれるんだい、何だか変な話だ」

「こういう訳なのよ。実はねえ……」

夏江は弾み切った声で早口に茄子の夢の話から債券の抽選日が明日であること、一富士、二鷹、三茄子の吉夢であること、等を自分だけよく解っている説明の仕方で性

急に話すのである。

義姉さんは、実に話が下手だなア……と笑いながら頭脳明哲な義弟はふん、ふんときいていたが、

「なアんだ、大方そんなことだろうと思った……」

「だけど義ちゃん、もし当たったらどうする？そんなにばかにするけど」

「それア、当然ないとも限らないね」

「そら、ごらんなさい……。それでね。私日本まで行くのはそれでいいけど、東京から生家までの旅費に困ってるの」

「一体いくら位かかるんだ」

「――そうね……。いくらかしら」

「二十コントス位あったら大丈夫ね。女の人が一人ですもの。男のようには使わないと思うわ」

とそれまで黙って食事の仕度をしていたみね子が薬缶（やかん）に水を注ぎながら言った。

「何だ、二十コントスか……。よし！義姉さん、僕が出してあげよう」

「えッ！義ちゃん？それ、本当？」

「本当さ」

この義弟の日頃の真面目さを知っている夏江もみね子もそれは信じられる事に思われた。

夏江は眼を瞳り驚愕の口をあけて義弟を眺めた。感動にしばらく何も言えない風であった。義弟はこやニヤしながら無言で煙草を喫っていたが、

「義姉さんの里の人達にお土産をやろうかな、一人に一万円ずつ……。一体、何人姉妹がいるの？」

「八人 エーとみんなで九人よ」

「エッ！九人？そりや大変だ」

それで三人は笑い出した。

戦争の直前、最初の支那事変で負傷して帰還したばかりの久平はそこで父母の急死に遭い、知り合いの家の娘であった夏江を無理に貰って、三人の弟は現役で北支や海軍に居たので末弟の十九になったばかりの義雄と三人家族で、あわただしくブラジルへ移住して来たのであった。それから十一年、日本に残した三人の弟は予想通り

戦死したが、夏江の家族達は父母兄弟姉妹とも皆健康で戦災にも遭わず、熊本の市外に農業で豊かに暮らしていた。

久平も夏江も親代々の熊本県人である。

「私があの時分あなたの所へ嫁にきてあげなければ、貴方はブラジルへ来損って、もうとつくに、どこかで戦死していますよ。義ちゃんだって生きていないわ」

事実その通りであった。久平達の渡伯直後、軍籍にある者はもう誰も国外へ出ることは許されなくなつて了つた。ほんの数旬のちがいで、久平達は渡伯できたのである。

「だから私を一ぺん日本へやって！親達の生きているうちに、もう一度連れて来ますって約束だったじゃないの」

しかし、それは無理であつた。

正直な一商会の社員にすぎない久平の俸給では、一生かかっても、夏江を飛行機で日本へやる、などということとはできる事ではなかった。

末弟の義雄は兄と違って非凡な商才があり、若くてもひとかどのコーヒー仲買人として聖市のコーヒー取引所では顔の売れた腕利きであつた。まだ独身で下町のアパートに住み、時々ふらりと兄の家に来て家庭的な雰囲気を楽しんでは帰るのであつた。

「あの時、妾（わたし）が兄さんの申込みにうんと言わ

なかったら　―　義ちゃんだって今頃は、ビルマのどこかで骨になっているか、よくてもシベリヤ帰りよ」

夏江はよく恩に着せた。

「判った、判った。もういいよ」

上品な趣味のいい服装に、商売人とはまるで見えず、顔立ちも知的でどこか大学の助教授といった雰囲気をもっている三十才の弟は、落着いた態度で座を起ちながらいうのであった。

「あんまり、それも度々いわれると、有難味がなくなるよ。嫂さん　―　恩に着せるんだなあ……あんたは！」

やっぱり義ちゃんはそのことをちゃんと考えていてくれたのよ、松村さん　―　義弟の帰ったあとがまたひとさわぎであった。有頂天になった、夏江の絶え間のない饒舌につかまり自室に引き上げる機会を失った松村みね子はだんだん味気なくなるのである。自分だけが必ず当るものと頭からきめて、訪日の計画やあとの始末をあれこれと喋っている夏江の自分本意は、しかし、私にもあるのだと、みね子は心の中でひそかに苦笑するのだが、そのうちふと夏江が、へんに真剣な顔になった。

「それはそうと、松村さん。あんた、私の留守中どうするの？」

何とうかつだったことかと、相手の有頂天に釣り込まれて、くだらぬ相槌など打っていた自分の愚かさに気付いて、あッと瞬間、棒を呑んだようになった　―　する

と俄かに心の中であわでだすものがある。それは間をおかず一つのおそれに変って行つた……。

夏江が日本へ行くことを、みね子が心の中で喜んでゐる！とでも、夏江に思われはしなかったか――というおそれである。これは、くだらない思い過しには違ひなかつたが、世の中には非常に瑣細な、くだらないと思われることが、案外重大であつたりする場合も往々あることをみね子は知っていた。世間の怖しさを知っていた。と言つてもよい自然神経過敏になるのであるが、この神経過敏には女がひとりで世の中に生きて行く哀しい裏打ちがされているのである。

「明日にでも、越さなければ」みね子は心の中までお白んだ氣持でひそかに呟いた。

「越さなくともいいわ。貴女だつて、急にゆく所はないでしょう？」

しかし、夏江の言葉と腹裏とは別々である事は世馴れたみね子はどうに察していた。また貸間を探して歩くのかと思うと、もうそのわずらわしさで心が滅入るのである。

それを表面はつとめてさりげなく友達の喜びを共に喜んでやらねばならぬ苦痛に、みね子の心はゆううつになつた。自然とつまらない表情におちいるのだが、夏江はもはや郷里の日本に着いた時の空想でほとんどひとりで喋べるのである。二人とも同じように債券を買っているの

だが、この場合は少しも友達の債券の当落に心の向かないのは人間の自然の本能であろうか。

自分の債券の当っていることしか考えられないのは、片手おちの考え方だと思うのは冷静な傍人の考え方で、自分の債券の当りに熱中している本人にとっては、それが結構楽しいことにはちがいない。一人が仮に一枚買うとしても一万人の人々に或いはその三分の二に近い人々が、こうして、抽選の日までを、限らない楽しい夢を追って毎日が過せるなら、この債券の売出しは大変な供徳である。

みね子は、自室に帰って眠る前、手函の底からソツと自分の債券を出してみた……。たった一枚……。こんな紙切れが人間の心をあんなにも飛躍させ、あんなにも和やかに、夢多くするのが不思議であつた。

偶然を信じて生きる人間の何と多いことであろう。そして、それはただ忙しくて苦渋なこの世の中に人間に許されたわずかな幸福である……。が、自分の債券の番号はどうしても当りそうにも思われず、みね子はホツと吐息を洩らすとボソボソとまたそれを元にしまった。机の前に坐りこれから日課の読書を始めるのである。訪日の空想よりも、現実の書物の面白さに引き入れられて、いつしか我を忘れて行くことができた。

約半年間、一万人の夢と希望をこもごも織りまぜてき

た抽選の日は土曜日であつた。

「きつと当っているわ」

夏江は、朝から何度もそう言った。ひとり言まで呟やいた。南銀の係員が恭しく訪日往復の飛行切符を机の上に並べて「お目出度うございます」と自分に向つて言う光景さえが、空想家でもない夏江の瞼に浮んだり消えたりした。

「茄子は三茄子つて三番目だから、私今日は三の数に賭けてみるわ」

みね子は朝、そんなことを言いながら出動したが、夕方嬉しそうな表情で帰つて来た。

「やっぱり当つたわ。あのね、今日は馬の方に賭けてみたの、そしたら……これ！」

百ミルばかりの金を出して見せた。

「私の債券だつて、きつと当っているから……」

夏江は、その晩前祝いだといつて美味しい御馳走をこしらえて、みね子にも振舞つた。

が、月曜日の発表でみると債券はほかの人に当つていた。

「あなたに当ればよかったにねえ。本当はあなたに当らなければならぬのにね」

故郷の阿蘇山に九十歳の老祖母とたった一人の母が待つてゐる松村みね子を見ながら、夏江は思い出したよう

に言った。当否のはつきりしないうちは、少しも松村のことなど念頭に浮ばなかったが、当落がはつきりして下って、そして自分が当つていなかった、と知った時、はじめて松村に当ればよかったのにと、いう感情が夏江の心に湧いたのも不思議であったが、これが人間の自然の感情なのかも知れなかった。

（一九五〇年）

ロテリアを買う女

大体サンパウロの十二月は雨期の最中なので、三日は
れていると、四日目にはもう空模様が怪しくなる。それ
までカッカッと照っていた陽が突然黒雲の彼方に没し、
市街いちめん鉛色のかげに被われたようにかげりはじめ
たかと思うと、もう篠つく雨に街頭はたちまち騒々しい
雨の音と、細いガラスの管を束ねておとすような太い雨
脚に、面喰らった市民はプラッサ・ダ・セエやジョン・
メンデスの広場を右往左往、商店の軒下、ビルディング
の入口、電卓停留所の円柱のかげ、バス発着所の日覆い
の下、と、それぞれしゃへい物を目がけてかけ込むの
は、

まるで敵機を頭上に迎えた空襲下の交戦国民の逃げ惑う
有様を彷彿とさせるのであるが、流石に誰も生命を賭け
ておらぬ暢気さには、こんな騒ぎの中にも軒下に屯ろす
る男共の眼と心は眼前をかけすぎる美女のぬれたお尻の
まる味や白い脚を伝って流れる雨水の光にあらぬ連想を
誘われたり、へんな妄想にとりつかれて、思わずズボン
の前のボタンに手をやってみたりする。

二、三時間もすると、篠つく大雨もカラリとほれて街

路を流れる濁水だけが、さっきの名残りとどめているだけで、ふたたび街は午後の烈日の下にすべてが明るく輝きだし、仰ぐ碧空はさらに碧く、まるで中年女の喜怒衷樂にも似たヒステリーじみたお天気となる。

歳末のジョン・メンドス広場は、その日もそんなあとで、しつとりとしめった空気と、やや暑い陽光のなかに和んで、そして地上は相変らずの雑踏であつた。

夜ならば、青や赤や黄の原色の電飾がこれに一層の美しさを添えるのであらう。広場の前の商店街は、砂埃りを洗いあげられたおつとせいの背中のように黒くつやつやと滑らかに光っている。電車停留所の屋根の下、次々と無限に流れるように入つて来ては、黒蟻のような人間どもを吐きだし、又積みませて出て行く電車、デコボコの石敷き道を、断れ目もないくらいあとからあとからと流れてゆく自動車は、それらを縫つて、或いは歩み、或いは立ちどまる老若の男、女、人の世の悲喜憂患、或いは憂歡をそれぞれの心に宿した人間達が、明日の己れの運命はさて知る由もなく、やがて迎えるべき新しい年への準備に、或いはその準備もできかねる貧しい人々もまじえて、さも忙しそうな雑踏である。

「アー、三万五千八百九十四番！鹿（ヴェアード）！降誕祭（ナタール）の大富籤の当りはこれだアー」

「四百四十番！馬（カヴァロ）だ。馬（カヴァロ）だ！」
雑踏する広場の騒音はプラッサ・ダ・セエからジレイ

夕街に到ると一層に激しくなる。というのは十一月十五日街とジレイタ街には、それぞれ大きな富鼓店が三、四軒あり、その店の前に立ち並ぶ富籤売りのせい一杯の叫喚がなおさら雑音を増加させているからである。

馬だの、鹿だの、或いは犬だの、猫だの、豚だの、家畜の名ばかりでなく、獅子、虎、象、鹿、兎、と二十五種程の動物やら鳥禽類の名をそのおの数字の上にあてはめて呼びあげているのは、他国から突然やってきた、エトランゼや旅行者達には一寸判らないが、これは四、五年前、学者出身の州知事が禁止したビツショと呼ばれる数字賭博の名残りで、今もって多年この賭け事に馴れ親んできた市民達や富籤売り達は、習慣上これをきいても格別に怪しみもせず、「おい、豚（ポルコ）一枚くれ」三千三百七十二番（3372）、或いは1570などの数字を誌した富籤を、そこばくの金で購なうと、さつさつとゆき過ぎてゆく。

長年みじめな不運の下で喘ぎ疲れた老人、生活苦と病苦に半ばやけになった中年者、破産の失敗を、この一枚で……と深海に真珠を探るよりも、はかない夢を托して手をさしのべる小商人……或いは何かで景氣のよい酔っぱらいが、一杯きげんで買う万金の希望とゆめ。

コツコツと朝夕をごく地道に正直にいくら世渡りしてみても一向にうだつも上らず、運も来ぬ小男のつとめ人が、ふと心を射倖の通り魔に誘われて歩をとどめる一

瞬、すかさずその背中から、

「オー、旦那。三十万クルゼイロス！ さあ（ヴァモ）
さあ（ヴァモ）！大富（グランデ・ロテリア）でさあ！
一枚（フラッソン）二百五十万クルゼイロ」

つい釣り込まれる三十万クルゼイロス！二十分の一枚としても、当ればさて……一万五千クルゼイロス！乏しき財布を思わず知らずはたいて、さて一万五千クルゼイロのゆめはわがものとはなったが、わが娘が今年中学卒業の白靴を買ってとねだられて、それを購うつもりで、わざわざ市内の実売靴店なら、自分の住んでいる町の靴屋より格安故、このプラッサ・ダ・セエ裏のどこかで買って帰ろうと、ここを通りかかったのが運のつき、白靴代は跡形もなく、明日はまた、会計係にたのんで前借伝票で少し月給を内借りせねば……と、四十男の蒼い顔の表情は、万金のころがりこむ夢と、前借の増加する憂うつとが重なり合って複雑なことになる。

南島富代は、中年の婦人記者であった。

「コロニア」というブラジル中に散在する在留邦人目あての、半ば娯楽、半ばは在伯日本人、或いはコロニアの事情紹介をかねて創刊されたというものの、ありていをいえば、戦後いち早くぞく出した邦字新聞社の中の一社の幹部級の一人が、何かのことでやめ、折柄終戦直後のこととて、母国から雑誌新刊書の類はまだ一

冊も輸入されてはおらず、在伯邦人が戦後日本文字の解禁にもかかわらず、読書に飢え切ったことも恰も渇水湖の魚族の如きを見て、敏なる商売人であつたその男が「コロニア」なる半娯楽大衆雑誌を出したところ、これがたちまち大当りに当って、その機敏なる人物は大儲けはしたものの、柳の下にいつまでも泥鰌はいないの諺に洩れず、その後二、三年して母国からどんどん雑誌、新刊書類が輸入されはじめ、母国の国力の快復につれて、それらの雑誌類の体裁も戦前と変らなくなり、値段も安く売られるようになる、もともと素人記者のより集まりでできていたチャチなコロニア誌はみるみる太陽の前の暁の星の如く影がうすくなり、経営も次第に困難になってきた。

すべてを算盤でゆく経営者のことである。他に打開の道をコロニア社は求めて行き、その他の方面の方が有利になってゆくにつれ、雑誌の方は権威がなくなり、印刷事業や塩魚・干魚販売、中気病みの薬や腎臓薬の販売などを主とする代理部が盛んとなり、編集の方は完全にお添え物の形となってしまった。

記者も必然に離散していき、ただ重宝な存在で、行き所もない可哀そうな存在にすぎない（とその時は、一般にそう思われていたし、実際にそうであつたかもしれない）南島富代と、眼が鋭くてアゴが尖り、色が黒くて、後頭部の偏平な全体の感じから「あの頭の型から見る

と、アノ男、ひよつとすると高麗か百済の末裔じゃねえか」などと蔭で口善悪ない外交員連中に噂されている編集主任の田辺とがわずかに残った。

雑誌が盛に売っていて社運隆々という頃は、浅ましいほどポリチ力をやっていた若手記者連も、社業がおとろえ始めるとそれぞれ他の有利な方面に転身し、残ったこの中年の男女だけが、何か取り残された形で、ふしぎにも二人ともやもめ同志であつた。小心で狭量で少々ひねくれ者の気むずかし屋、偏屈な点などでも共通するとの二人の老朽記者の間に、そのままおけば、或いは何かのはずみで恋愛も起つたかも知れないが、富代が恋愛というよりも男そのものを意識して避けてきたのには、二つの大きな理由があつた。

富代の良人の七五三作は、天才的と言ってもよい建築家であつたが、生れつきの弱氣と、見栄坊とのいわゆる

お坊ちゃん氣質がぬけず、若い時から人にすかれながら、何時も貧乏していた。というのは、いつでも他人に利用だけされて自分はバカを見る、という廻り合わせを持ち、その上宵越しの金を持ちたくない、という江戸ツ子氣質（といえば完全な浪費癖なのであるが、本人にいわせると江戸前の気性なのだそうである）そこへもってきて、父親ゆずりの大酒家のつねとして、酔えばパツパツと金をまいてしまう方なので、これが長年肺を患つ

て、その上ガンを併発して死んだあとは、富代は残された二人の子をどうしても養ってゆかねばならなかったし、本当をいうと南島七五三作との結婚生活においては、富代は夫婦生活の歓びなどというものはついぞ味ったことがなかった。

大体が虚弱で、女性的な筋肉のやわらかい男で、ふつうの男が腕や脛や時とすると手の甲や胸にまで濃い毛が生えているのとは反対に、女のように白いやわ肌はあたかもつきたてのモチのようで、新婚当時から抱れている富代はしばしば良人の軀を女体のようにさえ錯覚したものである。その上、鼻がつまるといって、常用したコカイン剤と大酒の崇りで、極端な萎弱に陥っていた良人は結婚以来、その妻に歓喜を与えるということとはついぞなかったのである。いつも門口でおじぎをしてしまう組で、しかも悲しいことには、そうした事情の下に在っても、造化の神秘というか、まことに健康な子供を二人迄も富代は生んでいた。

それで男体から受ける女体の悦楽などというものには遂に遭遇せず、その内に良人は病重なつてあの世へ逝き、富代には結婚生活のいやな面だけの思い出が残っている始末なので、亡き良人の思い出が忘れられぬ、などという幸福は知らないのである。もともと七五三作と富代との結婚は、第三者が一種の政略的意味から無理に成立させたもので、その上、もう一つ不幸な事実が富代を

少女時代からひどく臆病なものにしていた。それは、富代の肌の秘密である。少女期に大怪我をしたのが原因で、彼女の左肩と左上半身の背部とには、噴火山のような物凄い傷痕があり、芝居でする「切られ与三郎」の背中を見るようであり、長じて後、いろんな人の言葉や書物によって男のもっとも珍重するものは「女の玉の肌」であることを知らされた宮代は、おのが傷痕を恥ずるあまり、一切恋愛にも、男にも心の扉を閉して了ってきたのである。（それは、それをすべて承知の上で結婚してくれたはずの良人でさえもが、現実には、ずい分失望したであろうことを推して、富代はいつも良人にすまないと思うのである）この理由はしかし、表面には現われないので、富代が人生の真の悦楽を知らぬための男性への冷淡を、人は幸いにも富代を物固い人間として扱ってしてくれた。

しかし、富代にも情熱というものがあつた証拠には、そのうちに富代のすべての心が突然ある契機からはずみ、「金」が飲しいということが盲目的になってきた。それ以来「金」に対する狂信的な慾望のとりことなり、それは誰が何といおうとも、富代の心には金が絶対であり決定的であるという信念にこり固って行つた。

ことに、多年一種の物ずきから扱ってきた「犯罪実話」

の調査に没頭すればする程、人間の心の底に潜在する最

大のものは、色と金、この二つの慾望よりなく、口先ではきれいなことを唱えている宗教家ですらも、心では金を欲しているし、救世済世の尊い事業でも、金そのものがなければ、実行できぬというジレンマからすべての人間は解放されること絶無であるという、一つの人生哲学をえたからでもあったが、それでもある日、銀行に迷い込んで何百万の紙幣を見なかったら、富代は、金というものにこんなにも執着しなかったかもしれない。

そのうえ、富代は記者として男達の間立ち混って働くようになってからは、今までは想像もしなかった真の人間社会、男と男の間の様相なども少しずつ判つてきた。

若くて、非常な美人ですべての男を悩殺するような賢さもコケットリーもない、そのうえ、貧しい子供連れの中年の女などは、結局、ただ重宝だからという程度のみとめられ方にすぎず、お互いがギリギリの安月給で生活線上をうき沈みしている状態の現実の職場においては、男対女の関係は忘れられ、男対男にひとしい場合の方が多くなる。同僚より勤勉でありすぎる場合、あるいは技量上において少しでも優秀である場合、例外なく男は同僚から憎まれるのがつねであるが、これは女だからとて、中年の色も恋もない時は男同様である。

仕事の上でお互いが抱く競争意識、嫉視、秘かなる反

感、敵意などを潜めて、つねに相手の地位や給料の昇ることを気にかけている点には、世のすべてのつとめ人氣質に、コロニア社の同僚達といえども、けして洩れてはいなかった。

だが富代の場合だけは、特に損な時もあった。若くもきれいでもなく、社長の眼にもとまらぬうえに、男の同僚達が遊び好きの社長をとりまいて「赤ねこ」で散々飲む折などでも、彼女はいつも孤独においてけぼりの、のけ者にされるのである。

また、それを我れから随伴してゆく程の図々しさも、闊達さも持ち合せない富代は、同僚達が愉快に飲を尽し、果ては酔余って仲間げんかまで仕出かしている頃、夜の三更、五更に至るまで、コツコツと残業を家に持ち帰ってするか、あるいは内職の「サンパウロ日本人洗染業者組合会報」の謄写版刷りのガリ版書きに右指を痺れさせ、両眼を充血させ、肩が石塊の如く固く凝るまでペンを握っているのであった。

子供のために学校で指定した運動具店から体操用のユニフォームを買わねばならなかった月などは、彼女はほとんど一週間以上もバナナ一本とコップ一杯の水で昼食を我慢しなければならなかった。心温かい友達の二、三もあるにはあっても、その人々とて、さして富める人ではなく、弱気など、いうよりは負おしみの強い富代にはどうしても生活苦を訴えてすぎる心地にはなり切れぬの

であった。同じように子供を抱えた他の未亡人達が、パーマネントとか洋裁とかで、婦人記者の何倍かの収入をあげているのをきく時など、何のために貴重な青春を犠牲にしてまでも学問に身をうち込んできたかと、不覚にも割り切れぬ心の疑問を憤ほしく抱いたこともあった。

コロコア社が、雑誌も売れずに潰れそうなのに氣息奄々としてやっているのは、そういう貧しい無能な南島達を養ってやろうという一種の「慈善事業じゃないんですか」などと口の悪い男達から、からかわれたこともあった。

そういう事情も知らず地方の無邪気な読者達は、はるばると遠い北の果ての州から、あるいはアルゼンチン辺境の不便な地方から温い手紙をよこすのである。「お慕いする南島先生」などと幼稚な中にも誠心のこもった十七、八の乙女達からの便りを手にする時、わずかに編集者のよろこびといったような、かすかな誇りを感じるものであったが、しかし富代の唇は、しらずしらず、自嘲のにがさにゆがんでゆくのがつねであった。

「ふふふふ……。南島先生も、実際のこの実物の私を見たら、この読者もトタンにおどろいて『アッ！キタナ島先生』って呼ぶかも知れませんか」

つよい自嘲味をこめてつぶやく富代の鬼氣迫るヒステ

リー一步手前の表情には、長い間同じ編集室で働いてきて馴れている筈の同僚も、しよう然として眼をそらすのである。

世界最大の文明都市として無限に成長すべき資格を備え、日毎に躍進し膨脹し美々しくなつてゆくサンパウロという大都会のけんらんたる事象の一切は、かくて富代には益々自分を虫けら以下、紙屑同様のインフェリオリティ・コンプレックス、つまり劣等感を助長させる以外の何ものでもなく、終には自分のような貧しい弱い者が、何でかようにも喘ぎながら生きてゆかねばならないのか、とさえも時には考えるのであった。

その富代が、ふとしたことから今迄は心の中にけいべつし切ってきた「金」というものに、もの凄い程の俄烈な欲望をもち盲目的なまでに金に渴きをおぼえるようになったのは、二、三年前のサンパウロも最冬の七月のある午後であつた。

良人が亡くなつて、もう三周忌も来ようとしているのに墓石さえも建てられない。

干乾びたごぼうそっくりの、色艶の悪い両掌の指を眺めながら、その日も富代は空腹を堪えて原稿を校正していた。自分の肌が汚れた下着の下でじつとりと汗ばんでくるのがかすかに感じられた。(良人の肺病が感染しているのかもしれない)その心配は彼女の心に恐怖と戦懷とを走らせた。瞬間心に浮んだのが二人の子供。(何と

しても、もう少し生きていなければ！）ああ、まだ幼い二人の子供。

愛情がなくても夫婦が共にいれば自然と生れてくる生きものは、しかし親達のさまざまな苦労は知らず、すすくと伸び、文字をさえ習っている。あの人間が苦しみを知り憂いを知るよすがとなる文字をさえ習い始めているー。

人間苦！にうちひしがれている母親の心も知らず、父親のない子供は明日の命もおぼつかない弱い母おやを唯一のたよりとして食物をねだり、美しい絵本をねだり、曲馬団につれて行つてとせがむ。

その母親の財布には五、六枚の小額紙幣があるばかり。わびしい間借りの室につもるものは塵ばかり、「金」のかけらなどついにつもったこともない。

富代は、栄養物もこの日頃ろくに食べていないこと、思い当り、牛乳でも飲んでこようと、だまって戸外へ出た。

市中は相不変の賑わいであり、美しさであった。何かに反抗してみたいわーあつと叫びたいような苛々した気持を抑えながら、富代はしらずしらず今迄、全然入り込んだこともない銀行街へと、いつか迷い込んでしまっていた……。

ジョン・メンドス広場の「ばけもの屋敷」だと、誰れ

いうとなくいつている位、恐らくこの広場が、まだせまい小さな商業街として発足した頃、建てられたに相違ない、いずれは、遠からず取り払われる運命にある事を誰にも肯ずかせる程の古びた、じつにきたない「コロニア社」の建物などから比べたら呆れるほどの堂々たる、ほとんどそれは莊嚴にさえ見えるほどの大きな石造りの館が建ち並び、その入口や扉口には、ピカピカと黄金色に輝く真鍮の看板がそこにサンパウロ州内、或いはブラジル、或いは南米、或いはヨーロッパやアメリカに名だたる銀行の名を極めて鮮やかに浮き出させていた。

その内部がまた莊嚴で、ある銀行は道路からひと目に見渡せるような広い部屋に大勢の男達が各々大机を並べて熱心にタイプライターや帳簿や書類をいじり、ある銀行は金ピカの真鍮のワクや棒で囲まれた檻のような囲いの中で、各囲いの中に一人ずついる男達が金をかぞえたり、束ねたりしていた。

その壮烈といたいくらいの忙しさ、美事な紙幣の山……に度ぎもをぬかれた富代は、牛乳も、空腹も、微熱さえ忘れ果てて、呆然とそれらを注視して歩いていた。

こうした光景は、世界中のあらゆる国々の中心部で見られる光景に相違ない。ただ私が――私だけが今まで知らなかったのだ……。あまりにも金に縁がなかったために――。でも……と富代は、立ち止って爪をかんだ。イギリスだって、フランスだって、たとえロシアだって――

豊富な国として旧大陸の人々にはあこがれられている
ブラジルにだって爪を黒くし、首すじの皮膚のわれ目に
アカを溜めた貧しい主婦や寡婦は沢山いる……。これら
の銀行が、ただそういう人々とは何の関係もないわけな
んだわ……。

そして、またそこに蓄積されてある富がたとえ何億あ
ろうとも、富代の現在にとっても、お茶の水橋畔のマタ
ラーゾの大建物と同じく、いわば画餅よりもはかない遠
望の事物にすぎないではないか……。

屈強なばかりで思慮の浅い男どもが、銀行ギャングに
なる気持が一瞬富代にわかるような気がした……。

金ピカの看板の文字の太く鮮明なもの、いつそう富代
にはわびしかった……。

サンパウロ州立の商業銀行の前であつた。富代の足は
無意識にそこに停止していたのであつた。

B a n c o C o m e r c i a l d o E s t a d o
d e S a o P a u l o

正面の鉄扉に楕円形に模様入りではめ込まれた文字。

その様の厚いガラスの廻転ドアは絶えず揺れ動いてい
る。まるで何かの流れのようにさまざまな服装の男達
が、

そのドアから出たり入ったりしていた。

大抵の男が、美しい、或いは古ぼけた革靴を提げてい
た。

宮代も誘われて、吸われるようにその廻転ドアを押し
て入った。

金網と真銀の棒と厚いガラスでかこまれた檻のような
仕切りの一つ一つに男が入っていて、その仕切りの正面
上部には、何番から何番まで、と番号の札の数の順番が
書いてある。左側にまわると、二番目の窓口に一連の人
々が行列を作って払い出しの順番を待っていた。その人
々の垣をかきわけて、そつと覗くと、今しも六百番とい
う真鍮札と引換えに、一千クルゼイロスで五百万クルゼ
イロス、つまり百万クルゼイロスずつの束を五つ受け取
った男が少しわきに身をひくと、窓口の前脇にその紙幣
束を積んで一枚一枚丁寧に数え出すところであった。

金網とガラスと真鍮の棒で囲まれた仕切りの中の頭の
はげた男たちは、極めて正確な機械のようを動作で、あ
とからあとからとつめかける人々に紙幣の束を積んでは
渡している。

その表情には、飼い馴らされた家畜の従順さがあり、
せんべいを数えて袋に入れる時のせんべいやの娘のよう
な無雑作な表情で紙幣を扱っているように、宮代には思
われた。……しかし、このばう大な巨大な額の紙幣は一
体誰のものなのか？富代が一生かかって働いても、恐ら
くこの紙幣の両の何十分の一しか手に入れることはでき
まい。

世の中の大多数の人間達は、あくせくと一生を働き通

し、稼ぎつづけ、そして順々に死んでいく……わずかの資産を残して……。

彼らは大抵各一様に、子供らのためといって、働くのであるけれども、ごく少数の例外をのぞけば、それらの子供達もまた、成長してその親達と同じような生活をくり返していくにすぎないのが、今の世の中の有様なのではないか――？

人々はまた、異口同音によく働けば――働きさえすれば……という体をこまめに動かしていさえすれば、金持になれるものなら、労働者はみな大金満家になっている筈であるし、また、今日この世の中で誰が一体このまま食わずにねていられようか。食う物を得るためには、そして働かねばならないのはどこの国でも同じではないか。

よくよくの怠け者でもない限り、今日の大衆や庶民階級の人々は誰でも働かない者はいない。誰が毎日遊んでいられるものか！とすると、一生働けど働けど庶民においては死ぬ迄、ラクにはなれないのが二十世紀の人間に課せられた鉄則なのであろうか――。

……ぼんやりと、そんなことを考えていると誰かが彼女の背中をついた。いつの間にか彼女の順番が来ているのだ。

「札（フィシヤ）！」

老眼鏡を額にずらし、上限づかいに胡散臭げな顔つ

きで、じろじろと富代の方を見ながら、檻の中のはげ頭の男が叫んだ。

「・・・・・・・・」

就職口をことわられた田舎娘のような表情で、富代はモノも言わずに窓口を離れると、追われるような気持で夢中で廻転ドアの外へ出た。

沢山の眼が、自分の背中を追っているような錯覚におちていた。

その夜富代はほとんど一晩中眠りもやらず考えていた。

いかにして金を獲るべきか。わずかな月給と雀の涙ほどの筆耕料やアルバイトの収入……一生かかったとてその額は、吞まず食わずで働いたとてタカのしれたものではないか。しかし、事業的にも社会的にも何の背景もなく、

商才や度胸もなく、政治性もない、まったく貧しい市井の片隅の微弱な中年の女に一体何がこれからできるであろうー？

第一に、事業をするにしてもその資本を如何にして手に入れるか？（誰かに金を借りて何か商売をしたら？）子供のような考えに囚われた。それが一番手っとり早いと思われた。

何か……商売を。

数日の思考の後、富代は郊外のある知人を訪ねてみ

た。

それは、つね日頃、富代の書いた実話物などを愛読して
いて、いつも富代のためならば如何なる助力も惜しまな
い、とよく手紙をくれた人物である。鹿を追う獵師は山
を見ず、の諺の通りただ金を借りただけの一心でその
家を訪ねた。宮代は、人間の言葉や手紙やというものが
実際には何の実行ももたらすものではないという、一つ
の教訓を得たにすぎなかった。その上、妻女には良人の
許にづうづうしく借金を申し込んでくるようではサテは
？という表情でひどく冷酷に、充分なる警戒と侮蔑とを
もって扱われたにすぎなかった。

次に頼んだ金持の男は「水心あれば魚心」というこ
と、

貴女が理解して下さるならすぐにも百万や二百万出しま
すよ。どうです、僕も今迄、ずいぶん遊んだが、まだ貴
女のような変り種と恋愛をした経験がない……。ねえ、
今夜バンブーでめしをたべてから、どつかで一と晩、楽
しく遊びましょうや……。握られた手首、情ないことに
富代の情が少し動いた。……

ウヤムヤで、では……。早速、ここでいま、接吻を……
、貴女が僕のものになって下さる証拠に……。と、のし
かかってくるその戦争成金を、それでもやつとの思いで
抑えると、

「よく考えてから御返事致しましょうね」

わたしも実はあなたを嫌いではありません、などと富代にしては生れて初めての色っぽい返事をして、そうそうとその応接間を出たが、富代の変わりものと、ふだんあまりきたならしいみなりばかりして色気のなさすぎるのに安心し切った表情で、まあ、まあおかまいしませんで……と折柄外出中であつた自分の不在をわびながら帰宅したその妻女のあまりにも富代を信じ切っている善良な瞳をみているうちに、富代の心は千斤の斧で頭を叩かれたような自責の想いにとりつかれ、この成金の大邸宅も、二台もあるパツカードも、あの御亭主の女道楽の金も、みんなあの御亭主より十歳も老けて見える程、良人のために働いてきた妻女のおかげではないかと思うと、

富代には次第にその金持が憎らしくなり、良人に放蕩された昔のニガニガしさまでも思い出してしまい、もう二度とその家の鉄門はくぐる気がしなかった。

それではと、河岸を変えて、今度はお人よしで世話好きだった亡夫が、わが弟の如くいつくしみ、金をかけて一人前にしてやった男が、薬屋で大成功をしているのを思い出し、それを訪ねてみた。

ところが、そこにその男の妻の母親というのが坐つていて、

「奥さんや南島さんに、なるほど、茂さんはお世話になったでしょうが、といって茂さんにも物要りがあり、到

底、他人様に金を貸すなんどと……。それとも奥さん、今頃になって茂さんのところへ金借りにきて下さるには、何かそのような因縁でも茂さんとの間におありでございますか」

これには、憤るよりまず先に呆れ、なるほど世の中にはそんな風な物のカイシヤクの仕方もあったのか、ここでも一つ教えられて呆然とした。

この男が、この若さで今日になるまでには、富代の亡夫は富代の持参金まで相当使って面倒をみてきてやったものではあったが。――自分の息子みたいな若僧の嫁の母親がその上、少々なら貸しもしようが、その代り利息は毎月みち子の許までもってきて入れて下さいね。御用立のできるその少々の金額はそして百万クルゼイロスの百分の一である。――というのをしまいまで聞かぬうち、富代はもう椅子を起っていた。

憤りと、情なさで、頭の中は火の燃えているように熱かった。折柄の大雨、歳末近いプラッサ・ダ・セエの雑沓は一瞬にしてさらに騒然たるものとなり、しかし、富代は雨を避けて右往左往する群衆の間をほとんどまるでわざとのように悠々と無関心に大雨に頭髪や肩や体全体をうたせながら歩いていた。

まるで放心した人間か、狂人のようであった。親切なブラジル人の老若が早くこちらへ入って雨をよけなさ

れ、

と口々に商店の軒下から連呼してしてくれるのも、ただボンヤリと耳に聴いているだけであつた。

広場の真申へんの、とあるコーヒー店にそれでもフラフラと迷い込んだ時は、店中に一杯詰った人々は河中から揚つた水死人みたいにずぶ濡れの富代のために親切に場所を与えてくれ、店の主人はタオルまで貸してくれるのである。一杯の熱い熱いコーヒーが、腹の中までしみとおる想いがした。

二〇仙鋼貨を二つ立飲台の大理石の上におくと富代は、もう一つ、と頼んだ。

すると店主は何を思ったか、その二つの銅貨を彼女の前におし戻し、首を振るのである。その間もその男の手は動いて、すばやくもう一杯のコーヒーが彼女の眼前に出された。

「息子さんでも病気かね？」

五十格好の苦労人らしいその店主は、笑いもせずポツリとそう言った。

大雨の中をずぶぬれで女が走り歩くなど、尋常ごとでないと思つたのかも知れない。雨にぐしよぬれに叩かれて一層、みすばらしくなつた富代の風態は、最早、どうみても市の最下級の人間の風態であつた。

多少雨音が静かになつたので、店主に礼を言い、店中に詰っている男達の間をぬけて、そつと戸外へ出ようと

すると、軒下に作っていた松葉杖の男が「もし」と呼んだ。

ふり向くと二、三枚の何かきれいな色彩の紙片をビラヒラとつき出しながら「一千五百万」とその男は言った。

私に劣らず貧乏臭い汚ないみなりの栄養不良の顔色の三十男。

その眼には、何か一生けんめいな懇願の色があった。そのさし出されているものは、ロテリアであった。

ロテリアのあることは知っていたし、以前、ごくたまに買ったことはあったが、どうせ当らぬものときめていたし、又一仙の払い戻しをうけたこともないので、こんなものは当らぬと富代は心で決めていたので、「不要」とニベもなく答えて戸外へ出ようとする、カタリと松葉杖を動かして、その男は一步そばによつてきた。プンと竣臭いしめった臭いがした。

「何卒、買って下され。雨で売れ残ったので……。これが売れないと、私は晩飯を食べることができない……。最後の一枚です……」

ボソボソとつぶやくようにいう瞳の色、哀願のための顔面の歪み……。ああ、ここにも私みたいな人がいた……。が、しかし……。買うべきか……。買わざるべきか

この栄養のわるい不具の男にとっては、今夜の晩飯の有無が長らうべきか、生くべきかの境になっているかもしれない……。手あかで真黒に汚れている松葉杖によりすがり、寒いのか絶えずふるぶるとふるえている男を見ているうちに、宮代はふと心が動き、

「一枚買いますよ」

「三枚！もうこれが最後で」

「一枚で沢山」

「いや、三枚何卒」

松葉杖を支えている尖った肩や、着ている服と同じような古びた灰色の唇、「ああ、この男も空腹なのだ」、宮代の手はほとんど無意識に動いて、あっと思う間に何枚かの紙幣をその男に渡していた。そして、富代の手に残ったものは、雨でしめり、汚らしい男の指紋が少しついている三枚の富籤札であった。

市の西隅にある商業街の市設市場の裏街のぬかるみの多い暗い横丁の小さな洗濯店の地下室。三階と地下室との相違だけで、コロニア社と大差ないポロ家の一年中ものすえたような臭気と湿気としみだらけのセメント壁と床と天井とにかこまれた地下室。頭上では絶えずアイロンをかけている職人達の靴音がしてをり、壁のどこかではネズミが何かしら噛っている。道路に面した方の四角な小窓から、かすかにさし込む光線がうすばんやりと

室の中のポロや古靴を照している。

風の吹く日は道路から遠慮なく舞い込む砂塵や埃で窓

の白金巾のカーテンは茶色になっていて、雨の降る日は容赦なく吹き込む雨滴の流れたあとが暗い横丁の石塀についている酔漢の小便の流れそっくりの痕を窓際から床の中央へんまで作っている。この汚染は天井や壁の汚染と同様、年月を経ているので、拭いても洗っても取れたことはない。

弾条の底のぬけた人間の体ののる度に泣き声に似て途方もない音をたてる木のわくの広い二人用寝台に、富代はボンヤリと坐っていた。

両側に、母親の方を向いてより添いながら、兄妹の子供がよく眠ってる。妹の方はあどけない顔を母親の腰のあたりにくっつけ、母親のひざにあづけたまま掌の指を無邪気な格好で一杯に開いたまま、眠りこけているし、兄の方はボタンのみなとれてしまったパジャマから片方のあばら骨を出して、やや横向きにこれも熟睡している。

男の子の右手もやはり母親の方へ差し出され、これは拳を握っている。

さつき濡れた服のまま富代は両脚のしびれるのも忘れてしばらくじっと坐り込んでいた。

膝のあたりに三枚の富薇の札がひろげてある。

平凡な活字で13416と番号が刷ってある。

赤地に緑いろの稲の穂の模様。両側に三万本と発行の数が記してあり、この札は、十枚組のうち三、四、五番目の札であつた。

一等一千五百万クルゼイロス。

二等五百万クルゼイロス。

三等四百万クルゼイロス。

四等三百万クルゼイロス。

五等百万クルゼイロス。

おもえばこの札を眺めていた瞬間程、富代にとってたのしい瞬間はなかつた。

降誕祭の大富籤でなかつたのが残念だが……、しかし、それだともつと札は高価でこの三枚の値を合わせても、一枚買えるかどうか難かしいと富代は思い直して、また、しみじみと札を眺め入るのである。

帰宅してから、この札をひろげて母と子とは三人夜の更けるのも忘れて、めいめい当つた時の空想に笑い興じていたのである。こんな楽しい夜は今までめつたになかつたことだ。おかげで子供達は笑い疲れて早く眠り、夢の中で自転車や野球のグローブやバットや絹と藤でできた裁縫箱や白キッドのサンダルにとりかこまれているであらう。

疲れも忘れ、空腹も忘れ、富代だけは、いつときの楽しい空想をまだ抱きつづけながら、幼児よりも嬉々とし

た表情で、いつまでもいつまでも寝台の上に坐っていた。

その札を三枚もいちどに買ってしまったために、次の日からまた、当分ひる飯はぬきにしなければならない必然性にすら、彼女は思い及んでいなかった。

しかし、親子三人の、狂おしいまでの渴望も祈願も、まだ時期が来なかったためか、哀れにも裏切られ、コロナ社の帰途、わざわざ廻り道してまでも覗きに行った富籤店の軒の掲示板には、一等にも二等にも最低の五等にも、また、最終の一字すら当たっていなかった……。

しかし、富代の近所の肥料屋さんには、見事三等があったり、四百万コントスをまるまると儲けたその人は、すばらしい自動車を買入れた……。だから、満更当らないものとは言い切れない……。あまりにも熱望した期待が外れたのと、目前に幸運を掴んだ実在の証人を見た富代の気持は、へんに狂信的になり、それからは、毎月第一土曜日に限り「連邦政府のたからくじ」を買うことにきめたのである……。

富代だけがますます粗食になり、益々栄養不良に、黄色く萎びて行った。

三年の歳月が過ぎた。

過労と粗食の結果、富代の健康は、なお一層害なわれ、心臓病まで併発した。

コロニア社をやめ、生命保険の外交員となつた富代は、ありとあらゆる俟約の下に、この頃では毎週水曜日に、欠かさず富籤を買つた。土曜日は、当らぬ時の失望で、日曜日がいつも憂鬱になつて厭だからである。

州立商業銀行の窓口で見た五百万クルゼイロスの紙幣束は、夢寝の間も忘れたことはない。

あれだけのもの、否あの五分の一でもよい、資本ができたなら、店を開こう！この一事だけが、富代の生きる唯一のはげみであり慰さみであつた。

生きてゆく上の目標であつた、と言つてもよい。子供達は、もう母親に「当つた？」ときかなくなつた。訊くことも忘れてしまったのである。哀れなこの母親が三年間、13416の同じ番号を買い続けてきた理由は、トミヨトムと読めるからであつた。

一九五三年も押し詰まつたある日、富代は昨夜から、明日は水曜日だから富籤を買わねば――そう思い続けていたのに、その日はあいにく大口の契約者があり、その事務的な仕事のために、時間をとられていた富代は、やつと終つて正午すぎ、かなりなカーブを走る電車にうつかり乗つて他の契約申込者の所へと行きかけた。

電車が十分も走つた頃、（あつ、今日は水曜日だ！ああ、富籤を買いおくれる）とはじめて気がつき、腕時計を見ると、もう一時に近かつた。一時をすぎると、店で

はもう札を売らない。皆売り切ってしまうからである。
富代は狼狽した。

今日まで、根気よく三年間も、同じ番号を毎週水曜日にキチンキチンと買って来ながら、今日うっかり時間を忘れて買い損ない、もしそれが当たたら……と思うと、体中がカッカッと火熱り、頭の中はカーツとして、唯一途にあの店まで引き返さねばと思いつめた。

その時、電車の速力が前方の車のためにおくれ、停車に近い速力となった。早くあの店に引き返そう、早く行き着いて買わねば売り切れてしまう！

そのことばかりに氣をとられていた富代は、電車が停留所へきて停ったものとばかり思い、あわてて降車しようとして片足を車外へ出たトタン、電車は急速力で急坂を走り出し、富代は軌道のそとへ転げ落ちた。

それきりであった。

心臓が破裂したのであった。

過労にあえいでいた心臓であった。

次の日の、オ・エスタード・デ・サンパウロ紙の商業欄の片すみに、「昨日の連邦富徴当り番号」として、13416が一等のトップ一千五百万コントスで出ていたことには、しかし母親を襲った悲歎に泣きぬれつつ、わびしい葬列の棺を担いでいた富代の子供兄妹二人の心には、そんな番号のことなどついに浮んでも来なかった。

牛糞

渋川和樽

早咲きの花

略歴 渋川和樽（ワタル）は本名。ペンネーム渡魔襲は川柳に用いる。広島県比婆郡出身。一九〇五年生れ。高等尋常小学校卒業、一九二四年、ブラジルに移住。マツト・グロッソ州、パラナ州に居住して、農業を営んだ。晩年は、パラナ州マリंगा市で、歯科技工を業とす。義弟堀田栄光花について川柳を学んだが、のち創作に転じた。処女作「牛糞」が第二回「よみもの」文学賞（一九五〇年）の第一席に入賞。昭和初期にはプロレタリア文学を耽読した。葉山嘉樹、葛西善蔵などを愛読した。長年宿痾を患い、一九五二年、マリंगा市で死亡。行年四八才。生涯独身。本集所収の「早咲きの花」が遺稿となった。

牛糞

ひさは、もう二十八になった。働くことは、誰にも負けない娘である。ひさは、働くことは好きでも嫌いでもないのである。人間が生きていて、毎日時間をきめ、飽かずに物を食うのと同じことで、理屈はないのである。だから、水車と同じで、動から晩まで休むことがない。

ひさの前に出てくる仕事は、くるくる回って身をもって片付けてしまう。男仕事、女仕事などと、選りごのみはないのである。

働いても働いても、人間に仕事の限りのないということとは、この上もなく幸いである。そのことは、ひさを一層頑丈にし、処女らしい青春のわずらわしさは、きれいに彼女からもぎ取って、幾ら考えても解るはずのない将来を、無駄に考えて見たり、子供にさえ嘲笑われそうな、自分勝手な夢などは、みずにすむのだ。

そして、そのことによって、父母達の大事な財産は、日毎に、確実に太っていくのである。

親子八人、ひさたち一家の生いたちも、この地に来て始まった。

在伯三十八年という父親の寅吉は、当時の誰にも負け

ず、金のなる橋を探して、耕地と町を行ったり戻ったり、無惨にも打ち破れた夢に、すべて、自己さえも見失う程の辛酸の限りを舐めつくした初期移民の一人である。

夢

は破れ、勇心は挫けて、惨憺たる希望の骸（むくろ）は、流れ流れてようやく五年目、麻州の寂しいこのT町に来て、不在耕地の当時管理人だったポルトガル人に無理矢理に勧められて、この地に初めて野菜作りを始めたのである。当時の誰もが想いもつかなかったであろうこの仕事――僅かばかりの野菜を管理人から借りた馬の背につけて、町とは名ばかりの、T町を隅から隅まで、不慣れのままに、無言で売り歩いた。それでも、すぐに追い出された町の邸宅での皿洗いよりも、僅かな日本人同士で互いにいがみあうがひどい鉄道工夫などとは、比べものにならないほどの、生き甲斐を見つけ出したものである。

それから一年、めったに日本人の姿を見かけない奥地のこの町で、二十六というまきと出会って、寅吉は一緒になったのである。

まきは、その時既に六年もの間、移民としての悲惨な生活を味わいつくしていた。兄たち夫婦に日夜いためられつつ、食うや食わずで、耕地から耕地を転々と夜逃げをして、日増しに自棄けくそになっていく兄の行状に堪

えきれず、勝気なまきは、死を覚悟して逃げ出して来たというのである。だから、二人の魂は、何の技巧の必要もなく、同じ方向へ一直線に結びついて、流れていった。

幾日経っても、日本人の顔を見ないということも、既に二人の心は痛まなかった。二つの鍬さきで、其黒い土に青々と野菜はふとっていたのである。

「死なずにすんだ！」とまきは言う。数年の間、見失っていた我が心を、やっと自分自身に取り戻すことができたのである。脳髓一杯に、真黒に焦げついていた重々しい郷愁も、此処に来て、全く晴々と暖い微笑の中に、懐しくも浮かんでくるのだった。そのたびに、まきの鍬さきには、思わず希望の力が湧きあがる。

「どうする気で、日本人もいないこの奥地へ女一人でやって来たのだ？」と、寅吉は、時々同じことを繰り返して訊くのである。そのたびに、まきは無言で、寅吉の顔を真正面（まとも）にみつめつつ苦笑をもつてごまかしてきた。それから半年余りたって、まきが初めて妊娠したことを知らせた時、寅吉は微笑の中から、又同じことを訊くのだった。まきは、何時もの苦笑は見せようとせず、ああざめた顔をふるわせて、

「ここの奥には、日本人の鉄道工夫が大勢いるいうだろうが……。なんば私が歳寄って醜うても、飯炊きや、洗濯をしてやったら、悦ぶもんがいたじやろうて……」

：。働くことア、誰にも負けるもんか！」

まきは、言ってしまうと、顔をそむけて、寅吉の前で初めて泣いた。

寅吉は、女のがむしやらな真剣さを初めて知った。二度と言いたくない、言わせてもならない言葉である。そのことがあってから、まきは、一層がむしやらに働いた。

働けば働くほど、盛り勝る元気に、働きの極意を存分に味わうのだった。その真剣さは、次第に仕事の手を拡げていって、野菜の外に、荒地を拓いてミーリヨやバナナも植えた。牛も飼い始めた。

「自分らの土地でもないのに……」

という、寅吉の反対も押し切って、傭人を増して、コーヒーも植えつけたのである。すべてをまきは、自分の頭と腕で切り回して、いった。やがて自分達の汗と腕でできあがった農園は、ついに自分達のものになった。そして、水車を廻して、ミーリヨ（とうもろこし）やマシンジョカ（マニオク）の製粉も始めた。

煉瓦工場も建てた。夜も水車を回転して発電し、住宅も明るくきれいになった。年毎に少しずつ拡張げていった牧場には、百数十頭の牛どもが、朝夕家近く集まってきて（青草を青草を）と喚くのである。

こうした男勝りのまきも、自分が女であることを忘れていたわけではない。寅吉と夫婦になった翌る年から、

梯子式の三年目ごとに、ひさ、ふみ、みつと、女の児ばかりの後に、長男の準一も産んだ。それから七、八年、もう終止めたと思っている間に、又パウロとローラを産みだして、六人の子持ちになったのである。

寅吉は、何もいうことはなかった。

ふみの仕事は炊事と洗濯である。二十五の熟れ切った胸の前垂れは、朝から晩まで乾いたことがない。

何時も大家族のうえに五、六人の傭人（カマラーダ）もいるので、ふみ一人では並み大抵ではない。何時も腹を空っぽにして戻るひさから、おそいといって剣突くも喰わされる。時々、食物が不足したとか、残りすぎたとかで、母のまきから散々口小言も聴かされないわけにはいかない。十数人の元気な働き者の、その日その日の胃袋の空き工合までを、大鍋に計算（つも）り込むことは毎日の事ではあっても、なかなか容易でないのである。

（せめてみつが家にいたなら……）などと、忙しさの余りに、ふみは想うのである。そして、みつの身を案じつつも、時々、男の胸に甘えたみつの幻影（まぼろし）が、ふみの心を轟かすのである。

誰よりも明るい朗らかな娘だったみつは、傭人のセルソという褐色男と逃げていったのである。

セルソは、寅吉の家で二年ちかくも働いた。案外に

も、

彼は読み書きできるので、毎晩二時間ばかり余分に、準一や娘たちに文字と算術を教えていた。それは、寅吉やまきの思いつきから始まったのである。一時は、心の底の大穴さえ気づかずにいる程の初期の移民（マカコ・ベリーヨ）ではあつても、ようやく心の夜明けを迎えようとする人の子の親である。自分の産んだ子が、みな土人なみに太っていくということは、それは堪えられないことだった。だからといって、自分たちに一番都合の良い働き手を手放して、それぞれを町の学校に入学（い）れてやるということは、それは又困るのである。

先は先でとー、この安あがりの思いつきの結果が、こんなことになって終止つたのである。あれから三年、心の底では、常に追い探しているのだが、ついに、どうにもならないことだった。

2

寅吉は、常になくにごにこと町から帰って来た。

寒さとともにやってきた濃霧のようやく晴れた五月の昼過ぎである。

ふみが大急ぎで支度をした食卓につくと、寅吉はだし抜けに、まきに訊くのだった。

「いま、うちの牛は幾らくらいいるんかい」

「さあ、どの位いるのかなあ」

と、まきは、自分になく戸惑いしてしまう。

「ふみ、ひさシヤマ（呼んで）して采う！」

「ふん、お前も知らんとか！」

と、寅吉は不満げである。

「どうしてえ！ あんたが知らんものを、私（わし）が、なんで知ろう………」

牛のことは、初めからひさが独りで面倒をみているのである。夫婦でいくら威張り合うてみても、それは、ひさに訊くより手はないのである。

「まき、土地を買おうや。牧場（バスト）つきの安物があるんだで……」。渡場の近くに………」

寅吉は牛のことよりも、これが言いたかったのである。自分では、既にみてきたかのように、土地の実状を細々と並べてきかせるのである。いつもは、まきの事業欲を庄え庄えしてきた寅吉が、自分から乗気になって土地を買うといいだすのは、余程の買物に違いないと、まきは想うのである。珍しく乗り出して、話しだす寅吉の顔を見直して、まきは独りでに可笑しくなった。

牧場（バスト）と聴いて、ひさが一番に賛成した。僅か四、五頭の牛の頃から、現在の百七十頭になるまでの十五、六年もの間、ひさ独りで、牛どもの世話をなし続けてきた。

ひさの希望は、二百頭までにしてみたいのであるが現

在の持ち地だけの牧場では、それは望めないのだ。

既に二、三年も前から、若い牡牛を売り払っても、それで牝牛を買いこむわけにはいかない。それどころか、まだまだと惜しみながら老牛は、どしどし始末していかなければならぬ有様である。ひさが、一番賛成する理由も此処からである。

兎に角、親子三人の相談の結果は、次の日曜に、家族全部で、渡場へピクニックかたがた視察するという事になったのである。

別の離れた場所であっても、土地を買い広げることとは、農民にとっては、確かに喜ばしいことの一つである。ひさは、この朝、いつもより早く起き出して、毎朝欠かすことのない牛どもの世話をやいた。地平線に太陽が真赤な笑顔を見せる頃は、何時もの通り大バケツに一杯の絞るだけの乳は絞り取って戻ってきた。ふみは、又昨晚（ゆんべ）から支度していた今日の特別の弁当も、さつそくにできあがる。準一は昨日のうちに、すっかり用意のできた釣の道具を、早くからカミニョンを出していちいち積みこむのである。一家の者は各々の想いで、みな浮きたった。

ひさは、すでに新しく購入込んだ土地の初見にでも行く気持ちである。まきはまきで、誰も気づかない間に、秘密の穴を掘りおこして、瓶詰め of 札の一枚一枚皺をの

ばして重ねた札束を、何時でも寅吉に渡せるように、すでにしつかりと肌身につけているのである。

ひさは、広々としたこの低地に続く若い牧草をひと目視ただけで、この上、こまごまと土地内を視て回る必要はなかった。ひさの膨れた胸の内では、二百頭の持ち牛は、もうちゃんとできあがった。

落ちつきを失っていた土地の番人は、新主人をでも迎えたかのように、寅吉やまきを一々案内して巡すた。そして自分の家に請じて甘いコーヒーを勧めながら、今まで通りの管理人の地位を、馴れかかった飼犬の恰好で、彼らに頼みこむのである。

まきは、想つてきた以上にこの売物が気に入った。広いマンジオツカ畠と並んだカンナ園。それに続く一千株ほどのバナナが、これ見よがしの元気な房をぶらさげている。まだ収穫してない二アルケールのミーリョは、荒れた畠に立ち枯れのままである。

それに六頭の牡牛と牛車が一台、三頭のブーロと馬車、番人の家の前には煉瓦糖（ラッパヅーラ）を作る大釜の据った小屋と、腕木を空中に良くのばした牛引きのカンナ圧搾機も建っている。

寅吉とまきは、庄搾機の前にきて、しばらくたちどまり、いよいよこの土地を買い取るということに決定めてしまったのである。

「四十コントは、なんとみても安い」

「錢（ぜに）の用意は、もうちゃんとできとるが……」
まきは、自分のへそのあたりを叩いてみせるのだつた。

これでまた、彼らの財産がひとつ殖えたことになったのである。明日にでも、ひさを連れて行って、地主と交渉し、一切の手続きを為（や）って終えばそれで済むのである。

ポールトの渡場では、もう三日前から、氣狂い染みた牛追いどもの怒声を浴びて、一万頭もの牛群が次から次へ籠舟（ヴアルサ）で河わたしされていた。うようよと待ち牛どもが、垣の穴から、二、三日何も喰わずか、萎えた腹を減込（へこ）ませてないのが、ひさには直ぐに瞳についた。

何時も眼先きの仕事だけを視つめて、夢中で働き通しの女達は、この眼前に広々と続く見渡すばかりの河面一杯に、悠々と流れて行く水藻の濁流に吸い込まれていくのを見ていると、恐しいまでに血潮も心も、すがすがしく晴れ昂（あ）がるのだった。パウロやローラまでが、鎖を解かれて猿のように、嬉々と騒ぎまわって、水際までも降りていって、まきたちをはらはらさせるのに、忙しい。

当てにして来た渡場の小舟を、今日ばかりは借りるわけにはいかない。準一は落胆（がっか）りした。

「このすぐ河下に、日本人の若者が二人小屋掛けで、大した道具を持って来て釣りをしている。行ってみよ」と、

渡守は言うのである。「一週間位になるか？一人の若者はマレッタで寝ている」とも言うのだった。

小川の落ち合った三角州の堤の中段に、渡守のいう（大した道具）の散らばった小屋の周囲一面から、生魚の乾く臭いが鼻を突いてくる。彼等の自動車が出た気配に、小屋の中から、日本人らしくも見えぬ様子の小男が出て来た。黒人そっくりに河陽に焼きこんだ、全く河男に成りすました日本人の小男の風采には、寅吉もあきれた。「あんたア、ここでペスカドル（漁師）をしているんかい。何処から来たん？」と、寅吉の初対面は変わらないのぶつきら棒である。

「日本から」と、答える処かも知れぬが、見懸けとは全く反対に、宮地はなかなか穏やかである。

「はい、河下から来た者です。三カ月前から、この近所で始めているのですが……」

「まあ、まあ。あんた達ア、ペスカなんかしておんの！面白い生活だことよオ……もう一人のひとは？」

まきは誰にも愛想よく、如才ない。

「ええ。仲間はこの間からマラリヤにかかって寝ているのです」

「まあ、マレッタ？　可哀想に……。養生もせずに、

こんな処で寝ておんの……」

まきは、小屋の中を覗くのだった。

「ジャ・アランジョー・パイ？」と、待ち切れぬ準一、小型のモーターを担いで降りて来た。

「舟ですか？ 舟なら二隻とも空いています。お好きなのを使いなさい」

「それでは、済まんが夕方まで、ひとつ……」

寅吉は、まきと違って、他人事には、何時までも感情を燃やして拘泥することは、今までの彼の経験にも、記憶にも、刻みこんだりしていないのだ。

寅吉は、今日の第二の目的であるはずの釣りへ向って、子供や女達を残して、モーターの取りつけてない方の小舟に、持参の小型を据えつけて、釣り好きの傭人や準一も乗り組んで、火つきの悪い乱調子の爆音をたて、下航して行った。子供や娘達は堤の上から手を振って、それを見送るのだった。

まきは、狭苦しい小屋の中で、病人の世話を焼いている。ふみ達の日本人を見てみたいと思う気持が、節くれた手を鼻に当てて、魚臭い小屋を覗かせるのである。

「おはいりなさい」

と、宮地に声を掛けられると、急に跳び退き、舟繋ぎ場まで逃げだして来て、互いに脇腹を小突き合って、笑いこけるのである。彼女たちは生れてこの方、日本人の顔は、父母以外余り見かけたことは無いのである。

「プレット・ジャポネース（黒い日本人）」という、ふみ達の言葉に嘘はない。宮地や三宅の陽水（ひみず）に焦げた顔色と、マラリヤに喰い荒らされた容姿は、誰が見ても、彼等の気持ちとは別に、異様に憐れではある。

まきは三十年前の、切実な覚悟の独り旅を想い出すのだった。どんな些細な仕事をでも、血眼になって探し求めた当時の移民―、働き盛りの独身者達が、食を求めて、麻州奥地の大広野に、なんの潤いもなく、終日炎天下に、鉄道工夫となつて働いていると聞いて、見知らぬ彼等に同情、というよりも、彼女自身、苦しみに苦しみ抜いた揚句の、二十六娘の捨て身の家出ではあった。

まきは、今こうして、同国人の若者達の病苦を見るにつけ、とうとう見ず終いになったが、当時の鉄道工夫の生活が、こうもあつたであろうと、現在我が身の幸福とを想い合わせて、まきの人間性は熱い同情心となつて、吾が胸を焦がしつけるのだった。

「あんた達ア、此处でこうしていても、仕様ないじやろ
うで……。うちへ来て養生しんさい。何もお構いもせ
ん

けどなア。一緒に嫌なら、別に空家もあることだしの
……

……。見ればあんたも顔色が良うないがな」

宮地は、邦人社会を見捨て、隠遁にも等しい河辺生活を始めて六年―。久々にあい会うた同国人の見知らぬ

女の人から、かくも軟く丸々と太った人間性を、冷徹の
囲いの胸深く貰い受けたことは、初めての体験である。
去年の暮、宮地の旅先から無理矢理に従いて来て、この
河辺の生活に有頂天になっていた三宅も、「僕にだけは、
マラリヤの方から遠慮する」と、元気で言い言いしてい
たのに、今こうして、汚れた万年床の中で熱臭い息を吐
きながら、陰の裏が焼けつくか、見知らぬ老婦の温い言
葉に黙念と、鼻を鳴らしている始末である。

「僕等も、何処か、町にでも、一時此処を引き揚げよう
かと思つて、昨日から釣道具など全部取り込んでいます
です。早速お言葉に甘えて、甚だ失礼ですが、そう願
いできれば、僕等も助かります」

宮地は三宅の身を案じて、頭を下げるのだった。

「なんの、あんた。それがえエ！　そうしんさい。町も
良エじやろうが、うちへ来て、しっかり養生しんさい。
毎週うちのカミニョンが二、三回も町へ行くことだしの
オ・……」

まきが、さきにたつて、ひさやふみを手伝わせて、地
面や棚に乱雑に取り散らかして乾かしてある釣りの道具
類や、汚れた世帯道具の一切が、自動車一杯に積み込ま
れたのである。

「うん、それが良い。何時まで河べりで寝ていて、どう
なるもんかい」

寅吉も釣りから帰ってきて、快よく賛成するのだっ

た。寡言（むくち）で、ぶつきら棒の寅吉にも、温い血の流れていることを、誰も見損ってはならない。

ひさの家では、その夜、電灯があかあかと何時までも消えなかった。

病人であることも忘れて、三宅はもとより久々にあい見る同胞人の親しさを傾けて話は何時までも続いた。娘達は、炊事場の焚火に顔をほてらせて、瞳と瞳を打つつけあつて、そつと笑うのである。父母達の常にない興奮振りも不思議である。まして病人の三宅の話し振りや、無表情に落ち着きました宮地の言葉などは、曇り日に雨を呼ぶパパガイオ（オーム）か、青葉の蔭に頬を膨らませるサツポ（蛙）としか聞こえないのである。娘達の知る限りの日本語とは、親たちが、彼女らに怒鳴り散らす時の間違いだらけの伯語を混ぜた訛り言葉だけである。だからと言って、娘達のこうした成育振りを嘲笑い返す程の者があつたら、それは余りにも彼女等にも勝つて、大陸に住み、大陸を知らなさ過ぎる井のなかの蛙よりも憐れと言うべきであらう。

二宅は、この家に来てから、すくすくと元気を取り戻してきた。宮地の方がかえってじりじりと床につく有様である。三宅は起きあがると直ぐから活発に動き回った。

まきやひさに従いて菜園の手入れもする。寅吉や準一

とともに、バナナの収穫も手伝って働いた。そして、彼持ち前の無邪気さは、娘や子供たちには、純日本式に話かけるのである。

「意地悪！　ブラジル語を知っている癖に、もう、着物なども、洗濯（あら）ってやらないから……」

と、ふみ達は憤りだすのである。

それでいて、日が重なるにつれて、彼女達は、異性に対する人生への眼が醒めると共に、二人の若者から、何かを伝染されていた。何時からともなく、彼等の言葉を真似しては、黙然と口の中で稽古するようになった。そして彼等の寝室の、常に清潔になり、汚れ物等もきれいに洗濯して、整頓して敷かれるようになっていったのである。

3

雨、雨と部落の人の口癖になり初めると、重く煙った空から、毎日地面を這いまわって、人々の心を暗く庄え続けた。広い原の牛の群は、毎日枯野を踏み続けて、日

毎に腹萎え背骨はめっきり尖っていった。

この朝、みな集まったコーヒーの食卓で、三宅は常になく落ち着きがなかった。次々と食卓を離れていった後で三宅は、

「僕は今日、町に買物に行ってきたのですが……一日だけ休ませて戴きます」

と、やつと寅吉に願ひ出たのである。

「町へ……。それは何時でも構わないが、自動車が出る日に一緒に行ったら……」

「……………」

「自動車と行ったら楽だろうに……。でもなア、若いもんは、たまには独りで面白い処へ、こつそりも行つてもみたいじゃろうで……。ゆっくり泊つておいで……」

まきは、笑いながら、開けた処を見せるのだった。

寅吉が起つて行つた後で、部屋から持つて来た札を、行きかけた三宅のポケットに押し込みながら、

「これ、あんたの今日の小使い錢……。うちのひとには黙言（だま）っといで……」

三宅は、いつものまきの親切が、今日ばかりは、心を責めるようで、彼の指先は、何時までも札には触れていこうとはしなかった。

「オンデ・バイ・ヒサ？」

「カンペエア・ヴァツカ！」

ひさが、乗馬の仕度をしているのへ、まきが呼びかけたのである。

もう二、三日姿を見せぬ一頭の孕み牛が、牧場の何処かに仔を産んでいるかも知れぬ、と言ひ残して、身軽に白馬にまたがって馳け出して行つた。牧草の焼け焦げる

香が、馬上のひさの鼻をつく。枯れ果てた牧場の牛共は、

みな低地に集って、伸びる暇のない青草の芽をむしって地面を舐めている。ひさは、馬首を向けて、一応それらを調べてみたが、孕み牛は、その群にもいない。牧場のあちらこちらをことごとと馳け回って、次の低地に出た。

此処にいるはずのない四、五十頭の牛群が、我がもの顔に悠々と青草の芽を喰んでいる。ひさは不審に思つて、馬を跳ばせて馳せ寄って見ると、案の条、泥棒牛である。

ひさは、自分の食糧を盗まれたほどに腹を立てた。

「ヴァツカ・ドス・ジアーボス」

ひさは、いきなり馬上に踏ん張り上って、ぴしぴし牧鞭（むち）を鳴らして、うろたえた牛群に馬を突っ込み、右に左に身軽く馬頭をひるがえしては、一頭も残さず、柵を跳ばせて追い馳け回す。牛共は尻尾を棒切れのように打ち振り、土煙の渦を蹴おこして、地響きをとどろかせ、一散に森の中へ馳け込み、馳け抜けて、境界線に長々と延びた沼地の粘土をぴしゃぴしゃと蹴散らして遁れ逃げた。

ひさは、境界にたち止った馬の背から、も一度痛罵を打げつけることを忘れなかった。

隣地と自然の境界をなすこの沼は、これまで小鹿一匹

も通さなかった底無しの沼だった。毎年減っていく雨量と共に、量近の早り続きに乾き切って、処々に地底がでてきたものである。

ひさは着物の裾をまくりあげて、赤く汗ばんだ顔を、それで拭った。

豊かな白い彼女の大腿や膝頭は所々破れて血がにじみ出ていた。（これでまた、仕事がふえた）と、独言しながら、恨めしく乾いた沼地を見返りつつ引き返して森を抜け、丘へ回ると、矩形の椰子蔭に、ようやく毛並の乾いた産れたばかりの仔牛が、よろよると起き立っていた。ひさは素早く馬を止め、裸で遁げ回る悪戯児（いたずらっこ）を追う母親の恰好で、跳びまわる仔牛の耳を掴んで両腕に抱きあげる。仔牛は、ひさの内股を滅茶々に蹴かえして、なきながら跳ねあがって暴れた。

急に藪から強びだしてきた親牛は、頭を持撞（もた）げ、耳を立て、角を振りまわして、ひさの周囲を蹴たてて走る。ひさは唇を鳴らして愛撫（なだ）めつつ、うまく身をおかわして、馬に近寄るや、素早く仔牛を横抱きのまま、尻もあらわに馬の鞍にまたがってしまふ。そして両股と片腕にしっかりと抱き込み、ことごと馬をかけさすのである。仔牛が温いひさの肌身に甘えて静かになると、親牛は頭をもたげて耳を前後に振りたてて後について行く。

ひさが悪戯（からか）って仔牛をなかせると、親牛は、

また急に振り返ってくるのである。

こうして、又一つふえた親達の生きた財産の一片を、ひさは、牧場の果てから拾いあげて、追い込み場まで抱き込んできたのである。ひさは、ホッと大きく息を吐いて、空腹を抱えた馬を引き、家へ帰ってきた。

まきは、青くなつて、独りでぷりぷり怒っているのだった。

「ひさ。ふみ、アオンデ・イスタ？」

「ヨウ・ノン・セイ！」（知らん）

「ノン・セイがあるか、馬鹿ア！ 十時すぎて、まだ御飯も炊いて無いぞ……。馬鹿分駄奴（バカブンダメ）が

！ バイ・ベー・ナ・シャーカラ！」（菜園を見てこい）
見境もないまきの罵倒は、幾ら聞きなれているとはいえ、ひさは面喰うのだった。何時も家に居残つて、炊事を受けもつふみが、十時を過ぎるまで朝飯の支度も忘れ、独り菜園を歩き呆けているとは思えないことである。

ひさは、今まきが洗ったばかりの米を、素早く大鍋にあけて、屋外の竈に乗せ、大急ぎで火を入れ、ありあわせの南瓜を包丁で叩き割って、荒っぽく刻むのである。元気な働き者は、腹をペコペコさせて今にも、戻ってくるかも知れない。

まきは、独りぷりぷりと菜園に行きかけて、何かを気

づき、ばたばたと引き返えしてきて、無言で部屋にはいつていった。そして、娘達の共同の箆笥の戸を開き、ひさを呼びつけて、ふみの持物を調べさせるのである。三カ月前に新調してやったふみの冬物の晴衣がない。外に滅多に着たことのない晴衣が二、三着と、一緒に入れてあったはずのふみの貯金帳と、生れ日の登録証明書が消えてなくなっている。まきの（もしや）の気懸りが当つて、ふみの家出を明らかに、箆笥の小抽出が口を開けて証言したのである。

まきの顔は、みるみる血の気が引いていって「馬鹿が馬鹿が」と言い続けるだけで、幾ら口端を痙攣させてみても、次の言葉が出てこない。ひさも、整頓されたふみの寝台に瞳をもつていったきり、何も見えなくなったのである。

「オワツ！ コミィダ・インダ・シタ・ナ・フオゴ！」

準一が空っぽの胃袋を提げて、傭人（カマラーダ）と共に帰ってきたのである。

「オケ・シタ・フアゼンド・コジンネーラ・ジャ・クワジ・メイオ・ジア・エ！」

準一は、誰もいない仕事場へ胃袋の不満を投げこむ。傭人たちも、各々の寝小舎に引きさがって、汗臭いまま寝台に長くのびてしまう。宮地も、何事か家庭の取り込みを感じて、人気のない炊事場を覗いたが、まさか、急病人のできた様子もないので、仕方なく、自分の寝部屋

に這入って行つて、壁のタオルを採って汗を拭いた。其白いタオルが波形に黒くなった。彼は寝台の白布を捲つて掛け、今年も亦、釣時期の近づいてきたことを、ぼんやりと想いだしていた。その時、まつさおな顔のまきが、

ひよっこりとはいってきたのである。

「宮地さん。ちよつと、三宅さんの持物を調べてみておくれ。あの人、ここから逃げだして行つたんでしょう？ あんたは、何も彼も、知っているんでしょう……。隠くさず言うとおくれよ……。」

「三宅が？ あれは今日、町に行つたのと違いますか？」
「あんた隠すつもり！ 正直に言うてくれ。何も彼も、知っているんでしょうが……。」

宮地は、まきの硬張った表情に、何かを読み取つて、いきなり起つていつて、三宅の大鞆を開けた。

そのなかには、洗いざらしの古いシャツとズボンが細かくたたんで入れてあるだけで、彼の登録手帳や、日本からの旅券、それに時々、こつそりだして眺めていた数葉の写真なども見あたらなかった。

「それみんなさい。隠そうたつて駄目……。あの男、逃げて行つたのよ。……。うちのふみを唆かして。あんたが逃がしたんでしょうが……。アー、アー。これだから日本人大嫌い……。あんたも直ぐに出て行つとくれ。家には、まだ年頃の娘がいるんじゃないやけん……。」

まきは、体をふるわせて、言うだけのことを言ってしまうと、荒々しく戸を蹴って出て行った。

宮地はなんと返事の言葉もありようもなく、全身に冷水を浴びせられたように黙念と静まりかえって、まきのヒステリックな後姿を見送るより、仕方がなかった。

何時までも帰ってこない寅吉を呼びにやって、いい加減に朝飯を切り上げてしまった一家の者は、それから大騒動になったのである。ふみのいなくなったのは、八時から十時までの僅かの間である。一家の者は全部傭人までが手配りして、町まで自動車を飛ばせ、両側の小駅にも見張りをつけ、彼処此处と、みんな心当りを探ねて廻った。既に解雇を言い渡されたはずの宮地も、このまま出て行くわけにもならず、寅吉の後を黙って従いて回った。

二、三日は、みな満足な食事も摂らずに、毎日同じ所を繰り返して探してまわったのだったが、遂に彼ら二人を捉えることはできなかったのである。

こうして遅れ咲きの野育ちの一輪は、三宅によって手折られていったことになったのである。寅吉やまきは、毎日ふくれては沈み、仕事にも出て行こうともせず、二人は黙り続けた。

宮地は今更取りつく術もなく、不本意な重荷を牛車に積みこんで、暇（いとま）乞を告げて河辺に向かつて帰って行くのだった。

味気なく去って行った宮地は、ひさの心に大きな空虚（うつろ）を残して行った。それは、宮地には、何も想いもうけぬことだった。ひさ自身ですら、何故とも気づかない程のものである。

それにしても、ゆるやかな哀調を奏でて回転していく宮地の牛車（カーロ）が、遠く枯れ果てた荒野の野路を、とぼとぼと砂埃りに消えてなくなるまで、たった独りで、丘の上にきて見送るひさの瞼の裏から、清らかな露の玉が、乾いた牛糞の土に、ぽとりと流れて落ちた。

（一九五〇年）

早咲きの花

お父さまと、テルと八重ちゃんを残してぽっくりと、お母さまのこの世を去ってお逝きになったのは、テルの九つの時でした。その時はまだ、差し逼って、さびしい悲しいということも知らないままに、それでもテルは、理由もなく泣いて泣いて、まるでお顔がくさるほどだった。生きてゆくままに、小女から娘になり、そうして、

女に成るまでの目まぐるしい十年間、それはそれは、お母さまのお逝きになった時のように取り乱しはしませんけれど、身も心も凍るほど、随分とさびしい悲しい想いでいつそ死んでしまいたいと、独りこころの底で泣き暮す日が多かった。まるで、死というものが何であるかを知らないテルは、ほんとに死んで逝きさえすれば、お母さまのお傍へ行けるものと、本気でそんなことを信じていた。

テルが、C市の伯人のお医者さまのお邸へ・養われて行ったのは、お母さまが亡くなられてから二十日ばかり後のことだった。とても親切で、日本人好きのM医者さまは、以前から常に病身だったお母さまのために、時々テル達の住む田舎のあばら家へお越しになった。そして変なお菓の匂いのする毛だらけの大きな腕で、テルや幼ない八重ちゃんを抱き上げて、大きくお笑いになったりした。八重ちゃんは、お腕の中で反身返って大げさに泣いたりした。

その頃、テルが七つの時だった。お歳の二十も違う、お若い綺麗な奥さまとM医者は、洗礼親になって、C市の大きなお寺でテルは洗礼して戴いた。そんなことから、小供好きのM医師のお邸へテルは引き取られて行ったのだった。

初めの頃はお家が恋しくて、学校に行っても、町にすむ日本人の生徒も七、八人はいらっしゃるようだったけれ

ど、田舎育ちのテルは、すぐにお友達にもなれず、日暮れになると、お家に帰ればまだお母さまが生きていらつしやるような気がして、お父さまやお八重ちゃんと一緒に乗って来たことのある、其黒く光っている冷たい自動車にとりすがって薄暗い車庫の中でしくしく泣いてしまふのだった。そんな時、お若い奥さまに、よく見付けられて、「元気をお出し！　いつまでも泣いていては駄目。

お母さまは天国にいらつしやるのに……」と、憤ったような大声でおつしやるのです。そして、御自分でも涙にぬれたお顔で薄暗くお笑いになって、強く強くテルをお抱きしめになり額や頬に暖い接吻などをなさるのでした。また、ビスコイト等もよく戴いたりした。その時の奥さまの涙にぬれていらつしやったお顔が、なぜか、小さなテルの胸にジンと応えて、それからは、メソメソと表面では泣かない子になっていった。

学校から帰って来て、お部屋や庭で小さい坊やと遊んでいる時など、氣に食わぬ意地悪な坊やの悪戯にテルが怒って、坊やを打ったりして、奥さまからひどく突きとばされて、ビクツと急にはねあがった血が、スーツと止まってしまうかと思うほど、強くお怒りになって急に田舎のお家が想い出されて悲しくなることはあっても、テルはもうけっして泣かなかった。

テルは半年の通学で二学年に進級して、三年間で、首席で小学校を卒えたのだった。M医師と奥さまはたいへ

んテルをお褒めになつて、

「こんどは、女学校だ……。女子師範ヨ……。」

と、お二人は不思議な位お悦びになつて、お客さまなどがお見えになると、わざわざテルを呼び出して、お客さまの前で、とくにお褒めになったりした。

テルは学問が嫌いではなかったけれど、近頃お父さまはあまりお出でもなく、時たまお越しになつても、以前ほどの元氣が見えず、急にお歳が寄つたように寂しそうなお姿が氣にかかつて、田舎のお家に帰りたくて仕方がなかった。それをお察しになつたM衷帥は、また直ぐに帰つて来る約束で、さつそくお家へ行つて来ることをお許しになつた。テルは跳ね上るほど嬉しかった。大きな手提袋に着替えなどを、テルは夢中で詰め込んで、

「まだ、早いヨ！」と、おつしやる奥さまにお辞儀をして、乗合の発着所へと、大忙ぎで駆け出すのだった。

お邸の物置きの壁にとりつけてある止り木だけに住み馴らされたパパガイオ（オーム）が、時々お庭の茂った樹木の天辺に遁げ登つて氣狂いのようにおらび叫ぶ時の氣持ちが、こんなのだったのかしらと、緑野と化して広く広くつづいた棉畠の中の大きな樹の古い切株に登つて、テルは自由な瞳をぐるりつと遠く彼方まで拡げていつて、こころ一杯大声で歌つてみたいような……。精一杯泣き叫びたいような……。ジーンと体全体が解け合つて、一塊りの雲のようにフワフワと浮び上つて、自

由に流れただようて行く想いだった。暖い清らかな空気の満ちている広い広い自由な世界がどこにもあることを、はじめてテルは眼の前に視たような気がした。生きていくことがなじめて軽やかに、明るく楽しくなるのでした。

テルはジイツとしていられなくなつて、一飛びに大きな切株から跳び降りた。そして、もう一度瞳を輝かせて薄雲にようやく黄昏れの色彩りゆく大空を眺めなおして、力強く大地に足音をひびかせて棉畑の細道を、お父さまと八重ちゃんの住むテルの家へ急ぐのだった。大きく膨れた手提袋を抱えた小さな両肩で、生きた大翼が生えで、ハタハタ動いた。

テルのはずんだひとみに懐しいお家の横顔がとび込んできた。しばらく町住いに慣れてきた眼には、近頃のお父さまのお姿のように、お家全体が年老いて、周囲とともにひどく淋しく映るのだった。近づくにつれて、お家の裏側にひとみが廻って、ハツとして、テルはその場に立ちすくんだ。(母さんが生きていらつしやる。元気な背

中を見せて、お水を汲んでいらつしやる)。テルは体をおいてけぼりに駆けだした。体が、それに遅れまいと前へついてのめりそうだった。

「アラ、お姉ちゃん、……」八重ちゃんは捲き上げていた井戸捲きの手を止めて、ニコニコとこぼれそうな笑顔

で、テルを迎えてくれるのでした。

「マア、八重ちゃんだったの！　大きくなつたわネ……」

八重ちゃんは心持ち顔を紅らめて、うつむき加減に、両手で握った井戸播きの腕木に、全身で力みかえってまたくるりくると捲きはじめるのでした。テルの小さなお乳の底では不思議な鼓動がタック、タックと余いんを静めてようやく落着きはじめた。

「どうも、重いのねエ！」　テルはここまで抱えてきた手提げを地面に転ばして、やっと井戸枠からのぞいてきたお水一杯のバケツに、両手を差し出した。八重ちゃんの日焼けした片手が加わって、三本の腕でやっと井戸枠に引据えるのでした。

「毎日八重ちゃんひとりで汲むの？」

「近頃はお父さまめつたに汲み置きして下さらないの。でもお風呂だけはお帰りになってから汲み足して下さるの……」

「大変ねエ！」　テルは誰にともなく、お気の毒のような……済まないようなんだか恥しい気持ちで、思わず妹の八重ちゃんから静かにひとみを外らすのだった。

テルは不慣れのゆえに、お手伝にもならないお手伝に、広くもない台所を行ったり来たりした。そして、お暇ができると奥さまから頂いて来たショコラッテ（チョコレート）など分け合って二人で食べた。テルは同じ所

を二回も三回も、ぐるぐるとお家の周囲を、お母さんの匂いを探してまわったけれど、何ひとつ想い出は残っていません。

お父さまが畠からお帰りになったお声がお家の前から聞えて来るけれど、強よく臭う豚小屋の側に起ち尽していたテルには、急に駆けだして出てゆく元氣は消えていた。

「テルかい！　良く来たね……」お父さまのひとみは潤んでいた。お声がとても嬉しそうだった。

テルはいつからともなく、深くものを考える子になっていた。目的も無く、湧かない希望を駆りたててまで、根のない手活けの生活を目指して、自然に叛き、はなやかに見える手造りの花壇の大輪になることは好まなかった。たとえ貧しく見えようとも、自然の中に個性のままを生きぬく雑草の小花に、より深く、力強い根の張っていることを知っていた。

だから、テルはC市の医師の元には帰らなかった。M医師からはたいへん惜しまれたのでしたけれど、テルの我侭な希望を訊き入れてお父さまや八重子ちゃんと野畑で共に働くことを御承諾下さったのでした。

妹の八重ちゃんは、テルにくらべて、ガツチリとした大柄で力競べではテルはかなわなかった。肩をくらべてみると、二センチも背丈も高かった。でも、テルの大きめの不断着と、八重ちゃんの小さめの野良着とを交換し

て、すぐ棉畑に出て働くことは、とても嬉しかった。

畠のお仕事やお洗たくも八重ちゃんと同じに

なるまでには、テルの身にはかなり応えたけれど、いつの間にか慣れて平気になっていった。

「テルが帰って来てから、家のなかまで明るくなった」などといって、お父さまも時々声を立ててお笑いになったりした。お母さまのお亡くなりになってから、時たまに、お飲みになっていたお酒が近頃では習慣になっていた。三人揃った夕飯の時など、少し召上り過ぎて眼元が赤くなり始めると、日頃の微かな老衰のお面をお剥ぎになって、

「八重も大きくなった。テルも戻ってくれた。これで、俺も一人前のお百姓になれるわい」と、二人の顔を見此べては、元気そうなお声でおっしゃったりした。

テルは、女学校などを望まなかったことがたいへん嬉しかった。はやく一人前の女になりたいと、小さな胸の底から硬い希望の塊りが、プクプクと音を立てて湧き上ってくるのでした。

たゆまない勤勉な農邦人の汗にとうとう地面の方で降参しはじめたかのように、年と共に地力の衰えて行く古いこの耕作地に早くも見切りをつけたお方達は、ほとんど去年の内に奥地の肥沃な地に住み変えなさっていた。最初は二拾数家族の邦人棉作者がいらっしやったのが、今では、衰え切ったこの耕作地にふさわしいような……

テル達一家と同じに、澁刺さの欠けた労働力の細い数家族のみが居残っているのです。

労働力の旺盛な張切った家族達は、どんどんと、新しく肥沃な土地に進んで行って、ますます澁刺さを増して膨張して行くかわり、テル達の家族のように微力な者達は、肥沃を新地に進出するほどの気力も経済も、とぼしくなっていて、老衰の耕作地に居坐ったままあるかぎりの労力を振り絞って懸命に働いていて尚々、全てが、衰えの道を年毎に後退していく見えすいた現実が、小さなテルの胸をピシピシ鞭打って、テル自身まだ少女の身であることさえも忘れて、ようやく鍬の柄の怒りに馴れ初めたばかりの小さな腕なのに、堅い希望の塊りを植え込むかのように力まかせで撫でさする想いだった。

「今年の収穫が終ったら、お父さん、私達もどこか奥地の新しい山に行きませんか？　もうこの辺ではこれ以上働いても収穫はかえって少なくなるんですもの……」紅ばんだ残り葉に迫るような真白い柔かな綿が、一辺に咲き初めた棉小屋の中で、三人でお鍋を囲んでおいしく食事を戴きながら、そつと吐息を隠すかのように、お匙をゆつくりとお口に運んでいらっしやるお父さんに、テルは元気よく話しかけたのだった。

「ホウ。テルはなかなか頭の良い子だとは思っていたが、やっと鍬が動かせるようになったと思うまに、もう俺よりも百姓道は委わしいんだなあ」

「アラ、お父さん。でも、いつも御自分でそんな風に、テル達にもおっしやっているのに……」

「ハッハ……。えらい。よし、今年は思い切って奥地へ行こう」

お父さまは、お匙を持った手を大きなお膝にのせて握りしめてお皿が傾いて御飯のこぼれ落ちるのもお氣付きなく大きな黒い眼を見開いて、八重ちゃんとテルを視つめて、嬉しそうにお笑いになった。

「マア、お父さん、おサラ、……」愛くるしい八重ちゃんの笑顔とテルの笑い顔が、またばったり会って、くすくすと笑った。

「お姉さん、新地に行ったら、こん度は、お米も植えませう、ネ」貧しい台所を預かって、いちばんに切実に思うことが愛らしい八重ちゃんの日を突いて出たのだった。

新しくテル達の引越して来た土地は、同じA線のIという小さな田舎町から、荒々しい牧場の坂の多い曲りくねった路を八軒も這入った処だった。お荷物と一緒にカミニヨン（トラック）で、朝早く発って暮色に追われるようにして、ようやく到着したのでした。（向うで、家は自分達で造るのだ）と、お父さまから訊いていたので（お家のない処へ引越しして）と、テルがそのことがたいへん心配だったのですけれど、去年お越しになったと

いう、お独りで棉作をしていらつしやる河井さんのお家へテル達のお家に出来上るまで、一緒に住まわせて戴くことになってたいへん嬉しかった。

テルには詳しいことは解らなかったけれど、この耕地は、おなじ日本人のTさんと、Nさんとの協同で近年購入なさったとかで高みの森林地帯はすでに伐り拓かれて、黒く焦げて倒れた大木に挟まれて、何万本とかのコーヒーが、穴の中から柔かい青葉をのぞかせて整列していた。それに添って、丸瓦の乗ったおなじ恰好の土壁の家々が拾二、三軒も直線に建ち並んでいた。それらの家にはイスパニヤ人とポルトガル人が住んでいてコーヒー園を受けもっているのだった。この耕地の境界を流れている小川に添うた低みの森に幅広く食い込んでいる棉畑にはすべに収穫の終わった後の棉に、もう一度、青々と新芽を吹き出して、所々遅れ咲きの純白の棉が、長く垂れ下っていた。

テル達の棉畑もそれに並んで、森を伐り拓いていくことになっていた。小川に添うた斜面の藪を伐り開いて、瓦や草葺きの粗雑な家が六、七軒不規則に点々とうずくまっていた。すべてが真新しい新開地の荒っぽさが、かえってテルの気持ちを快くそるのでした。お父さまと河井さんは、朝から毎日出て行かれて留守勝ちだった。借地契約のことでもなにか事情があるらしく、I町に二度も出て行かれたようでした。八重ちゃんとテルは、ごた

ごたと、お荷物いっぱいで落着けないお家で不安の中に一週間を過ごして待った。ようやく契約の手続きも済んで、お家造りに取り掛ったのは十日も過ぎた後からでした。

八重ちゃんとテルとが、毎日小鬼のように跳ね廻ってお手伝いが始まった。お父さまの伐り倒された材木の細いのを、二人は森の中から運び出すのだった。どつしりと肩に食い込んだ長い材木が、立ち木や枝に引っ懸って、なかなか骨の折れる仕事だった。張り切った二人は、大人のように材木の両端をやつとのことで肩に乗せて、頑張って途中まで運び出して来て、とうとう投げ出してそのまま放ってしまったりした。テルの胸は悲鳴のようにタクンタクンと鳴りあがり、全身にねばっこい汗が泌じみ出て、急に上半身が冷たくなるほどだった。八重ちゃんな、はれあがったようは、泣いているのか笑っているのか解らない其赤な顔をして、

「こいつ、重いヤツ！」　　といって男の子のように、投げ出した材木を小さな靴先で蹴ったりした。木質によって意外に重い材木のあることに、テルは初めて気がついた。二人は小さな肩を真赤にして、でも元気で垂木や壁木など全部運び出した。時々河井さんが手伝いに来て下さって、お父さまとお二人で重い大きな材木も、処々に全部を寄せ集めて、恐いような大きな角を持った牛が、六頭も繋がって並んだ牛車で、地均しの出来たお家の建

つ場所に、全部運び寄せるまでに、十日とはかからなかった。その日全部引き寄せて、最後の材木を牛車から降してみんなでほっとして憩んでいる間に、可愛い顔をした牛達が大きな体をどっしりと地面に据えて、胞の中から丸い玉のような物をふとったのどの中を転がし出し

て、ゆっくりと口を動かせて、それを食べていた。恐る恐る、傍へ近寄って行って眺めていた八重ちゃんが、「牛さん達、みんなでシクレ（ガム）食べているよ」と、うらやましそうにも見える茶目振りで皆を笑わせたりした。

「牛君、とつてもお美味しそうだ。ひとつ、八重ちゃんにくれ給え」

「アラ、嫌ッ、おじさん」

「なんだ、おじさんはないだろう！」

「そんなら、なんていうの？ おじさん！」

「カワイっていうんだよ！」

「でもちつとも可愛くないもの、おじさん」

「八重ちゃんが可愛くなくても、僕がカワイっていうんだ」

河井さんはいつもニコニコの顔そっくりで、たいへん朗らかで八重ちゃんやテルをお悪戯いになったりするのですけれど、なぜかおじさんと呼ぶことをお好みにならなかった。最初からテル達は、親切なおじさんと思い

込んで、そうお呼びしていたのですけれど、機嫌が悪かった。

「三十にはなっても、まだモツソ（若者）だ」と威張っておっしゃるのです。人さまから、すっかり子供扱いを受けて、不満に思うテルの気持と同じだと独り定めして、まるでお友達になった気で（河井さん河井さん）とお呼びしているうちに、兄さんのないテルに、すっかり、気のおけない、好きなお兄さんが出来上っていた。

テル達三人のさびしい一家にも、苦しい生活の中からも、でもこころ強くもちつづけて頼り切ってきた希望の収穫もやっと終って、みんなほっとする思いだった。

大きな労働力と、懸命な努力を要求する開拓地での最初の一農年は、テル達可愛い一家に、各々の思いで、うまれて初めての無慈悲な体験を、心の底が痛むほど深く刻みつけて残した。おさないテルの肉体はまるで発育が止まったと思うほど、ひどく応えたけれど、この最初の一農年で、すっかり底意の出来上った一人前の女になったと、テルは自負するのだった。

テル達一家の、新開地開拓への転居には、経済にも、体力にも、たいへんな無理があつたようだった。転居と共に一家の生活は地主であるはずのTさん達に保証していただくことになっていったのだったけれど、旧地主のイ

スパニヤ人に地価の払込みが出来ず行き悩んでいらつしやるとかで、それは不可能だった。そんなことで、Tさん達は、I町の商店にも大きな負債が残っていて、この耕地にすむ日本人には、個人的に信用のない限り、どの商店も貸し売りはしなかった。だから、テル達の生活は、当然見るも悲惨なものになっていったのでした。

お父さまは仕事のお疲労れの上に、思い掛けぬ心痛に、お顔は常に暗くなり勝ちで、頬骨は尖り、おひげは伸び放題で日々に寡黙になって行かれるのが、テルには、何よりも無性になさけなく淋しかった。でもテルには何もなすべきわざの心得もなかった。切迫詰って、幾度かお隣りへお願いに出掛けようかと思ったりしたのだったが（すぐにお返し出来る当も無いのに）と、何者かに打ちのめされたように……そんなことを思ってみたことさえが、テルには、すでに嫌だった。棉畑の低みに少しばかりまき付けたお米の、すぐにも太って稔るすがたを、台所の隅で、真剣に映いてはじつと元気を出して待ちつづけて我慢した。

「そらッ、お米だ？ テルちゃんのお腹はペコペコみただい。お隣りのおばさんのように、こんなにならなきやあ」

と、間もなく赤ちゃんが産れるとかの、お隣りのおばさんの恰好をして見せたりして、河井さんは気軽く、朗らかにテルを励ましてくださることが度々だった。そん

な時、頼もしい後姿を見送っていつもテルの体は熱く
なった。

何の気なく、疲れた夢の中にまで、河井さんの、おどけた、滑稽な真似姿が現れてきて、常に沈み勝ちになってゆくテルの気を慰めて下さることも、しばしばだった。

テルが或る日、何気なく開けて見た母さんの形手の箱の底から、お札だけの小銭で二十六ミルのお金を見付け出した時は、母さまが天国とやらから、テルにお授け下さったのだと思って、とても嬉しかった。

「元氣をお出し！　いつまでも泣いていては駄目。母さんは天国にいらっしゃるのに……」

テルは五年前のC市での、M医師のお若い奥さまのおっしゃったお言葉を、ヒシヒシと想い浮かべた。テルは近頃の切実に過ぎたあまりの生活に、おやさしい母さんのおったことさえもつい、忘れるともなく想い出さなかったが、蔵い忘れていたM医師の奥さまからいただいたお小使いの一部が、唯で出てきたとは、テルには、どうしても思ってしまうことが出来なかった。

「お母さま、ありがとう」と、暖かくふくらんだ感動の底から、瞼の母さまに、心からお礼をいわずにはいられなかった。テルは早速その夜訳をお話ししてお父さまにそっくりお金を差し出した。するとお父さまは微かに、うなずくようにお笑いになって、

「それはテル、お前のお金だ。蔵っておけ……」と、

はつきりおっしゃるのです。

「アラ、お父さん。でもお金は使うためのお金ではないの……」

「うん。そうかなあ……。そんならお前の好きなものを買ったらいい」

はずんだテルの気持が落胆するほど、何時もながらにお父さまに元気はなかった。

「八重ちゃん、明日はふたりで町に買物に行つて来ようネ！」

「お父さん、いいでしょう？」

「明日かい。そんなに急ぐのかい」

「でも、いいでしょう！一日ぐらい骨休めに、憩んで待っていらっしゃい。好いものを買つて来るから……」

テルは勉めて快活に振舞うのだったけれど、お父さまのお疲れの様子はすでに隠しきれぬほどのものでないことはテルにもよく解っていた。

テルは、八重ちゃんとはしやぎ廻って、食卓の後片付けも笑いのなかに済まして、いつものように二人はお風呂の中で、背丈競べや、腕比べをしたり、男の子のように体中で力みかえってお腕の硬い力癖の試めし合いなどしたりした。八重ちゃんの体は、テルの体ほどカサカサと硬わ張っていないだけ、滑らかに太っていて、テルよりすべてが大きくて丸味がとても可愛いかった。ふと気がついてみると、八重ちゃんのお胸の二つのお乳が小さ

なお皿を伏せたような丸味が、少しばかり高く可愛くふくらんで見えた。テルは自分のお乳にソツと手を当ててみた。

皮膚の下にちよつと厚味のある硬いものを感じるけれど、八重ちゃんほどに皮膚のうえまでもふくらんではいい

なかった。二人は浮かれたままお風呂から出てきた。騒々しくお部屋に駆け込んで這入って行った。静かなお父さんのお部屋に向ったテルの瞳に、ふと、壁に取り付けたお粗末な箱の中のお母さまのお位牌の前に、常にお灯明のまたたいているのが映ってきた瞬間、テルの全身が、スーンと冷たく鎮まっていた。八重ちゃんもそれと気が付いてか、にわか黙って、動かなくなっていた。二人は明りを消して、そのまま無言で、音もなく寢床に道入った。いつの間にかお灯明も消えて、闇は、テル達三人をおなじ想いに包んで、夜は、静かに、更けて行った。

（一九五三年）

野 生

田畑三郎

略歴 一九二二年、石川県の現加賀市に生る。一九三四年、十三才で家族とともに移住。日本では小学校を卒え、ブラジルでは商業学校に学んだ。農業組合・商工会議所などを経て、現在ブラジル三井物産に勤務。青年期には、長塚節・徳田秋声などを愛読し、つよい影響を受けた。文学上ジャンルでは、創作・ほんやく小説に関係。所収作品以外に、「彷徨」などがある。現在、ブラジルの代表的作家エリコ・ヴェリシモの大河小説『時と風』を訳出し、『コロニア文学』誌に連載中である。かつては、田畑陽三のペン・ネームを用いた。サンパウロ市イタケーラ在住。コロニア文学会々員。

野 生

夜明け前の港は、霧に眠っていた。とおい河岸の鶏が鳴いて、繋がれたカノアの触れ合うごとと鈍い音がかどきひびいてくる。河岸の所どころに建てられた小屋が濃い霧の中にうづくまって、船付場の、低いがつしりとした倉庫の軒に、小さなランプがほんのりとひとつ明るい。幾艘も並んで泊っている河蒸汽のほの黒い煙突から、ときおりは、薄闇の中に、ぱつと火の粉が吐き出されてはすぐに消える。あたりは、河波に寄せられたごみの甘酸っぱい匂いが漂って、べつとりと、砂土が素足にねぼりつく。かさつと、水に垂れた葦のような草の葉のすれる音。

邦三は重い足どりで、黙ったまま、雇人のジョゼーと、

繋いであるカノアの方へ、雇人の妹ベネジッタを迎えに出て行った。今日は遠い河上に帰るので、レジストロ港を、おそくとも朝五時半には漕いで出ねばならなかったし、この舟便で、暫く泊っていた叔母の家からベネジッタは帰ると言うのだった。

泥の中へ深く棹を突き差し、蔦の皮で作った細い縄で

繋いであるカノアを解き、ことんことんとの白い河面を、ベネジッタの泊っている向う河岸の家へ漕いで行つた。

朝の五時になると、ジュキア行きの河蒸汽の重い汽笛が、なまぬるい河面にひびき、苔の生えたような大きな水車がばたばたと水をかきはじめる。それが杳かな河上に倦いひびきを残して消えると、次はイグアツペ行きの船が出て行つた。朝焼けのない日の出前、湿気を含んだ空がすみきつて、次第に蒼みを増してくる。もう河面には、うすれた霜が這うように、小さな塊りとなって流れてくる。向う河岸にひろがったバナナ畑の蒼みを帯びたみどり、その間に散在する小屋の、腐りかけたサツペ屋根、そこから上る薄い煙が爽やかな日光に透きとおって見える。

邦三は昨夜のうちに求めた少しばかりの買物を舟に積み、ズボンをまくり上げて漕ぎ上るのだった。邦三らの住んでいる所は、リオ・プレット川に添った山の中でセツテ・バラスから二十キロの峻しい山道は草に覆われていた。僅かに残った人びとが、米や繭（まゆ）をカノアで売りに行く。曲りくねった平和な川面を、一日がかりで下ってリベイラの平野に深い呼吸をするのは年に三度ぐらいで、大方は谷間（たにあい）の沈んだ空気の中に一年を過してしまふ。

十月の眩い日光が、漕ぎ上るリベイラの平野に満ちみ

ちていた。南聖（注・サンパウロ州南部）の無風地帯の、湿りけにふくらんだ暑さが、日の昇るとともにじりじりと強度を増してくる。邦三はシャツのボタンを外し、胸をひろげて、大きな棹を突っこんでは力いっぱい押す。ベネジッタが真中に坐っていて、時どきはじいっと邦三を見ている。まだ年は十四というのに、はち切れるような褐色の肌に盛り上った乳房のカボコ娘（注・カボクロ・土地の娘）を、邦三はそ知らぬふりをしては倫み見ていた。

赫土の懸崖が視野の限りつづいて、ジュキア河の河口に近いあたり、広いゴヤバ林がつづいて、それを過ぎると、杏かに拡がった牧場、向う河岸には色とりどりに、動くともなく牛が群れて、所どころに立っている白壁の家が眩しい日光の中に音もなく生きている。河岸のやや高い所には、丸太を立て並べたカボコの小屋があつて、二、三株の丈の高いバナナ、その前にいっぱいになったレモンが真赤に熟していた。

平野の涯に、パラナピアカーバ山脈の高峯が蒼く浮き出て、杏かな平野に光の波動が虹のように、土人の伝説への、ほの紅い幻影を今もなお描いて――蒼いピアカーバ山脈の二つの高峯、眩い金塊がその山の精だった。それが年に一度、北から南に移り、また翌年には南から北に帰る。宵の明星の沈む頃、年に一度は大地をゆるがす轟音がして、山の精の移り代って行く日や、澄ん

だ元日の日の出時、遙かな項上を跳躍する金色の馬、その山の麓から流れ出るエタ河の注ぐ所、セツテ・バラスの或る山の頂きに、みどり深い一本のセードロの樹の下、グアラニー土人の埋めた壺にいっぱい黄金。

バイタカの、みどりと紅の羽根で飾った冠りを、ペリーの表皮を編んで紫色に染めた腰巻をしたグアラニー土人、黒光りのするバラヂューバの弓、透きとおったトツクの絃、赤く磨き、白い羽根のついたアラビシーカの細い矢が、しめり深い蒼穹にひらめき、高く渡り行く。胸の赤い大きなくちばしのトツカーノを射落す、白い日が音もなく上り音もなく沈み、永遠から永遠にありとも知れぬ夢に生きている土人の息吹き――白い雲、青い山、どの草の葉、どの木の梢もちらりとも動かず、燦燦と注ぐ日光の中に、かすかな呼吸をしていた。河岸の崖がなくなり、河が大きく湾曲した所、砂原にはマンジューバ（注・イカナゴのような小魚）を漁る網が乾してあつて蒸すような匂いが漂っている。

ジュキア河の河口は、どす黒い水が澱んでいた。春も、

夏もただかすかな気配でそれと知らるる黄色いイッペーが、あたりの沼地の深いみどりの中にところどころ咲き出し、それがいつとなく、一つちり、二つちりして、枝がみどりに覆わるる頃は、水のような蒼穹に、夏がいつ

ぱいになっている。イッペーの花も散りつくしたジュキア河の沿岸の森が、どんよりと水に映っている。流れに倒れ込んだ巨木に、大きな牛の屍体がかかって、ぶくぶくとふくらんでいた。

イピランガ川に入る頃、もう日が傾いていた。一面にペリーーの生い繁った沼地がひろがって、林立したペリーーの中に午後の日光が射し込み、滑らかなみどりの茎が透きとおって見えるあたりをサラクーラがしきりに鳴く。

邦三は疲れていた。

「ジッタ……。漕いでくれないか。エウ（注・私）、とても疲れた」

ベネジッタは重い棹を、軽がると扱う。ボンと前方に突込み、小さな体をひねってぐいぐいと押し出す。軽いはづみのある足と腕に汗がにじんで、あめ色に見える。午後の手を出せば把めるような濃い森の空気、それがきめのやわらかなベネジッタの肌に溶けて、処女のなまあたたかい体臭とせわしい呼吸の音。小さな流れの曲折が多くなつて、小高い森が川に沿ってつづく。椰子で作ったカボクロの家の豚の囲いのように棒切れを並べた壁。庭先の屋根には古いエステーラ（莫塵）にマンジオツカの粉がひろげてあつて、腹ばかりふくれた裸のムラートの子供が、大きなピット（おしゃぶり）をくわえて見下ろしている。

起伏の多い森々の間を流るるイピランガ川の上流は、ところどころに小さなせせらぎを立てて、なごやかな階調が、重く澄んだ空気をふるわせている。夕べの、紅みがかった空が森の枝越しに洩れて、ことんことんと船にあたる棹の音が、ひろびろとした沼地の彼方から、うす青く漂った煙の中に聞こえ、高く、森を超えて行く山鳩が二つ、遠くにぬき出た椰子の梢に消えていった。

「ホーイ」……すきとおった声が森から森に伝わり、それが消えると向うから同じ合図が、森の深い呼吸のようにながいがい余韻をひいて返ってくる。苔の生い繁った巨木の枝が頭上に被さって、奥の遠くにホーホーとマクコが鳴いた。

目が暮れて、邦三らが着いた頃は、小さなカンテラを前にして、赤ら顔のベネジッタの父が、マンジオツカ（マニオク）粉をつくる臼に腰かけ、舷のゆるんだヴィオーラを鳴らしていた。ベネジッタはしわくちやの母と頬ずりしている。

父親がひげだらけの顔で、人なつっこい眼をひからせて、

「ジャンタ（夕食）しよう。今日はタツー（アルマジロ）の大きなのが獲れて、焼いてあるし、ながく喰わなかったトツシンニョとフエイジョン（ベーコンと豆）がある」

「うん。けど、晩くなるし」

すると、ベネジッタが着物を引っぼるように、じっと眼をすえて、

「ジャンタしてもいいじゃないか。暗けりや泊っていけばいいだろう」

と、すばやく皿を洗いに外へ出ると、暗い崖を川岸へ身軽に下りて行った。

壁には、黒いブドツケ（石弓）の弓と銃口の二つ連んだ猟銃、赫い毛並のままの鹿の皮で作った火薬を入れる袋、肩から胸にかけても余るような大きな角笛等が、すすけた中にかけてあって、ほの暗いカンテラに照し出されている。山の匂いのするタツ―の肉とかるくこがしたマンジオツカ粉を皆が頬ばった。

邦三は重い袋を担いで、森の狭い山道を上って行く。背中は汗にぬれて肌にべっとりとシャツがねぼりつく。沼地に入れた丸木を渡る。暗い。眉毛を唾でぬらしては見る。突然ぎやぎやとジャクーが鳴いて飛ぶ。

邦三の家では両親や弟が灯をともしたままで待っていた。

山と山との間、斜面のなだらかな所に桑畑が少しあって、前の方は米を蒔きつけた焼跡がくつきりと見える。養蚕小屋の屋根が半分見えがくれして、畠のすみに伐り残したフイゲ―ラの大樹が、正午の日に涼しい蔭をおと

している。近くの再生株が眠たげに静まりかえり、ペリキット（オーム）の群が、青みどりの羽根を目に光らして空を渡ると、裏の森にスルクワがものやさしい声で鳴き出す。谷間の中に、邦三らの家が静かに二つ、白色の鶏が二、三羽動いている。もう母親が昼食の仕度をしているので、蒼空に煙が立ってぼんやりと消えていく。

邦三ら父子三人は除草に余念がなかった。米の蒔付け、桑の剪定から除草、蚕具の掃除と小さな仕事を毎日くり返す。それも茶の景気のよかった頃や入植当時、隣の近かった頃は皆大きな仕事をしていたのだった。皆茶摘みに忙しかった。大きな帽子を被って手伝いに行った。

それも皆出て行ってしまう、残った僅かの人びとが一キロも二キロも距って住んでいるだけだった。――一緒に茶を摘んだ波子は、近くの道路工事の土方と逃げたし、初江は黒人の雇人に強姦された――。

大きな窓が開けられてある。汗のにじんだ裸体が時どき寝返りを打つ。外はきらきらとした日光が、前の沼地のみどりに蒸せて、山の中腹に赫土の崖がつづいて小道が見える。行く人もない。鶏が口をあけたまま軒下にしやがんでいる。見晴らしのきかない森と森の間をバイタカがときどき渡る。それでも夕方になると、やや涼しさが戻って、小高い梨畑に働いていると、遠い隣家の、鶏を呼ぶ声や、薪を割る音が、谷々に漂ったほの蒼い霧を

通して聞えてくる。

天氣のいい日は珍しかった。十月に入ると、南聖特有の霧雨が濃い霧のように寄せる。前の小川がどす黒く溢れて、水が逆流するようになる、低地の湿地は一面水に浸ってしまふ。森のしづくが夜も昼もばさばさと小止みなく、それが十日も二十日もつづくと、どこの家でもとんとんと米を撞く音が、うすく煙った小雨の中に聞える。

暫く小止みの間を見ては、邦三はサッコ（麻袋）を着て米蒔きに出るのだった。森の合間から温泉のような山霧が立ち上り、それが消えると見る間に、又遠くから真白な雨が寄せる。ぽとぽと雨だれの音にくれて、それがやわらかい夜の眠りを誘う。

時どきは、雨の日に邦三はぼろサッコを着て近くの森に蔦を探りに出て行くのだった。暗い原生林の中にばさばさと、しづくが騒がしい。苔の生えに生えた鬼蘭の葉に溜った水がごみと一緒にざあっと流れ落ちる。高い梢から真直に垂れた着を、手元で輪に作って捻る。と、つけ根から長いまま頭上に落ちかかるのをひらりと身かわして手早く輪に作って肩に掛ける、奥に入ると、猿の群が人の近づいたのを知って、枝から枝に移る音が無気味に聞える。邦三は、竹を細く割って、蔦でコーボ（うけ）を作るのに余念がなかった。それを川へつけ、一夜たつと産卵期の・タライラや、カラーが、いっぱいに獲

れるのが楽しみだった。

雨にぬれたため邦三は、一週間もつづいたマレッタ（マラリア）の微熱に倦るい体を壁にもたせて虚のように戸外を眺めていた。土間の焚火がぱちぱちと燃えている。戸外は、さあーと白い小雨がバナナの葉に吹きつける。マモン（パパイヤ）の熟したのに小鳥が集まっけて真紅な小鳥が葉から枝に移り代る。青色のやや大きな小鳥が羽ばたいて他の小鳥を追いちらす。

裏のごみ捨場にサビアがおそるおそる餌を拾いに来ている。森の向うにすんだ口笛か聞えて、光男が白い馬に乗って来るのが、見えかくれする。どこどこと馬の足音が静かな邦三の家に、人懐かしい賑わいでひびく。

サツコを背中に着て、すそからは雫が垂れている。よごれた脛をむき出して、のしのしと家の裏へ馬をつなぎに行った。草屋根から上る煙がゆるく、青く、小雨の中に溶けて、鶏が畠の方で二声三声鳴く。

「……だけど、高田の文子、毛唐とナモラ（恋愛）してるってーほんとか」

「ああ。あいつ、こないだ逃げたんだ。それで兄貴が迎えにいつて連れてくると、親父が、縁の下へもぐり込んだそうだ。で聞くと、『無理に連れて来たから毛唐が怒って殺すかも知れん』てナア。あのバカ親父奴」

「で毛唐はどうした？」

「そのままよ！」

「ふん……。文子のちきしよう。バカたれが、こないだのバイレ（ダンス）の夜、エウ（おれ）が、踊るに毛唐とエウとどっちがいいかって聞いたら、「毛唐は踊るとき胸をきつくしめてくれるからいい』ちうんだ。ちきしよう」

邦三はぶつぶつ言いつづけた。

「初江だつて、あの水車小屋でジョンにやられたんだろう。それであんなでっかい乳してるんだよ。あのでぶでぶのしりを見てみる」

「うん」

「こないだ、ジッタと帰ったのか？」

「あいつ、奇麗になったナア。オッセを好きなんだろう」「さあ、どうだか知らん！」

「こないだ学校の先生に会ったら、オッセ（ボッセ・お前）のこと聞くから、知らん、ていうと、またバイレしないかちうから、邦三に話すつて来たんだが、やらんか」

「やってもいいナア。ジッタにも話すことがあるし」

「家は先生が学校をかすし、オッセにエウに、平山に堀田と五ミルずつ出すとく……。石油もカフェ（コーヒー）もフアリンニヤも買えると……。こんどの土曜でいいなア。オッセの方から毛唐に通知しろよ。で、あいつらに薪や何か揃えさせて、エウが後から行く」

灰色の空が一日一日と薄くなって、やんわりと日光

が、じつとりとした崖の土に吸いこまれて、濃い陽炎が桑畑にもえる。ぐう、ぐうと鳴く蛙が、沼地の蒲の中や、油のような溜り水の中に重い体を移す。重い空気が湯気のように肌にねぼりつき、明るい日光が森いっぱいにかぶると、カネーラ（キョウジ）の、黄色い小さな花が一度に咲き出し、強い香水のような匂いが、真昼の軒端一ぱいに漂う。群れた蜜蜂の羽音が、ねむく何処かに聞こえる。庭には、マンジオツカ（マニオク芋）を薄く切つて陽に乾してあり、甘酸っぱい醗酵が重い土の匂いをただよわしている。邦三は、又少しの掘り残しの芋を取りに山に登っていく。再生林の中の小道が雨にゆるんで、素足にふくふくとやわらかい。やや高所から見ると、重り合った山脈の彼方にピアカーバ山脈が北から南に走つて、夏の日がみどりの原野に沈んでいた。

ぐつしよりと汗に濡れた肩にマンジオツカを担いでは下る。それがすむと、除草に、少しばかりの茶の樹の手入れ、邦三は今晚のバイレのため、疲れた体を引きずつて仕事を済まそうと懸命に働くのだった。

夕方になると光男の家に遊びに行くといつて家を出た。

「あんまり遅うならんようにナア……」

母親が戸口に立って見送っていた。

夜の森が四方にくっきりと、低い輪廓を描いて、なだ

らかな山の斜面に、少しばかりの畠と牧場があつて、古い家が二、三軒ぽつりと灯をともしている。その中のやや大きな家が学校になつていて、早くから集まつた者が外に焚火をしている。ぱちぱちと上る焰に興奮したカボコらの顔が赫く照し出されている。室にはすすけた大きなランプが三つ高く吊り下げられ、ヴィオーラやカヴァキンニョ（ウクレレとギターの中間くらいの大きさ）を抱えた者が音を合している。光男もその妹も文子も、初江も来ていた。ベネジッタが外から、窓に一寸顔を出し、にこつと笑うと、ひらりと外の暗がりに消えてしまった。

所どころの白壁が剥れて、埃りのにおいのする室が人いきれで一ぱいになり、ヴィオーラやカヴァキンニョでサンバがかき鳴らされて、がああんとした中に汗がにじんでいた。

赤いレンソの大きなのを首に巻いたムラート（黒人の血のつよい混血）。広い革帯に銀の鋏をちりばめて、フアッカを吊りシャツ一枚 になつているモレーノ（混血）。真白い服を着た黒人。胸ばかり張って足の細い娘やほほ紅を染めた黒人女の体臭。うめくように耳元にするせわしい呼吸。汗ばんだ薄着の胸に、べつたりと重い乳房がおしかかってくる。フランシスカは学校の先生だった。栗色の髪を美しく巻いて茶色の瞳をした背の高い女だった。何時頃からか邦三に親しくよ って来て他

の男と踊るときも、男の肩越しに、邦三には げしい視線を送っている。

音楽がひとやすみすると皆が思い思いの所に立って話していた。邦三はベネジッタから離れなかった。休憩の時間も次に踊るように彼女の側にいた。ふとベネジッタが、二、三人の娘や男と連れ立って暗い戸口へ出て行った。すばやくその後を追った邦三が暗い階段の上に立って、

「ジッタ！ ジッタ！」

と狂うように叫んだ。と、後にはフランシスカが一人で立っていた。

「どうしたの？」

「うん……」

「ヴオッセ、あれが好き？」

「なに、あんなもの」

「エウ、たばこがないんだけど、家まで一緒に行かない？。」

「ノン。いやだ。わらわれるよ！」

「行こう。誰にもわからないから」

二人は連れ立って外に出て行った。

森の彼方がほの明るく、もう晚い月が登りかけていた。

くだらだら小道を登っていくと、沈んだ夜気の遠くで、すきとおった鹿の暗く声が聞こえ・白い月が森の木立の中

にちらちらと見え出すと、やがて、明るい海底のような夜の静寂がかすかに息吹きを始める。なまぬくい月光の沈澱したなかに、吐く息だけがせわしく、二人は無言のまま、家の戸口まで来ていた。戸を開けてマツチをすり、

小さなランプに火を点して、フランシスカは乱れた髪をなで上げてにこつと笑った。

「少し休まない？」

「ノン、早く……」

「けど、エウ、とても疲れた」

ほっと息をして立上ると、戸をばたんとしめ向き直ったとたん、激しい吐息とともに、ささやくように、

「アイ！　コーモ・ゴースト・デ・ヴオッセ」

押しかがられた邦三の顔いっぱい、熱くぬれた接吻が覆いかかって、息するひまもなく二人は寝台の上に倒れた。

険しい山の再生林の中に、小さく切り分けられた登り道を、ときおりは真紅な小鳥が横切る頭上にあぶがうるさく、じっとり汗ばんだ襟首にはいつか血を吸った二匹がふくらんでいる。はあはあと激しい息をしながら、遠くの畠にしまつて置いた米を邦三父子が一俵一俵運び出している。邦三の父は草鞋がけで背負子で中腰になって、日焼けした皺だらけの襟くびに汗を流してい

る。邦三ははだしのままで、肩に担いで運ぶ。近くの枯れたままになっているミーリオ（トウモロコシ）を荒すペリキット（オーム）が喧しい。かすかな人のけはいに、大きな山鳩が飛び立って、繁ったフイゲーラのかげに姿をかくした。森の中程に生えたパウ・ド・ブラジルの火のような幹が、繁った枝と枝との間に、傾きかった日光に輝いて見える。

疲れた体を引きずって帰った夕方、光男が黒い顔をしてひよっこりと現れ、鶏小屋の戸を閉めて来た邦三に、「どうした、こないだ」

「うん……。フランシスカになあ……」

邦三は苦しそうにいうと、

「なに、やれやれ。構うもんか」

「おい。所で、ジッタがエウに仕事をさせろっていうんだ。エウの家では仕事はないし、下女でもなんでもいいから、オッセの家で使ってやらんか」

「ほう。ちようどいい。エウも毛唐の女を探しに来たんだ。ママイは弱いし、忙しいしするから」

「そんなら、エウからジッタに行くようにいうから、使ってやれや。働きたがってるんだ」

そういつて邦三はうつむいて考えていた。

忙しいなかに幾月かすぐ経っていく。夏も春もない森に、紅紫のナカチロンの花が見え出し、インバウーバの実にたかる小鳥で、あたりの再生林が賑かになる。もう

五月にも近かった。米の除草から刈入れ、秋蚕の繭むしり。そして邦三は、三度目の繭を積んで平山と一緒にレジストロに下って行く。ようやくに出たりベイラ河は小波が立って、夕日の影がちらちらと流れている。汗を流したような河蒸汽が白塗りのマストを日に光らせて追いつ越して行つた。だぶんだぶんと大きな余波が岸にあたり、波頭が日に映えて、鮮かな織物のようになって、リベイラの平野になごやかな憩いの夕べがくる。

夜は、港のほの暗い所にかくれて、平山と邦三が、新しいコンチネンタルをそつと喫いながら、平山が声をおとして、

「オイ、光男の所のジツタは腹がでかいっていうぞ」

「本当か？」邦三はぎくりときた声で唾を呑んだ。

「光男の野郎。やったんだそうだ。何でも、ジツタが体の工合が悪いつて、克蘭デーロに見せたら妊娠だつていうので、サア親や兄弟が騒ぎ出した。カーザ（結婚）するか金を出さかつて光男の所へ押しかけた。それでとうとう警察までいったら、カーザしなけりや、カデア、それとも金つていうんだ。なんだかカーザすることに決めたらしいぞ！」

「いずれ、カーザするんだなア。ちきしょう、バカたれが」

邦三は怒った顔をゆがめていた。

珍らしく天気がつづいて、蟬が再生林の中で鳴き、蒲の穂が出揃って、平地近くのイビリスの木棉がぽつくりと開いて、秋がかった大気を一寸覗く。ベンテヴィが黄色い胸を張って、尾を逆さに立てて鳴きしきる上を、野鴨が高く渡っていった。日が沈みかかって赤く空が染っている。邦三は疲れた足どりで小川のコーポを見に行くと、光男が急いで来て、

「あのう……。今度、エウはジツタとカーザしなきやな

らなくなつたんだ」

「ほう……」

「で、明日の晩、そつと、形ばかりの式をするつて親父がいうから、来でくれないか」

「けど：なぜ、そんなことになつたんだ」

「仕方がないもんなあ……」

前にやや天きな平地が広がって、その中を、一寸した川が流れる。後に峻しい山を背負って、サツペで葺いた屋根が二つ三つ並んでいる。夕日のいっぱいあたたつた庭には、少しばかりの縄たばこが乾してあつた。黒ずんだ汁が垂れて、強い匂いが鼻をつく。土手の下にバナナの大きな葉が夕映えの中に静まりかえつて、鶏がその間に、かさかさと餌を掻いている。近くにカフエ樹が一本あり、濃いみどりの葉の間あいだに、つぶらな実が真赤に熟れていた。

邦三はゆつくりと土手を上って行った。もうベネジツタの親族やカボコらが集まっていて、片方のズボンをまくり上げたもの、大きな帽子を被って、胸毛をむき出した年寄り、仕事帰りのついでにフオイセを担いだままの者などが、わやわやと話していた。光男が遠くから小さなカノアで上ってきた。ズボンがずぶ濡れになって、右手の籠には、今夜の宴に使う魚がぱちぱちとはねていた。

遠い隣りの日本人が一人二人と来た。籠を下げた光男から視線をそらしながら、

「今夜は、遠慮なく上りました」と頭を下げている。

日が暮れて、壁の破れた室に、ランプが二つ鈍い光を放っている。椰子を割って作った棚に、すすけた神棚や、

ぼろ雑誌が二、三冊重ねてある。何年か前からのカレンダーが、よごれたままに掛けられ、隅の方には大きな鉄砲が立ててあり、鹿の皮の巻いたのが横たえてある。しっとりとした気配がいっぱいになって、荒削りのメーザ（机）には、小さなカネカが幾つも並び、魚の天ぷらや茄子の煮物が二皿、三皿、その前に皺くちやな服に体をかたくした日本人が四、五人黙りこくったまま坐っている。カボコらが帽子を被ったまま窓から重なり合って覗いていた。水鳥の暗く声が遠くに聞こえ、うす明るいランプが、ときどきぱっぱと吾を立てる。

光男の父親は六十を越えていた。やせほほけた頬の荒々しいひげの剃りあとがよけいにやつれて見せる。静かに立上るとふるえる声で、

「みなさん……。わしは、なんと皆さんに申上げてよいや

らわからんのです。今更いうのも愚痴ですが、こんなことになろうとは夢にも思わなかったのであります……」

うつむいたまま、しばらく黙っていた。

「光男は、日本で小さい時、小倉に何不自由なく育ったのです。わしは、この一粒種に嫁をもらって、孫の顔を見るのが楽しみで暮していたのです。それが、こんな女と縁のつながりになりましたのも、何かの因縁でしょう。――諦めてはおりますが……。お笑い下さい。もう、何とも皆さんに合わす顔ありません」

落ちくぼんだ日には、涙がいつぱいになって頬をつたう。誰も顔を上げるものはいなかった。

「しかし、これは皆、わしの責任です。光男が悪いんではありません。親として、監督が不行届きだったわしの罪です。――可愛いわしに、子供がどんなことをしているか見られなかったわしがバカだったのです。光男は何も知らない……。どうぞこれからもよろしく御願います」

泣きながらようやくいい終ると、ああと大息して、
「どうぞ皆さん。光男の前途を祝ってやって下さい。夜

の明ける迄唱い踊って下さい」

静かに座につくと面をふせてしまった。

大きなガラフオンに満たしたピンガが少しずつ注がれる。小さなカネカを各おの口へ運ぶ。話す人としてはなかった。ベネジツタは知らぬうちにその場を抜け出ておらず、光男がうなだれたまま動かなかった。すると光男の父が、

「光男！ 飲めナア……。心配することはない。みんなわしが悪いのだ。何も心配せずに、飲めなア……」

いたわるようにいい聞かせていた。台所の方では近所のおかみさんらが二、三人ひそひそと立話しをしている。

「マア……。この前の小屋でねエ……」

と驚いたように答えると、光男の母が、

「それで、女の方から媚びをかけたらしいのでね。知って

るように、光男は内気だし、とうとう女の媚びに負けたんですよ！」

雨が近くなると、森々が蒼みどりにすんで、山の間に遠く見えるピアカーバが手にとるようにせまる。紅く空が焼ける頃、どこからともなく、地ひびきのような山鳴りがする。ピアカーバの麓に大滝があつて、雨前には暴れるのだといい伝えられる。そしてどんよりした日がつ

づいて、死のような静けさが森を覆って巨木の枝に覆われた小道の崖に、濃紫のニアカチロンがべつとりとして重い花びらを開いている。いつの間にか糸のような雨がしとしとと腐りかけたサツペ屋根をぬらし始める。それがまた十日も二十日も、音もなく森をも包むのだった。桑畑の除草をすまして、暗くなって帰って来た邦三が、ほの暗いランプの下で夕食をしながら、

「お父さん、サンパウロ郊外へでもエンボーラ（引っ越し）したらどうやる。こんなところにいてもちつとも面白いことはないし」

思い沈んでぽつぽつ話します。沼地の暗闇に、水鳥が無気味に鳴いていた。

（一九五〇年）

星座の涯に

孤影

佐藤 実

略歴一九一七年、宮城県に生る。日本では中等学校に学び、一九三四年移住。産業組合、証券会社などに働き、現在ブラジル協栄勤務。もっぱら創作にはげみ、古野菊生・山路冬彦の感化を受けた。「孤影」は日伯毎日新聞社の懸賞超短篇小説入選作（一九五一年）。「星座の涯てに」は第2回「よみもの賞」第二席入選作（一九五〇年）。サンパウロ市在住。コロニア文学会々員。

星座の涯に

ドドン……雷だ。大太鼓を叩いているのと変りない。それをきっかけに、ひっきりなしに雷鳴がつづき、稲妻の閃光が地面を突き刺すように放射される。この雲行では大暴風雨だ。憤怒を学んだ気流は白い糸のようなものを見せて、凄まじい風速を加えていく。

人間同志の世界の中では何事が勃発しようと好意ある黙殺をもって、感情の境界をけがすことをしない信条に馴れた熊蔵も、自然の激怒の前には他愛のない存在であり、はつきりと狼狽していた。臍物のようにくろずんだ唇を歪めて自信なげに、脚の速い雲を目を据えて睨めていた。

―駄目だであ、おっそろしい風だでは。

傍らの辰にいうのでもなく、吐き棄てる言葉は途方にくれていた。ほんとうに駄目なような熊蔵の目付きにつかれて、息子の辰も乾肉を漬けた瀬戸鍋を跨いで立上った。

―お父う、なんとする？

見事に盛上った漆黒の入道雲は、墨汁のような色で頭上に蔽いかぶさってきた。その雲の下と、彼方のうつ蒼とした森林との間は、火気を含んでいるとでもいいたい

渦を巻きながら強風が襲ってきていた。枯葉や小枝を吹き上げて、火の粉のようでもあった。

人里を数十キロメートルも離れた州境の原始林の真只中に口を開けたように伐り拓かれた五十域の穴は、風の下に白く、骸を並べたように美しさのない眺めであった。

小舎にはいま人夫が少かった。野風呂のある背後の一廓は、下刈りだけ済ませた巨木の立木が、蒼黒い肌や銀色の肌をむきだしに小暗い陰を落して大きく揺れていた。

風は狂い廻り、引き裂くように枝々にからみついて咆哮し始めた。

ー 轟ッ、めりめりめりッ。

脆い枯木は次々と抵抗も試みず、同類の上に折り重つて果てた。砕けた骨のように白い枝が散らばって、暗い鈍い光の中に無気味に見えていた。夕餉の支度に燃やされた焚火は土を嘗め廻って何処へ飛火するかも分らなかった。砂塵は視野を埋めつくし、小舎はふわふわと伸縮しだして手の施しようもなくなった。

キーツと悲鳴があがる。そして大木の枝が裂けた。井戸端に置かれっ放しの石油岳や鍋が競走するように転って行つては木に打つっかり、棚が落ち、皿類が割れて散る。

ーお父！　まだ采ねえな、カマラーダ（雇い人）は？

――

深い溪谷を隔てた向い側の森林は、暮色に鎖されたように光を失っていたが、滝のような雨脚だけが、笑った気狂いの歯並のように白く迫って来た。怒濤に向った船頭よろしく、熊蔵と辰は思わず裏口の柱に身を寄せた。

辰は上歯をむき出しにして、小刻みに戦っていた。熊蔵は下っ腹が痛むような気がした。平常の暴風雨ではない。天の怒りだと思つた。雨・風という観念を叩き壊したものだつた。大波だ、津波だ。すると大きな掌で耳をひつ叩かれたような雷鳴が炸裂し、雲と溪谷に訝し、やがて波の音に掻き消された。上体を大きく揺れている大木も折れそうに見えた。

―― お父！ お父！

―― やかましい。黙つてれ。小舎あ吹っ飛んだら何んとする。死んだタラあ見てえな面ばしてねえで、そつちの

柱の方見でれ。ぎいっと……この馬鹿あ。

見ていてどうにもなることではなかった。薄い草葺きの屋根は膨んだり、いびつになったり、一枚の筵のようにばたばたしたりした。柱だけは丈夫なものだが屋根とのかくつきが悪いのでいまにも小舎の頭はもがれそうであつた。この屋根は今度は横なぐりの猛烈な土砂降りに打

たれだした。お河童式に撫で下した草屋根は、下からめ

くり上げられ穴だらけになったので、小屋にはいくつもの滝が流れ込み、どんどん水量を増して、辰の泳ぎ場ができた。半分擦り落ちたズボンが尻の所で袴のような襷を溜めて引掛り、濡れた腹が黄色に滑々して見えていた。

わあっ　ー　と鳴って来た風は辰の頭の上でよどみ、ぐたぐたともつれたと思ったら細長い小舎の屋根が半分裏返しにされ、べたべたと地面に叩きつけられた。

もう、とつぷりと日は暮れて、怒涛のような水の音だけが間断なく耳を聳っていた。半分になった屋根はさらに弱くなり、いまにも潰れそうだった。このとき、熊蔵は、自分の身边に忍び寄ってくる恐しい影のようなものを感じた。小舎の中の手薄と金のあることを知っている人夫はきつと何かをやるに違いない。そうするとこの嵐の夜がなにか彼らのためのものに感じられた。熊蔵は、書類と現金を着物にくるみ、懷中電灯と拳銃を毛布に包んだ。そしてありったけ口を一文字に結んだ。

責任がある。山ば降りている親分に代ってここば守んねばなんねえのだ。北海道のやどいばした俺だ。人夫の二人や三人……と熊蔵は腕を擦すった。喘ぎ、身悶える大木の肌が稲妻の光りに映えて、雨の中で魚の腹のよう光っていた。深い谷に降り注ぐ雨の音は、轟々として地獄までもつき抜けているような音を立てていた。

直感は的中した。

― お父！

異様な響きの呟きが聞えた。戦っている辰の視線を辿って行くと、大木の下に人夫共が一塊りになって佇み、幹を背にしたまま這うような眼ざしを小舎に向けていた。

いずれも流れ者の伐採人夫でけっして信用のおける連中ではなかった。熊蔵は慄然として、その奇怪な様子を喰い入るように凝見め返した。彼らは小舎に入ろうとはせず、しきりに闇の中からこつちの様子を探っていた。真黒な空から流れる電光の中に浮び上がる四人の形相は油ぎって見え、獐猛な野獣がその仇敵に対峙したように、そつとした静けさを湛えていた。豪雨はいささかのゆるみもなく降り瀧ぎ、風は狂って暗黒の森林を折り畳もうとしている。

四人の人夫はただならぬ荒天と知って、急遽、帰途についたのであるが、途中、暗黙の中に一つの計画を立てて来たのである。請負師の木村に対する憎しみはもちろんのこと、そこには人種的な不和が多分にあった。しかも最下級の労働者に数えられる彼らは、階級意識から生れる半性格的僻みと、浮浪者特有の犯罪癖が働いて絶間なく悪事を重ね、虐げられる魂を慰めながら底の知れない淵を歩き流れる者だ。その性質と遣り口を承知しているものには案外、抑えを術もあるのだが、単純で気短かな者にはとても御しえない代物である。

熊蔵は陰悪な殺気を感じながら、冷静になるどころか、かえって自分の方が刃物のような空気の中で激情にふるえていた。

四人はこのこと小舎の中にはいつて来た。昂ぶった憎悪の情が、またそれと交錯した。移住者に対する侮蔑の念が執拗な眼光となって熊蔵親子に注がれていた。吊された石油箱の中に煤けた安全ランプが赤くまたたいている。両者とも耳を聳する風と雨の音の中で逃れられない闘争の中へと駆り立てられていった。善良で、狭い心をもった日本人なるが故に、自ら求めていく忌わしい宿命の闘争へと……。気拙い不穏な対立に痺れを切らした男が冷たい口を切った。

―金は！

彼らの当面の問題は金である。熊蔵の唇は、わなわなと痙攣した。

―なんだと。あつかや、そんなもの……。：

と、白っばくれはしたが、惨めなほど取り乱していた。

懸命に燃え上る血を制御する熊蔵に、悪人に悪事を思い知らせ、その悪事に平然としていられない心の破綻を起させる威圧があつたら、また生領の試練による磨かれた魂の力があつたら……。それは熊蔵自身の思いでもあつた。

死に対すを恐怖よりも、生きることへの憧れの強い

ま、やはり血を流すことは避けたいと思った。もし辰が生命を失くするようなことがあつては、熊蔵の夢は根底からくつがえされるのである。唯一人の子であり、後継者であればその感懷は深かった。

辰は何気ない素振りで、拳儀と金包みのある藁床に後向きに横たわり、全神経を耳に集中して成行を氣遣つていた。

― 日本人奴。禄でなし共奴つ。どうしてやるか覚えておれ。お前らが出しやばつて、我々が黙って引込んでおれると思うか。威張りくさりあがつて……今夜はお前らを殺してやるからそう思え。木村もその中に殺してやる。それともだ、お前の隠している五コントスあまりの金をここに出して、我々がいなくなった後、三日間、黙っているなら命は助けてやろう……。うん、且本人奴。

熊蔵にも大体意味は解された。だが彼の感情はそれには背を向け、いつそう頑なな性情をはつきりとさせるばかりだった。

― 銭コくれて？ どつたら面ばして、そんたらごと吐くや日本人はそんなこと嫌だ。死んでも嫌だ。そんな不正なことだば出来ねえ。

熊蔵は正義の下に流す血の美もさを信じていたでそういう觀念の中に築かれる生活こそ真実のものであると思つていた。だから死を賭しても、彼らに降ることはできなかった。

― ほんたらコケ威しに乗るものか。やる気だば、や
って見ろさあ。

そのとき、アフリカ象の耳のように、薄い屋根がばた
ばたしたと思うと、ぐうっと膨んで、皆体を吊り上げら
れるように感じた。とたん、なにかに弾かれた辰は、右
手に素早く拳銃を執り、床の上に向き直った。だが日頃
そうであるように、伸縮作用のない顔血筋肉は伸ばした
餅のようであり、微塵の動きも示さなかった。四人の男
たちは、氷のように光る水をたたえた小舎の中に立った
まま、弱いらんぷの光に照らされている着物を伝って落
ちる雫が小さく足元へ碎けていた。

意外な辰の落着いた様子に腹を立てた樺猛な一人が、
辰の前へつつとにじり寄った。

― お前死にたいというのか

と腰に手を廻した。細身のファッカ（ナイフ）が抜き
とられた。

辰に発止と向けられた眼は、狂暴性に血走り、瞬きもせ
ず、隙があつたら襲いかかろうとしていた。

辰の魚のような眼も据った。どろんとしているが、よ
く見ると緩慢ではあるが、闘志がちらちらと閃めいてい
た。辰は問答などはどうでもよかった。そんなことに関
りをもつような造作ではなかったのだ。銃の引金に掛っ
ている指にひそかな快さを感じ、ぴくぴくと動かしてみ
た。

我と我が心の落着き、また相手への反応を試すだけの余裕をもっていた。

― これだば大丈夫。鉛コの弾丸ば、食わせでやるぞと思った。

主役を辰に奪われた熊蔵は、しかしここで息を抜くだけの間もなく、辰の背後に廻って、米余の斧の柄を握っていた。

辰は前方から眼を離さず、拳銃をもった手に最後の、決定的力を籠めて、

― お父！ 射（ぶ）つか？ と、聞いた。

熊蔵はまよった。己が射つならともかく、辰に、射ち殺せとは咄嗟に言い兼ね、ぐつと喉を語らせた。だがその重心は、辰には通じなかった。熊蔵の沈黙を無言の叱咤と聞いた辰の心は、美しい陶醉へと滑り込んで行った。― 血が出るぞオ、ええ。あの胡座をかいた鼻コの下へ、ずどんと打ち込んだら……へへへへ。

次の光景を想像して、全身をくすぐられる思いだった。

一息吸い込み、痔く指全体に力を入れた。

― 快い轟音。

血塗れになってひっ繰り返った男の姿は、しかしそこには見られなかった。四人は一せいに闇の中に逃げ去った。

辰は不覚の失敗を喫し、弾条仕掛けのように立上り、

彼の力とは思えない敏捷さで後を追った。小舎前で彼らの横隊と危うく突き当たるところだったが、辛うじて踏み止り、間髪を入れず男に向けて第二弾を放った。豪雨の中ではあったが、グワツという坤きは確かに聞かれた。

電流のような快い反応を感じて、次の瞬間に見られる相手の姿を雷鳴の轟きの中に待った。間断ない電光の明滅のため、暗黒の中では全く視力を失った眼をひらいて、次の照明を焦りじりと待った。一閃地割れでもしたかと思われる雷鳴がした。美しい金色の光条が張りめぐらされた。そして相手の凄惨な相貌が浮上っていた。迸る血沫に胸部を彩り命中した喉元を手で抑え、しかも右手に腰刀を振り上げ、光に浮き出る辰を射止めようと身構えていた。

危機一髪、右手をぐっと伸し、転変常ない浮沈の哀しい夢の中に全生涯を賭けた悲願をこめて引金を引いた。魂も凍るかと思われる瞬間だった。銃口が灰明るい光を発すると同時に、流星のように飛んできた腰刀は、辰の腹部を掠めて、折しも、後を追って来た熊蔵の股にぐさと突き立った。一度直立して、立直ろうともがいたが、そのままそこへ尻をついてしまった。浮立つ足取りで逃げ去ろうとする男の背後から、悠々と接近して行った辰は、小川の崖上に四、五米後方で歩を止めた。橋渡しに倒れている大木の肌を渡り切る体力のない半黒は、じ

いっと凝つめていた。大きく息をしては腹部に手を当てて、新しい傷口を抑えていた。猟師が傷手を負った獲物を尾行する時に味う食欲な征服感が湧くだけで、人間同志の間にあるべきはずのなんらの憐憫も呵責も漂わなかった。

よろよと右足を吊上げるように踏み出し、暫時、足はそのままだったが、ついで左足がその後に従った。そして津身の力を足に集中して渡り始めた。辰も、歩の運びをあわせて距離を保って行き、彼が橋の真申近くに達したとき、何の必要あつたかまた一弾を浴せかけた。銃声が、水流に掘られた壺のような谷に訝して、半黒の発したはずの断末魔の呻きは聞きとれず、橋の上に棒立ちになった体は、がくんと腰を折り泳ぐように闇の中に消えて行った。堰を切ったように流れる濁流が何事もなかったように、うねりの背を光らせていた。

豪雨は幾らか猛威を緩めたのか、森の上に騒ぐ風の音だけが強く叫び狂っていた。

辰は自分を吸い込んでゆく暗黒と、異様な音の交錯したような咆哮の中に茫然と立ったまま、全身の神経が麻痺でもしたように、次の行動を忘れて動こうとしなかった。背筋を伝わる冷たい雨が少しずつ意識を呼び起こし、やがて激しく襲って来た寒気に身懷いし、悪夢から醒めたように太い息をついて周囲を見廻した。更け始めた夜の底に這う沈潜した夜気が轟々と心に迫ってくるの

が感じられた。

辰は、何か得体の知れない怖しさに胸を絞められる思いがしだした。「人殺し」「罪」否、そのようなものではなかった。この種の出来事は普通の社会の事件とは別に存在するもので、神や人間と懸離れた地上の涯の変事として考えられた。不当にならされてきた者の考えなのであった。それ故に、生きることも死ぬことも、それを経験する魂自体が知るだけで、明るい世界に住む幸せな人間や、自分達の生涯に訪れがたい光と、だんだん遠ざかっていく際限のない虚無の恐しさだった。青白い焰を上げて燃える裸の魂を凝つめて手繰る人生の中には、辰のような人間にも容易に肯ける悲愁の虹があったのだ。四つするとき、妹を産む産裾の中に死んだ母が、闇の中から声を忍ばせて呼んでいるような気さえしてならなかった。

十五年の才月は、母の声を聞く思いの中で掻き消されていくようだった。

辰はその時、ふとなにものかに突当ったような衝動を覚えた。魂はぱちぱちと焰を上げて燃えているようだった。誰にも打明けることがなかったが、彼はやがて父になるのだということを考えたのである。それは日雇いをしていた男の娘で、エレナという十八の女だった。汚れた髪の痩せた体をして、前歯が大方抜けているので、辰と一つ違いには見えない女だった。綿の収穫で忙しい

頃夜業が続いて、棉畠の中で月を眺めながら愛の言葉を交したのである。荒れた手に温かい情愛の籠っていたのを辰はいまでも忘れてはいなかった。唯、子供が生れることになれば早く家をもたねばならをい。そうすれば自分も一人前になるのだと胸を弾ませていたのである。

― どったら、悪りい（つまらない）お母でも、生きていだら俺あ、一生懸命働いたべに……

淋しいとき、母の、死が恨めしくなり、熊蔵に泣いて訴えた寂莫もあつたが、その底からいま新しい希望の芽が生れ出ようとしている。愛情のない境涯を寒々と堪えてきた辰は、愛情を食物のように欲してきたのである。だからエレナを熱烈に慕い美しい生活を築いて行こうと覚悟していたのであつた。だが、こうして夜の底に沈んでいる辰には、その幸福もどうしてか胸に冷たく痛かつた。

母と自分との愛情ほど、自分と自分の子との愛情が濃いつとは思われなかった。間違つた夢だつたのではないだろうか。自分達の幸福は母の死と共に疾うに終をつげているのではなからうかと思われた。そうすると、雨水の流れる体は孤独の淋しさに打震え、胸はざくざくと痛んで、涙だけが熱く、後から後から流れて頬を洗っていた。

フクロウがげろげろと鳴いていた。星の光も土の臭い

も凍りついたように動かない夜が山を包んでいた。暖を摂る焚火を囲んだいくつかの顔が、いずれもこの静寂に中毒ったような表情で、やたらに火をつついていた。傷に包帯した熊蔵もいれば、辰もいた。外国女には歓待されそうもない年配の同胞ばかりは、いつも町へ遊びに出ることもなかったので、明日の休日をあてに、歌い、飲み明かそうという魂胆だった。もちろん、事件以来、なんとなく重苦しい幾日かをもてあましている故もあった。誰もが、裁判に掛ければ必ず勝つとはいっていたが……。深山の情緒を掬む酒宴は、ときもときなので、耽々とした気に満ちて怪談めいていた。どの顔も飲けそうであり、妖しい山の夜気に憑かれた面々は、赤鬼、青鬼のようにも見えた。

洗濯の行き届いた仕事着を皺のまま着用し、手拭い代りの白布を腰に下げている姿は妙に傷々しく、気の毒にも見えたが、座はぼつぼつと賑っていった。大きな掌で鼻や口を一遍に拭っては、ちぐはぐに笑いながらピンガを酌み始めた。お邸にでも呼ばれたように骨の折れる初めの杯を、熊蔵は神妙に二つ、三つと傾けていた。何かといつては、上げる杯からこぼれる酒を勿体なさそうに行儀よく拭き取ったりしていたが、強烈な酒の酔は廻りも早く、囲っているように感じた雰囲気も、何処からとなくとけていった。

辰も面白そうに隅の方から皆の顔の伸び縮みを見守つ

ていた。― お父！ 歌うべや。

誰も歌い出す者がいなかったが、もうなんか出ていい頃合いになったので、熊蔵に誘いをかける者があった。浮立たせようと杯を差す者、哀願する者たちの中で、唇を幾様にも結んだり歪めたりしていたが、快諾した模様が見え、それから除々に気持を整えている様子だったが、熊蔵にしてみれば、やたらに歌えない十八番であるだけにかなり苦心して格好をつけ、ふしぎな韻をもつ美声で巧みに歌い出された。親指だけ起こした拳固が、鼻先を起点にして前方に水平に伸び、左右へ泳いで歌詞の流れを導いていた。

― 忍―路―高ア島ア―及―び―も―ない―が、せめ

エて、歌―す―っ：磯―谷あ―まア―で―

嫋々として、しかも男性的であり、霏々として降る雪を吸い込む北国の海面のうねりを彷彿とさせる調べは、さすが、民謡の雄といわれるだけあって、聞く度に胸をそそられた。ことに北海道の漁場や、奥山を半生の間、漂泊を続け歩き歩いた熊蔵の歌には、吹雪と潮の臭が感じられ、哀感がにじんでいるので、歌う者聴く者とともに境地に引き込んでいく迫力があつた。暫時、歌が終つても座は言葉がなかった。魂を故郷に持ち去られた形だった。熊蔵もそうだった。

すると突然、怒ったような口調でいい出した。

― 何んも面白ぐねえでば、何んも。こつたらごと
で、無えもんだ。糞う、垂れでじゃ、寝でヒや、何んも
面白ぐ無え。

人々は何のことか解らなかった。面白くないというのは
は聴き手の顔触れに不足があつてのことかと思つたが、
そうではなかった。熊蔵には自分の境遇が面白くないの
だった。食べて、寝て、働く。家庭もなければ女もない。
その生活が一向面白くないというのだつた。死んでしま
いたい寂莫に対する呪詛であり、積り積つた運命への反
逆の感情であつたのだ。頑健な体躯と情熱の迸るままに
太平洋、オホーツク海、日本海をたくましく跳梁して廻
り、港々では腹一杯の遊興を味つて来た身には、無味乾
燥な現実には堪え難く、さりとて追憶にばかり耽けること
も女々しく、連繋のない二つの境涯の中に挟まれて悶え
る自分をもて余して腹が立った。すると歌わされ、歌つ
て、悲しみを呼び戻した心の遣り場がなかった。

― 何んも、面白ぐねえ。

繰り返しては胸をさいなまれ、酒が苦くなるばかり
だった。

― お父、飲めであ。ブラズルさ来ると、皆んな、面
白ぐねえデや。あきらめつうもの、もたねばねえべ。諦
めつうもの。プラズルあ、好えどごだつごど、聞かされ
て来たども、仕方無かべ。政府の役人だて、山伐りした
訳でもあんめえし、女子の余つてゐるの探して歩くつうご

とも、むつかしがんべから。

熊蔵とは妙に間の合う同郷の秋山という爺（オジジ）が、親切と気安さのあまり軽口を叩いた。

― 爺（オジジ）、何だど、誰さいうごとだ。その女子の話あ。

子供の前だ。慎んでけれ。ずう何年、子供を青でるには、苦勞したども寢床が淋しつうごどいった覚えはひとつも無えなだ。

焚火の明りが赤黒く照り映えて、酔った熊蔵の顔が恐しく光っていた。

― お父、そうすぐ怒っても駄目だ。我々は移民だばこそ苦しむなだし、また、思い切りが好ぐねば駄目だ。ブラズルと日本とは違う国だ。政府は、我々をここまで送り届けるまでつながりはあるが、それから先あ、自分自分の事だべ。いつまでも日本さ悪口というような気持だば、出来ねえ。日本ば忘れて働くごどだや。日本も事變が始まってからあ、昔のようこど無かべ……。陰気な話あ止めべや。飲めや、先づ。

熊蔵はそれには答えず、ふらふらと立上った。辰はその時、熊蔵の瞳が涙で光っているのを見た。秋山も見た。

しかし、気拙く見ただけで、どうすることも出来なかった。

熊蔵は外に出た。冬の空は冷たく澄み切っていた。倒

れた木に腰を下して、月に濡れた黒い地面に瞳を落した。

すると自然に、清水のようを、星空から降る雨のような涙が玉のように滑り落ちた。愚痴や感傷の涙ではなかった。容れられる世界を失った己を偶像化し、それに捧げる慰籍の涙であった。中天に懸った美しい月を見上げると、心が静かなのに、涙が降るように面を濡らして止まなかった。

― 面白ぐねえ、何んも……、

手もつけず、瞼に下った雫を振り落とし、呟いていた。

十五年の才月を振返ってみると、ブラジルの野ほど渺茫

とした思いを抱かせるものはないと思った。親子という繋りの他に地上になんらの執着もなかったような気がした。だから秋山の言葉に尾を引く韻は、苛酷なまでに堪えて来た禁欲生活の誇りを汚し、熊蔵の描き上げた壁画のような生活意識に泥を叩きつけたようなものだった。

もちろん、恋愛をする情熱も、それに対する夢もあるはずがなく、強いていえばやっぱり家庭的な心の温みを欲していたに過ぎなかったのである。秋山の言い方に腹の立ったのは、自分のそうした気持を正当にとってくれない不満と、何処にでも付きまとう人間的弱点を払い退け

ようとする感情の現われであつたのだろう。唯、この国での苦難も、寂しさもそれは皆自分々の魂の生活として堪えていかねばならないもので、移民政策の拙劣から生ずる弊害でもなければ、移民に負わされた不当の苦痛でもないということにうつ勃とした反撥が働き出すばかりで吞込み悪く、何遍も繰り返して考えていた。

―んだども、俺は、そうは思わん。たとえば家族のない者の不幸なんつうものは、やはり関係筋が政策的に温情をもつて救つてやるような方法ば取らねばなんねんだ。連れて来て後はつつ放し切りのやり方をする人間共が気に食わねんだ。おらだの苦しみを日本さ知らせるこ
とが必要だ。政策が悪りいために苦勞してる人間が、
んどけいるが、解んねなだから、とても、とても。

振り揉まれてこんな所まで飛んで来て、誰にも顧られない憤りが心に昂つていた。

辰は熊蔵の後に立ったまましばらく様子を見ていたが、

― お父、泣いてるどが。お父、淋しんだべ。俺あ、
今度、生れかわつてお父を大事にする。な、お父、そ
し

たら好いだべ。

熊蔵は変に腹の力が抜け、鼻の奥から涙がほとばしり
そうだ った。嬉しいとも悲しいとも付かない半端な感情であり、月の良い山奥でこんな話をしているのが、切

なく情なかつた。

――辰う、銭コためで、お前、嫁ゴ貰え。そして、ほ

んとの百姓ばやれ。俺あ、邪魔にならねえようにする。辰は胸が詰ってきた。エレナの顔が目の前にちらついた。そして子供と、自分の父親の顔と。お父は混血児の孫の生れることを喜んでさえくれれば幸せなのだが、しかし、この父親はそれを喜ぶはずがなかった。辰はお父の言葉に答えようもなく、すっかり困ってしまった。

だが熊蔵の方は、それには構わず、辰は感激し恥らいつを感じているのだと思い、自分達にも光明が微笑みかけてきているのだと信じていた。長い間、苦しめられ続けた家庭への夢も、辰によつていま実現されようとしていくと思うと、歓喜は怪しい光彩をさえ添えて行つた。

――捨てられた実コでも、芽ばふくもんだ。馬鹿にだぼしやがって、兄でれ、熊蔵つら人間の値打を。ブラズルさ、だまされて采たども、他人と違つた生き方をするなだ。妥協だば死んでも出来ねえ。俺あは、捨てられた実コだべ。

熊蔵はうそぶき、反抗の氣勢をあげては、遠くきらめく勝利に陶醉し、目を細めていた。自分の生存を、こんなに度ぎつい感覚のなかに味わつたことがなかった。蔑視、迫害、憐憫のなかに堪えてきた屈辱の生活にも、やがて終止符が打たれるのだ。昨日までの詠歎的な郷愁を

生唾と一緒に、ごいと呑込み、丸太ん棒のように揺ぎない生存の根をブラジルの土に打込んでやるぞ、と誓を立てた。小舎の中の騒ぎを夢のように遠く聞きながら……。

その翌日、辰は大木の下敷きになって死んでしまった。

空は憂鬱なほど晴れ渡って、密林の濃緑は油で固めたように動かず、周囲は深い静寂にとざされていた。いま伐り倒されたばかりの大木の枝や葉は、脈をもってでもいるように幽かな慄えをみせていたし、海草色をした銭苔の密生した巨木の胴体は、一種の美しさを堪えて横わっていた。まだ人間に踏にじられたことのないその処女地を、ぽつと紅く染めて柔い辰の肉塊は血脹れした蚊のように潰れていた。よく見ると、快い重量感の下に満足して眠っている風にも見える壮美な死であった。寄り集った誰も彼もが等しく、そうした感情で視入っている中に、熊蔵は節穴のような光のない眼と、禽の巢のようにぽっかり開かれた口で放心してはいたが、引き出された辰の死骸に近寄り、手伝っていた鹿部という若者に手コ、揃えてやってなしーと、ぽつとり父性の籠められた一言を呟いた。辰のばらばらの腕は揃えられた。経文もなければ合掌もないこの仏は、これで成仏せねばならなかった。

あむことのない現実の試練のきびしさは何処まで続く
ともしれず、遙々、海を越えて来て、さんざん手を焼か
せた辰の生活も、このようにして終った。

熊蔵は、辰の賃金と、わずかばかりの悔み金を含めた
若干の金包みを手にした。

― は、どこさも行ぐあではねえども。

横を向いて一息、白い息を吐いた。寒い朝の飯場の前
だった。行く先はなかったけれども、どこかへ行かねば
ならなかった。誰の故でもない。夜と夜は定った速度で
ここまで運んできたのである。何処かへ行くであろうと
いう魂が、発足地で最早困り果てているように、今朝、
訣別の意味で親方に招かれたピングアの酔が鼻先で傷まし
く戸惑いしていた。やたらに手の甲で鼻を擦り廻して
は、先刻からほろりほろりと涙を落していた。また感情
が堰切ったように、親方の手を握っては泣いたりした。

― 辰あ、可哀想な奴だったし……

たった一人の肉親の絆を絶たれ、天涯孤独の身となっ
た悲愁は、熊蔵の魂を打ちのめしていた。秋山が横か
ら、

― お父、止めれであ。ブラズルの星あ日本の星と違
うなだべ。風あ、同じ方からばかりあ吹がねえ。心配し
んなあ。金ば儲けてよ、それ、婆でも貰……おっと、だ

めだ、だめだ。お父には、この話あ向かねなだ。

惜しまれる訣れでもなかった。秋山の言葉は激励にしては熱がなかったばかりでなしに、熊蔵に深い敗北を味わしめるだけだった。屈服せしめねばならない相手より、針を含めた温容の言葉を静かに聞き締めていた。阿諛の世界において、無感覚に使用される毒をもつ皮肉を骨にまで感じながら。それから親方の前に進み出て、訣別の挨拶を無事に済ますと、煤けた合財袋を古い砂糖袋に押し込み、灌木のように曲った脚に力を入れて担ぎ上げ、固い道を下りて行つた。頼りない足取りで、絶壁のような林の中の道を日光にとき折り彩られながら。

（一九五〇年）

孤 影

―なにも、そんなに苦しめられなくてもいいでしょう。それは、あなたたちの世界のものではないんですから……。

お餅のこげるにおいから生れる詩なんて、だいたい、むりなんですよ。雪のふるくにお正月は、ここにはないんですから。

あなたたちには、あなたたちの生活をつつむもつと大きな、美しい詩がありましたよう……。見当ちがいなんですよ、そんなにかんがえなくていいのです。

―でもお母さん！ にっぽん語のべんきょうをしていて、わからないことないでしょう、それとも、わたしの頭がわるいのかしら。

―さあ。……外国で生れているのですから、なんと

いっても、理解しようとするれば、骨が折れるんですよ。―でもね、美しい詩、よい詩というのは、だれだつてすぐわかるでしょう。残念よ。それが、わたしにはわからないとすると……。

―でもね……。

そういつて言葉につまってしまった。そういえば、むりなんですよ、という自分のがわにむりな独断があったのではないかと、うたがいがわいて娘と自分との立場が、この問題を中心にぐるぐる回転して、どっちがどっちやら、わからなくなってしまうような、気がした。外国に生れた娘が、いかにしても、父母の国のさむい正月の雰囲気が理解できないものとすれば、運命的なかけが、自分たち母娘を冷たい二つの手で握っているのだ。まえもって、いくどもそんなことをかんがえもし母として、できるできないはべつとして、子にいろいろのべんきようも強い、おしえもしてきたのに……。なん年たっても消えない移民の途方に暮れたおりおりの足あとの上に自分も迷いつづけるのだろうか。

思い切って、母につながるいつさいの背景をたち切って、自由な天地へ解放したなら、おたがいにいいのではないか、子は子、自分はまたべつに。ここで成人し、結婚し、子を育てて行く娘なのだから……。

ほのぼのと子の屈託ない成長が思われて、新しい愛情をあたえる母性のしあわせが、晩秋の陽のように胸をあたためた。苦しめまいというおもいやりが、子への愛情の原則として、いつか世の母たち、すべての人々に徹底したなら、このかんがえの勝利は偉大なものとなるだろう。子にそそぐ愛に殉ずるというかんがえの封建性を抜きにしても、母として惜しみなく己れをそれに捧げうる

のだ、子のしあわせのために。

子のしあわせと母のしあわせが渾然として見える場合にしろ、それは瞬間のものであつて、新しい必然はいつまでも、そのしあわせをそつとして置いてはくれない。まして異つた森の中に、母の知るよしもない鳥を追う娘であつてみれば、なおさらのこと。

― お母さん……。

― なんです。

― お母さんは女学校に行つていらつしやつたんでしょ、フ……。

― どうして、だしぬけにそんなことを……。

― あのね、わたし、お母さんのべんきようなさつたところまで、わたしもべんきようしてお母さんの氣持を知つてみたいの。わたしのような娘を、育てるお母さんの氣持を……

―

― あら、あら、お母さんがみじめよ。そうになったら。

― どうして？

― つどうしてつて、わたしのまずしさがわかつてしまったら、― お母さんは、いばれないじゃないの。

― お母さん、どうしていばったりするの……。

娘は本をとじて、真顔になった。お茶碗を口につけていた母の顔が、いくつかの小皺をつくつて微笑になつていた。忍従にまけない、ふしぎなあの微笑であつた。

― お母さんは、あんたには、わからないままで死ね

たら、その方がなぜだか、しあわせそうなの……。

― フム……。

まじまじと、みつめる娘の瞳は、母にはおそろしい光をたたえて澄んでいた。

― 止めましょう、そんな話は……。

― そー。

短くつぶやいて、手もとの本をパタと置いた。美しい模様の表紙に視線をむけた母は、ハッと胸をつかれた。

― その本……。

― ええ、ボードレールの詩集。

― まあ、そうお……

げんしゆくに、しかしやさしい、ひかえ目の嘆息だった。母も若い日に読んだ。あの不快な題、ロマンチックなてらい、猟奇的な悪臭にみちみちた詩の、ただれた熱い息が、娘になにをささやくことか、もはや餅のこげるにおいの詩の領域をこえて、偽悪ぶった調子の大時代的な『悪の華』を読む娘だったのだ。若いたましいの免疫はこのように仕組みられているものなのだろうか。あえぐようなつぎの問い、それは詰問にもならない弱いひびきの声だった。

― その詩集、買われたの？

― いいえ、Tさんからいただいたの。

刃物のような、そつ直な返事に、母はまたも魂にきずをうけた。そうおと、つぶやくうちに、つるりと涙が落

ちそうになった。

― お母さん、詩をお読みになったこと、あつて？・

― いいえ、いいえ、ちつとも……。

十六の娘の心理に、母はなぜ直裁な批判と指導がでないのであらう。それは、あながち理性の欠除とか、知識の不足にのみ原因するものではないようだった。

（一九五一年）

梨奈（りな）のはなし

緑野狩太

略歴 本名・渡部重。俳名・渡部南仙子。柳名・亜舞凡々。
詩文名・緑野狛太（みどりのちんた）。

一九〇八年、福島県相馬市に生れた。県立相馬中学校卒。十七才、渡辺水巴について俳句を初める。一九二八年、二十才の時、力行会を経て単独移住。爾来、日本語学校教師、自由学園・奨学舎・寄宿舎などを経営。コチア組合職員、世界救世教布教使などを経て、現在は悠々自適の身。

俳句・川柳・詩・創作のジャンルに関係し、絵も描く。「同素体」同人会を主宰。『曲水』（日本）同人。コロニア文学会々員。句集に『地の裏にて』『ふるさと抄』、文集に『俳感断想』がある。パラナ州ロンドリーナ市とサンパウロ市に半々に居住している。

梨奈（りな）のはなし

ああ本当に冷たい、おいしい水でございます。有難うございました。それでは、その先を御話しましょう。もう少し御幸棒戴きましょう。こうしてゆつくりと静かに過去を語るということは、本当に軽やかな、明るいところになるものです。なんとなく輝やかしい将来が待っているようにございます。いいえ、私はいつこう疲れてはいません。あなたこそ御迷惑なことでございます。でも本当に嬉しいのでございますのよ。そうして母が急逝致しましてからの父の日々は、仕事に没入することだけでございました。五十アルケールのコーヒー園は、平均五年ものになっていましたし、コロノの人達も皆いい人間ばかりでしたから、そうあくせくしなくともよろしいのでしたのに、朝早くから夕方までなにかをしていました。鞠男兄さんは病後の養生をしていましたので一日中家の中で、俳句を作ったり、本を読んでおりました。ですから夕方になると、女中のベネジッタが作ってメーザ（食卓）に出して行ったジャンター（夕食）の白布を照らすガス・ランプの下で、もう話しがなくなつた私達は、私は刺繍を続け、兄さんは句帖になにか書きながら父の帰りを待っているのです。

ですから、この明るい、ジャンターのひとときが、私達のもっとも楽しいときでございます。父も葡萄酒の一杯に、ニコニコして《鞠男俳人の近来の傑作はなんなのかな》とか、《梨奈詩人の「枯草の匂いは私を窒息させる」は、すばらしい。これはきつと入選するよ》などとかやさしい笑顔で話し合って、食後の果物とカフェーを終るのはいつも九時ごろでございました。兄さんは兄さんで、私の詩を美しい韻律をつけて、よんで下さったり、かと思うとけなしたりして下さるのでございました。この楽しい私達のジャンターは、私がものごころついてから、ずうっとそうでありましたが、母の死後には、父はつとめて団欒の中心となって、あかるくするように努力されておられたようでした。私達の植民地の先生は、高村白羊先生でございました。兄さんも私も、尋常科、高等科と教えて戴いて、そのころでも兄さんは俳句を、私は詩を指導して戴いているのでございます。四十才位のガツチリとした体格の親切な先生でございました。お人形のように美しい先生の奥様はカンボスで二、三年療養していらっしゃいましたが、あちらでお亡くなりになられました。一人娘の、美雪ちゃんと御二人で、私の家から三〇〇メートルぐらいの学校の花壇をへだてたお家に住んでおいでになっていらっしゃいました。先生は日本から、俳句を熱心続けていられたので、青年会でも学校でも、俳句はそうとう盛んをものでございま

した。同人雑誌『白陽』は、こうして俳句や文章や詩や歌で続けられていました。先にも申しましたように、兄は廿一才でございましたが、コロニア俳壇ではそうとうに認められていたものでございました。兄の俳句でございますか。句帖も、『白陽』も、その後の火事で皆焼いてしまいました。え、その火事で、そうです。お話をしましたように、兄は怪我をして、可愛想に亡くなってしまったのでございますが――今でも私が忘れられない兄の俳句をたくさん覚えています。なかで、たとえばこんなのがございました。

飄々と山焼の陽の幾日を

金魚の死 掌にとりひとり おそろしく

黄そうびはまぶしと書いて君寄り采

雲峯は崩れ 空港はろかにす

爽竹桃好かぬいもとと議論となる

暴風に倒れて鶏頭燃えている

薔薇活けて梨奈が嬉しい灯を入るる

ほほたるはいとけなき日の匂いして

などと、剛壮、色と線との繊細さ、愛情のこまやかさ等は独特な個性がみえる美しい俳句ばかりでございます

た。あら、私の詩でございますか。その「枯草は私を窒息させる」というのは、白羊先生のおすすめで、日本新聞の詩壇に入選して、選者の大島碧雲先生にもとてもおはめの言葉を戴いたものでした。そうとうに長篇のもので五篇からできていて、例えば、第一篇は、

枯草に 臥す

空を 胸にのせて

夕焼けの 雲のささやきを

きいていると

背中の方に 心臓があばれる

枯草に臥す

昏れて行く 天地の

一枚のふところに抱かれて

目をつむると

乳房が喉を 圧迫する

枯草に臥す

母星が またたいて

わたくしを 呼ぶのだが

枯草の匂いは

わたしを 窒息させる

といううたいだしで、自分でも、わけのわからない、肉体と詩のたたかいの切なさを、ありのままに、詠んだものでございました。私は十八才で、もう立派な処女でございました。身長も一メートル五十三で、日本人としては大きな方でございましたし、それに、植民地の青年達にも「ミス・東洋」などと騒がれた位で、私もそうとうに自信をもっていたものでございました。でも「クレオパトラ」とか「オツパイ小僧」などと、いわれるのはいやでございました。そうでございました。私の乳房は、このようにその頃から、まんまるに盛上って、固く、だから仰向けに臥しますと、その青春の血潮が夢を追うてわきたぎり、胸苦しく、喉首圧迫されるようになるのでございました。それで、あんな詩となって創作されたのでございます。え？・なかなか大胆ですって。それは白羊先生のお教えで、詩は嘘をうたつてはいけないという第一条件でありましたので、五感をそのまま、それが実在しないものであっても、感じたものを真実として表現したものでございます。あら、今はもう駄目でございます。それからの五年の間に、私は、もう冷え切ってしまったのでございましょうね。それよりも、これから申上げる、私の人生記録がまったく、非現実的な、それもき

びし過ぎる宿命とに無我夢中で過ぎてきたのでございます。今後の私の人生にはあんな、無茶苦茶なうず巻きは起らないでございましょう。

私の話しますことには嘘はございません。話は要領をえていないでしょうが、本当のことでございます。詩的ですよ。それでも私は、ことさら美しくお話ししようとは考えていませんのよ。とにかく先を急ぎましょう。ああ、もう一杯、さっきの氷水を下さいませんか。その年の暮に、先程もお話ししましたように、父が飛行機の墜落で亡くなり、つづいて次の年の三月に不慮の火災で家を焼いて、父の死後兄さんの相談相手として、パラナから来ていられた伯父と一緒に怪我をされて、鞠男兄さんは亡くなられるし、世間知らずの私は、その間、負わされたみじめな試練の重さに煩悶し続けたものでございます。本当に御想像も戴けないほどでございます。そうですね。小説よりも、きびしいものでございしました。その頃の記録を白ら白らしく綴ることは、私にはとても堪えられない苦しいことでございます。もう、そうした身近かなきびしさの中におりますと、詩もなにも生れるものではございません。私はただもう呆然と、父の死から続いて兄の死、土地の整理とそしてパラナの伯父の家に移る迄、否、移ってからの一、二年笑いを忘れ、歌を忘れたカナリアのように過したのでございました。いつも、ただ泣いたあとの静かさを、伯父の家の離れの

私の部屋で電気スタンドを引きよせては、白羊先生に作文のような手紙を書くのが何よりの慰めであり、その度に下さる先生の御返事が嬉しくて、大事に大事に、その御返事を美しい文箱に綴込んで、美白な原稿用紙に伸び伸びと書かれた緑のチンタ（インク）の文章を秘めるように蔵っておいては何度も何度も読み返すのでございました。まるで天国からくる御声のような、清らかな、愛に充ちた美しいお便りでございました。それでも、私など、なんとなく近寄りがたい重さが、いつも先生にはあつて、思い切り甘えるということもできない私でございました。

それでも先生と文通することによつてもみくしやになつてしまった私のところに、ほのぼのとした明るさをえさせていくことはたしかなことでございます。もう私の一生の恋がその頃に、たくましい芽をもたげていたのでございましょうね。伯父の家には子供がありませんので、大きなコーヒー仲買人でございましたが、三台のカミニヨン（トラック）をもっていられましたから、いつも十人以上の人を使用しておりました。伯母はとても神経質な人で冷たい人でございましたが、猫をととても可愛がってたくさん飼っていられました。どうしてか知りませんが、淋しい私の話し相手にもなつて下さいませんでした。《梨奈は、詩人なんだってね。きれいだし、肉感的だから、アプレゲールかね。》などと、とても皮肉たつ

ぷりな言葉で申されたことがございましたが、私は呑気だというのでございましたよ、のんびりしているというのでございましたよ、いっこう気にもとめませんでした。別棟の二階建がその青年達の合宿所みたいなもので、いつも五、六人はおりました。私達とは別に炊事と洗たくの外人をやとっておりまして、私達は三人だけの食事をするのでございましたが、伯父は外出がちで、いつもメルクリーで夜遅く帰られることが多くて、ジャンターは伯母と二人で猫達を相手にすまして、女中のマリアがメーザを引いてから、私のおやすみなさいをいうのにも御返事をなさらない伯母を残してひとりで自分の部屋に戻るといのが随分多いのでございました。だからその淋しさやつれづれな時間を、その青年達のビオロンを聞いたり、笑い声をきいたりしていても食後すぐ夜学に出て行く青年達の留守の静けさに、孤独な自分にたえられなくなって、泣いてしまうのでございました。

時折、青年達の働いている店を通ったり、キャッチボールをしている広いキンタールに行って見たりして、人なつかしさに話しかけても、なんとなく、皆が遠慮がちで、ピッタリしないのでございました。それも皆、伯母のヒステリーからであることは、あとで解ったのでございますが、その伯母のヒステリーが、私が私の張りきった乳房の奥に湧いている青春を、かり立てたと申せ

るのでございますから、面白いことでございます。そうです。白羊先生へのお便りが、いつの間にか、詩となり、その詩も私の燃ゆる熱い息吹きに満ちあふれた、相聞的なものとなっていていき、先生の御返事も、俳句の美しい連作が何回も続いていくうちに、私の心がぐんぐんと、先生にひっばられていくのをどうすることも出来ませんでした。ございました。

もちろん、先生は、私の詩を引張っていて下さったのでございましょうが、私は先生の肉のふところに深く深く、つき進んでいたのでございます。私の夢の対象は詩ではなくって、先生そのものになっているのでございしました。いつか先生から頂いた小さなお写真を引きのぼして、銀の大きな額に納め、桃色のメーザ掛けをかけて、黄色な薔薇を活けた大1なれの中央に蒙いて、クリーム色の丸い笠の電気スタンドをななめに傾ぶかし、先生の使われると同名じ緑のチンタで私は、私の詩集の紅い表紙をめくって、詩を綴るのでございました。例えば、

燃え失せよとて

太陽と 薔薇の くちづけ

我は 君のもの

一つと溶ける

碧海の 底の黒潮

空ゆ来し 我はひとでぞ
いだかれて

泣きて のたうつ

嗚咽する なみだを君は
はの甘き 真珠と言えて
火の如き 唇寄せまする
巨きその胸に 消えなん

白砂の くぼみけがしぬ
驚きもせで 君笑み給う
月ながる わが髪よしと

ああ

さわあれ

夢に見し 恋のかなしき

というようなものでございました。先生は、先生で、

薔薇の紅 その露 君が涙とし
薔薇の陽の 直下の恋を泣かすまじ
薔薇折りし 君の指の血吸いてより
薔薇園の 薔薇の唇の齒にあたる

薔薇薔なる　目ひとときのくちつけを

というような本当に、私の詩の上を上をといく、高度な美しい俳句が届けられて来るのでございました。なお続けられていた『白陽』誌上や、新聞や雑誌のうえで

の先生の俳句を拝見致しますと、ですから、私は私で、勝手に、私のための先生の俳句であるときめておりましたものですから、

若草の　恋を拾うて　あるきけり

若草に　佇つ黒髪を　冒しけり

などと、これは、先生の「亡妻追憶」という、前書のある俳句なのですが、いても立ってもいられない、嫉妬と憔悴に、カーマにはいつてからもなおねむれない、そして、詩も湧かない、せつない肉体をもてあますのでございしました。それでも、大きな羽根枕が、いつの間にか、ぬくぬくと私の頬をつつんでいる暁方の空気に触れて眼をさますのでございました。

どれも、これも私には忘れることのできない重大な人生体験のなまをましい記録なのでございますが、その次の年に起った伯父の事業の大失敗と、私が決行したあの事件は、あなたもあの頃の新聞で大さわぎしましたか

ら、御承知のことでございますが、だいたいにおいて、あのとおりなのでございますが、パナからソロカバナの白羊先生のもとに走って行ったという私の行為に、けしてあの新聞に書きたてられたような、先生の邪恋でなかったことは、今までの私の話で、解って戴けると思うのでございます。

けして、先生が私を誘惑されたのではなくて、私が夢を追うて、わがままにふるまったのでございました。かえって私が一途に先生を誘惑したのでございます。もちろん、伯父の事業の失敗から、あの伯母を含む伯父の家庭が私のいるべき所ではありませんでしたし、ほんとうに私の生きていくところが、先生のふところだけであるという決定的な結論に到着したことは当然なことでした。先生も事情をきいて、御自身の娘が帰って来たように、心からよろこんで迎えて下さいましたし、美雪ちゃんも、姉さんが戻ったように、「もう行っちゃ駄目よ」とはなしませんでした。私は、まったく幸福な、どうしてこんな、私にぴったりと、私のための住み場所に早く来なかったものかと考えたりするのでございました。先生はどこまでも私を、美雪ちゃんの姉妹として、へだたりのない愛情をそそいで下さるのでしたが、しかし、私には、どうしても、それが、もどかしく、不満でなりませんでした。

それは、ある春の雨の日でございました。

美雪ちゃんの、その日が誕生日だというので、私は、朝から、いそいそとその準備に忙しく、心をこめた御馳走を作ることとで一生懸命でございました。午後には先生も美雪ちゃんも学校から帰られて、メーザを飾ったりしてお手伝い下さるのでした。六時ごろには、メーザの上はきれいにかざられておりました。

私は美しく化粧してあげた美雪ちゃんと、私・もすこし濃いと思うほどに紅をひいて、先生のまつていらつしやる、サーラに出て参りますと、先生は、美雪ちゃんを抱いてプレゼントのハーモニカをお渡しになられました。先生は、私のもつて参りました、ページェのネクタイをしめてお出になりました。三人が、メーザに坐つて、私がそつと買っておいた、白葡萄酒をコップに酌いで、三人の前に置きますと、美雪ちゃんが、十本の色蠟燭を、ポーロにかぶさつて一気に消してから「おめでと」う」と三人で乾盃いたしました時には、最先に、先生が、あの大きな瞳から川のように涙をお流しになりました。私も泣けて、泣けてしようがありませんでしたが、美雪ちゃんは、

「パパ、泣いちゃ駄目。泣いちゃ駄目。もう一度乾盃のしなおしよ」といって、きかないので、私は立って、先生のお顔をふいてあげ、私もおおをなしておりますと、

美雪ちゃんは、お部屋から鏡をもって来て私にかざして

下さるのでございました。そこへ先生も寄っておいでになられて、見ておられました。すぐに、美雪ちゃんと私をあの大きな腕に抱いて、しっかりと胸のところにかけこんで下さるのでした。美雪ちゃんも、私も、力をこめて、しがみついたものですから、そのまんま、三人は、先生のうしろのソファの上にくろげこんでしまいました。美雪ちゃんがきやつきやつと笑い出しましたものですから、とうとう先生も大声でお笑いになられる。私も、恥しさも忘れて、笑い崩れてしまいました。メーザに坐りなおして、今度こそ、本当に、お祭のようによく食べ、よく話しく歌いました。先生がまっさきに、美雪ちゃんの、ハーモニカの伴奏でお唱歌を歌うことになりました。私もうたいました。二時間以上もかかって、

食事をすましてから、今度は、美雪ちゃんがきかないものですから、メーザを片よせて、ダンスでございます。これは私の、ハーモニカで、先生と美雪ちゃんが踊るのでございますが、《梨奈ちゃんのハーモニカは駄目。私が吹いてあげるから、パパと踊るのよ》と、とうとう私を、先生の前までつれて行くという騒ぎでございました。お上手な美雪ちゃんの曲によって、私は、先生の温かい巨きな胸の中に、ぴったりとはいりこんで夢心地のまま、とけてしまいそうでした。美雪ちゃんは美雪ちゃん、いつまでも、御自分でもその音律に酔う

てもいられるように吹くのをやめようとはしませんでした。先刻のすこしばかりの葡萄酒がそうさせたのかも知れませんが、それは、しごく自然な、私の心臓から波うって流れ出る血潮が、そのまんま、先生のからだの裡に通うていくような、安堵と親愛にあふれた、夢心地でございました。

何時かしら、雨がやんで、月の光りの清らかな美しさが、さしこんでおりました。そして三人は、ややつかれたからだを、大きなソファア―に坐って、先生を真中にして、だまつて、誰も話すものはございませんでした。三人の一人ひとりが皆おなじことを考えていたのでございましょう。幸福に満ちたところを、おたがいにとつと、大事に大事に、消化させようとしていたのでございました。先生は、二人を、そつとかかえて、髪をなでて下さいました。美雪ちゃんも、私も先生の背に頬をつけておりました。静かな、静かな刻でございました。

そのうちに、いつかしら、美雪ちゃんが先生の膝の上に崩れてねむってしまいましたので、先生は美雪ちゃんを抱き上げられて私と二人の膝の上に、そつとねむらしてあげるのでもございました。そして、ごく自然に、二人は顔を見合って笑み合すのでございました。三人の体温が、すぐに、あたたかく、ひとかたまりに、とけあつて参るのでございました。私は、先生のお顔をのぞきながら、美雪ちゃんを抱きかかえて、お部屋のカーマにつれ

て参りますと、先生も、あとからついておいでになりました。私は、美雪ちゃんに、毛布をそっとかけてあげて、その美しい額に、くちづけ致しました。うしろをふりむくと先生の胸にぶつかりました。そしてーああ。

私は、それからのことを申しあげることはいけません。それは、どなたにもお話し申しあげることのできません私の大事な大事な、美しい記憶でございます。あんな、幸福な、ひとときは、もう私の一生にまたとあらうはずは絶対にありません。

それからの、ひと日、ひと日は、どなたにも御想像のできない、私達の天国でございました。心から、生きている身の倖せを、そして神への感謝で一杯でございました。

それから三カ月目の修学旅行に、先生は、美雪ちゃんをお連れになられて、植民地の二十人ばかりの児童と男女青年達と、サンパウロから、サントスに十日間の予定でおいでになられたのでございますが、どうしても、その御出発の朝の別れが、とてもとてもつらうございました。そんな、いやな予感的中するなどは、まことにおそろしいことでございますけれども、それが事実となつて、あのサン・ヴィセンテの遭難事件となつて現われたのでございます。それでもその犠牲者が、先生と、美雪ちゃんだけで、後の一緒の人達は幸いにも助かりまし

たことは植民地の人びとに対して、ほんのいくらかの申訳がたつような気がするのでございました。あなたなど、ここで、身近かにあの時のことを見ておられたと思いますし、皆さんの耳にも事新しい事件でございますから、そして、私と致しましては、とても申しあげる勇気もございませんから、申しあげません。私の驚愕と慟哭と失墜との様子を御想像下さい。父母を失い、兄を亡くしました私にしてが、今迄にかつてない、たった一人となつてしまった自分というものを、身も心も碎々になるほど感じたのでございます。しかし、私には、先生と美雪ちゃんのあとを追うていくということは出来ませんでした。

先生の、いのちの一部が、私のからだ奥深く、育って
い
たからでございます。

私が、サン・ヴィセンテのここに家をかりて移り住
み、

毎日お二人の墓参りを日課として、寂しいが、静かな生活をつつましく、はじめましたのは、その後間もなくのことでございます。そう、それでも半年になるでしょうね。あら、私ばかりおしゃべりして、泣いたり致しまして。あなたも泣いて下さいますか。さあ、そのイチゴをおとりになって下さい。レイテ（ミルク）もそこに
ございます。

イチゴと申しますと、先生は、そのイチゴを潰すのがおきらいで、レйтеを一杯におかけになって、赤いイチゴの上から、美白なお砂糖をかけて、それを一つ一つ、妻揚げでお口にもっていかれて、すするようにしてめしあがるのが好きでございました。どうぞめしあがって下さい。私は、そのお水をすこし頂きましょう。めし上りながらお聞き下さいね。え？そんなのにどうして、自殺などはかったのかとおっしゃるのですか。それは、私も、

はつきりとは思上げることのできないほど、何かにつかれてでもいたように、今にして考えますと、そうあいまいなのでございますが、蓄えの少なさが、生活の不安となってきたということもあったでしょう。しかし、それよりも、生れ来る子の将来を思うとき、真つ暗な怒涛が、私の心の思案を、絶望にしてみましたというのが、

そうさせたのでございましょう。それも、どうして、あなたに助けて戴くことになったのかが不思議でなりません。御説のように、わたし達の将来は、ブラジルの広土の中に消えてなくなってしまうのではなくて、消化され、生きてひろがり溶けていく、わたしたちの、生命力を、私ははつきりと、認識いたしました。もう私は、強い一人の女として、なにものもおそれないで、感激と希望をもって、この子のいのちをいのちとして、生活を続

けるでございましょう。

碧き海 その碧染まず 千鳥舞う

とモンテ・セラツトの絵葉書にお書きになられて、事件のあとに私の手もとに届きました先生の最後の、緑のチンタのお便りが、これでございます。ご覧下さい。これが、先生の宗教であり、哲学であり芸術に生きられた先生のすべてであると、今、私ははつきりと、悟ることができるのでございます。かぎりなき水平線に一如になっている、天と地のむこうまで、悠遠のひとのいのちを啓示されているのでございます。あの潮の音は、先生の御心の響きでございます。小波は、美雪ちゃんの瞳です。

ここに参りましたからも、夜々の、星の中にある母星、父さん星、兄さん星は私について離れることはけしてございません。こうして、昼も夜も、この人達の靈魂の無限の護りに抱かれて、生きている私は、どうしても、この子を丈夫に産んでそだてなければならぬという、あふれるばかりの、もったいない崇高な義務に、おののいているのでございます。ほんとうに有難いととでございします。あの朝、私をお訪ね下さいまして、私をお助け下さいます、偶然となったその時、もっておいで下さった書留便は、パラナの伯父からのものでございました。あ

の書留が間違っただけであなただけの所に配達されたことが、そしてそれをわざわざあなたがもって来て下さったことが宿命なのです。父のコーヒー園の整理したときの金だからといって、九〇〇コントスのシエツキが入っております。

そして、伯父の事業も軌道にのってきたから安心してくれとも書いてございました。それでも、私はたった一人の伯父には心配をかけたのですからこの金の半分を戴こうと思っていますのでございます。そうでございますね。一週間の病院から帰って、こうして、家に帰って参りますと、もう今日にでも渚の風につけて歩いてみたいような気分でございます。もうすっかり元気になりましたから、四、五日いたしましたらあなたとご一緒に願って、その助産婦さんのところにつれて行って戴きましょう。そして、先生と美雪ちゃんのお墓に、白い蘭の花をお供えいたしましょう。もう二カ月、私は生れ来る子の名前も考えているのでございますよ。男の子だときめているのでございますから、私は先生のお名前の修蔵の「修」の字を戴いて「修梨夫」（ジュリオ）とつけるつもりでございます。そうです。それは、無理かも知れませんが、いい名でございましょう。女でしたら「黎」ときめているのでございます。

もう私の過去は、過去といたしまして、綴れば何百ページのものごたりにございますが、だからあの朝早く、

渚に行つて、ぎつしりつまつた文箱と一緒に、先生の句帖も兄さんのものも、私の詩集も、千鳥に見られながら、

皆焼いてしまったのでございますが、生れるこの子のためにもいい母として、また人の心の美しさと、自然のきよらかな偉大さに触れさせ、この父のこころを知らせてあげようと考えますので、詩をうたう、ほろびざるよろこびを、うえつける決心でございます。それで、しばらくぶりで、今朝、あなたが見えられるまでに湧いてきました、こころのしらべがこれでございます。御覧下さい。

それは、私の、こころの詩の歴史と、肉体体験からえた、人生への傍観的な記録でございます。そこにもございます第一篇のように、私が、幸福を追い幸福に満ちたその真中にある時には宇宙の総ての空間が、私を中心として、一杯になってくるのでございます。ところが、反対に、ガタガタとその一つ一つの倅せが、ポロポロ私から離れて行ってしまう時は、その空間が、とてつもなく、どこまでも広がって行つて、とり残された私一人が、ポツンとした小さな一点の孤独に遭つて、いても立つてもいられないそれはそれはおそろしい、たよりない、無力な、

みじめな存在となつてしまふのでございます。それは、どんなにあせつても、あせつても、ちやうど、コクトー

の詩のように、

シヤボン玉には 庭は入れない

まわりを ぐるぐる 廻っている

ばかりなのでございます。その時には静かに考えてみますると、自分のいのち、自分の靈魂というものを、忘れていた時なのでございます。そう悟りますと、ひたむきに自分を、凝視するのでございます。そうすると、自分へのいたわりと自信が湧いてきて、自分のいとしさ、尊さをひしひしと感じ、情熱の泉が涸れるところを知らないよろこびにみちてくるのでございます。それは私の自己成長の黎明なのでございます。その度に私というのが脱皮してゆくという循環をくりかえして参ったのでございます。ところが、それが、ひよつとの思い惑いから、私の死もその私の生命への進展の一過程としてありうる、大きな意義をなすものだ、と、決定致しました瞬間に、一週間前の、あのおそろしい、間違ったことを決行したのでございました。あなたのお話によるまでもなく、冷静さによみがえってからの私は、私の生命の清算は私の裡にある先生のいのちの滅亡であつたことを思

い、慄然といたしたのでございます。病院での毎日のご訪問から、今日まで、ずいぶん私のおしゃべりにはあきれたこととございましたようが、これで、私の話したかった身の上話は終るのでございます。

さようでございますね。もうだいぶおそくなりましたし、今日の私のおしゃべりが長かったので、もう、そんな時間でございますか。お帰りになりましたら、皆様にもよろしく申して下さいませ。明日またおいで下さいませ。何時頃でございましょう。同じ頃？　ありがとうございます。ございました。あら、女中の、アラシーが帰って参りました。どうぞ、そのままに置いて下さいませ。

今夜は、きつと美しい夢のなかにやすらかに休めることとでしょう。あしたはピンピンして、お待ちしております。すよ。さようなら。では、あしたはきつとおいで下さいませ。

（一九五三年）

泥 凜

摩耶 晃

略歴 本名・山口寛桔（ヒロキチ）。ペン・ネーム摩耶晃、まやあきら。福島県出身。日本で中等学校を卒業後、一九三二年、ブラジルに渡る。長年、パラナ州に在住。現在、パラナ州々都クリチーバ市で鉄工業を営む。『よみもの』、『文芸パラナし、『農業と協同』等の諸雑誌に創作を発表した。コロニア文学会会員。

泥 凜

新しい町で、私は私設郵便局を始めている。文盲の多い国のことで、よくも着いたと驚くような宛名書が多い。

先日、バイヤ・クルゼーロの消印で、所書だけで、受取人のない部厚い手紙が来た。郵便局宛では勿論ないが、受取人が判らなくては仕方がないので、開封した。「私の愛しい懐しいジョアキンよ」という思いがけない書出しに、私は一寸僻易した。しかし、ジョアキンだけでは判らないのでつい、他人の手紙と知りつつ読み続けなければならなかった。

「恋しい私のジョアキン。貴方はお達者でいるのだろうか。私は胸騒ぎがしてならない。もう三日間も食事が頂けず、睡眠も出来ずに貴方のことばかり想い続けています。モンテ・ベーロのジットが、南部から帰って、貴方を見たというそちらへ手紙を書くのだけれど、果してこの手紙が貴方のお手許に届くだろうか。ジットが何とおうと、私は貴方を信じています。だけど胸も張り裂けそうなこの悲しみは、どこからくるのでしょうか。私のジョアキン。この手紙が着き次第帰って頂戴。もう金も何も私はいらない。貴方は一冬頑張つて、ハコントスのお金を儲けて帰るといって出稼ぎに行った。その金で、あ

のモイーニョの牧場と、牛二頭を購って、私達の小さな家も建てようといってくれた。それなのに、春はとうに去り、夏も過ぎ、もう直ぐ貴方の発った秋が来ようというのに。私のジョアキン。早く帰って。私は貴方の帰るまで生きておれるだろうか。もし私が死んでも、ジョアキン、貴方は私のことを想い出してくれるだろうか。

あの恐しい旱魃の冬が来ようというのに、ああ、私はとても、独りでは生きておられない。沙漠のように醜く禿げた緑のないカンポ（野原）。灰色の石ころだけが、屍のように墨々と並んだ涸れた河。コツケーロ（椰子）の葉さえ、針のように黒くよれ細って、鶏が、豚が、そしてとうとう牛までがたおれていった恐しいセツカ（旱魃）。その屍を貪り喰う野犬の群がほうこうする真赤な月の夜。いやだ。いやだ。私はとてもセツカまで生きのびることはできない。

貴方の赤ちゃんが産れようとしているのに、ジョアキン、どうして帰ってくれないの。マレイタ（マラリア）にでもかかっているのじゃないかしら。怪我でもしたのじゃないかしら。ジツトが言ったことも、私は真実だとは思わない。私はジツトよりも貴方を信じているの。だけど私は黙っておられない。貴方が帰る迄、独りでこの悲痛を抱いているのに堪えられない」

私は他人の手紙を読んでいる罪惡を忘れて、途中で止すことができなかった。小説でも読んでいるように牽き

つけられていった。

「ジットは、イヴァイ河畔のヴァルサ（渡し）を待つバー
ルで、貴方が」マリアなんか知るもんか。あの腹の子
だってシンサクの子さ。俺はアンナと結婚しているのだ
」 といったというの。腹の子が貴方の子でないって。
神様に誓うわ。神様に誓って腹の子は貴方の子よ。

ジットに下心があって、貴方を悪様にいつているの
よ。それははつきり判っているの。だけど、貴方が発つ
と前後してアンナも何処へか行ってしまつて、今、この
クルゼーロにいないのを貴方は知っているかしら。

腹の坊やのためにも、何も考えまいと齒を食いしばつ
ても、胸の底から湧いて来るこの悲しみをどうしよう。
もう何もいうまい。貴方が何処にしようとも、この炎え
上る思慕が貴方の胸に届かない筈がない。きつと、貴方
は帰ってくれるわね。坊やが生れるまでには帰ってくれ
るわね。
待っているわ。私のジョアキン、私は待ってるわ。貴方
の哀れな妻の、心からの抱擁とベージュ（接吻）を受け
て下さい。

「悲しみのマリア・ルールデスより」

読み了えて、私は映画が終った時のような昂奮と疲労
を覚えて、ほっと溜息をついた。そして、この悲しい使
命を担った宛名のない手紙が、一日も早く、その人の手

に渡るようにと祈りつつ。

「バイヤーノ・ジョアキン様へ、クルゼーロのマリア・ルールデス様よりお便りが来ています」

と、窓口にアヴィーズを貼出した。それきり、忘れるともなく、仕事に紛れて忘れていた。

九月も中旬過ぎて、煙のような糠雨が降る肌寒い日であつた。郵便局の机で「戦争と平和」の社交界に退屈していると窓口に影がさして、若い日本人らしい婦人が近寄って来た。

「ジョアキン・ペレイラ・ダ・シルヴァに手紙が来てないでしょうか」

日本人と思つたのに、ブラジル婦人の顔が窓口に覗いていた。ジョアキンの一語で、私は、すぐ先日の手紙を思い出した。

「ジョアキン」

といったまま、じつと婦人の顔色を窺つた。婦人も又、

一種異様な表情で、私の眼を凝視していた。

「あのう、失礼ですけど、山口先生ではないでしょうか」

私には、ブラジルに三百人程の旧教え子がいるが、伯人から先生と呼ばれる覚えはなかった。

「山口ですが、どなたでしたらう」

「お忘れでしょうか。先生、平田シンサクの妹のアンナです」

「ああ、そう。あのアンナさんですね」

私はしどろもどろに日本語が出た。そして、十数年前の教え子、当時一年生だった混血児アンナを、つくづく見つめたのだった。シンサク、アンナ。あの手紙の中の二人が、この混血児の兄妹、私の昔の教え子だったのだろうか。手紙の受取人ジョアキンはアンナという（ジョアキン・ペレイラ・ダ・シルヴァ）ではあるまいか。

日本語に当惑をみせたアンナに気がついて、私は伯語に替えた。

「お入りなさい。アンナ、本当に久し振りだったね。坐って話そう」

尻込みするアンナを招じ入れて、相對して座に着いた。

さすがに幼時の面影が、どこにかあるが、成熟した美しい混血娘は私には落着けなく、馴染めないものであった。

「君はどうして、いつからここにいるの」

話の糸口だけを立てて、アンナの今日迄の経歴を、小一時間も耳を傾けて聴いた。

父の平田氏が死亡すると、母はシンサク、アンナの二児を連れて、郷里クルゼイロに帰って、半商半農のささやかな生活を立て、ひたすら二児の成長を楽しんでいた。

疲弊した僻村では口に糊するのが精々で、あれ以来、学

校へも行けなかったと、アンナは昔の教師に詫びるようにつけ加えた。

クルゼイロといい、ジョアキン名宛の手紙を尋ねたことといい、アンナが、私の読んだ手紙の中の人物であることに間違いのないようであった。私は性急にそれを確かめたかった。

「先刻お尋ねしたジョアキン・ペレイラ・ダ・シルヴァは、私の夫ですの」

というのを聞くと、すぐ、

「だけどアンナ、ジョアキンにはマリア・ルールデスという妻があるのを君は知らないの。しかもジョアキンの子を見ごもっている彼女を……」

アンナの顔に、さつと狼狽と驚愕の影が走った。その昔、叱られた時の表情に似た顔色を、私はそこに見た。私は郵便局から例の手紙を持って来て、黙って手渡した。

アンナも黙って、それを読んだ。顔が鳥肌だって蒼きめ、

眼だけが血走った。手がわなわなと顫えているのが解った。

お茶を持って出た妻も、そこに坐っていた。やがて、アンナは滞れた眼を上げて、妻と私をまともに見て、かすれたような声で、静かに別れを告げて、雨の中を帰っていった。

泥濘のような運命を担った混血児アンナを、私は妻とともに悲しんだ。そして、皆が幸せになれる道を、アンナが選んでくれることを祈った。

こね返す泥濘の道に、またひとしきり時雨が降って、遠く幽かに、アンナの姿が雨簾の彼方に消えていった。間もなく、ジョアキンは山伐りの仕事を終えて、アンナとともに、どこかへ立ち去ったと聞いた。ジョアキンには遂に、私は逢わず終いである。

二

例によって県人会の流れは、倉田の車に乗れるだけ乗って、料亭Sに押掛けた。ひと頻り飲んで、それぞれの馴染が一人宛付いた。こんな雰囲気を持たない異邦人のような私を、気の毒がって、「当番さん、秋ちゃん呼んで、こちらのお兄さんの相手」

出て来た秋代は、凡そこんな場所に不似合な、乳房も尻もない板のような身体に、借着の黒衣、野暮な身のこなしで、お通夜にでも出たように、私の傍へ腰を降ろした。唄え踊れの乱痴気騒ぎが始まる。倉田は踊りながらソファに相手を引倒して怪しげな恰好。本間は大きな尻を抱えて接吻ごっこ。私はこんな場の話題をもたない。

「君、いつから出ているの」

「三日程前」

「どこから来たの」

「マツト・グロツソ」

みんな踊り出すと秋代がヴァルサ（ワルツ）を唄う。柔かい唄声は切々たる哀詞を帯びて、じんと心に渉み入る。そつと手をとると、ぽとぽとと涙が私の手にかかる。秋代は泣きながら歌っていたのだ。

愛撫し、まさぐった掌に、小指が根元からなかった。私ははっとした。その昔の教え子の中に、私は左小指のない田川秋代を想い出したのだ。学芸会の稽古で遅くなった彼女を送って、私は初めてその家庭を訪問した。継母は五人の自分の子供を抱えて、秋代を無惨に酷使した。天涯唯一の肉親である父親は、ピンガを飲んで、秋代を打擲こそすれ、父性愛の素振りも見せなかった。秋代は、その細い身体はどこにあるかと思われる力で、大きなバケツに谷川の水を汲んでは風呂を焚き、夕飯の支度をするのだった。五人の異母弟妹を守り、夜も添寝して、

いつも睡く、疲れ果てていた。ある日、薪とりの折猛毒蛇カスカヴェル（ガラガラ蛇）に手をかまれた。親達は治療もせず、その不注意を怒り、漸く説き伏せて、看護に通う私をさえ迷惑がった。血精注射をした後は、かみ傷を冷す位きり方法がなかった。痛い痛いと言き続けて

は、高熱に意識を失って、ママイ、ママイと、死んだ実母を慕った。私は施す術もなく、乾草に似た挨くさい、赤茶けた髪を撫でながら、一晩中、まんじりともせず、父親のいびきと、継母の歯軌りを聞いていた。こうして左小指を失っただけで生命を取り止めた秋代を、今はかrazuも、この料亭で再見したのである。

「君、田川秋代君じゃないか」

返事もなく私を見つめていた秋代は、複雑な表情をすると、両手で顔を覆って、さっと部屋を出て行った。泣くだけ泣いた頃を見計らって、私は次の部屋に入って、小卓に向き合って坐った。「先生」万感交々というのであろう。暫くは言葉もなく、あの頃のままの澄んだ瞳で、

私は見直していた。

「先生、妾、三年間というものの、河本に尽すだけ尽してきました。そして、物質的に少し楽になったと思うと、河本はあの豚のような売女と手をとって逃げてしまったのです。あの人を満足させるために、私はこんなに惨めに痩せて、役に立たない身体になってしまったのです。先生も御存じの私は両親の許で、永い永い苦難の日を送った揚句、生れて初めて知った人の愛、それも束の間でした。生涯に唯一つの愛を、惨めに踏みにじられた女の果敢ない腹癒せが、こんな職業に私を落したのです」

「秋代君。帰るんだ。帰って河本君を待つんだ。きつと

河本君は君の愛の手に戻って来るよ」

こんな空虚な慰めが、何の救いになろう。私には誰をも裁く権利はないし、この泥濘の生活から秋代を救う力もなかった。

手洗い帰りらしい一人が私達の戸を叩いて、「今が忠義の其最中……か」。浪曲の一節をうなづいて通っていく。私は独り、紫煙とアルコールと女の体臭で濁った広間に戻った。倉田が、「おい、一首出来たぞ」と紙片を示す。「トンコ節唄いつつ我にビールつぐ、哀れ知性なきその白き顔」

傍からエミが覗く。「何なのそれ」「歌だ」「何の歌」「タンカだよ」「ああら、タンカ節なの」とひったくる。

「何だか難かしいわね」

「お前等は馬鹿だって歌ってあるのさ」

「馬鹿でお気の毒さま。利口で女給が勤まりますかかってんだ。ふん」

冷たい階段を降りながら、妙にうらぶれた気持だった。

秋の夜空に、南十字星が真横になっていた。もう十二時であろう。私は自動車の中で、他の女給達のように、「又来てね」ともいわず、黙って握った冷たい秋代の手の感触を、悲しく反適していた。

リンスからの帰り、私は未知の地ガルサに寄った。一泊して、飛行機でマリंगाへ帰るつもりだった。夕飯後のひと時を寛いでいると、帳場に案内された警察の者が来て、同行を求めた。私には、拘引される理由がさっぱり見当つかなかったが、慇懃なその態度に、別に不安もなく出頭した。

ドクメントを出して、姓名、住所、職業などを答え終ると、

「貴方の持つておられる金高は」

「百五十コントス。外に小銭で二コントス位でしょうか」

係官の眼がぎりりとして、書記と見合す。

「その百五十コントスを出してください」

私はとっさにこの紙幣の中に、話に聞く贋札でもあったのかと思いながら、財布とは別に紙包にして膚に着けていた物を机上に出した。その金包には手も触れず。

「これはどんな金か御説明下さいませんか」

私は、ある取引で、リンスの宮本氏から受取ってきたばかりのもので、今度の旅行もそのためだったことを述べた。

「貴方は、ジョゼ・ロドリゲス・ダ・オリヴェーラ

という

者を御存じでしょうか」

「二年前に、私の店で一期間働いてくれた雇人に、ジョゼ・ロドリゲス・ダ・オリヴェーラという者がおりました」

再び、係官の眼が光るのを私は見た。そして、自分がどんな渦中に巻き込まれているのかと不安になってきた。

「それはこの男でしょうか」と一葉の写真を示す。私は元雇人の顔が急に思い出せなかったもので、その写真が彼であるか、そうでないか判然としなかった。この写真の男を知らない旨を話すと、呼鈴を押して、一人の男を呼び入れた。それは旧雇人とは同名異人で、私には一面識もない男だった。

「この日本人です。私はこの日本人に頼まれたのです。百五十コントスは、この日本人に確かに渡しました」

私はがく然とした。頭が混乱して言葉も出なかった。そのまま、私は留置場に入れられてしまった。

独りになると、立たされた困難な立場を思っ、一睡もできなかった。悪いことには、この町に一人の知人ももたないことだった。しかし、この金の支払人宮本に采て貰えば万事解決がつくのだと、幾度も心にいいきかせて、自らを慰めていた。

二日目の夕刻、弁護士だという男がやって来た。私は

早速、宮本に来て貰うことと、ジョゼをしばらくあげて、真犯人を白状させることを依頼した。

翌日、弁護士は、宮本が商用でサンパウロ市に出て、取引先やホテルに電話しても通じないこと、またジョゼは、細君の出産費のため、五百ミルで日本人に雇われたこと、産後、日の浅い細君が心配だから帰してくれるようにと、泣いて同情を求めていること、それを金を出して叩き上げさせていること等を報告に来た。今にも宮本が現れるものと期待していた私は、がっかりした。真犯人を出すか、宮本の帰りを待つか以外、方法がなかった。

一週間経って、宮本がやって来た。私の出した領収書を提示して、私の所持金を正当化してくれたし、市の有力者の間を奔走してくれたが、ジョゼの証言があり、それを覆えすべき真犯人が挙がらないので、容易に釈放されなかった。

しかし間もなく、真犯人、真木があげられた。包みきれぬジョゼの自白であった。釈放に当って、私は、私をひどい目に会わせた奴を一目見たいと思った。それに真木富士夫という名にも、ひっかかりがあった。弁護士の話では、彼を取り巻く不良共に人の良い真木が利用され、

脅迫されて、悪から抜けられないでいる気の毒な青年である、ということであった。

真木富士夫は、やはり、十八年振りで会う私の旧教え子であつた。まだどこかに幼顔の残つた彼を見た時、私はなにもいえなかつた。

富士夫は、旧師の私を認めても、黙つてそつぽを向いていた。私は彼をその環境から救い出そうと決心した。初め、飛行機の切符が失効することを、やきもきしていた私だったが、今では、その為に百五十コントスを失うことを、いささかも苦痛に思わなかつた。

それから二日の後、富士夫を新生さすべく、私は彼を伴つて飛行機に乗つた。

アルタ・パウリスタの広漠たるカンポに一筋、延々五十キロに及ぶだろう直線道路が、上空からは地図を見るようであつた。「はい」とか「いいえ」とかより外、答えようとしない富士夫は、空虚な眼を下界の偉大な自然の姿にやつてゐる。どんな感慨が、この数奇な若い心を去来しているのであろうか。

パラナバネマ河の乳灰色に濁つた流れを越すと、パラナ州である。一目緑濃い原始林がもくもくと続いて、その上に、黒い雲の影がきままな形を投げている。原始林が尽

きると、整然と植付けられたコーヒー園の緑一色の中を、代赭色の道路が、幾何学的な美しい線を画している。小川を挟んで少しばかりの牧場と、小さい赤屋根、白壁の家が点々と置かれてある。何と小さくささやかな

人間の営みであろう。何とかなく美しい人間の生活であらう。

こんな小さな哀れな人間同志が、何故憎しみ合い、虐げ合わなければならないのだろう。私はこの青年を恕し愛することができたように、隣人達の不道德や不正を恕して友情を結ぶことができるだろうか。私は今更、周囲の誰彼に抱いている憎しみを思い出していた。そして、そんな憎悪の眼の中のみを歩いて来たであらう富士夫が可哀相でならなかった。まだ少年のような眼に、うつすらと涙を浮べて、じつと窓外を眺めている富士夫の視界に、驚異の都市マリंगाが、ぐつと大迂廻して、その全貌を現して来た。

数多い私の旧教え子の中からは、ドクトール（大学卒）も、郡会議員も、優秀な技術者も、富裕な商人も出た。こんな人達は今も誇らかに旧師の私に手紙をくれる。その半面、こんな不幸な人々もいたことを、今初めて知ったことを私は恥かしく思った。しばらくは快々として、憂鬱な日が続いた。

これは教師私の責任であらうか。親の責任であらうか。

或いは社会の罪というのであろうか。私に解っていることは、この児達の罪ではないということだけである。

（一九五三年）

老移民

竹井 博

略歴 本名・桜田博。竹井博（散文）、竹井蘭譜、竹井らんぷ（俳句）などの筆名を用いた。山口県豊浦郡（現下関市）の産。小年期に父母とともにブラジルに移住し、サンパウロ州レジストロ植民地に入植した。一九才にして父母を哀い、一時放浪生活をする。二五才の時、サンパウロ州バストスに定着して、製糸工場に働く。二八才で結婚。長年同州アルヴアレス・マツシャードに居住して、農産物の仲買人などに従事した。創作・俳句のジャンルで活躍。一九五三年にパウリスタ新聞が行った短篇小説懸賞募集で、本選集所収作は第三席に人選した（第一席なし。第二席上村俊幸「歪められた歩み」。没年一九七一年頃。

老移民

煤けた天井の中央から吊り下げられたコールマン灯のホヤに、沢山な蛾や甲虫がカツンカツンと体をぶっつけながら乱れ飛んでいる。蛾はぶつかるたびに燐粉を花火のように散らした。

むし暑い晩である。じっとしていても、背や腋の下から汗がにじみ出て来るのである。

高田勢造は、うるさそうにコールマン灯にたかる蛾を見上げて、

「明日は雨だぜ」とつぶやくと、カリスに残っていたピングを一息に飲みほし、大きな伸びをした。伸びをした勢造の影が大きく壁にうつると、その影は受難のキリストを想わせた。勢造の家には夕方から隣家の青木三次が来ていて、ピングを飲みながら話しこんでいるのである。

ピングのさかなの鶏の刺身もほとんど食べつくされていた。隣家といっても、どちらも二十アルケールの土地持ちなので、お互いの住宅は二百メートルもはなれているのだが、二十数年前、このB植民地に入植して以来、両家は何事にも相談し合い、まるで親戚以上の交際をして

いるのであった。

「うん、雨かも知れん。一雨降ると、俺は落花生を播こう
と思っっているんだ」

三次は、ピングに火照った顔で飛びまわる蛾を見上げて
言った。勢造は日本の女優が笑っているカレンダーを
見た。

「明日は新月だから降るぞ」

そして、空になった自分のカリスと三次のカリスにピ
ンガを注ぐと訊いた。

「それで今日の集会では、俺を除名することに決議はし
なかったのだな」

三次は無精ひげの伸びた顔で苦笑しながら、

「そうさ。とに角もう一度お前に反省をうながして見て、
思い直さねば仕方がないから除名するということになっ
たんだ。それで俺がお前と一番深い交際をしているか
ら、まあ、使者になって来たのさ」

「馬鹿らしいにも程がある。反省うながしてやりたいの
はこっちの方ではないか。何が戦勝祝いだ。戦勝の確報
がどこから入ったんだ。M市で一部の誇大妄想狂が勝手
に作ったデマ・ニュースを得々としてふれ廻しているな
ぞ、まるで気狂いざただ。俺はそんな気狂いと一緒の行
動はとらないよ」

先週の土曜日、このB植民地では、第二次世界大戦に
日本が宿敵英・米を撃滅して大勝したというので、戦勝

祝賀会を開いたのであった。

高田勢造はB植民地の日本人会々長である。そして八月十五日の終戦以来M市の無電で受信したという怪ニュースー彼はそのあまりにも突飛な有り得べからざるニュースを全然否定していた。だから戦勝祝賀会の催しにも真向うから反対した。その時に、副会長の野瀬が激論の末、

「会長が戦勝祝賀会に反対ならば、菩々は会長を日本人会から除名しても戦勝祝いを断行する」

といきまいた。他の日本人全役員も野瀬に賛成の意を表したのである。だから、戦勝祝賀会はB植民地の会館で盛大に行われ、その時、高田会長の除名問題が出たのだ。

「日本の戦勝を疑う非国民を会長に戴くことは出来ない！」と野瀬はいうのである。しかし、高田勢造は会長として永年植民地のために尽力し、このB植民地の草分けである。

「いま一度、高田会長の反省をうながした上で」ということになり、三次が使者になって来たのであった。

「では、お前の気持が全然変らないことを、野瀬につたえるんだな」

勢造は笑いながら、

「そうだよ。俺は今の所まだ正気だからな」

三次も笑った。

「俺も、現在の日本人会は厭になっちゃった。お前が除名されたら、ついでに俺も頼んで除名して貰うよ。野瀬は、日本人会の名称も変えて、今後は愛国日本人会とするとか言っていたぜ」

「世の中も変ったな」

勢造は縄煙草をきざみながら言った。

「そうだ。俺たちがこの植民地に入植した頃は苦勞もしたし、辛かったけれども、皆氣持の合った者ばかりで面白いこともあった。皆が協調し合って少しでも向上しようとしたものだ。仕事にも張り合いがあった。それが最近はどうだ。植民者の氣持はバラバラではをいか。利己主義のかたまりだ。そしてロクでもないポリチカ（政争）に仕事も手につかない有様ではないか。佐々木なんか、引揚げの船が来るといので、仕事もせずに剣道の練習ばかりしているそうだ」

三次は日頃の従順さに似ず昂奮して言った。

勢造は壁に背をもたせると、眼をつぶった。

そして戦勝だ敗戦だと対立し、いがみ合っている現状を思うと、苦しかったけれど、真実の同胞として数家族がむつみ合い協力した入植当時をなつかしく想い起すのであった。

それは一九二四年、イジドーロ將軍の革命のあった年であつた。土地の境界が判然としないため、無法にも勢

造の持山を伐りこんで来た外人を青木三次兄弟と協力してピストルと鉄砲で撃退し境界を確定した翌年であった。

勢造はその年、二アルケールばかり植えた棉の出来栄えもよく、予想以上の高値で売れたので、今年から少し余裕も出来るかも知れないと思い、仕事にも励みがついた。

郷里の母親にも少額ながら送金も出来た。その日、町に馬車一台ばかりの棉を売っての帰途、町はづれのコーヒー園から、五人の軍服を着たカマラーダ上りらしい革命の敗残兵が銃をつきつけて勢造をとりかこんだ。勢造は革命の敗残兵があちこちで暴行をはたらいているということは聞いていたが、自分が被害者になろうとは夢にも思っていなかったので、すぐには実感とはならず呆然とした。

隊長と見えるたくましい兵士が、

「金をよこせ」と勢造の胸を銃口で押した。

勢造はよろよろとなった。口惜しかった。

家をあげて血をふく思いで働いて得た金である。二人の幼児を木蔭において、蟻や蜂にさされて泣き叫ぶのにも構わず、妻のキクと汗して働いて得た金を、国民を防御すべき兵士から強奪されるのである。後からも一人の兵士が銃を背中にうきつけて、勢造が手を上げている間、兵士らは、勢連から棉を売った金から煙草・ハンケ

チマ

で取りあげると、

「ヴアイ エンポーラ ジャポン」

と銃の台で殴りつけられた。勢造は痛さよりも家族のものに済まない心と口惜しさで涙がこぼれた。家に帰ると、早速、植民者全部に報告し、警戒することにした。

銃声が始ったら、植民者全部が協力して救援にあたるのである。四、五日経った午後、勢造は畑で妻キクとトマ・カフエーをしていた。メリケン粉で作った団子を食べながらコーヒーを飲んだ長男の武は、木片を自動車のつもりで口で爆音を真似ながら遊んでいる。ハンモックでは次男の強がこぶしをかたく握って眠っていた。突然、青木三次の家の方で銃声がした。勢造は瞬間ギリとし、妻のキクと顔を見合せた。銃声は間歇的にコーヒー園を越えて響いて来、勢造の持山の原始林に木魂した。もう疑う余地はない。革命軍の敗残兵が町からの本道路に近い三次の家を掠奪に来たのだ。それはあまりにも急激な、平和から修羅場への転換であった。蜂雀がチチチと小さく鳴きながらコーヒー樹の間をぬうように飛んで行った。

勢造はあのこと以来畑に来るにもピストルと鉄砲を持って来ていた。

「キク、お前は子供と鉄砲を持って家に帰れ。戸じまりをしっかりするんだぞ。絶対に戸を開けちゃいかん。も

し戸を破って入って采たら撃ち殺せ！」

キクは蒼白な顔でうなずくと、二人の子供を攫ふようにして家に向って走った。

勢造はそれを見送ると用心深くピストルをかまえて、コーヒー樹にかくれながら三次の家近づいて行つた。最初、勢造の眼に映つたのは、勢造を銃の台で殴りつけたあのたくましい兵士が、大きな木の切株に身をかくして三次の家めがけて銃を射っている姿であつた。それから少しはなれたマンガの樹にかくれて射っているもの、倒れたペローバの木にかくれて射っているもの三人、勢造を襲つたあの五人組である。勢達はカツと燃えあがるような敵愾心を覚えると、あの兵士めがけてコーヒー樹の間から一発うった。意外な方向からの銃声に驚いた兵士のふり向いた所をもう一発引金を引いた。二発目は身体のだこかに命中したらしく横ざまに転倒したが、すぐに起り上り勢造の方に一発射つと何か大声にわめきながらコーヒー園の中を走って逃げはじめた。すると、他の四人も口々に何か叫びながら、隊長の後を追って逃げはじめた。

勢造は続けざまに彼等の背後からピストルを射つた。三次の家からも窓も戸もしめてあるのだが、どこからか、ピストルと鉄砲を射っている。

「皆、大丈夫か！」

敗残兵が去って了ってから三次の家に走りよって勢造

は声をかけた。邦人たちが、手に手にピストルや鉄砲を持って蒼白な面特で三次の家に救援に集って来た。三次の家の板壁は無数の弾痕で痛々しく新らしい木肌を現わして裂けているのであった。やがて、弾痕だらけの戸が内側から開かれた。勢造はじめ、邦人たちは家の中に殺到した。火薬の臭気と煙とで息がつまりそうな家の中で、三次、三次の妻のマツ、三次の弟の四郎が手にピストルを持ったまま虚脱したような蒼白な顔で立っていた。

「皆、怪我はなかったか？」

邦人たちは異口同音に訊いた。

「五郎がやられた」

三次が呆然としたまま言った。

「何！ 五郎君がやられた！」

そういえば、五郎の姿が見えない。三次が指さす隣りの部屋を見ると、五郎は心臓を射ちぬかれたらしくシャツを真赤に染めて死んでいた。

「五郎も可愛想に……。敗残兵どもに殺されて、ほんとに死に切れんだろう」

三次は涙もぬぐわず言った。その時まであまりの恐怖のため泣声も出さなかった三次の四つになる長女の節子が激しく泣きはじめた。それが皮切りのように、三次の家に居合せた邦人たちは、初めすすり泣き、しだいにそ

のなき声は号泣に変わって行つた。憤怒と悲哀とがもられた号泣であつた。

B植民地の日本人会が勢造を非国民として日本人会から除名したのはそれから間もなくであつた。勢造は、氣狂い連中から除名されたのは、俺が正氣の証拠だ、と言つて平氣を装つたけれど、その晩、三次としたたかピンガを飲み、キクを手古摺らせた。B植民地の日本人会では役員改選が行われ、会長には野瀬辰男がなつた。野瀬はB植民地に入植当時は無一文で、勢造の歩合作に入り、勢造より物心両面から絶大な援助を受けて現在の自作農になつたものである。三次は勢造に、

「お前こそ、飼犬に手をかまれたのだ」

と言つた。野瀬は、臣道聯盟のB植民地支部長にもなつた。B植民地の邦人はほとんど臣道聯盟に加入しなければならなかつた。臣道聯盟に加盟すると、日本引揚げの場合、優先権があるというのである。怪ニュースは臣道聯盟の連絡員が毎日、自動車で町からとばして来た。日本軍の戦果は、日を経るにしたがつて増大し、アメリカ全土はもちろん、欧州から南米にまで及ぶもので、来月十五日、軍艦「大和」以下、五十数隻がサントス港に停泊、聖市プラッサ・ダ・セーで大觀兵式が行われる、などというニュースに、会長野瀬は植民地代表として出聖することになつていた。

勢造が日本人会を除名される上同時に、勢造の長男武と次男強が青年会を除名された。除名された翌日、青木三次が進めていた武の縁談も先方から破談にして呉れ、と申込んで来た。先方からの仲人の言分は、

「武君は申分のない模範青年として、私どもも喜んでこの縁談に乗気になっていたのですが、最近、聞く所によりますと高田さん一家は日本敗戦をとなえておられる様子で遺憾に思う次第です。何しろ花嫁となられる人は女子青年団長という責任のある身です。敗戦論者ときいただけで、身ぶるいするといわれ、この縁談はなかったものとあきらめてほしい、と先方で言われるのです。敗戦論者はユダヤの手先です。ユダヤの手先と親戚になることは御免こうむると言われるのです」

三次はその報告に、夜、勢造の家に話しに来た。

「そんな阿呆な奴等と縁談が成立していなくて幸だった。向うから言ってくるまでもなく、当方から断ってやる所だったね」

武は三次に笑いながら言った。

「俺もたいいてい辛棒する性質だが、今度だけは腹が立って、その男を怒鳴り帰してやったよ」

「でも、おじさんには度々御苦労かけてすまなかった」

キクは、勢造のシャツの継ぎをあてながら、

「時局問題はいろいろの方面にとばっちりが飛ぶね。私も武が嫁を貰えば、こうして自分でボロを継ぐこともい

らないし、楽しみにしていたんだが」

三次はなぐさめるように、

「なあに、キクさん。そのうちに私がもつといい嫁さんを見つけて来ますよ。安心していて下さい」

勢造は黙然と腕を組んでいた。世間の嘲笑を全身に受けている思いであつた。何故自分は野瀬たちと調子を合わせて行けないのであろう。日本が戦争に敗けた事実を何も固執して主張した所で誰もほめてくれはしない。ほめるどころか、非難され、非国民呼ばわりされるばかりである。勢造は自分の嘘のつけない性分がはがゆかつた。

その時、強が自分の部屋から、手に原稿用紙をもつて出た。強はこの頃、日曜日でも遊び相手はなし、俳句に興味を持ちはじめ、暇さえあれば作句しているのである。

「今、いい句が出来たんだよ。みんなに批評して貰うかな」

強は卓の上に原稿用紙をひろげて得意であつた。

「どんな句だね」

「春の季題だがね。」原爆の害のみ花の便りなく〃というんだ。つまり、原子爆弾が長崎、広島と二カ所に投下されて、そこから来る便りは、春咲く花の便りはさらになく、悲惨な原子爆弾の害のみ書いてある。という意味なんだよ」

三次はピングを一口飲んで、

「うん。そりやいい俳句だ。とてもいいよ。臣道聯盟の連中みたいに、勝った勝ったで日本政府からただで引揚げさして貰うなどということを考えている非常識な面々に見せてやるといいんだ」

そして勢造に、

「お前のおふくろも広島市に住んでいたんだな。生きていれば何才になるんだい」

「広島市にいたんだ。もう年が年だし、生きていても原爆の犠牲になったかも知れん。そうだな。いま生きていれば八十五才になっている筈だ。戦争がはじまる一カ月前の手紙では、耳がよく聞こえなくなつたと書いてあつたが」

勢造は、姉が一人、男は勢造だけという姉と弟であつた。勢造の父は、事業で失敗し、莫大な負債を残して死んだのである。

若かつた勢造は全財産を投げ出して負債を精算し、十年したら成功して帰り村の連中を見返してやるのだ、と身寄りの少い母が心細がるのを無理にブラジル行きを納得させた。ブラジルまで行かなくても、と親戚の引とめるのもきかず、勢造の決心はかたく、意気込みはさかんであつた。

神戸の埠頭まで見送りに来てくれた母と姉夫婦は、勢造とキクとが投げたテープをしっかりと握っていた。母

は涙をふきながら眼をはらし、勢造の顔を見ていた。少しの間でも見ておきたいかのように真剣な眼差しであった。

勢造の手から母にわたされたテープには、お互いの心情が血となって交流していた。出港のドラが鳴りはじめた。喧騒が船と岸壁との距離をはなして行くように湧き、うず巻くのである。見送る人も見送られる人も単なる出船というには、ブラジルと日本ではあまりにも遠ざがた。

行っておいで行って来ますでは済まされない悲愴な気持が、お互いの胸で渦巻いているのであった。生き別れ――そんな気持が払っても払ってもまといつくのだ。交錯したテープを潮風が冷く吹いてゆすった。

船は岸壁をはなれた。

新たな喧騒が全体を包んだ。勢造の握っている幾条かのテープが母の手との間で重味をもって張りきった。

「母さんよ！ たっしやでね！ すぐ帰って来るから！」
喧騒で聞こえないとわかっていても、勢造は体をしばって叫んだ。キクはわけのわからないことをつぶやき、泣きながらハンケチを振っていた。母は涙をふきながら眼をはらし振っていた。テープがぷつんと切れて船尾の方へひらひらと流れて飛んだ。運命のテープ、勢造はそんなことをつぶやいて切れたテープをひとつひとつはなしていた。神戸港も母の姿も一瞬にして涙に曇った。

「早いものだな。おふくろと神戸で別れたのはそう遠い昔ではないような気がするんだが、もう三十年以上も経っているんだからな」

「お互いによい爺さんになってしまったよ。十年計画だの何だのと言っているうちにさ」

勢造も三次も自嘲的に笑った。

「そうだ。俺達の時代は過ぎようとしているんだ。ブラジルの邦人も今度の戦争を転機として今までのような一時的な腰かけ主義の生活を排し、この地を墳墓の地として生活態度も根本から改革すべきだ」

第二次世界大戦が、連合軍の勝利に終るまでブラジル在留邦人のほとんど全部は日本軍の最後の勝利を信じ祈願した。大戦の勃発する二年前、B植民地で大使館付武官N大佐が立寄った時、講演したことがあった。

「今度の支那事変で皇軍が台児荘で一時、転出したことがある。国民はこれを見て皇軍が敗退したと思ったらしい。しかしこれは作戦であつた。この転進によって、あの世界戦史にも稀な徐州会戦がかく赫たる大戦果をおさめたのである。あの作戦は高等作戦であつて、『陽攻作戦』という。諸君！ だから今後いかに皇軍が転進しようとか心配には及ばない。それは陽攻作戦だと思って戴きたい」

だから、勢造はサイパンが陥ち、硫黄島が陥ち沖縄に米軍が上陸した時も、陽攻作戦だと思っていた。本土ま

で引よせて置いて一挙に撃滅するのだと確信していたのである。

ブラジル在留の邦人のほとんどが勢造と同じように、日本軍の最後の勝利を信じ祈願したのである。だから、戦時中、邦人の会合が禁じられ、邦語を話したものは獄につながれ、相当な迫害が加えられたけれども、邦人たちは歯を喰いしばってたえしのんだ。

「今に見ろ」

邦人たちの背後には、天皇があり、巨大な日章旗がはためいている。はためいている日章旗は邦人を鼓舞し、刺激する活力素であった。

あらゆる享楽とほとんど絶縁状態の最低の衣食住生活に甘んじる邦人の最高の目標は、いずれも日本に帰ることであった。それが、日本の敗戦と共に邦人の目標を奪ってしまったのである。

「お前もこれからは、武君や強君の意見を聞いて畑の仕事もまかせるんだな。もう息子たちの時代が来たんだよ」

「パパイはまだむじゅんした考えを持っているよ。何故かなら独裁政治の日本やドイツが、そのために国をあやまったのを知っていながら、自分は昔ながらの一徹な強情さで僕たちの意見を全然とり上げてくれないんだからね。なあ、強」

武はやや興奮して言った。

「兄さんのいうとおりだ。結局、パパイの行きかたは東条やヒットラーと同じだ。時代が変わったとか民主主義の世の中とか言ったって、自分もそれに順応していく気になれないんだ」、

「僕は迎合主義がきらいなんだ。時代の風潮に応じて便乗する連中を見ると胸が悪くなる。町の敗戦組といわれる連中がそれだ。もう日本語なぞ子供には覚えさせる必要はないとか、のべつまくなしに土曜日になれば若い者を集めてダンスをやっている。あんな連中がいるから、戦勝組がそれに乗じて日本精神鼓吹のためとか言って反動的な言動に出るのだ。敗戦組にしる戦勝組にしる、真剣味が無いのだ。俺たちがこのB植民地に入植した当時の苦しみを味ったことを想えば、現在、いがみ合っている連中はあまり甘やかされ過ぎたからだ。幸福すぎるのだ。俺たちは鉄道がまだ町まで敷かれていなかったので五十キロはなれたI駅まで買物に歩いて行ったものだ。皆、苦勞が足りないんだ」

「パパイのその気持は分るよ。鉄道もなければ自動車もなく、不自由なままこのB植民地を開拓した草分として、現在はあまり恵まれているかも知れない。だが、それが時代だよ。時の移りで仕方がないと思う」

三次はたえず微笑しながらだまって聞いていた。そして十二時をうつ時計の音に、勢造の家を出た。

空は明日の日和を約束する美しい星空であった。

その日、勢造は町へ老眼鏡を新しく合わせるため馬を仕立てた。最初馬は鼻を鳴らし、元気な様子であったが、もう老境に入っているらしく、町近くなると汗をかき息苦しうであった。乾期に入ってから、ほとんど雨らしい雨の降らない道路を馬鈴薯を満載した貨物自動車が、もうもうと土壌りを巻き上げては何台も勢造を追抜いて行つた。馬鈴薯の産地として、奥ソロカバナのA町は小さいながらむ聖市では有名であった。馬鈴薯がこの地方に盛んに植えられるようになったのも勢造や三次が試植して成績をあげたからである。

勢造は山岸商店へ入って行つた。成功者で、雑貨商のほか、パラナに珈琲園を所有していた。山岸は勢造と同航海の仲である。

「山岸君、景気はどうだね」

「相変らずだ。まあ、かけろ」

山岸は最近肥えはじめた体を店の奥まった事務所で金庫を後にして腰かけていた。

勢造は、買ったばかりの老眼鏡をかけると、机の上にあつた伯字新聞を読みはじめた。邦字新聞は、戦時中、発行禁止されてい、終戦後もまだ発行をゆるされていなかった。

「ドイツの戦犯もとうとう処刑されたな」

勢造が、ニュールンベルグ市の刑場でナチスの幹部が

処刑された記事感慨深く読みながら言った。

「そうだ。しかし、伯字新聞の記事をほんとにして他人に言わない方がいいぜ。国賊呼ばわりされるだけ損だ。

俺はこのごろ、勝組に転向したよ。でないと、商売は出来ないからな。それに特攻隊に狙われたら百年目だ」

山岸はずるそうに笑いながら言った。その頃地方では、敗戦組として世間から評判されはじめると、交際はおろか、親戚同志でも絶交し、特に商売人は日本人の客種を失ってしまうほどであった。それに非国民として天誅を加えるべしというので、臣道聯盟から選抜された特攻隊という決死の若者たちから暗殺された者さえあるのである。しかし、勢造は、山岸の言葉が癪にさわった。「お前は、日本が敗けた事実を知りながら、勝組に迎合するために嘘をつくのか」

勢造は、うちから盛り上ってくる激しい怒りに持っている新聞をふるわせて、山岸をにらみつけた。

「仕方がないさ。金儲けのためにはな。君子は豹変す、さ」

山岸は、悠然とソファに背をもたせてかけると葉巻に火をつけて、ぐるぐる指でまわしながら煙を吸い込んだ。

「お前は、自分の節操まで売って金を儲けたいのか。そんなお前ではなかったはずだ。新移民時代に、俺と一緒に配耕地から夜逃げした山岸は、そんな腰抜けではなか

ったはずだ」

勢造は、老眼鏡をはずすとポケットにしまった。新移民当時に命がけで行動を共にした山岸が金儲けのためとはいえ、戦勝組に加わるとは思えなかった。

「だがね、高田君。昔は昔だよ。僕があ頃から、現在のような融通の利く人間だったら、もう少し早く成功していただろうと思って残念でたまらない。なんといっても金の世の中だよ。君も敗戦組になって日本人会を除名されたそうだが、馬鹿らしいことだ。悪いことは言わない。今からでも遅くはないから、改心して日本が勝ったことにして、馬鹿になることだ。負けるが勝と昔から言うではないか」

「聞きたくない！」

勢造は新聞を机にたたきつけると、怒鳴った。

「お前こそユダヤ人だ！ 呆れた男だ。そんなにしないで金が儲けたいのか。節操を売る男女郎だ。見下げはてた男だ。お前とは絶交だ！」

勢造はこれだけ言うと山岸の事務所を足早に出て行った。山岸が大きく笑う声が後から聞こえた。

勢造は町からの帰途、馬にゆられながら、山岸のあの大きな笑声が耳から消えなかった。

山岸をはじめ、B植民地の邦人全部から笑われている声のようであった。妥協性に乏しく、怒りやすい自分の性格が、次第に友人を少なくするのが淋しかった。だが

、山岸の態度はゆるせない。単純に、日本が戦勝したと思ひ込んでいる者は純である。しかし、敗戦を確認しておきながら、現在の邦人社会情勢から打算して煽動的なデマを真実めかして言いふらす者こそ、罰せられるべきである。騒擾罪に値するものだ。現に、そうした煽動者のために、特攻隊なるものが組織されている所で、所謂認識者たちは狙撃され、暗殺されたものも少なくないのである。

―常夏の国でも、肌寒い風が吹いて冬を想わせた。

勢造と老馬の影を長く地面にうつして、太陽は西の地平線に赤く燃えていた。勢造が最初のおのをこのB植民地に下した頃は見わたす限りの原始林だったが、今、馬の上から見える所は、点々とユーカリの植林があるだけで原始林はどこにも見当らないのである。

なだらかな起伏が波状形に続いていて、所どころ青く見えるのは翻耕園であり、うす黄色に色づいた所は、やがて掘られる馬鈴薯畑であろう。

「よく拓いたものだ」

勢造は入植以来、三十年の歴史をまざまざと眼前に見せつけられたように、つぶやいた。

勢造は、珍らしく息子たちと一緒にコーヒー園の除草を早期から励んでいた。乾燥した地面は、鍬を引くたびに土埃をあげ、勢造の顔は汗と土埃で異様なまでによご

れていた。

勢造は、息子たちと併行して除草しながら進んだ。まだまだ若い者に仕事の方は負けないぞ、と勢造は張り合う気持だった。ザツザツ、バリバリと鍬が土に喰い込み雑草が根こそぎ取り除かれる音が小気味よかった――。

やがて、勢造は疲労を感じると、鍬をおき、大きなペローバの切株に腰かけた。その切株は入植当時、妻キクと二人で長い時間をかけて伐り倒した直径一米近い大樹であった。勢造は縄煙草をきざむと火をつけた。勢造のそばを、武と強が除草しながら、進んで行った。勢造は自分のおとろえを感じた。

「丁度、このコーヒー樹みたいに自分も弱ったのだ………」

勢造は手を伸ばしてコーヒー樹の葉を一まいむしつた。勢造のコーヒー園はB植民地で一番最初植えつけられたものである。その最盛期には二本から一俵のコーヒーが穫れたものだ。だが現在では五十本から一俵やつと穫れる程度なのだ。

「こんな竹箒みたいなコーヒー樹は切り除ってしまつて、雑作か、牧場にした方が有利だ」

二人の息子はいつも言った。すると勢造はそのたびに怒った。

「馬鹿な。このコーヒー樹を植える頃は、お前たちはまだ小さくて、仕事の邪魔だから木蔭にハンモックを吊つ

て寝かせておいて、ママイと二人で懸命になって植えたものだ。お前たちは苦労を知らないから駄目だ」

だが、コーヒー樹は老衰期に入っていた。むかしは花ざかりになると、ふくいくとした花の香りと多くの蜜蜂の羽音がしたものであるが、現在では数えられる程の花をつけているにすぎない。勢造も幾たびか、コーヒー樹を切り牧場にでもしようか、と思ったりするのであるが、それが出来ずにいた。樹の一本一本に、勢造たちの息吹きが通い、念願がこめられていた。しかし、念願は日本の敗戦と共に完全にこわされた。日本に帰るという念願は虹のように消されてしまったのである。だから、勢造の一徹さも、最近はもろくなっていた。虚脱状態でもあった。波のようによせて来る混迷の前に、溺れかかっていたのである。

はるか、多分パラナ州に近い方面で大山焼きの煙が立ちのぼっている。むくむくとのぼっていく真黒い煙は上空で雲の形になって広がった。勢造は、その煙を見ているうちに、ある決意にたっしたのである。

―息子たちの言うように、コーヒー樹を切って、半分は牧場にしよう。そして今後の方針は息子たちにまかせるのだ。ブラジルに腰をすえるのだ。永住だ ―

勢造は、切株から立上った。そして、自分の決意を息子たちに知らせるべく、息子たちのいる方へ歩きはじめた。

（一九五四年）

ゆがめられた歩み

上村俊幸

略歴一九二一年、熊本県に生る。一九二八年、ブラジルへ移住。爾来主として農業に従事し、一九六八年サンパウロ州スザノに没す。短歌、創作、詩のジャンルに活躍、『南米時事』および『パウリスタ新聞』の懸賞小説に入選した。横光利一、古野菊生の影響を受けた。

ゆがめられた歩み

ふるさとの山々を心にうかべていると目がしらが熱くなってくる。急速度に戦争に突入し、その血みどろな戦いを身をもって体験した日本の歩みが身近に感じられるのだった。そして、次にはその方向さえ容易には見出せぬであろう混沌とした状態の邦人社会が浮び、今日までよろめき歩いて来た自分の姿がえがかれ、わけでも戦時中、つねに迷い続け無気力だった生活が顧られるのだった。そしてその中に存在してゆるがない知子のことが生々しく蘇り、冬木は身をさいなまれるような慙愧にも似た思いで回想してみるのだった。

冬木は太平洋戦争が突発した年、一九四一年の冬から三年の間、P線の奥、N市を二十数キロ離れた新開地に住んでいて棉栽培に従事していた。山焼きをして間もない灰の匂いがただよっている開墾地に横たわるグワイピーラの大木が音も立てずに燃え続けたのもほんのこの前のように思われる。新鮮で荒けずりな新開地であった。

大東亜戦争突発当時、強い感動とともに張りのある充

実感に包まれていたのもしばらくの間で、邦人社会は次
牙に上つ調子となり、盲目となつて常によるめき止まぬ
不安定な状態におちいつていった。

冬木は努めて　― 流れといったものを意識しようと
する。

みんな流れている。しかし生きている。生きている
からにはこのままではいけない。こうした漠然としたも
のに絶えずおそわれた。そしてそれは被を無氣力にさせ
ていった。― 戦っている祖国― 動いている世界　―
立ちすくんでいる邦人社― 自分自身の位置、身のや
り場のない焦慮に苦しみながら、まるで空中にうかんで
いるような、ここにこうして存在しているということが
やつとであるくらい、空虚な心になりがちであつた。

そうしたなかで知子だけが、だんだん否定しえぬ存在
となつて彼の身邊にまつわり続けた。

知子はコーヒー地帯で生れた。青々と一面に続くコー
ヒー園と、コーヒー園に点々と高くそびえて残っている
枯れた大木、強い陽光、はつきりした色彩の山々、やわ
らかい風音を立てるバナナの葉、そこで知子は裸足で育
つた。

三年前に父を亡くし、間もなく知子の家は経営困難な
コーヒー園を売つて、この新開地に移つて来たのであつ
た。冬木の近所に住んでおり、家族は腹違いの兄とその
妻との三人きりで、知子の母はN市で裁縫をしながら一

人で暮していた。知子の母は亡くなった父の後妻だったのである。

知子の兄はN市で事業を起そうと準備をすすめていて、N市でも有力な仲買業者から援助をうけていた。そして、知子はその仲買業者へ嫁ぐべく内定されており、苦しみながら強い反抗を続けていた。そしてひたすらに冬木に接近して来るのだった。

N市へ行こうと家を出た冬木はひどく憂うつだった。しだいに無気力になっていく自分を感じ、このままいつたら破滅だと意識しながらも起上れぬ彼だった。

あまりにも大きな自然の中でもすれば呆然となろうとするその奥底から自己を見出し、うごめく動きを身をもって意識した彼であった。素朴でひたむきな知子に自分の進路を見出したはずの彼ではあった。この新開地に入植して以来、知手と交際しながら、しばらくは平和な毎日が続きさえした。すくなくともその毎日は充実した日々だった。しかしそれは長くは続かなかった。彼のうえに大きな動揺がおそってきて、言い知れぬ不気味な不安のなかに突き落された。戦っている祖国、動き波うつ時代、自分はいったい、どこで何のために生きているのか、何故に？ はげしい焦慮感によるめき、たとえば、自分がどのように動いてもそれは無意味なものだ、と暗くなり、しかしいかに意味のないものであろうとやはりはっ

きりと事態を自覚して動かなければならないことは分つていながら、漠然と横たわる壁に氣力を失い、なにものに身をゆだねるような氣特になるのをどうすることもできなかった。

州道に着いた冬木は道端でバスを待っている知子に氣づいた。

「Nへ？　そう、あたし、知らなかったものだから」
「今朝、急に思い立ってね」

二人は並んで立った。

冬木は、知子が結婚を強いられて苦しんでおり、自分に倒れかかってくるのを救わなければならないと思ひながら限らない不安を覚えるのだった。彼女を救わなければならない、結婚しなければならないという心は純粹でありながら、つきつめていくとその氣持になりえぬものがあった。だが、知子と一緒にいるとやはり、だきしめたい愛情を覚えるのだった。そして彼女が抗しがたい瑞々しい肉感的な魅力となって彼をゆるがせた。

だが、自分はいったい何時になったら今の心境から飛躍してこの知子と結婚する氣持が実感となるであろうかと、だきしめたい感情とさけようとする心とがもつれ合ふのだった。

「なにか考えていらつしやるの？」

「いや、別に――」

冬木は知子の視線をうけながら妙に庄迫を感じた。

「そうー」

知子はもの足らなそうであつた。でもある喜びをかくし切れないようにして言った。

「あの、あたし、何しに行くか知っていraftしやる？

あたしね、お母さんの病氣見舞いに行くのよ」

「お母さん、具合悪いの？ それは知らなかつた」

「ええ、あたしほんとうは見舞いなんか行きたくないの。でも行くのよ」

彼女はいたずらそうに言った。

知子の母も知子に結婚を強いているらしいがと冬木が思っていると、バスが来た。・

N市に着いてバスを下りた冬木と知子は街路を並んで歩いた。知子はぴったりと冬木によりそつて歩いた。

二人は日本人の食堂で食事をした。食堂はおおくの邦人達でかなり混んでいて、戦争ニュースでもち切つていた。邦字新聞を失つた彼らにとつて食堂などはニュース交換所でもあつた。

人々は不利な状態におち入りつつある日本を憂慮していた。日本が不利な立場にあるということは冬木にも強く響き彼を刺戟するのだつた。そして自分の日常を思い、これでよいのか、なぜ生き甲斐のある生活をしないのかと責める声が心の奥から湧き上り、ふと、自分を見つめてそれをどうしようという心さえ見出せぬ救われ難い自分に突き当り自分は駄目だ、と髪をむしゃくしゃと

引くのだった。彼はどこからくるとも分らぬ不気味さに愕然となった。

「どうかなさったの？」

気づくと知子が心配そうに見つめていた。冬木は今、はじめて見るかのように知子を見やると、

「君は美しいな」

と言って出口に行ったが、ああ、そうだ、と勘定を思い出して引返した。

「勘定は済ませたわよ」

と、言いながら知子が近づいて来て、悲しみとも怨みともつかない微笑をするとそのまま、外へ出て行った。冬木はその微笑と動作になにか発見したような気持ちになり、自分はどうかしているのではないか、と思うのだった。

しばらく行くと、知子は立止って冬木が近づくのを待って、

「お母さんどこへ一緒に行ってくださいさらない？　ね、お願いするわ」

と言うと冬木の返事も待たずに母の住む方へ曲った。冬木も仕方なさそうに曲った。二人はまた、並んで歩いた。強い夏の陽光がさんさんとふりそそいでいた。

母の家はがらんとしていて、ミシンが一台置かれていた。知子は意味ありそうな目付きで冬木をふり返って奥へ声をかけた。

深い考えもなく、知子と一緒に来てしまった冬木であったが、やはり来るのではなかったと思った。

冬木と知子は寝室から出て来た母とテーブルを囲んでしばらく雑談をしていたが、知子は突然、改まると、「お母さん、あたしね、どうしてもあのこと嫌だわ。だからお母さん断ってよ」

と言った。と、今までにこにこしていた母が急に表情を変えて言った。

「そんな我儘を言っては困るじゃないの。よく考えてごらん」

「なにを考えるの。なにが我儘なの？」

知子のはげしく言った。

冬木は思わず立って辞そうとした。すると知子は、「いけない。いけないわ！行ってはいけないわ！」

と真剣になって叫んだ。その眼に涙が光っていた。

母は当惑そうにそれでも、

「冬木さん、どうぞ、ごゆっくり」

と言ってまた、知子に向い、

「それはね、お母さんにはお前の気持ちはわかるよ。でも、お母さんはお前に苦勞をさせたくはないんですよ」と言った。

「そう、相手はお金持ちだっという意味でしょう？　そして、そうすればすべてがうまくいくからっていうんで

しょう？」

知子は嘲笑的に言った。

「お母さんに苦勞をさせたくないっていう考えがあるなら、なぜ、断って下さらないの。なぜ苦しめるの」

知子は子供のように言い続けたがやがてしずまると、いきなり、

「あたし、冬木さんと結婚するの！」

と言ってテーブルに打伏した。冬木はその声が自分自身にも言った心からの純真な叫びなのだ、と熱くなるのを覚えた。母は眼を閉じて長い間考えていたが、

「それほど、お前が言うなら仕方ありません」

と言つてうなだれて、

「でもね、お兄さんがどうおっしゃるか……。もつと

もお兄さんはお前と兄弟には違いないんだけどね」

と言つてちよつと言葉を切った。

「ほんとうはお母さんはお前の嫌いなことは進めたくはなかったんだよ。でもお兄さんはNに事業を起そうとしているし、それが失敗したら家は破滅同様だからね。お前は知らないだろうが、亡くなったお父さんは日本で相当の地位にあつただけで、妻には――兄さんのお母さんね、死なれるし、間もなく破算してしまつたんだよ。お父さんはそれでも負けずに起上つてブラジルへお兄さんと私を連れて来てコーヒーを植えたんだけど思うように行かず、ああして亡くなられたんだよ。それでお

兄さんがああしてあせるのも無理ないことだと思つてね。それで――お前はおこるだろうがお前をああいうふうにしたんだよ。お前のためにも結構なことなんだしね。それが駄目だとすると――私は辛い立場になります」

彼女は力無く言い続けた。冬木は弱々しい彼女の言葉を聞きながら、ふと、一思いに知子と結婚してこの人を幸福にしてやりたいものだと思いはじめ、二人の結婚を許してもらおうとする気持ちが起るのだった。

「お前はお兄さんと兄妹に違いないんだから何でもないだろうが、お母さんにはずいぶん辛いところかあります。お父さんがおらない今、私は他人のようなものだからね。それでなくてさえ気兼ねする思いなんだから私にはお前だけが私の子なんですよ。でもお母さんはお前を苦しめようとは思いません。知子は自分勝手に好きなようにしなさい」

もう泣き声だった。

「このお母さんは辛い立場になります。でもお前が嫌なら仕方ありません。私はどんな辛い思いをしても構いません。お兄さんにはお母さんがどんなにしても謝ります。どんなにしても」

「お母さん、止めて。そんな惨めな、卑屈な話はいや！」

知子は不意に立上って言う出口の方へ歩き出した。

「知子。どうしたの」

母はおろおろして言った。

知子は失神したかのようにして、しかし眼は強く見はつていた。

「知子さん、待った」

冬木は知子の肩をつかむようにして手をかけた。

「構わないで頂戴。もう、駄目だわ！ なにかもみんな駄目だわ。ああ、あたし、でも駄目だわ」

知子は取乱したように外へ出て行つた。冬木も続いた。

「知子さん、とにかく待った」

それでも彼女は歩いた。彼は彼女の肩をつかんだ。彼女はふり外そうともがいた。

「止めないで！」

「ばか！」

冬木は思わず知子の頬を平手でたたいた。それでも彼女は歩こうとした。

「ばか！ ばか！」

冬木は続けてたたいた。今度は知子はじつとしていた。その表情はもつともつと叫んでいた。

しばらくの後、二人は公園のベンチに腰を下したまま長い間黙っていたが、やがて知子のはげしい迫力で冬木と一緒に逃げてくれ、と言うのだった。冬木はじりじりと迫る知子にたじろぎながら、しかしついに応じなかった。彼が知子を追った時ならその場からでも逃げたかも

知れなかった。それを敏感に感じとった知子は急に彼に倒れかかると、

「もう駄目なのね。みんな過ぎてしまったのね。もう、おそいのね」

と肩をふるわせて泣くのだった。冬木は知子の弾力のある肢体を感じをがら今はすべてを忘れて逃げようと言わなければならなかった。しかし、そう思えば思うほど、冷静になっていく自分を発見して、ああそれでは自分は知子を愛してはいないのだ。愛情はすべてを焼きつくすものではないのだ。自分は知子に義務を覚えぬのか、自分は卑怯だ、悪人だと思い、しかもなお、心のどこかに空自な世界が位置を占めているのに気づいてかなくしく思わずにはおられなかった。

昼過ぎから雨を思わせるむし暑い日曜日であった。人の気配に棉小屋から出てみた冬木は、家の前に知子が立っているのに気づいた。

知子はこの前よりもやつれていた。だが圧するような瑞々しさはすこしも失われてはいなかった。

二人は家の中に入った。

「しばらくね」

「うん。すこしやせたようだね」

冬木はまた自分にも分らない感情にとらえられていった。長い沈黙が続いた。

と、急に裏山の方からごおっ、という音がするとたちまち大雨が降ってきた。

「あら、困ったわ」

「どうせ、俄雨でしょう」

しかし、止みそうな雨ではなかった。雨のしぶきにかえって蒸すような空気が家一ぱいに入り込んで来た。

雷が鳴り始めた。冬木も知子もなにか激するものを覚えてた。自分の身近に知子がいる。冬木は熱するものを覚えて視線を他へ向けるのだったが、しなやかな温味と匂いとが彼の感覚を刺激した。冬木は思わず知子を見た。彼女は目じろぎもせず彼を見かえす。焰のような知子の瞳。突きつめた肢体。彼は自分を忘れることが彼女を助け、自分自身をも救うのだと思った。烈しい感情が潮のようにおそってきた。全身がかあつとなるのを覚えた。彼は思わず知子の肩に両手をかけた。彼女のふつくりと高まっている胸は熱く呼吸して、逃れようとして逃れられぬようにふるえ、苦しそうな息をはあはあともらした。冬木は知子をかきいだこうとした。と、瞬間ある明るい光線のようなものがさつと彼の脳裏にひらめいた。彼ははっとなると不意に知子を突離すと、発狂したように外へとび出し、雨の中を走った。雨は盛んに彼をたたいた。彼は大嵐となつて自分を地面にたたきつけなければよいと思った。しばらくして気がつくとも棉の木々の間から家の入口で泣いている知子の姿が見えた。

やがて、知子は泣きながら外へ出ると家の方を振り返ってお辞儀をするようにすると雨の中を急いで去って行った。ふり向いてお辞儀をするようにしたのが、さようならと言ったように冬木に思え、それではこれがもう最後であろうという予感にはっとなって、さようなら、知子さん、と心につぶやくのだった。

数日の後、知子の婚約が決定したことを耳にした冬木は、それではあの知子もとうとう人妻になるのかとまだ感じたことのないさみしさが込み上げてきた。彼はこの環境から遠く離れた処で生活したかった。生まれかわって、新しく出発したかった。力が欲しかった。さながら神経衰弱にでもかかったような自分に耐えられなかった。なにもかもすべてに無感動な棒のような神経が欲しかった。なんでもよい、こうだという自分への絶対な命令さえ、欲しかった。

ある日の夕方であった。常になくおそくなり薄暗くなって畠から帰ると一冊の本が戸に立てかけてあった。それはいつか知子が借りて行った図書だった。冬木ははっとなつて道端の棉小屋まで行くとほんのそこを帰って行く知子のうしろ姿が見えた。思いなしかひどく力無げだった。

「知子さん！」

冬子は呼ぼうとした。だが、そうすればまた、どのよ

うな変化が起ることだろうと、何ものかに身をゆだねる
思いで黙った。

幾日か経った後、冬木はサンパウロ市近郊を視察に出
かけた。

サンパウロ市近郊、Aに入植することに決めた冬木は
帰途、サンパウロ市に一泊した。

地方の邦人達が雑然としてうき足立っているのにひ
きかえ、サンパウロ市近郊の植民地は、しつくりと落着
いていた。彼らは自分達の場所を愛しそこを盛上げて行
くことが、今あたえられたせいっぱいの仕事であるこ
とを自覚しはじめていた。それは戦争とかかわりのな
い、人間としての生き方であるのかもしれない。そうし
た郊外に自分の位置をさぐりあてて生きて行きたい願
いがひとつの意欲となって冬木を活気づけたのだった。

中央市場に近いある邦人旅館に宿をとった冬木は中心
街の方へ向って歩いて行った。無数の人波が潮騒のよう
な音を立てながら歩いていた。中心へ行く人波、中心か
らくる人波は右と左に別れて歩いていながら、冬木はと
ももすれば自由がとれなくなるのだった。整然とした無
数の窓を光るガラス玉のように見せながら夜空にそびえ
立つビルディングの上部にイルミネーションが文字をつ
くる。ものものしく交響する雑音。それは種々の雑音で
ありながら背後にはたえずひとつのリズムが流れ続けて
いた。

挨拶もなく行交う人々がそれぞれの生活をもっているのだ。行き違う人々の誰かとぶつかればそこからなにかが生れそう。少々前へうつむき加減に歩いて行く邦人になにかきっかけをもって行けばあるいは今後の自分と深く関係するものかもしれない。なにか起そうと思えば今にも起りそうだ。しかし人波はただ流れ流れる。

冬木は今までの自分と今、こうして歩いている自分との間につながりのあるのがふしぎなくらいに思えた。彼は努めてそのつながりを見つめようとする。今、都会を歩いている自分、郊外に移るべく決した自分。その変化への意識の持続をたえず探りあてようとするのだった。旅館へ帰るとまだ人びとは起きていた。旅館の主人は、

「シネマでしたか」

とお愛想を言った。すると今まで花札をやっていたらしい青年が札を片付けながら言った。

「シネマも悪くないですね。僕も前にはよく観に行ったものですよ。しかし昨今は観る気になれませんね」

冬木はこの青年はなにをいおうとするのだろうかと思

った。

「友達なんかが、シネマ、シネマと騒いでいるところなんか、実際なんといえますか、実に不健康ですね」「そうですか」

冬木はもったいぶっている青年の齒がうくような言葉をいまいましそうに聞いた。しかし都会の片隅に生活し、花札に興ずるこの青年もなにか漠然として焦燥にかられているのかもしれないと思った。と、青年は急に態度を改めていった。

「貴方は聞きましたか？　日本はいよいよ国家総動員ですよ」

「それはそうでしょう。前からですよ」

「本格的にですよ。東条さんは『非常時宣言』を発表したんです。そして、『決戦非常時措置要項』が出采上ったんです」

冬木は思わず表情を固くした。青年は我が意をえたとばかりに、平時的業務の停止、学徒の総動員、女子の挺身などを力んで語り出した。

冬木にはもう、青年は眼中になかった。「非常時宣言」とか、「決戦非常時措置」とかいう言葉を聞くと全身が緊張し出すのを覚え、こうしている時にも世界は動いているという大きな現実に圧倒され、ぐっと日本が迫って来るのだった。しかしこれも都会の邦人旅館で感ずる一時の緊張でもあろうか。祖国と国交を断たれたこの国に住む日本人にとってこの時局は近過ぎるものでありながら、また、あまりにも遠過ぎるものであった。

ふいに覚えた緊張と馴れない騒音のため、冬木はベツトに入っても意識は冴えていた。その冴えた脳裏に知子

のことが身を切るような現実となつてうかび、知子をえたい欲望が急に強く衝動となつて湧き上つてきた。

つぎの夜、ルス駅を發つてNへ向う汽車の中で、冬木はさまざまなことを思いづづけるのだった。

サンパウロ市および近郊では太平洋戦争突発直後官憲による取締りも緩和されていた。市民の日本人にたいする態度はむしろ好転しているというのである。ことに郊外では邦人社会は安定し、自分達の環境を自分自身のものとして自分達の手で造り始めていた。しかし、それよりも早くこのブラジル全体としての時間意識が始まっているのではなからうか。各国民が在住するこの国でこの大きな時局を生きぬこうとする中に、共に耐えよう、共に動こうとするひとつの世界が出来始めているのではないだろうか。種々の民族性は異なれ、戦争の余波に巻き込まれて揺れるこの国で各民族が呼吸しているという共通した存在は事実である。と冬木は理論もなく考え、しかし、自分達はこの時勢下において、それがどのような小さくとも日本人として恥じない、生き甲斐のある生活をせねばならないと思い、だが、それも畢竟、ブラジル全体の必然的な動きの中に包含されるものだ、という、矛盾めいたものがぐるぐる廻り出すのだった。そして、その廻転する遠くに戦後、しばらく杳然と立ちすくんでいるであろう邦人達の姿がちらついて見え、その群像の中にはげしく存在している知子の姿が雑草のように

強くうかんでいた。

視察から帰った冬木は、今までかつて味わわなかった決意と同時に言いがたいつまずきとを経験した。

夕焼けがいつまでも残っている夕方だった。冬木はきおい立つ心を制しながら知子を訪ねた。知子は、ちょうど棉小屋を出るところだったが、冬木を見ると、はつと、

立ちすくんでしまった。知子の瞳はおびえていた。

「話したいことがあるんだけど」

「……………」

「僕と一緒にしてもらえぬだろうか」

「……………」

「今まで、力が湧かなかった。今、はじめてほんとうに決心がついたんだ」

「……………」

「今さら、こんなことをいえる柄ではない。しかし偽りのない気持ちなんだ」

「冬木さん、もう、なにもおっしゃらないで。もう、おそいわ。なぜ、もうすこしはやくいって下さらなかったの」

「おそかったとは思う。しかし……………」

「だめよ。もうどうすることもできないわ」

「知子さん！」

「どうぞ、もう、そんな話はお止めになつて」

「それでは、やはりNへ」

「ええ。みんなあなたがいけなかったんだわ」

冬木は全身がすうっと、消え入るようなかなしみに迫られた。

「それなら、ただ一言聞かせてもらいたい。貴女は自分からすすんでNへ嫁ぐのだろうか。そして、愛情がもてるだろうか」

「愛情やなんか、もう考えていないわ。苦しみぬいてやつとのことで行く気になっているんです。もう、なにもおっしゃらないで」

「・・・・・・・・」

「冬木さん。どうぞ、もう、お帰りになつて」

冬木は脳天に打撃を受けたように思った。みにくい自分がくつきりとうかび上った。にえきらなかった自分。無気力だった自分。卑怯だった自分。しかもあれほどのひたむきな知子の愛情にたいして冷静だったのは知子が自分から離れえぬだろうという、思い上った傲慢さがどこかにあったからではなかったのか。恥入る心がはげしく湧いてきた。彼は大声を上げて泣きたいと思った。自分は遂に知子をうることは出来なかったのだ。すべては終った。これが必然的なものなら耐えねばならない。彼は今、すぐにでもサンパウロへ向つて出発したい気がした。そこで自分一人になって新しい生活をつつましくき

ずきたいと思った。

冬木はやつと自分を支えていた。と、知子な突然、声をふるわせて泣き出した。そして、胸をかきむしるようにして言った。

「冬木さん！ あたしを欲しいといつて。もうなにもかもないんだわ！ あるのは愛情だけよ。たった、これだけ

があるんだわ」

すると、冬木は俄かに知子にたいして憤りを覚えた。

冬木は頭をふった。

「知子さん、やっぱり僕が悪かった。さようなら」

冬木は去って行った。

知子はもう、かなしみさえ感じられなかった。彼女はいつまでも消えない夕焼けをうつろな心で見ていた。

その年の翌年、太平洋戦争は終結し邦人社会に不気味な暗い混乱が始った。冬木はまた新たな苦悶に遭遇しなければならなかった。

（一九五四年）

コロニア用語注釈（アイウエオ順）

日系コロニアの慣用語と化したポルトガル語が必ずしもポルトガル語として正しいとはかぎらない。ここに示すのはコロニア用語である。したがってそれらのアルファベット表記は示さない。

アビーゾ（アビーザ） 通知すること

アルケール 土地の面積の単位。約二・四ヘクタール

アルモツソ（アルモツサ） 昼食

エンシャード 鍬の一種。コロノ労働者の代表的シンボル

エンボーラ 立ち去ること。“イル・セ・エンボーラ”の略

海興 海外興業株式会社の略称。戦前あった政府お声がかりの独占的移住会社

カーザする 結婚する。名詞はカザメント

カジミール 毛織の高級洋服布地

カデア 牢獄、豚箱

カーナ（カンナ） サトウキビ

カフェザール コーヒー園（畑を指す） ←

カボクロ 農村における下層現地人（人種的には主に混

血 メステイソン）。無知な田舎者

カマラーダ 同志。日傭いの肉体労働者

カミニヨン トラック

カルビ 除草する意の動詞を名詞的に用いたもの

ガローア 霧雨

カロツサ 運送用の馬車・牛車

カンポ 平（担） 地

克蘭デーロ 病気なおしを業とする祈祷師

コジーニャ 台所

ゴベルノ 政府

コペーロ ボーイ（私宅の家庭奉公者におおく使われた）

コロニア 移民集団（共同体的なもの）を指す。殊に、

日系 コロニアの略として用いることが多い。

コーヒー農場の労働者長屋をも 意味する。

コロノ 契約農業労働者の一形態。コーヒー農場の代

表的な労働形態であった。

コント 金の単位。一千ミル・レース

コンデ組 サンパウロ市における最初で最大の日本人集

団地がコンデ・デ・サルゼーダス街界隈で

あったため、それはコンデ街と略称され、

その日本人居住者たちはコンデ組とも呼ばれた。

コンプラドール 仲介人

サウーバ 葉きり蟻。ブラジル農業の大敵

サンタ・カーザ サンタ・カーザ・デ・ミゼリコール

ディアの略称。 カトリック系慈善団体

であり、慈善病院も経営する

シェツキ 小切手

時局問題 第二次大戦終結後、特に、日本が戦争に負けたか否かの問題を意味した。

ジャポン 日本。時に日本人。ジャポネースは日本人、日本語

ジャルジネイラ トラック状のものにベンチを備えた無蓋バス

ジャンタール 晚餐

出聖 聖市にでること。

臣道連盟 カチ組団体の代表的なもの

聖市 サンパウロ（聖パウロ）市。同様に聖州、出聖のごとく用いる。

セツカ 乾期、乾燥

セマナ 週。時には週末・祭日以外の平日の意

ソルベツテ アイス・クリーム

テーラ・ロツシャ 赤紫の土壤で、コーヒー栽培に最適の土地

チンタ インキ、ペンキ

特攻隊 狂信的なカチ組の者らが日本敗戦を唱える者に

”天誅を加えんと送り出した刺殺隊

トマ・カフエー コーヒーを飲むこと。朝の軽食。一服。三時。

ドミンゴ 日曜日

ニッポツニコ（稀）日本人

二分法案 一九三四年に成立した移民制限法案。排日法

認識派 日本の敗戦を認めた人々。マケ組。強硬派・信

念派・カチ組に対する語

ノイボ 婚約者（男性）。女性はノイバ

配耕 新着移民を各農場へ労働力として分配するこ

と、移民が分配されていくこと。類似の用法に
転耕、退耕などがある

伯字新聞 ポルトガル語新聞。伯はブラジル（伯刺西爾）
の意

伯人 ブラジル人

伯国 伯刺西爾国、ブラジル国。

バタタ 芋。とくにじゃがいも

パトロア パトロンの女性名詞。時には細君を意味する。

ビツショ 原義はむしけら、けだもの。民間でもっとも
一般的な、動物に因んだ賭博の一種

ピンガ 甘藷酒。ラム酒の一種。火酒とも書く。カシヤサ

ファゼンダ 大土地所有農場。プランテーション

ファツカ ナイフ

ファナチコ 狂信者、狂信的カチ組

フェイジョン 豆の一種。ブラジルの主食のひとつ

フォイセ 鎌

プラッサ 広場

ブルーロ ろば、うすのろ

ペスカ 釣

ポリチカ 政治、政略

マカコ・ベリーヨ 老猿の意だが、転じて古強者、老移

民

マツシャード 斧。開拓者のシンボル

マツパ・地図

ママデーラ 哺乳びん

マモン パパイア

マレイタ マラリヤ

マンジオカ マニヨック芋。南米原産の食用芋

ミーリヨ どうもろこし

ミル 原義は千（数の単位）。日本人は金の単位とし

て、ミル・レースの略として用いる

メーザ・テーブル、食卓、机

メルカード 市場

モジアナ サンパウロ州北部地方の名。古いコーヒー地帯で、日本移民

がコロノ労働者として辛酸をなめた地帯

モツソ 若者、青年、独身者年。女性ハモツサ

ラランジャ みかん、オレンジ

六年契約 コーヒー樹育成期の請負制契約の一形式

ロテリア 富籤

リシェイロ 塵芥清掃人

（前山隆担当）

解 説

移民文学から

マイノリティ文学へ

前 山 隆

一、これはどのような本であるか

ブラジルには、ほんの一握りの人々から成る日本語共同体というものがある。そして、それ自体、かなり長い独自の歴史をもっているし、また文学的な創造活動の歴史をもっている。かつて、≪ハワイより五倍も遠く、労賃はハワイの五分の一≫といわれたブラジルという、日本とは直接無縁な国家権力の統治する地域においてこの日本語共同体は永年棲息しつづけているのであるが、日本語と日本文化という姿をとつての”文化範型”Curatorial Paradigms によつて主として生活体験と文学体験とを積み重ねてきた人々から構成されているがゆえに、それは永年にわたり日本という文化圏の飛地でもあり、日本文学の飛地でもあった。そのような地上の一角において文学活動にいそしむ人々は、読書面では主として日本という外国圏からの輸入書籍に依存しているのであるが、その生産する諸作品は、事実

上、この一握りの共同体の内部で自己完結的に流通しているにすぎない。本選集もまた、好むと好まざるとにかかわらず、その読者の主要部分をその共同体のなかにもつものであることには変りがない。（この点と作家のアングジユマンとの関係を論ずる余裕はいまここにはない。）

このようなことは、ブラジルの日本語共同体においてはあまりにも、あまりにも自明のことに属し、一方「日本の日本人」にとってはあまりにも不分明のことからであるので、この解説の責務はおのずから二重のものとなる。すなわち、日本の日本人にたいしては、このようなことがごく当り前の、日常的なことである点を了解させるように働きかけることであり、ブラジルの日本人にたいしては、これらがけして自明のことなのではないのだという風に考えるように仕向けることである。一般的展望をも示しながら原稿用紙四十枚の範囲内でこれを果そうというのはどだいできかねることだが、予め断っておけば便利でもあろう。

この『コロニア小説選集』（全三巻予定）は、ブラジルに在住する日本人および日系ブラジル人の手になる、日本語によって書かれた小説の、最初のアンソロジーである。そして一般には、おそらくこれが最後のものとなるであろうというふうにも考えられている。これは、われわれ『日系コロニア』（註一）の人々のイニシアティ

ブのもとに企画・準備せられ、資金が蓄積せられ、かつこの日系コロニア自身の手で編集・印刷・発行されたものである。企画が芽吹いてよりすでに数年、ブラジルの日系人文学界の事実上の代表機関であるコロニア文学会（会員約七〇〇名）の創立十周年をひとつのチャンスとして、こうして第一巻が陽の目をみることとなった。（残りの二巻は、今後二年にわたって毎年一冊ずつ刊行される予定である。）

註一 “日系コロニア”とはC o l o n i a j a p o n e s aというポルトガル語、いいかえればブラジル人の間に流通しているひとつの範疇の日本語訳であり、同時にブラジルにおける日本人・日系人の共同体をひとつにまとめて自称する、日本人自身の範疇でもある。これを社会学・人類学上から人間集団のひとつとして眺めれば、e t h n i c m i n o r i t y g r o u p すなわち人種的・文化的な少数者集団ということになる。以下、そのグループ成員の自己規定の範疇としては”日系コロニア” または単に”コロニア”を用い、社会学的な集団理解のうえからは”日系マイノリティー”と呼ぶこととする。

ブラジルの日系コロニアは、この選集の刊行をもつて、はじめてその《日系コロニア文学史》を可能にしよ

うとしている。およそ日系コロニアは今日まで、このようなアンソロジーはおろか、個人または複数の作家による創作集というものをいっさいもたなかった。わずかに北島文子による、しかし娯楽本位の推理小説集『北島府末子作品集』（サンパウロ刊・一九六四年）一卷をもつのみである。

註二 鈴木南樹（貞次郎）『春』（サンパウロ刊・一九五九年）は作者が日本を離れる以前に体験した初恋に関する自伝小説であり、日系コロニアには直接何の関係もないので、ここでは考慮には入れない。また日本からの一時的な旅行者が『取材』として書いたもの――たとえば石川達三の「蒼ぼう」的なもの――もコロニア文学の範疇から排除して考える。ここでは、ブラジルに生活に本拠をおいた日本人・日系人が書いたものに限定して考える。

一九六六年に総合文芸誌『コロニア文学』がサンパウロ市において創刊されるまでは、コロニア小説は新聞に発表されるか、さもなくば農業雑誌その他の文芸誌ならざる定期刊行物の一隅に収録されるのが一般であった。（日本で印刷・発行された長篇小説の単行本も、二、三出たことは出たが、こはあくまで例外でしかなかった。しかも、一冊は未完のままであり、他の作者は第二次大

戦後― 本も戦後に出た ― は日本で生活している。）
その上、新聞・雑誌の保存は拙劣をきわめ、図書館といえるものもなく、新聞社や雑誌発行人の手元にさえ満足な保存が行われないことが多かった。すなわち、作品は発表されるや否や昨日の新聞三面記事とともに急速に散逸してしまつて、一般人や新しい世代の文学愛好家の手にとつて読まれるということがなくなつてしまつた。また、あえて読もうとするものも皆無といつてよかつた。このようなわけで、古い作品が新しい創作活動にたいしてなんらかの形でベクトルをもつということは極度に制限されていた。

（影響を与えるほどの作品はなかつたという論はひとまずおいて。）つまり、日系コロニアには独自の文学史というものは成立していなかつたのである。戦前の作品はもとより、一九五〇年代の作品のほとんどのものが一九六〇年代中葉にはすでに入手困難となり、古い移民たちの埃をかぶつたかすかを記憶のなかに埋没してしまつていたのである。

文学史とは、単なる文学作品の継起的な叙述のことではない。それは一時期の作品が次時期の創作活動に与えるエネルギーの歴史である。そのようなエネルギーを醸成しうる条件をつくることを目して、『コロニア文学』誌はその第二号（一九六六年）より「旧作再録」という企画を細々とながら続けてきた。本コロニア小説選集

は、そのような仕事の延長したところに具体化したものである。つまり、これは単に消え去る移民社会の日没の悲歌であるのではない。なんらかの形で、たとえば日本語作品からポルトガル諸作品へと変貌していこうと、新しい文学創造にたいしてひとつのエネルギーを触発せしめんとするものである。

二、文学史的視点

本選集が全三巻という企画の下に刊行され、全一卷でも五巻でもないということは、きわめて実利的な理由に基くのであり、したがって各巻への作品の配分がかならずしも文学史論的に妥当な時代区分の考えからなされたものではない。ことに移民の出稼ぎ意識が濃厚であり、錦衣帰国の妄執にとりつかれていた第二次大戦以前の時期には、文学的な創作意欲は一般に低迷していたため、発表された作品も数少なく、この時期をもつて独立した一巻にまとめるのは無理であると考えられた。しかしながらこの解説はできるだけ本選集の構成に沿って書くことにする。

全三巻は時代的につぎのごとく区分されるはずである。

第一卷 パウリスタ文学賞以前

― 一九〇八―一九五六年 ―

第二卷 助成文学賞時代

― 一九五七―一九六五年 ―

第三卷 コロニア文学会設立以後

― 一九六六年以降 ―

これら三つの時期は、大雑把にいつてつぎのように特徴づけられる時代でもあった。

第一期（第一卷） 新聞投稿時代

第二期（第二卷） 助成文学賞時代

第三期（第三卷） 組織運動時代

もとよりこのような時代区分は厳密性を欠いている。新聞投稿も、文学賞も、組織的運動も、すべての時期を通じてそれぞれにあった。しかしながら創作活動を刺戟し、作品を発表するその形態から眺めたとき、それぞれの時期はこれらの特徴を強くもったということである。（もし作品の文学的性格から展望するならば、全三期を通じて、その大勢は日本的を自然主義リアリズムにあつたというほかあるまい。）

第一期は一九〇八年に日本からのブラジル移住が公的

に開始されてより、一九五七年々頭に第一回パウリスタ文学賞入選作品が発表されるまでであり、この期は一言でいえば一時的な仮寓をブラジルに求めたにすぎなかった出稼ぎ移民たちが、やがて第二次大戦を通りぬけて、この国を”墳墓の地”、”第二の故郷”とみなすにいたるまでの期間である。

第二期の約十年間は、帰国を放棄することによってみずからをブラジル国の一部を構成すると確認したものの新しい模索の時期ともいえよう。永住か帰国か、同化か非同化かをめぐっての、いわゆるカチ組・マケ組の相剋がいちおうの落着をみ、当初認識派（マケ組）のプロパガンダ新聞として出発したパウリスタ新聞の設定したパウリスタ文学賞の発足をもってこの期は始まる。三年後の一九六〇年、これまた認識派の総本山と目されていた、ブラジル最大の農業組合たるコチア産業組合（日本人の手になる）の機関誌『農業と協同』（日本語月刊誌）も、同様にして「農業と協同」文学賞というものを設定した。第一期における戦後の十年間を社会的にも文学的にも、帰国か永住かの内的闘争の時期とすれば、第二期の十年間は固まった永住心、つまりあくまでもブラジルの一部をなす人間として、「日本」を外国と見て生き、かつ死んでいくへブラジルの日本人」というアイデンティティーに基いて、新しいビジョンと価値体系とを形成し

ていかなければならない時であった。そのためには、いはやく世界情勢と新時代の価値観にみずからを適応せしめた知識人たちを中心とする認識派がイニシアティブを握ったのは当然であったし、ふたつの文学賞もまたそのような人間観・社会観・コロニア観を培養することを経営的な目的として、新聞社や組合といった機関によって設定されたものであったといえよう。

いうならば、これは上からのパトロネージによる助成時代であった。それは文学を志すものたちがおのずから寄り集まって運動を析出せしめたという時期ではない。すなわち、この時期は、あくまでもこれらふたつの文学賞によって特徴づけられるのである。この間に両文学賞は、二十数名の作者と約四十篇の小説を世に送り出した。

第三期の開始はコロニア文学会の発足によって画される。

これを一言でいえば、第二期の両文学賞が世に送った新しい作家たちならびにそれら賞の選に当った人々を中核として、文学を志すものたちが世俗の諸団体への寄生的立場から独立して、みずからの組織的運動の牙城を形成したのである。一九六五年十月二日、二十六名により発起人会が開かれ、同年十一月二十一日の創立総会をもって会は発足した。そして翌年五月には機関誌『コロ

ニア文学』の創刊号が出、創立一周年のころには会員数が四百名を超えた。(散文運動の昂揚を目指して興されたこの結社は、しかしあらゆるジャンルを包括した総合文芸団体であり、数々の既成の短詩型結社とその人間関係のネットワークの上に成立したものである。)これは、なにかある傾向性のある文学主張・思潮をもった文学グループではなく、むしろそれから自由に、ブラジルの日系マイノリティーの文芸界を統合的結社の形に析出せしめようとしたものであった。

前期からの文学賞はなお存続した。パウリスタ文学賞は一九七五年現在までに年中行事として十九回を数え、これまでに四十三第の作品(三十六名の作家による)を受賞作あるいは佳作として発表してきた。一方「農業と協同」文学賞はわが任務了れりとして、一九七一年の第十一回目をもってけりをつけたが、それまでに約五〇名の作家による六十八篇の作品を活字にして世に出した。

しかしコロニア文学会の発足以後は、日系マイノリティーにおける文芸界、ことに散文の分野においては、そのリーダーシップは一応上記の両文学賞からこの会の手に移った。爾来、よきにつけあしきにつけ、一九七五年の現在までのところ、個々の作家の文学主張の相異にかかわりなく、あらゆるタイプの人々がこの会の機関誌に作品を発表してきている。

それは傾向性のある文学グループであるよりはむしろ、

討論の舞台となつていゝといえよう。この文学会主催のもとに六十数回の研究会も継続せられ、しだいに討論の焦点も定まつて来つつある。というのも、日本で生活体験・文学体験をえたものが異文化の支配的な政治体のなかで生きるといふ、あるいは日系マイノリティーのなかで成長しながら日本の伝統のなかで文学体験をえてきているといふ、かなり共通したシチュエーションに立つて、おおくのものが文学しているからである。コロニア文学合の出現は、ブラジルの日系マイノリティーの文学の日本文学からの独立運動の結果生れたものであると見ることもできよう。もつともおおくの独立運動と称するものの御他分にもれず、傀儡文学が生れたにすぎないのであるが。しかし、なにはともあれ、その舞台において、（コロニア文学とはなにか、≪コロニア文学は日本文学であるか、それともブラジル文学であるか≫、≪いかにしてコロニア文学は独自の、自律性のある文学たりうるか≫といった論議がおこなわれている。（第二、三期の文学的傾向については、それぞれの巻の解説において詳説されるものと思う。）

三、第一期概観

一九七五年現在、ブラジルに居住する日本人・日系ブラジル人は大把みにいって七〇万人と称せられ、そのほ

ば四分の三はブラジル生れの “ブラジル人” たちである。日本からの移民は、北米合衆国がジェントルマンズ・アグリメントをもつて一応日本人に対して門戸を閉ざした直後、一九〇八年にはじまり、太平洋戦争で中断されるまでに約一九万人が到来した。その内の約七十五％は一九二五〜三五年の十年間に集中的に入国した戦後是一九五〇年代に約五万人が移住し、やがて日本のいわゆる “高度成長” をもつて対ブラジル移民は一応の終息をみせたといえよう。

ここにいう第一期（一九〇八〜五六年）は、文学的には純粋に戦前移民の時代である。戦後移民は着いたばかりでまだ書きだしてはいなかった。戦前移民は一般に奴隷解放（一八八八年）以後の、奴隷に代るべき労働力として、太土地所有制下の熱帯プランテーションであるコーヒー農場（ファゼンダ）に、契約賃金農業労働者（以下コロノ労働者と呼ぶ）という姿で到着した。一九二九年の恐慌を契機としたコーヒー危機後土地を借入・購入して棉・米その他を独立農として栽培するものも急激に増大した。しかし一般には労賃を節約して帰国しようという出稼ぎ移民であり、階級的にはブラジル社会構造の最底辺たる農業労働者層の一部を構成していた。長い太平洋戦争の間は、アメリカの同盟国であり、対日宣戦も行なったブラジルに生きる移民にとっても、ひとつの厳しい「暗い谷間」であつた。しかし経済的には戦争

景氣に便乗し、ことに農産物の高値長期維持のために、日本人たちは急速に中土地所有者・小商工業者の部門における旧中産階級へ上昇しだした。戦後の約十年間にほとんどの日本移民が永住を決意するにいたった事情には、この中産階級への社会上昇、敗戦国の廃墟と化した母国日本、および”ブラジル人”というアイデンティティーをいつの間にか胸奥深く抱いて成人してきた二世・三世たちの存在などが主要なファクターを提供したといえよう。つまり、この第一期の最後の十年間は、戦前移民の新旧価値観の相剋の時期、アイデンティティーの彷徨の谷間であった。太平洋戦争の実戦に参加しなかった移民にとっては、ほんとうの内的な暗い谷間は、むしろ日本の敗戦、神国日本のイメージの墜落とともに始まったのである。天皇制ファシズムの価値体系は、ブラジルの日本人にあっては、日本におけるごとく戦い破れることをとおして崩れ去るということがなかったがために、それは戦後に新たに崩壊のためのエネルギー放出を要した。いわゆるカチ組・マケ組の問題は、このような出稼ぎ性と永住・同化との心理的相剋、天皇制ファシズムの価値観と新時代の風潮との世界観上の価値転換を代表するひとつの事件であった。このファクシヨナリズムは敗戦直後から第一期の終りころまでぶすぶすと燃える残り火のように存続したのである。(これは山路冬彦「つじ」、竹井博「老移民」等の主題である。)

この期の主要発表機関はサンパウロ発行の日本語新聞であった。コロニア最初の新聞であった謄写版刷り「週刊南米」は一九一五年に発刊されたが、一年足らずで廃刊された。翌一九一六年には石版刷り『日伯新聞』が発行され、さらにその翌年にはコロニア最初の活字新聞で半公的性格をもった「ぶらじ時報」（以下時報と略す）が創刊された。以上の諸新聞は、主として北米方面で多少とも移民新聞の発行に経験をもった人々によって始められたものである。さらに一九二一年には、当時日本移民の奥地集団地帯の交通の要地バウル―市に「聖州新報」が誕生し、”戦前のコロニアでは以上の三紙が主となつて、それぞれの性格を担つて情報・言論の場を提供していた。また文学作品をも発表していた。これらが日刊となつたのは一九三八年のことである。なお一九二四年に始まる『農業のブラジル』（初めは『農業の友』）も文芸作品の発表に力を尽した。

一九二三年に坂井田人間が『時報』紙に二十四回にわたつて連載した「狂伯爵」の出現以前には、特に注目すべき創作は発表されなかった模様である。「狂伯爵」は今日までの全コロニア文学史のなかでも特筆されるべき問題作・力作であるが、残念ながら現状ではわれわれの手に届くところには発表された部分のうちの三分の一しかない。発表当時これを読んだ半田知雄は、後日、「文

芸作品中にイデオロギーらしいものを持ちこんで世人をおどろかした最初の人であろうか」

と書いている。筆者が読む機会に恵まれた最後の連載八回分だけから判断しても、これより二年前母国日本において『種蒔く人』の発刊を契機として活発化したプロレタリア文学の直輸入的な影響は歴然としている。そこでは赤裸々に社会主義的イデオロギーが展開されているため、半公的性格の濃かった時報紙は全文公表をはばかり、作品のやま場だったと推測される伯爵の所有する大農場における労働関係の分析と労働者の状態の描写の部分など（全六部のうち第四部の一部分と第五部のすべて）が削除されてしまった。

この作品は、社会主義思想に武装された一青年日本移民・新作とブラジルの伝統的な大土地所有者であり、かつ大資本家・工業家であるM伯爵との対話から成っている。新作は理論的に伯爵の悪徳を追究し、一方では社会情勢から伯爵の大工場は乱徒と化した労働者に破壊され、またコーヒー農場は水害とそのもたらした労働者の惨状のため荒廃してしまう、伯爵は絶望と罪の意識のなかで発狂していくというものである。

素朴な理想主義を盛ったユートピア小説であるが、異色の力作であることには疑いを入れない。

日系コロニアの小説の歴史をふりかえってみて、このように意識的にプロレタリア文学の傾向を盛りこんだ作

品は例外といわねばならない。ごく少ない他の例としては、たとえば「時報」紙に一九三二年に発表された太田原（姓のみ）という署名のある「彼の心境」という掌編小説（習作の域を出ないが）がある。これは田舎から青雲の志を抱いてサンパウロに出て来た日本人の主人公が、紀局コッペーロ（ボーイ）以外の仕事を見付けることができず、移民としての疎外感からしだいに階級意識に目覚めていくというものである。この長い第一期は移民のおおくのものが階級的には最底辺を占めていたにもかかわらず、自然主義的な描写に終始する作品ばかり生れて、プロレタリア文学は成長しなかった。惟うにこれは、ひとつには移民が意識的にはあくまでこの国の一時的な「客」に留まり、この国の社会構造の一部を構成するものとは考えなかったからであり、いいなえれば、あくまでも「移民」の文学であつたからであり、他の要因としては、コーヒー経済の行きづり年のために比較的容易に小土地所有者となる道が開かれていたということがあろう。

一九三〇年代に入るまでは、ブラジル生活に根をおろした作品というものはほとんど、あるいはぜんぜん生れなかった。

それ以前の作品は観念的に、あるいは猟奇的にブラジル社会を覗き見たものをテーマとした作品か、さもなくば日本生活の想い出をそのまま郷愁処理法的に語るもの

が多かった。

上述の「狂伯爵」が観念的に一瞥したものとすれば、一九二七年に『日伯新聞』に十三回にわたって連載され、のち当新聞社長の国外追放事件のひとつの遠因ともなったといわれる羽室浩三（本名福田実美）の「女を嗅ぐ」は、発表当時ずいぶん物議をかもしたものであったが、一言でいえばこれはチビ助の黄色人種たる日本移民がヨーロッパ文明下の異郷に住んで準奴隷的労働条件で働いている時胸にいだいていた金髪女への猟奇的好奇心を日流的に満たしたポルノグラフィであった。ではあるが又一面では、ひとつの徹底した曝露小説であり、すくなくとも厳しいタブー下にあった通俗倫理への反逆をも表わしたものであったということとはできよう。

松尾小路龍麻呂「降魔譜」（一九二七年）はサンパウロ市の日本人集団区「コンデ街」にあった日本料亭に働くオルガという美人と主人公との恋愛心理の遊戯を描いた愚作であるし、鹿島生（斉藤政一）「金髪の妻と別れて」（一九二七～一九二九年）はシベリアからブラジルへ連れて来た金髪妻に逃げられる話である。つまり以上はきわめて猟奇的な眼鏡をとおして異文化の社会を覗き見た興味本位の作品の代表的なものといえよう。ブラジル到着以前の想い出を中核とした自伝的小説の代表は、すこし年代がくだるが、鈴木貞次郎（南樹）「久遠の初恋」（一九三三年）、輪湖俊午郎『流転の跡』（一九四一

年」などである。

このような風潮のなかで、一九二〇年代後半から一九三〇年代にかけて、ブラジル生活の現実に根ざした『植民文学』への要請が唱えられるようになった。たとえば「植民文学への断想」（一九二九年）、今井白鷗「植民文学について」（一九三〇年）、杉武夫「イデオロギーの問題」（一九三七年）等が挙げられる。これを要するに、『植民文学』は日本文学の模倣から脱し独自の文学でなければならぬ、大自然の中でたくましく斧をふるう開拓者の姿を描くべし云々といった論調がおおかったが、当時の移民の大多数が従事していたコロノ労働者の現実をこそ描くべしという声がなかったのは注目に値する。ただし、開拓者の姿というものがこの頃になつてようやくコロノ労働者たちの目前に実現性の強い現実のイメージとして現われてきていたことは事実である。

単に牧歌的な植民文学ではなしに、泥棒に足を奪われたようにコーヒー農場に沈潜するコロノ労働者の頭に描くイメージとしての開拓の音は、武本由夫の「死灰」という秀作によく措かれている。こういったリアリティーのために、この作はこの時期の最良の作のひとつとなっているのである。

一九三二年一月、『時報』紙が「植民文芸短篇小説懸賞募集」を発表したのは、このような『在伯同胞社会』の植

民文学への要請に応えるものであり、コロニア文学史上でのひとつの事件であった。石川達三の「蒼ぼう」が第一回芥川賞を受賞して日本の文学界のみならずブラジルの移民たちのあいだでも話題となったのは一九三五年のことであり、したがって時報社の文学賞設置にたいしてはなんの影響もない。（石川達三のブラジル訪問は一九三〇年のことであるが、当時まだ無名の旅行者にすぎず、ブラジルの移民文学とはなんの関係ももたなかった。）

この文学賞は一九三二年から一九三七年まで四回にわたって継続して行われ、本選集所収の園部武夫「賭博農時代」（第一回第一席）、西岡正雄（田辺重之）「或る開拓者の死」（第一回第二席）、片山耀子「夏代」（第二回第一席）、武本由夫「渦」（第三回第二席、ただし第一席なし）の他、浅見哲之助「見果てぬ夢」、笹島舞子「霧」、杉武夫「珈琲園を売る」、聡子「純愛」、西山悟「不慮の幸福」、川上ひさ「灯」その他の作品を受賞作として世に送り出した。

これらを要するに、ほとんどすべての作品はみずからの日本移民の日常的な現実を描いた、いわゆる『植民文学』である。（「夏代」はひとりの移民が日本での出来事を回想したものだが、なぜ移住を決意したかを物語っている。）そして一部の例外を除けば、すべては素朴なリアリズム、伝統的な自然主義リアリズムの手法で、作者

たち自身の身边に生起した状況を割合忠実に描写している。ブラジル移民間の創作活動がかなり直接的に昭和初年代の日本における新しいモダニズムとプロレタリア文学の激動に触発されて芽生えてきていながら、作風上からはそれらの強い感化をみずからのものにするにはいたらず、古い伝統のなかに沈潜していた。

こういったなかで、ひとつ例外的な作品で、その出来栄えからいっても出色のものとして、第一回の授賞作である園部武夫の「賭博農時代」がある。これはサンパウロ市近郊における投機性の高い農産物（トマトや馬鈴薯）の単一栽培という農法にのつとつた当時の日本移民の状況を戯画化して描いた作品であるが、とくにその強烈なモダニズムの作風、さらにエキゾチズム、頼廃、虚無、投機性の混活した特殊な移民情緒を戯画化したスタイルによつて、人々は直ちに魅了されてしまった。しかし残念ながら、あとにもさきにもこのような作風の作品は他には現われなかった模様である。またこの作者もその後ブラジルで作品を発表した形跡はない。（この作者の経歴は不明であり、現在考証を進めているが確定をみていないのでここでは省略する。ともかく、やがて帰国したらしい。）

この「賭博農時代」に具象化された、かなり通俗化された新感覚派の作風とエキゾチズムの移民文学はこれに少々先駆けてへめりけん・じやつぷの名の下に日本

で広く読まれた谷譲次の『めりけん・じやつぶ物語』、『テキサス無宿』等の一連の作品に類似するものがあり、それらからの直接的な影響があつたのではないかと推断される。

ここでついでに付け加えておけば、『時報』の文学賞には関係のない作品であるが、もうひとつ新感覚派・新興芸術派などのモダニズムの影響を蒙った作に、古野菊生の「転蓬」（一九四〇年）がある。古野は早大仏文科を出て一九三二年に移住した直後より、日系コロニア文芸界の中心部に関与し、おおくの影響力をもった作家である。「転蓬」に顕れたモダニズムは「賭博農時代」のものとは大いに異なり、おなじくエキゾチズムを意識的に表面におし出したものながらも、デカダンと虚無とからは自由な詩的抒情と主知主義を持して、格調の高いものであつた。しかし一方では、前田河広一郎の「三等船客」のごとく移民の帰国船の内部を扱いながらも、そこには前田河のどろどろとした庶民の汗臭い体臭はない。

日本を訪問しようとしているブラジル二世・アメリカ二世と故国へ向う古い移民とのやりとり、交叉するポルトガル語・米語・関西弁などには洗練されたエキゾチズムはあるが、と同時にアナトール・フランスの台詞やラテン語の諺、アーヴィングの寸言、果ては蘇東波の詩の一節をまで引用せざればやまないペダンチズムはこの作

品を、すくなくとも移民の典型を描くこと（作者の意図はここにはないにちがいないが）からは縁のないものになっている。この作品の“氷菓子”のごとき読後感は別世界のものであり、それはそれで良いのであるが。

その他の時報社の入選作品、および『地平線』誌創刊以前に新聞などに発表されたものとしては、移民船内や移住と配耕（新着移民が農場へ分配されていくこと）のメカニズムを描いた古野菊生の「配耕」、移住地到着時の新着移民のショックをテーマとした桜田武夫の「入植から」、写真花嫁の初めて現地で見る夫への失望感に関する浅見哲之助「見果てぬ夢」、強欲な叩きあげ移民の地主が錦衣母国訪問に出立する日、もと使用人に殺害される話、西岡正雄「ある開拓者の死」、不具の夫を抱え、他の青年への恋心をぶすぶすと燃やしかねている古い型の女を日系植民地の風物誌のなかに浮彫りにした武本由夫「渦」、愛人に死なれて移住国を放浪する青年に関する笹島麗子「霧」、進学と恋愛の問題で父に反抗し、放蕩児と化した男がブラジルの前線で開拓の闘士となる教養小説、西山倍「不慮の幸福」、病気で倒れた家長を擁して一家が労苦する純愛物語、聡子「純愛」、ふたたびコロノ労働者に下落するのを防ぐために父母によって政略結婚をさせられんとする娘とそれを阻止する青年を描いた川上ひさ「ともしび」、悪父との子の菖藤を描いた教訓小説、古沢典穂の「不遇」・「兄妹」等々がある。

概して移民個々人の“膺の緒”に密着した状況が当時支配的であつた社会規範の枠のなかで写實的に描かれた作品がほとんどであつた。社会批判がかなり明瞭に出ているのは「配耕」ぐらいのものである。作中人物が世俗的倫理に反流を試みる場合でも、やがてもろくも挫折する弱さばかりが描かれるか、それとも牧歌的な理想小説となるのが一般であつた。

『時報』誌に拠つてその文芸欄・文学賞を担当していた古野菊生はしだいにそれらへの投稿者、入選者たちと連絡を密にしていたが、一九三七年、古野を主将とし、これらの人々および短歌・詩などの愛好家を糾合して、総合文芸誌「地平線」がサンパウロ市に誕生した。小型新聞版四ページのこの純文学新聞は、九一年後の一九三八年二月、第九号をもつて終刊となるまで、常時二十名足らずの同人により、古野の編集のもとに、かなり活発に活動した。そこには未完の連載小説や習作の域を出ない小品をも含めて、十五篇の創作が発表された。このような散文を主軸とする文学結社がすこしの間でも継続的に活動を行なつたというのは、日系コロニアにおいては稀有のことである。

少くとも創作に関してのみいうならば、その文学的主潮は、これに先行した時報懸賞小説のものとすこしも変るものではない。この“文学部隊”は（文学を愛好す

る』という点以外には共通の文学主張をなんらもたない寄り合い世帯であった。

「地平線」グループの文学を一言で評するならば、当時の日本移民の本拠であった農村（九割以上が農村に住んでいたし、農業以外に日本移民が一旗あげる途はなかった）を捨てて都市へ集まって来た（逃亡移民たちの文学）であつた。戦前のブラジルにあつては、都市、ことにサンパウロ市において日本移民が生業をもつチャンスは極限されており、（学問がある奴は邦字新聞社、なければコッペーロ（ボーイ））という時代であつた。『地平線』同人はその「創刊言」（古野起草）において（植民地風功利思潮）に叛旗をひるがえしたが、かれらが都市に生きるべき、そして出稼ぎ移民であることを捨ててのち生きるべきイデオロギーも生活根拠も明瞭な形ではもってはいなかった。出稼ぎ移民の一旗主義からは離脱してきても、ブラジル社会のなかではレーゾン・デートルをもたない浮草のごとき移民たりつづけざるをえなかった。すなわち”逃亡移民”であつた。かれらの作品がおおく挫折感と被害者意識とに濃厚に彩られているのは、このような事情にも依るところが大きい。（「地平線」グループの被害者意識については、筆者はすでに別のところで詳細に論じた。（地平線の時代・コロニア文学 創刊号、二九六六年五月）

「地平線」発表の創作のなかでは、武本由夫「死灰」と

村井幸子「道」とが傑出している。（「道」を、作者の強つての意向によりこの選集から除外せざるをえなかったことは、たいへん残念である。）「死灰」はコロノ労働者の地位から抜け上ることのできない疲れきった出稼ぎ移民の老脱落者、卑屈な彼がその同国人である傭主に一方的に敗北していく姿、その彼の家族内部の葛藤などを描いてなかなか妙である。おそらく「賭博農時代」と並んで第一期最良の作であろう。

「道」は、かつて女性の社会的解放、個人の情感的解放に覚醒しながら、いつの間にかその熱情を喪つてしまい、俗な教説をも人にたいして口にしてしまう、無氣力で歪められたオールドミスを瑞々しい情感をもって描いた佳品である。

以上の他には、東京におけるアメリカ二世・ブラジル二世の軽挑さを戯画化した古野菊生の「ノミ芝居」、おなじく無理想な都市生活の二世たちをテーマとした秋野愁の「ある裏街」、離婚の悲劇を扱った同作者の「深淵」、日本ファシズム突進期における日系植民地内の青年の動きを恋の鞘当てをめぐって描いた杉武夫の「ふくしゅう」などがある。

「地平線」誌は資金難をその主要な原因として、一九三八年十一月、アンドウ・ゼンパチを編集主幹として創刊された総合文化誌「文化」に吸収されてしまい、その段階でかれらの文学活動は名実ともに中絶した。その

後はひとりひとりがそれぞれのジャンルにおいてリーダーシップをもつて仕事していくこととなる。「文化」誌は文学活動にはあまり力を注がないままに、一年後に生き延びられずに廃刊となった。

やがて第二次大戦とともに日本語の出版物は新聞をもふくめてすべて（在伯同胞）のなかから姿を消す。大多数の移民はブラジルに着いて十年前後のころであつた。この日本語共同体は”敵性国人”となり、集会・日本語使用・旅行の自由を襲い、情報網（耳から耳へ伝わるもの以外の）を奪われ、共同体ではなくなり、ひとりひとりの隠者のマスと化した。

一九四一年から日本語新聞が再開された一九四六年末までの間は、（無限につづくトンネルのなかの暗闇をとおりするような時代だったといわれる。都市生活者は職を失つて帰農した。そして、ただ待ちに、待っていた。

第一期における戦後の十年間の作品は、大雑把にいつて、「よみもの」誌発表のもの、諸新聞発表のもの、およびパラナ州北部での文学結社パラナペン倶楽部発行の三号雑誌「文芸パラナ」所収のものに分けられる。

「よみもの」というのは、戦後日本からの娯楽雑誌の輸入が途絶えていた時に、それらに代るべく、（コロニア版キング》を目して出版された月刊大衆雑誌であり、一九四八年三月に発刊し、約四年間継続したのち日本が

ら雑誌類が流入するに及んで廃刊となった。

『よみもの』誌の創刊号と第二号に、柳千枝子という作家が「雨」「牌」というかなり質度の高い佳品をつけて発表した。同名の作家はその前にもあとにも作品を発表しておらず、当時の関係者たちに質してみても、この作家の正体をつきとめることはできなかった。はじめ筆者はこれを故北島文子の筆名にちがいないと推断していたのであるが、ある消息筋がこれをつよく否定しているので、今のところコロニア幻の作家、ということにしておく。大家族を抱えてその生計を支えるオールド・ミスの哀しみを泌々と描いた心境小説の「雨」、姑や甲斐性のない夫との日常的ないさかいをある中年の主婦のひずんだ心理をとおして緻密に物語った「牌」―これらの二篇の小品だけで作者の凡手でない力量を窺うことができる。作風からいえば後述する北島文子の遺した「なすび」や「ロテリアを買う女」にきわめて近似した、私小説風な、中年女の哀歓と心理を吐露した心境小説である。

ついでに北島文子に触れておく。彼女は戦前、日本の『新青年』誌に作品を発表したこともあるセミ・プロ女流作家であり、『よみもの』誌の創刊号から文芸部門を担当していた。

（柳千枝子の作品は彼女をとおして持ちこまれたといわれる。）

彼女は生涯推理小説家・スリラー作家として娯楽読物を書くというプリンスフルに徹し、『よみもの』誌にはほとんど毎号なにかを発表していた。また彼女自身が編んだ生涯唯一の作品集『北島府末子作品集』（サンパウロ刊・一九六四年）にもそのような作品をのみ所収している。しかし筆者はこの選集を準備するに際し、彼女の純文学的作品を求めて捜しまわったあげく、ようやくここに所収した二つの私小説風な、泌々した中年女性の哀しみ、ひそやかな夢と虚栄を鳴った心境小説の佳品を発見することができて、心たのしい思いを味わった。（ここで、北島女史の人物は買うが、作品はぜんぜん認めないといった故木村義臣翁の言を想う。）

『よみもの』誌は発刊後間もなくの一九四八年九月、懸賞短篇小説募集を発表し、それには「邦人コロニアを背景としたもの」という条件をつけた。この「よみもの」賞は四回にわたって募集が行なわれたが、第三回目は不振で話題にのぼるほどの作はなく、第四回目の入選作は雑誌廃刊のためついに未発表に終わった。しかし第一回・第二回は、応募数も盛況をきわめ、また今日まで文学愛好家たちの記憶に残る佳品をいくつか生んだ。一九四九年発表の第一回入選作は、第一席山路冬彦「つづじ」、第二席水野浩志「樽」、第三席摩耶晃「辞表」であり、翌年の第二回は第一席渋川和樽「牛糞」、第二席佐

藤実「星座の涯に」、第三席田端陽三（田畑三郎）「野生」であった。『よみもの』は以上六篇の入選作のほかに、約十篇の佳作をも誌上に発表した。同誌は以上のほかに、も賞に関係のない数々の作品を掲載している。

「よみもの」賞が一時的ながらもそれほど大きな反響を生んだということは、ひとつには母国日本の敗戦が日系コロニアの人々に世界観・アイデンティティーの根本的な再吟味を迫って精神的混乱におとし入れたために、文学をとおしてみずからの状況を考えようとしたこととの顕れであり、また、戦中や戦争直後の制限された社会生活のなかで、おおくの人々は田舎に《隠者》的に生き、《公報》を待ちながらあふるる余暇をもてあましていたという事情にも関係があるう。

「よみもの」賞とほぼ同時代に各新聞に発表された作品のなかから数篇を選んだ。山路冬彦の手馴れた風俗小説「美しき咎人」、母（日本生れ）と娘（ブラジル生れ）とのギャップを軽く美しく描いた掌篇小説、佐藤実「孤影」（日伯毎日新聞社主催）懸賞超短篇小説”入選作のひとつ。一九五一年）、カチ組マケ組の萬藤を扱った竹井博「老移民」、敗戦直後の無気力な青年をテーマとした上村俊幸「ゆがめられた歩み」。一九二九年の世界恐慌のもたらしたコーヒー危機後、日本移民の群は新興の開拓前線パラナ州北部へ陸続として流れたが、これらの人々のなかから「よみもの」賞上位入選作の大半を占め

る人々が現われたため、《パラナ勢》は氣勢をあげ、早速一九五一年にはロンドリーナ市に堀田栄光花を主幹とするパラナ・ペン倶楽部を結成した。この結社の機関誌『文芸パラナ』は翌年二月に創刊号を出したが、一九五三年十一月に三号を出したまま中絶した。この同人誌からは、ふたつの牧歌的な青春純情小説、緑野狛太（渡部南仙子）「梨奈のはなし」と渋川和樽の遺稿「早咲きの花」、および元日本語学校教師のその教え子たちとの再会を映画「舞踏会の手帖」のごとくに展開してみせた摩耶晃「泥濘」の三篇がここに所収されている。

この項のしめくりに、「よみもの」賞以後の作品を展望すれば、すでに述べたように、それは戦前からの出稼ぎ移民の日本主義・帰国主義が動揺し、新しい価値観とアイデンティティーにのつとつた同化主義：永住主義とはげしく相剋して変貌していく時期であった。これを作品に即していえば、上述の相剋をカチ組マケ組の萬藤として描いたものに山路の「つつじ」と竹井の「老移民」とがある。山路の「月光」は、帰国はすでに遠くその実現性を喪ってしまった、六人の家族をすべてブラジルの地に葬った孤独な老移民がサンパウロ市にさえ辿りつけない姿をわれわれに見せた。永住の決意を明瞭に唱ったものに「老移民」と佐藤の「星座の涯に」とがあるが、この二作は対蹠的である。すなわち、前者においては主人公である家長は永住の決断とともに、日本式家長権

と出稼ぎ移民のコーヒー・コンプレックスとを破棄してみせる。

一方後者においては〈丸太ん棒のように揺るぎない生存の根をブラジルの土に打込んでやるぞ〉と叫ぶ主人公が、たちまちブラジル人労働者たちとの人種的・階級的抗争をとおして、その唯一の肉身たる息子を殺され、敗者となる姿、つまり挫折した永住主義が描かれた。「同化」の産みの苦しみは田畑の「野生」におけるお通夜のごとき結婚式の描写によっておおくの移民の胸をうった。ブラジルの視点をもった娘と日本的視点の母親とのギャップは佐藤の「孤影」においてその片鱗をみせる。渋川の「牛糞」はむしろこれのような相剋と同化の苦しみを通りぬけた先に現われるひとつの可能性としての姿、つまりすっかりカボクロ（現地人）化―クリオリゼーション―し、牧場主となりながら、半面では文明を喪失していく家族の姿を、老移民たちに蜃気楼のように映してみせた。これにひきかえ、水野の「樽」は、むしろブラジルの農村に根をはやした新しい世代を牧歌的な楽天主義で無邪気に見せてくれたともいえよう。

四、結語・アイデンティティの彷徨

一九五〇年度の第二回「よみもの」賞選者たちは、百七十数篇の応募作の選を果したあとその選後評で、ようや

くブラジルの大地に根をはやした、コロニア臭のつよい文学が芽生えてきたというふうにいつている。すでにいくども述べたように、新旧価値観の相剋・アイデンティティーの彷徨をおして、人々はしだいに新しい墳墓の地をつくりはじめた。泥にまみれた神国日本を棄て、別の新しい（日本）をつくりはじめた。それはブラジル社会に属する（日本）であった。

（移民）は（ブラジル人）とはならず、（コロニア人）と

なった。（ブラジルの日本人）はみずからを（日本の日本人）から区別し、他方では（外人）や（ブラジル人）からも区別している。日本の飛地としての、一時的な、変則的な（移民社会）、（在伯同朋社会）から、ブラジル社会の正常なる一部分としての、半恒久的な（日系コロニア）、つまりマイノリティーとなったのである。そして移民文学もしだいにマイノリティー文学へと転身してきた。第一期の作品が、主として自然主義リアリズムの手法によっていながら、旧道徳との闘いや社会批判は稀薄であり、また“皮剥ぎ”的な私小説の自我探究もなく、傍観者的な写真かあるいは被害者意識の吐露が支配的であったのも、日系コロニアの文学がまだ居住する社会にほんとうの意味で参画していかない移民の文学だったからであろう。しかし、しだいにマイノリティー文学の性格を帯びはじめても同様の傾向がまたニュアン

スを変えながら存続していくことになる。

後記 第一期の作品を読むことは資料・情報不足のため、困難をきわめた。多数の人々に作品推せんを依頼したが、回答はほとんど皆無であった。そのために、やむをえず、本巻所収の二十七篇、筆者が調べた約百五十篇の作品中から筆者の判断で選んだものである。また、第一〜三期にわたる文学史的な区分についても、筆者個人の便宜的なものにすぎないことをお断りしておく。

「入植から」の作者が桜田武夫か杉武夫であるかが最後まで確定しなかったので、その部分だけ変則的な編集となってしまうたことをお詫びいたします。

収録作品発表年月

賭博農時代

園部武夫

《伯刺西爾時報》

一九三二

年四～五月

ある開拓者の死

田辺重之

《伯刺西爾時報》

一九三二年五～六月

夏代

片山耀子

《伯刺西爾時報》

一九三三

年六～七月

配耕

古野菊生

《伯刺西爾時報》

一九三四

年

転蓬

古野菊生

《新ブラジル》

一九四〇年七

月

入植から

桜田武夫

《伯刺西爾時報》

一九三四

年二～三月

ふくしゅう

杉武夫

《地平線》

第八号一

九三八年

渦

武本由夫

《伯刺西爾時報》

一九三五

年七月

死灰

武本由夫

《地平線》

第三号一九

三七年

ある裏町

秋野愁

《地平線》

第二号一

九三七年

雨

柳千枝子

《よみもの》

一九四八年

四月

牌 柳千枝子 ≪よみもの≫ 一九四八年 五月

つ つじ 山路冬彦 ≪よみもの≫ 一九四九年

一月

日 光 山路冬彦 (よみもの) ≡ 一九五〇年十

一月

美しき咎人 山路冬彦 (日伯毎日新聞) ≡ 一九四

九年一月

樽 水野浩志 (よみもの) ≡ 五四九年二

月

なすび 北島文子 (よみもの) ≡ 一九五〇年十

二月

ロテリアを買う女 北島文子 (南米時事新年号) ≡ 一九五

四年一月

牛 糞 渋川和母 (よみもの) ≡ 一九五〇年一

月

早咲きの花 渋川和博 (文芸パラナ) ≡ 第三号

一九五三年

野 生 田畑三郎 ≪よみもの≫ 一九五〇年

二月

星座の涯に 佐藤 宴 ≪よみもの≫ 一九五〇年

一月

孤 影 佐藤 実 ≪日伯毎日新聞≫ 一九五一

年一月

梨奈のはなし 緑野狛太 ≪文芸パラナ≫ 第三号

一九五三年

泥濘 摩耶 晃 ≪文芸パラナ≫ 第三号一九

五三年

老移民 竹井 博 ≪パウリスタ新聞≫ 一九五四

年一〜二月

ゆがめられた歩み 上村俊幸 ≪パウリスタ新聞≫ 一九

五四年一月

コロニア小説選集・第一卷

一九七五年七月一日 第一刷発行

編集・コロニア文学会

発行所・コロニア文学会

G r e m i o L i t e r a r i o . . C O L O n i a

ブラジル国サンパウロ市

サン・ジヨアキン街三八一番

R u a S a o J a q u i m 3 8

印刷所・パウリスタ美術印刷株式会社

サンパウロ市オスカル・シントラ・

ゴルジーニョ街四六番・